

研 究 紀 要

第 4 2 集 (I)

はじめに	学校長 佐久間 春 夫	1
A 研究開発の課題		3
I 研究開発の課題		3
II 研究のねらい		3
III 研究計画		4
IV 研究組織		5
V 研究開発の経過		6
B 研究内容		11
第 1 編 カリキュラム編成における基本方針		11
第 1 章 本校教育の方向性		11
第 2 章 カリキュラム編成の理念		13
第 3 章 カリキュラム編成作業		23
第 2 編 個別教科		27
第 1 章 各教科カリキュラムの編成		27
第 2 章 国語科		35
第 3 章 社会科		44
第 4 章 数学科		60
第 5 章 理 科		69
第 6 章 英語科		88
第 7 章 芸術科		102
芸術科・音楽		102
芸術科・美術		104
第 8 章 技術科		107
第 9 章 家庭科		110
第 10 章 保健体育科		115
第 3 編 総合学習		121
第 1 章 総合学習の構造化について		121
第 2 章 統合型総合学習		124
第 3 章 分散型総合学習		126
第 4 章 卒業研究		130
第 4 編 新教科・合科構想		131
第 1 章 生活デザイン		131
第 2 章 「芸術と社会」(仮称)		134
第 5 編 総合学習センター構想		137
第 1 章 総合学習センターの理念		137
第 2 章 総合学習センターの必要性		138
第 3 章 総合学習センターの業務内容		138
第 6 編 現行カリキュラムの生徒による評価		141

2 0 0 1

奈良女子大学文学部
附属中等教育学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第65条の5第1項において準用する第26条の2及び第65条の5第2項において準用する第57条の3の規定に基づき、教育課程の基準改善のために文部大臣の委嘱を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容のすべてが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものではないことに留意してお読みください。

はじめに

学 校 長 佐久間 春 夫

『研究紀要』第42集をお届け致します。本校では、1973（昭和48）年から始まった中学校と高等学校の形態上における接続から一歩進めるために、平成元年度から3年間、文部省研究開発学校の指定を受けて、〈2-2-2制〉〈総合学習〉〈選択制〉を中心としたカリキュラムの編成と様々な実践を創造してまいりました。

昨年度の『研究紀要』第41集では、この11年間の学校改革のあゆみを総括いたしました。今年度は、中学校と高等学校を渾一体的に組織化した6年一貫の「中等教育学校」としてのスタートに際し、5日制と中等教育学校にふさわしいカリキュラムの編成についての研究の成果をまとめました。

本校の中高一貫教育の理念は、中学校と高等学校間の節目をなくすことから生じる「ゆとり」ある学校生活の中で、基礎・基本の学習活動の充実、自主的・体験的・総合的学習活動の導入、学力・能力・個性・特性・進路に応じた学習の進展を柱に、集団生活の民主的・道徳的ルールを見につけ、人間性豊かな自立した人格の育成をはかることです。

今回の研究紀要は（Ⅰ）と（Ⅱ）から成り立っています。（Ⅰ）部では、上記理念を実現するためのカリキュラム編成の理念・個別教科ごとの6年一貫カリキュラム・総合学習・新教科・合科教科・総合学習センター構想・カリキュラム評価等が紹介されております。特に、最終章には現行カリキュラムに対する在校生や卒業生による評価の比較調査結果が紹介されており、反省点をふまえて今後検討すべき課題が提示されています。

今回のカリキュラム編成上顕著な特徴として、

1. 中等教育の完成を目指す青年前期にふさわしいカリキュラム
2. 2-2-2制に対応した発達課題の達成がより確実になるカリキュラム
低学年（1～2年）：個の萌芽
基礎的学力及び学習の基本的方法を習得する。集団生活の民主的・道徳的ルールを身につける。
中学年（3～4年）：個の分化と深化
自主的・体験的・実験的学習を取り入れ、幅広い学力を身につけ、学習意欲を高める。
高学年（5～6年）：個の確立と将来への展望
学力・能力・個性・特性・進路に応じた学習の保障、人間性豊かな自立した人格の育成を図る。
3. いくつかの教科を合科したり、融合した新教科や新科目の創造
4. 6年間を見通したカリキュラムの〈梁〉としての「総合的な学習の時間」の実施
これまでの総合学習を分散的に実施する「奈良学」（1、2年）、「情報学」（1、2、5年）、統合的に実施する「環境学」（3年）、「世界学」（4年）や選択的に実施する「卒業研究」（5、6年）として再構成し、6年間を通じた総合学習の体系を創り上げる。

5. 「発達差」「学力差」「能力差」の発散・拡大に対応するカリキュラム

中等教育学校の6年間では、生徒達の個性や能力が多様化することが予想される。特に、教育内容が前期課程から後期課程に変わる中学年（3年、4年）では、その様相が顕著になる。そこで、「発達差」「学力差」「能力差」に対応したカリキュラムを研究開発する。

6. 附属小学校から本大学への連携を視野に入れたカリキュラム

本学の附属小学校と本校は、「総合学習センター」を通じて「総合的な学習の時間」の実践において連携を図り、本校と大学は、本校教員の大学での講義「中等教育授業論」の担当、本校の3、4年生を対象とする大学教員による本校での「アカデミック・ガイダンス」の授業などを通じて積極的な交流をはかっていく予定です。

本紀要の（Ⅱ）部は、「総合学習センター」紀要とでも言うべきもので、総合学習〈環境学〉〈世界学〉〈グローバル・クラスルーム〉の報告と特別活動・教科の報告から成り立っています。

附属幼稚園・附属小学校・大学・大学院との全学的な連携によって、総合的な学習の教材開発とその実践・地域や全国の総合的な学習の資料の収集・理論的研究・文献的研究・歴史研究等を行う「総合学習センター」を設置しました。センターの構成員は、本中等教育学校教員、本学大学・大学院教員と学生、附属幼稚園、附属小学校教員からなりますが、公立学校からの教員の研修も受け入れ、総合的な学習の具体的教材の共同研究・開発を行う予定です。

また、本校は、来年度より2期制に移行します。このことにより、授業時間が確保され、柔軟な時間割編成が可能となり、新しいカリキュラムの利点を十分に生かせるものと考えております。しかし、中等教育学校は、まだその緒についたばかりであるにもかかわらず、学校を取り巻く環境は厳しいものがあります。検討すべき課題は山積みではありますが、長期的展望に立ち、その方向を見誤らぬように努力して行きたいと考えております。本紀要を御一読いただき、御批判、御指導をお願いする次第です。

A 研究開発の課題

I 研究開発の課題

(1) 研究開発課題

中学校及び高等学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発

(2) 研究委嘱事項

中学校及び高等学校において、生徒の実態に対応して、教育内容の一貫性、継続性を一層深め、中学校及び高等学校の教育の連携を計る教育課程の研究開発を行う

(3) 研究開発の委嘱期間

平成11年4月1日～平成14年3月31日までの3か年間

II 研究のねらい

本校は昭和48年以来、主として制度的に中・高完全6年一貫教育体制をとってきた。その経験と伝統を生かし、中・高一貫の実践的内容の充実、徹底を目指して、平成1・2・3年度の3ヶ年間、文部省研究開発学校として中高の連携を深める研究開発と実践を行った。その成果は、総合教科「奈良学」「環境学」の実践、6年一貫2-2-2制カリキュラムの編成と実践などの多様な取り組みとして結実し、10数年後の今日まで継続されてきた。

以上の6年一貫教育の伝統をふまえて、本校は平成12年度より中等教育学校に移行した。今回の研究開発では、中等教育学校の理念を実現するためのカリキュラムの編成を第一の目標とする。その際、本校において従来から実施している2-2-2制の方針を踏襲し、第1学年から第6学年までを次の3段階に分け、それらの時期の発達段階と目標を次のように捉える。

低学年（1・2年）：個の萌芽

基礎的学力及び学習の基本的方法を習得する。集団生活の民主的・道徳的ルールを身につける。

中学年（3・4年）：個の分化と深化

自主的・体験的・実験的学習を取り入れ、幅広い学力を身につけ、学習意欲を高める。

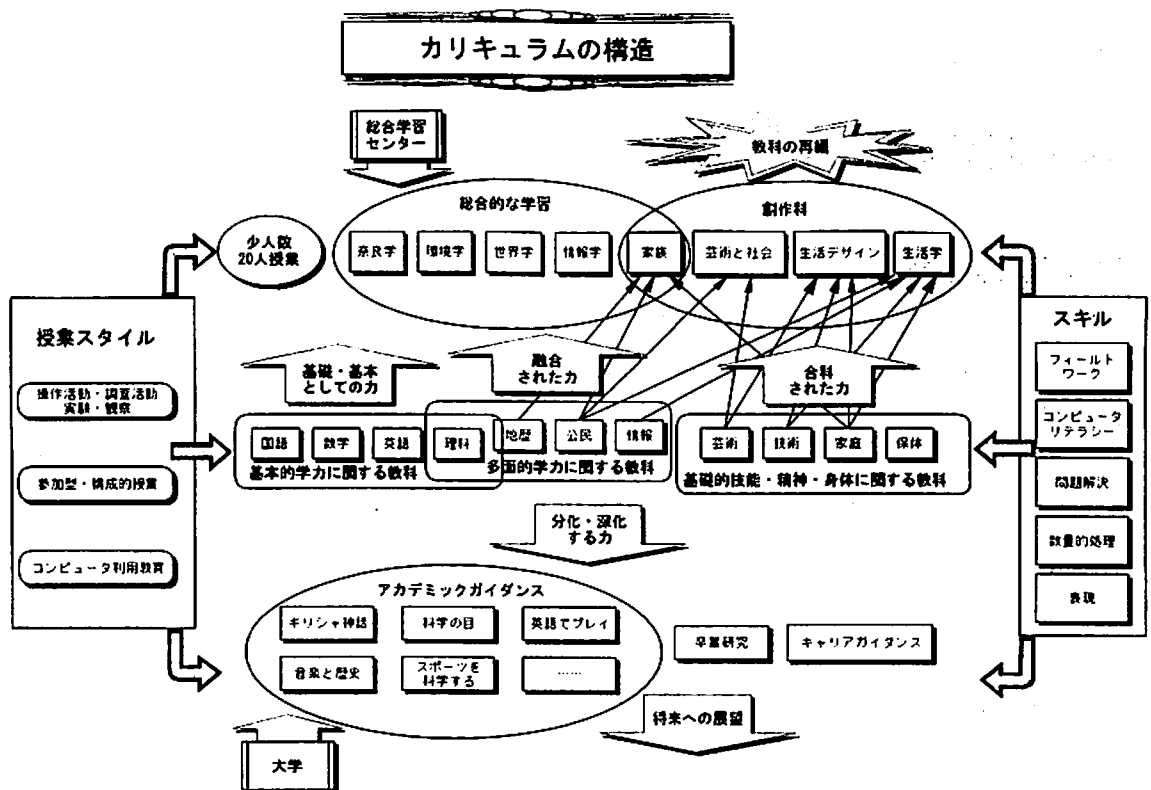
高学年（5・6年）：個の確立と将来への展望

学力・能力・個性・特性・進路に応じた学習の保障、人間性豊かな自立した人格の育成を図る。

そして、すべての学年・教科において、従来の学習方法を一步進めて、生徒の主体的な活動を重視し、あらゆる表現活動の育成をめざす。

さらに、このカリキュラムでは、将来の教科の再編をも見据えた「新教科・科目」の創設、選択教科「アカデミックガイダンス」（以下AG）の展開、総合教科・総合的学習の再構築を目指す。そして、総合教科・総合的学習の構築に際しては、大学・大学院との連携・援助の下に、校内に「総合学習センター」を設置すべく研究を進め、このセンターを中心に、現在の総合学習「世界学」「環境学」に、新たに「奈良学」「情報学」「家族」を構築する。

以上で述べたカリキュラムの構造を図式化すると、以下のようになる。

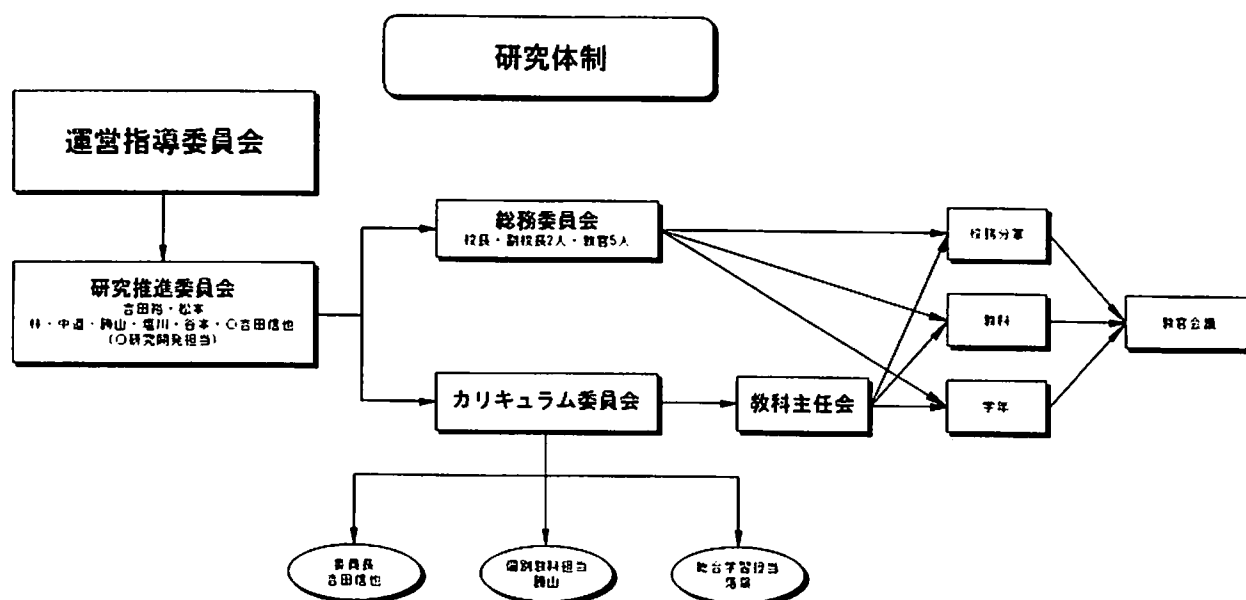


III 研究計画

	研究内容等
平成11年度 (第1年次)	平成元年度より実施してきた、2-2-2制を枠組みとする中高6年一貫教育の総括と中等教育学校組織の構築 (1) 2-2-2制における教育課程の総括 (2) 2-2-2制における学校組織の総括 (3) 総合教科「奈良学」「環境学」の総括 (4) 中等教育学校へ向けての週5日制カリキュラムの編成 (5) 総合学習センターの構想
平成12年度 (第2年次)	中等教育学校における実践の構築 (1) 中等教育学校におけるカリキュラムの編成 (2) 総合学習センターの構築 (3) 「奈良学」「環境学」「世界学」「情報学」の展開
平成13年度 (第3年次)	中等教育学校の展開 (1) 中等教育学校におけるカリキュラムの完成 (2) クロスカリキュラムの研究・実践 (3) 総合学習センターの構築

IV 研究組織

1 研究組織の概要



2 研究担当者 (○印は、研究主任)

職名	氏名	担当学年 及び 教科
副校長	吉田 裕	倫社・政経
副校長	松本博史	数学
教諭	林 良樹	研究部長・物理・総合学習センター
教諭	勝山元照	2年・日本史・奈良学
教諭	谷本文男	1年・研究部・国語・カリキュラム
教諭	中道貞子	6年・生物・環境学
教諭	塩川 史	研究部・英語・世界学
教諭	○吉田信也	学務部長・数学・情報学・研究開発担当

3 運営指導委員会

(1) 運営指導委員

氏名	勤務先	職名	専門分野
重松敬一	奈良教育大学教育学部	教授	数学教育
松尾孝司	奈良県教育委員会	指導主事	
長尾彰夫	大阪教育大学	教授	教育課程
西森章子	大阪府立大学	助手	教育工学
奥村悦三	奈良女子大学文学部	教授	国語史・文体史
吉田幸子	奈良女子大学文学部	教授	英・米詩
小田切毅一	奈良女子大学文学部	教授	スポーツ史
小路田泰直	奈良女子大学文学部	教授	日本近代史

氏名	勤務先	職名	専門分野
森岡正芳	奈良女子大学文学部	助教授	教育心理臨床学
見目正克	奈良女子大学理学部	教授	素粒子論
落合豊行	奈良女子大学理学部	教授	組合せ位相幾何学
疋田洋子	奈良女子大学生生活環境学部	教授	住居管理学

(上記運営指導委員のすべては確定的なものではない)

(2) 活動計画

各教科カリキュラム作成に対する指導助言
カリキュラムの評価
総合学習への学問的リソースの提供
総合学習における外部講師としての参加
公開研究会支援

V 研究開発の経過

平成10年(1998年)

- 10月14日 研究開発校希望調査提出の件を、研究部より会議に提案し了承
- 11月6日 プロジェクト会議①
- 12月9日 プロジェクト会議②

平成11年(1999年)

- 1月27日 プロジェクト会議③
- 2月10日 内示
- 2月12日 総務・教務(谷本・木村)打ち合わせ
- 2月15日 研究組織図(総務案)完成
- 2月17日 研究課題の変更・・・会議で了承
- 2月22日 文部省に提出する書類を、大学へ提出
- 2月24日 総務より連絡
運営指導委員会のメンバーの了解を得る
プロジェクト会議④
- 3月13日 中等教育学校時の時間割のモデル作り(谷本・木村)
- 3月9日 教官会議「5日制における教育課程(カリキュラム)について審議」
- 3月23日 プロジェクト会議⑤
中等教育学校時の選抜方法・これからの検討事項について
- 4月12日 研究開発推進委員会①(プロジェクト会議)
「研究開発第一年次の研究計画」
「中等教育学校に向けての校内体制の見直し」の検討(会議提案に向けて)
- 4月14日 特別会議「中等教育学校時の選抜方法について」(フリートーキング)
- 4月15日 「実施計画書の修正版」の提出依頼の書類を受け取る
- 4月23日 上記修正版40部を大学へ提出

- 4月28日 運営指導委員へ挨拶状と修正版を送付
- 5月10日 研究開発推進委員会②「入検の方法、カリキュラム、執筆分担」
- 5月12日 会議「初年度の研究紀要の執筆分担を依頼」
「平成12年度の入検について、概要説明」
- 5月26日 教育課程の基準改善のための教育研究開発の実施の委嘱書を受理
(平成11年4月1日付)
- 5月27日 研究開発学校連絡協議会(文部省主催)に出席(松本・木村)
- 6月9日 会議「中等教育学校の入検の方法について」
- 6月16日 特別会議「中等教育学校に向けてのカリキュラム」
- 6月23日 連絡協議会の分科会個別協議記録と学校要覧を大学を通じて文部省に提出
- 6月23日 特別会議「中等教育学校に向けてのカリキュラム」
- 7月1日 「運営指導者会議」の延期を運営指導委員の先生に連絡
- 7月7日 会議「来年度入検の仕事分担と今後の仕事日程について」
- 7月12日 研究開発推進委員会③「研究紀要執筆の共通項目とアンケートについて」
- 7月15日 会議「中高一貫教育の総括の執筆について、依頼など」
- 8月30日 研究開発推進委員会④「5日制における教育課程・授業時数について」
- 9月8日 会議「新カリキュラムに向けての移行期の時間数など」
- 9月13・14日 中部地区教育研究開発協議会に参加(大津にて、松本)
- 9月21日 文部省実地調査に向けての打ち合わせと資料の作成
- 9月22日 会議「附属小学校との接続について」
- 9月29日 会議「中等教育学校・5日制におけるカリキュラムの検討」
- 9月30日 文部省研究開発校実地調査
文部省より東京工業大学教授 牟田博光先生、千葉大学教授 天笠茂先生、
文部省初中局高等学校課 中野晃先生の3氏が来校
研究開発の実施状況の経過報告および「世界学」の授業参観
- 10月12日 教官アンケート・「環境学」「奈良学」のアンケートの原案作り
- 10月20日 中高一貫教育推進研究協議会(文部省主催)に参加(吉田シ・木村)
- 10月27日 校内研修会 名古屋大学教授 安彦忠彦先生
「中等教育のカリキュラム構成」
- 11月上旬 6年一貫教育・総合教科についての教官アンケート実施
- 11月19日 研究開発推進委員会⑤「初年度のまとめと今後の日程について」
- 11月24日 研究開発推進委員会⑥「学期制・授業時間・教官アンケートのまとめ」
- 12月7日 研究開発推進委員会⑦「15日の会議議題について」
- 12月15日 教官会議「2期制を取り入れるか(継続審議)
1日は45分7限授業とする(否決⇒50分6限授業)」
- 12月24日 研究開発推進委員会⑧「平成14年(2002年)以降の教育課程について」
- 平成12年(2000年)
- 1月7日 平成12年度研究開発実施計画書提出
- 1月21日 総合教科「世界学」の公開授業と研究協議会
- 1月26日 教官会議「平成12年度の総合教科の担当教科について審議」

- 2月1日 代表者会で「平成12年度の総合教科の担当教科」を決定
- 2月2日 カリキュラム検討のための教科担当者会議(1)
- 2月10日 カリキュラム委員3名(吉田、勝山、落葉)の選出
これ以後は、カリキュラム委員会が教育課程作成の中心となることを決定
- 2月14日 カリキュラム委員会(1)
- 2月16日 教官会議「中等教育学校校則の検討、カリキュラム委員会の方針の承認」
- 2月24日 運営指導委員会
運営指導委員の意見を聞き、各教科主任と委員の打ち合わせを行う
- 2月24日 総合学習を考える会
- 2月25日 カリキュラム委員会(2)
- 3月8日 教官会議
「中等教育学校に向けて、諸々の規定(内規)の検討」
「個別教科のカリキュラム作成について」
- 3月13日 カリキュラム委員が東京大学教育学部附属中・高校へ学校訪問
- 3月16日 教科主任会：各教科に総合学習との関係のシートを提出することを要請
- 4月6日 教官会議
カリキュラムについて議論する会議日程を決定
- 4月7日 カリキュラム委員会(3)
- 4月10日 カリキュラム委員会(4)
- 4月19日 カリキュラム委員会(5)
- 4月20日 カリキュラムに関する講演会を、鳴門教育大学 村川雅弘助教授に依頼
- 4月21日 個別教科と総合学習(奈良学、情報学)との関連、全教科から提出
- 4月26日 研究会議「2期制について」
2期制のシミュレーションを提示し、それに関して議論
- 5月10日 カリキュラム委員会(6)
- 5月17日 カリキュラム委員会(7)
- 5月24日 カリキュラム委員会(8)
- 5月26日 カリキュラム教科担当者会議(2)
- 5月30日 カリキュラム委員が、名古屋大学附属中・高校へ学校訪問
- 5月31日 7/14の総括会議の午後に、研究開発運営指導委員に出席要請を決定
- 6月2日 大阪府立大学総合科学部助手の西森章子先生、運営指導委員を了承
- 6月5日 大阪教育大教授の長尾彰夫先生、運営指導委員を了承
- 6月7日 教官会議
・2期制への移行：反対1、賛成27、保留10で可決
・移行年度は、課題を各責任部門で検討してから決定
・名古屋大附属中・高校への訪問を報告
・カリキュラム担当者会議の報告
- 6月14日 カリキュラム委員会(10)
- 6月21日 カリキュラム委員会(11)
- 6月27日 長尾先生(大阪教育大学)を訪問し、指導を受ける(松本・勝山・落葉・吉田)

- 6月28日 分掌会議「2期制に関する問題点」
- 7月7日 村川先生（鳴門教育大学）講演（13：00～16：00）
演題：中等教育における「総合的な学習」
- 7月14日 カリキュラム&運営指導委員者会議（9：00～16：00）
午前：6グループに分かれて議論
午後：全体会議（運営指導委員）
- 7月15日 教官会議
2000年度の紀要は、カリキュラム特集&総合学習&個人研究と決定
- 7月20日 有志カリキュラム会議（言いたいことを言おう会）参加者10名
- 7月25日 文部省 研究開発進捗状況調査
文部省：教科調査官 大杉昭英先生
本校：杉峰英憲・吉田裕・松本博史・林良樹・中道貞子・落葉典雄・吉田信也
研究の進捗状況を報告し、指導を受け、中学年を重要視する必要性を再認識
- 7月26日 1993年度卒業生へ、本校教育課程へのアンケート発送
- 8月22日 カリキュラム委員会(12)
- 8月31日 教官会議「カリキュラムの諸問題をまとめて提示」
- 9月6日 カリキュラム委員会(13)
長尾先生+カリキュラム教科代表+カリキュラム委員+有志の研修会（23名が参加）
カリキュラム教科担当者会議(3)
- 9月20日 カリキュラム委員会(14)
- 9月27日 研究会議
・移行期のカリキュラム
・各教科の新カリキュラム構想の説明
・2期制移行に関しての問題点
- 9月28日 1993年度卒業生アンケートの集約が完成
- 10月5日 カリキュラム委員が6年有志から、2期制に関して意見を聴取
- 10月6日 カリキュラム委員が生徒会関係者+有志から、2期制に関して意見を聴取
- 10月7日 カリキュラム委員が生徒会代議員に、2期制に関して説明
- 10月10日 カリキュラム委員会+長尾先生
環境学のフィールドワークを見学
- 10月11日 教官会議
・移行期のカリキュラムを議論し、次回に結論を出すことを確認
・2期制への移行時期を2001年度とする原案を提示
反対5 賛成22 保留11 で可決
・各教科の構想と単位要求について
- 10月18日 教官会議
・移行期のカリキュラムを第2案に決定
カリキュラム教科担当者会議(4)
- 10月25日 合科を考えている教科・科目の担当者会議
- 10月30日 カリキュラム委員会(15)

- 11月8日 教官会議
- ・新カリキュラムに関する課題を列挙し、説明
 - ・説明に対して、質問・意見を受けた
- 11月15日 カリキュラム委員会(16)
- カリキュラム会議
- ・全体会で審議日程などの説明
 - ・グループに分かれて協議
- 11月29日 カリキュラム委員会(17)
- ・各教科との協議（ヒアリング）をすることに決定
- カリキュラム教科担当者会議(5)
- ・授業年間計画表の作成を依頼
- 11月24日 公開研究会（公民科、数学科、英語科が公開）
- 大杉先生（文部省）、長尾先生（大阪教育大）に参加要請
- 12月4日 カリキュラム委員と理科との協議
- 12月5日 カリキュラム委員と社会科との協議
- カリキュラム委員と国語科との協議
- 12月7日 カリキュラム委員と数学科との協議
- カリキュラム委員と英語科との協議
- カリキュラム委員と保健体育科との協議
- 12月8日 カリキュラム委員と芸術科との協議
- カリキュラム委員と技術・家庭科との協議
- 12月14日 カリキュラム委員会(18)
- ・家庭科から、「いのち・暮らし」はできないとの申し入れ
 - ・相談の結果、家庭科の「家族」を総合的な学習として実施する方向で検討
 - ・そのために、社会科が出講する形で援助する方向で考えることに決定
- 12月19日 カリキュラム会議（教官、長尾先生）
- ・45分×7限を50分×6限と平行して考える
 - ・50分×6限を基本に、柔軟にモジュールの考え方も含めて追求する
 - ・研究紀要の執筆は、50分×6限で行う
 - ・AGとホーム制と総合的な学習
 - ・AGは大学の先生の講義を中心にした形で追求することで了承
- 12月22日 カリキュラム委員会(19)
- 平成13年（2001年）
- 1月10日 教官会議
- 1月16日 カリキュラム委員が長尾先生を訪問し、指導を受ける
- 1月31日 カリキュラム会議
- 2月13日 カリキュラム委員が長尾先生を訪問し、指導を受ける
- 2月21日 教官会議
- 3月7日 カリキュラム会議（教官、長尾先生）
- 3月16日 教官会議・総括会議

B 研究内容

第1編 カリキュラム編成における基本方針

第1章 本校教育の方向性

カリキュラム委員会

1 本校の最近20年の軌跡

本校の進むべき方向を探るために、まず最近の20年の歩みを簡単に振り返る。

(1) 前カリキュラム：1980年代

1973年から「中高6年一貫教育」にふみきった本校は、国立大学附属校の「エリート主義」教育への批判をふまえて、奈良県下随一の進学校から普通の学校への変革を図った。しかし、中高6年一貫教育の具体化は、当初カリキュラム編成に関してはあまり進まなかった。教育研究も個人的レベルにとどまっていた。

入学検査に「実技を含めた8教科による入学検査」「3倍抽選制」を導入し、高校入試がないことから高校段階では「学力」差が大きくなり、どの水準の生徒に焦点を当てた授業をするか、悩む時期でもあった。「標準学力テスト」の実施や授業方法、考査の問題や方法の工夫がなされたが、次第に授業や特別活動に停滞が見られるようになった。「特別指導」を要する生徒も年々増加し、指導方法をめぐり教師間の混乱が生じた。そして、附属学校本来の使命を果たすことに、困難も生じはじめた。

(2) 現カリキュラム：1990年代

現カリキュラムは、学校改革と同時に、1989～91年度における「研究開発」指定にともなって開発された。前項で述べた課題をふまえ、新たな中高6年一貫教育の内容づくりがカリキュラム上から試みられた。その結果、総合教科「奈良学」「環境学」が創設され、英語20人講座が導入された。また、5・6年では大幅な自由選択制度を導入した。これらの実践は、2002年度（中学校）および2003年度（高校）から実施される新学習指導要領における「総合的な学習」や、少人数講座編成の先駆けとなった。さらに、情報教育や国際交流教育にも力を入れた。学校的規模で教育研究が前進し、公開授業も毎年開催されるようになった。

これらの取り組みによって、多様な「学力」の向上を目指すと同時に、ある程度の進学保障も実現できるカリキュラムづくりを行った。また、入学検査の改革（3倍抽選制廃止、附小接続見直し）を行った結果、高校における「学力」差は縮小された。しかし、単位数が増加したため、3年～6年において7限授業が行われ、生徒の特別活動などへの影響も出た。

2 本校はどこへ向かうのか？

以上の20年の経験を基に、これから本校はどこへ向かうべきなのかを考える。この方向が、新カリキュラムの編成の基本となる。

(1) どのような生徒を育てるのか

中等教育学校となっても、本校の基本的なスタンスは1990年代と大きく変わらない。次の本校の基本方針に基づいて、教育の実践を行う。

1. 自由で自立した人格の形成と社会的責任の自覚を養う学校
2. 多様な能力に対応し、それを伸ばせる学校
3. 地域社会に開かれ、国際化社会に対応できる学校

「自由・自主・自立」は本校の校風であり、あらゆる教育活動の根幹に位置付けているが、最近の生徒はややもすると「自由」と「勝手気まま」を混同する傾向にある。「自由」と「自律」は対であることを理解させ、様々な場面でこの校風を意識させたい。また、自分の頭で自主的に考え、議論し、行動できる自立した人間を育てたい。

独立した人格の基礎を築く中等教育は、単なる高等教育への通過点ではない。したがって、大学受験のみを目的とする中等教育はあり得ない。本校は、生徒が将来、国際化社会に通じる「良き市民」として、生きていく力を身につけることを目指している。また、新カリキュラム作成にあたって、この点をより強調したものにしたいと考えている。

(2) 学力水準

ここでいう「学力」とは、教育研究・教育実習の対象になりうる基礎・基本をふまえ、個性を伸ばす学力のことである。また、本校は高校入試がないため、6年間において「学力」が多様化し、格差が拡大することは避けられないと考え、次のような方策を考えている。

- ① 入学時に「適性検査」を実施する。この検査は本校の教育を受けるのに適した能力が備わっているかをみるためのもので、いわゆる「受験」に必要な知識量ではない。興味・関心がどれだけ豊かか、試行錯誤しながら考える力や表現する力が、身につけているかという点である。
- ② 中学年（3・4年）の英語・数学・国語で、少人数講座を編成し、中学の内容から高校の内容へ移る際のギャップを、ていねいな指導で補い、「学力」差の拡大を最小限に食い止める。
- ③ 「中学校・高校学習指導要領」の内容を、生徒の発達段階に応じて合理的なカリキュラムに再編成し、生徒の学力がスムーズに定着するようにする。

これらの手だてがないと、6年間で「学力」差が急激に拡大し、本校のめざす教育が実現できないことは、前述の80年代の経験から明らかであろう。

(3) 進路保障

中等教育における本来の目的が大学進学でないことはすでに述べた。しかし、ほぼ全員が大学進学希望である本校にとって、多様な生徒の能力や適性に見合った「進路」を保障するようなカリキュラムを編成することが重要である。したがって、高学年（5・6年）では「大学入試」をまったく無視するわけにはいかない。この点について全教員の認識は一致している。このように進路保障を確実にすることで、本校生徒の「学力」が、多様かつ一定の幅に落ち着き、中等教育学校としての教育活動が困難になることを防止できると考えている。

(4) 教育研究

本校は、1990年代より公開研究会の実施や研究開発学校・研究指定校としての実践を行い、全校的な研究体制を確立してきた。今後も、この研究体制を発展させていく予定である。さらに、中等教育学校としての教育内容の構築と、中等教育学校の実態に合わせた新学習指導要領の実践を行っていく。具体的には、以下の内容の研究を進める。

- 6年一貫の「総合学習」
- 3・4年選択学習と各種ガイダンス構想
- 習熟度別・少人数講座の編成
- 各教科における2-2-2制の徹底と中高内容の互換
- 新科目創設と教科・科目再編の試行
- 情報化・国際化への対応
- 評価の研究
- 小学校から大学までの連携
- 学校行事、ホーム制

第2章 カリキュラム編成の理念

1 中等教育学校としての6年一貫カリキュラム

カリキュラム委員会が中心となり、カリキュラム編成の基本方針を以下のように決定した。この方針のもとに、各教科のカリキュラム担当者とカリキュラム委員会が常に連絡を取り合い、協力してカリキュラムを作成することになった。

(1) 中等教育の完成を目指すカリキュラム

本校は大学進学希望者がほとんどの学校であるが、「大学進学準備教育」だけを目的とはしていない。大学進学はあくまでも結果であって、本校を卒業すれば「よき市民」として世の中を生きていける生徒・人間を育てることを目標とする学校である。したがって、そのためにはどのようなカリキュラムが最適であるかを研究・開発する。

(2) 2-2-2制が形の上からもわかるカリキュラム

現在のカリキュラムは、2-2-2制を標榜しながら、形の上では3-3制あるいは4-2制にしか見えないという指摘を受けた。中等教育学校が、単に中学3年と高校3年を足しただけの学校ではないことから考えても、2-2-2制がカリキュラム上で実効性を持つようにしなければならない。

これはカリキュラム全体で考えなければならないとともに、各教科のカリキュラム上でも2-2-2制が見え、2-2-2制が必然であることがわかるものにする。特に、中学年（3・4年）のカリキュラムをどのように構成するかがひとつのポイントである。

(3) 教科の再編をにらんで、新教科・科目の構想・実践を行うカリキュラム

おそらく、10年後には教科の再編が始まり、20年後には教科の様子はかなり変化しているであろう。その状況を見越して、各教科の特性を考えながらカリキュラムを編成する。すなわち、現在の教科・

科目や学習指導要領にこだわらず、中等教育学校としての本校が考える教育を実践していくためには、どのような教科・科目が必要なのかを考えて、教科の再編もにらんで大胆に研究を進める。

(4) 総合学習を6年間を通して実施するカリキュラム

総合学習としては、「奈良学」「情報学」「環境学」「世界学」の実施が決定しているが、「総合的な学習の時間」として新学習指導要領が定める時間数には不足している。さらに、本校の総合学習は、グループ別で学習するものばかりである。それらの点を克服して、6年間を通した総合学習の体系を創り上げる。

また、新カリキュラムで出てくると予想される新しい構想と総合学習とのバランスを考慮しなければならない。

(5) 「学力」差の拡大に対応するカリキュラム

中等教育学校は学力検査が許されないので、入学した生徒は6年間を過ごすうちに「学力」差が拡大することが予想される。これは、本校が10数年前に経験したことである。この「学力」差に対応するために、どのような方策が考えられるのかの研究がぜひとも必要である。

特に、教育内容が中学の内容から高校の内容に変わる中学年(3・4年)が重要だと考えられる。その時期に、チームティーチング(以下TT)や少人数、習熟度別の教育を用意する方向で編成していく。

(6) 小学校から大学への連携を視野に入れるカリキュラム

本学の附属小学校は、大正時代から総合学習を実践してきた学校である。本校が計画している「総合学習センター」などを通じて、附属小学校と総合学習において連携をとれるようにしていきたい。また、本学の教官にも本校へ出講してもらい、生徒が学問の最先端にふれる機会がもてるカリキュラムの編成を行う。

2 中学年(3・4年)の重要性

中等教育学校の6年間の生徒たちの発達の幅と深さは、3年+3年では見えない。つまり、中等教育学校は、中学3年間と高校3年間を単純に足し合わせた学校であってはならないと考える。特に、3年(中学3年)と4年(高校1年)の間には、教科的、認知的ギャップが存在する。これを1つの段階と見ることで、様々な教育的・教科的取り組みが可能となる。

例えば、本校の社会・地歴・公民科では、知識・概念、各種技能の習得について、次のように考えている。

学年	知識・概念	各種技能
1・2年	基本的知識の習得 (鎌倉武士、裁判所など)	視点の広がり まとめ・発表 意見表明 体験・交流
3・4年	知識から基礎概念へ (在地領主、司法など)	課題学習 多様な表現 二項討論 協同・主張
5・6年	基礎概念の習得・応用 (荘園制、国家権力など)	課題追究 主題的表現 多様な討論 模擬授業等 相互認識

このように、カリキュラム作成の際には、全教科において2-2-2制の概念が必要となっているのである。全教科において、上記のような研究を行い、2-2-2制が形の上からも見える中等教育学校のカリキュラムを編成する。

3 新教科・科目の構想

上記で述べたように、中等教育学校においては中学年（3・4年）が非常に重要な学年だと考える。したがって、従来の教育課程、あるいは中学校・高等学校を前提とする学習指導要領にとらわれていたのでは、中等教育学校として十分なカリキュラムは編成できないと考え、3年と4年をつなぐ新教科・科目の設置を行う（もちろん、この試みは、中学年に止まるものではない）。平成12年12月現在において、構想が進行中のものは以下の通りである。

- 3年 現代史（社会・地歴・公民科）
生活デザイン（芸術科と家庭科の合科）
- 4年 現代史（社会・地歴・公民科）
生活デザインⅠ（芸術科と技術科の合科）
- 5年 芸術と社会（社会・地歴・公民科と芸術科の合科）
総合数学Ⅰ（数学科）
生活デザインⅡ（芸術科）
- 6年 総合数学Ⅱ（数学科）
生活デザインⅢ（芸術科）

それぞれの構想について、簡単に述べておく。詳しくは、各教科の項を参照していただきたい。

(1) 現代史

中学年を結ぶ新科目として、「中学社会」歴史的分野と「高校日本史A」「高校世界史A」の相互乗り入れを行う「現代史」を創設する。これにより、同時代史的前近代史・近現代史を重視した新しい視点を打ち出す。

「現代史」では「産業革命」以降の歴史を扱う。

(2) 芸術と社会（仮称）

本校の5・6年生時では「個の確立と将来の展望—個性、能力、進路に応じた学力の習得と自立した人格の形成—」が教育目標となっている。この目標に接近するために、新科目「芸術と社会」（仮称）を設置する。

本科目は二つの視座に基づいている。一つは、現代世界が当面している諸問題を根本的には価値の問題としてとらえる視座である。いま一つは、「自立した人格の形成」を、体験を通じた価値との出会い、自己認識、表現という過程としてとらえる視座である。この二つの視座が交錯する地点を「humanities（人文）」と理解したい。

ここでいうhumanitiesとは、文学などの言語的表現だけでなく、ダンスや映画や音楽などといった非言語的表現をも含むものであり、そのいずれもが現代世界を表象している。したがってhumanitiesは、私たちが現代世界についての認識を深めたり、個の確立を試みるにあたって、格好の素材を用意しているといえよう。

本教科ではさまざまなhumanitiesをとりあげ、現代世界の仕組みや既存の価値観の矛盾を学びとり、それらを乗り越えてゆく力をつけていきたい。

(3) 総合数学Ⅰ・Ⅱ（仮称）

現在のカリキュラムでは、4年までが必修で、5年から自由選択である。これを、新カリキュラムでは5年まで必修にすることにした。数学の力は「生きる力」の基本となるものであるが、理系・文系や大学受験との関係で教科・科目を選択する傾向が強まってきた現在の生徒たちは、数学を避けようとする傾向が強い。このままでは、中等教育を終了するにふさわしい「数学の力」「生きる力」を全員が身につけているとは言い難いからである。

しかし、数学が苦手であり、大学受験にも必要でないという生徒も現実には存在する。そこで、従来からの教科書に代表される「数学」とは別の、新科目「総合数学Ⅰ・Ⅱ」（仮称）を創設することにした。これは新学習指導要領における「数学基礎」と似ているが、「数学Ⅰ」あるいはそれ以上の数学を学習したあとに履修する点で大きく違う。すなわち、「数学基礎」よりも進んだ数学の上に展開するのである。

(4) 生活デザイン

従来の工芸科に、美術科・技術科・家庭科の要素を加えて、合科したものである。従来の教科の枠にとらわれることなく、文字通り「生活をデザインする力」を身につけることを目標とする。

3年生は、ファッションデザインやテキスタイルデザインなども内容に含め、家庭科の出講を受ける。4年生は、「イサム・野口の明かり」などのインテリアデザインや建築・環境デザインなども内容に含め、技術科の出講を受ける。

以上の他にも、社会・地歴・公民科、家庭科、保健体育科による合科で、新科目「いのち・暮らし」構想があった。しかし、社会・地歴・公民科が他にも新科目を創設すること、総合学習へ積極的に参加することなどの負担増から参加が危ぶまれた。そして、保健体育科と家庭科で教育内容のすり合わせを行ったところ、本当の意味での合科となるための合意ができなかった。このままでは、単に担当者が複数教科から出て講義するだけとなる恐れが出てきたので、今回のこの構想は発展的に解消した。その代わりではないが、家庭科の構想に社会・地歴・公民科が協力、出講する形での「家族」構想が現れて、総合学習として設置すべく研究中である。

4 教科の再編

カリキュラム委員会では、現在の教科を次のように分類した。

- 国語・英語・数学 → 基本的学力に関する教科（含理科の一部、地歴の微部）
- 理科・社会（地歴・公民） → 多面的学力に関する教科（科目間格差あり）
- 保体・芸術・技家 → 生きていく上での基礎的技能・精神・身体に関わる教科

そして、これらのうちの「基本的学力に関する教科」は将来も存続するであろうが、他の教科は再編されると予想している。

特に、「生きていく上での基礎的技能・精神・身体に関わる教科」は、現在の枠組みにとらわれることなく、社会の変化に伴って大胆に再編を目指すべきだと考えている。その1つの方法として、中等教育学校として必要な新教科・科目の創設を通じて、教科の再編を構想している。

具体的には、「芸術科」・「技術科」、「家庭科」が大同団結して、「創作科」（仮称）を編成することを協議中である。前項で述べたような新科目を通じて、これらの教科が有機的に結びついて新教科を構成するように研究を続ける。

5 総合学習と個別教科

(1) 総合学習

本校では、総合学習を次の2種類に分類している。

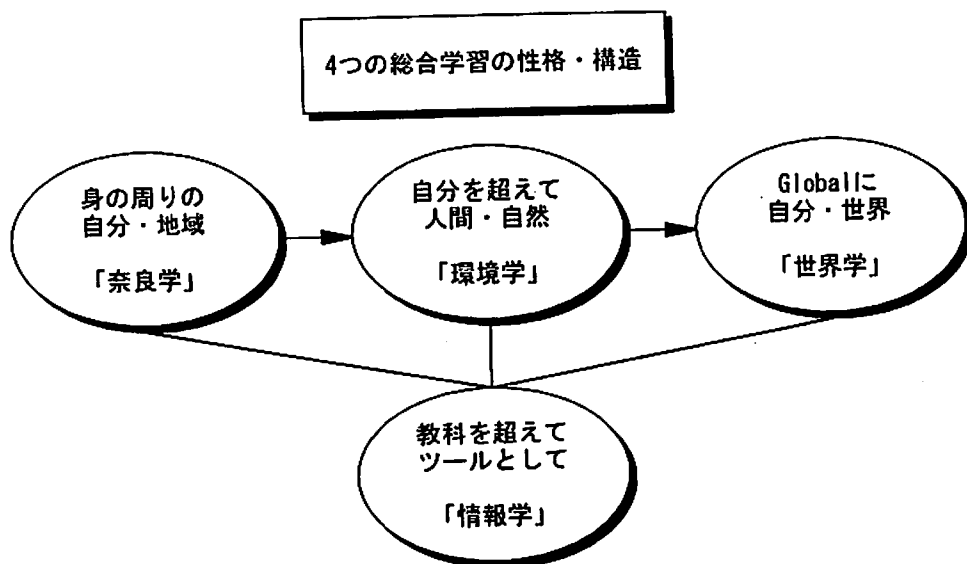
■「統合型総合学習」：まとめて学習する方が適しているもの

1つのテーマを、教科横断的・総合的に学習する

■「分散型総合学習」：各教科に分散させて学習する方が適しているもの

1つのテーマを、各教科の側面から学習してモザイク的に総合する

そして、新カリキュラムでは総合学習として、「奈良学」「環境学」「世界学」「情報学」の4分野の実施を予定しているが、それぞれの性格・構造を次のようにとらえている。



したがって、自分の周りのことを学習する「奈良学」、教科を超越して様々な場面でのツールとして重要な情報を学習する「情報学」は分散型として、様々なテーマを扱い、それらを深めることができる「環境学」「世界学」は統合型として、学習するのが最適だと考えた。

統合型の内容や教材は、時系列をなしながら網状をなして関連・系統化されていくが、依然として一個の〈教科〉として構成していくことができる。ところが、分散型は時系列や系統性は全く保証されていない。そこで、2つの総合学習を明確に分類することで、その取り扱い方法、展開方法、留意点、評価方法等が明確になると仮説を立てて研究している。

それぞれの総合学習についての詳細は、第3編 総合学習を参照されたい。

(2) 個別教科

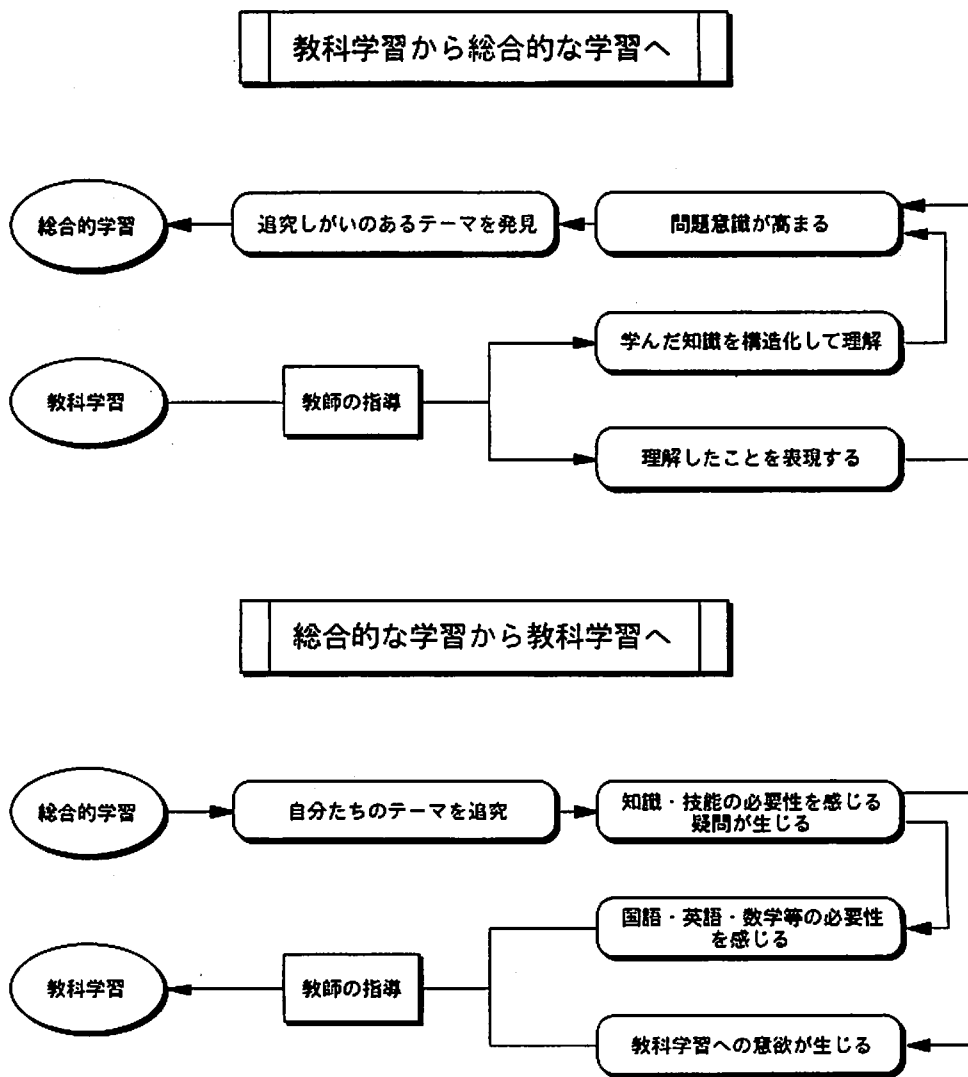
各教科のカリキュラムにおいて、最も重要視しているのは「2-2-2制が見える中等教育学校のカリキュラム」を編成することである。そのため、中学校・高等学校を前提としている学習指導要領に縛られることなく、大胆に前期課程（中学）・後期課程（高校）6年間で重複する教材を精選し、どちらか一方に位置づけて不必要な重複をなくす作業を行っている。あるいはその逆に、生徒の発達段階

を考慮して、同じ概念をスパイラル方式でそれぞれの発達段階に応じて教育内容に組み立てる研究も行っている。

このように、単なる教育内容の前倒しではなく、生徒の発達段階を考慮した2-2-2制の考え方に基づいて学習内容を並び替えることによって時間的ゆとりをつくり出し、未知の世界への好奇心や学習への意欲を深める。そして、「安定した学校生活で自分を発見し、自己実現する生徒」、「ゆとりのある学校生活」、「教師の余裕ある生徒理解」、「余裕ある教育活動」、「柔軟なカリキュラム」の実現を目指す。

(3) 総合学習と個別教科

総合学習と個別教科とは無関係ではあり得ない。総合学習が実りあるものになるためには、当然、教科の力が必要である。そして、総合学習において教科の力が実際に役立つことを経験することで、教科の学習にも意欲的に取り組める。このように、総合学習と教科学習は両輪である。



したがって、カリキュラムにおいても、個別教科は総合学習を意識したカリキュラムを編成し、総合学習は個別教科で学習することを意識したカリキュラムを組まなければならない。例えば、3年における「環境学」をより実りあるものとするために、理科では3年生でエネルギーを重点的に学習するカリキュラムを構想している。あるいは数学では、関数の学習において「環境学」の内容を取り込

めないか研究する予定である。

6 前期課程と後期課程の相互乗り入れ

前項でも述べたように、新カリキュラムでは、6年間を見通して各教科の教育内容を精選し、配列し直す研究・作業を行っている。それに関して、新指導要領との関連を整理すると、以下のようになる。

- (1) 前期課程（中学校段階）について（例えば、必修教科の授業時数を、年間90単位時間の範囲で必修教科の内容を代替することができる選択教科の授業時数に充てる、など）
 - ① 3年の社会の公民分野を、3年「現代社会」の内容に含めて指導する。
 - ② 3年の社会の公民分野を、「アカデミックガイダンス」の「マスコミ」でも指導する。
- (2) 後期課程（高等学校段階）について（例えば、必修教科・科目の内容を代替することができる学校設定教科・科目の履修をもって、必修教科・科目の履修の一部又は全部に替える、など）
 - ① 3・4年「現代史」の履修をもって、高校の必修教科・科目「世界史A」「日本史A」の履修とする。
 - ② 4年「代数・幾何学Ⅱ」の履修により、高校の必修教科・科目「数学Ⅰ」の履修とする。
 - ③ 4年「総合理科Ⅱ」の履修により、高校の必修教科・科目「理科総合A」「理科総合B」の履修とする。
 - ④ 4年「家庭総合」で、高校の必修教科・科目「家庭基礎」の履修とする。
 - ⑤ 4年「Integrated English」で、高校の必修教科・科目「英語Ⅰ」の履修とする。
- (3) 前・後期の教育課程の相互乗り入れ関係について（例えば、中学校段階で高等学校段階の必修科目を履修している場合は、高等学校段階に進んだときにその科目を履修済みとみなし、他の発展的な科目などを履修させる、など）
 - ① 3年の「現代社会」の履修により、高校の「現代社会」内容の一部を履修済みとする。
 - ② 3年「総合理科Ⅰ」の履修により、高校の「理科総合A・B」の内容の一部を履修済みとする。
 - ③ 3年の「保健」の履修により、高校の保健の内容の一部を履修済みとする。
 - ④ 3年「生活デザイン」の履修により、工芸、美術の内容の一部を履修済みとする。

7 選択制と「アカデミックガイダンス」

(1) 現在のカリキュラムの選択制

本校の現在のカリキュラムの特徴の1つは、高学年における大幅な選択制である。したがって、5・6年においては多くの選択教科・科目を設置している。その裏返しとして、1年～4年ではほとんどの教科・科目が必修であり、芸術科を除いて選択制は存在していない。

そのため、生徒たちは高学年になっていきなり教科・科目の選択を迫られてきた。数年前までなら、その状況でも自分の進路に応じて選択が可能な生徒がほとんどであったのだが、生徒や社会の変化に伴って、最近はとまどう生徒も多くなってきた。

(2) アカデミックガイダンス

以上のような状況を考慮して、新カリキュラムにおいては「アカデミックガイダンス」と称する選

択学習を設置することになった。この「アカデミックガイダンス」は、次のような名古屋大学の安彦忠彦教授の選択の理論を参考にしている。

- 中学の選択方法と高校の選択は違うべき
- 中学で選択を履修する原理：広く、浅く、多く、短く、軽く
- 高校で選択を履修する原理：狭く、深く、少く、長く、重く
- 高校は個性を伸ばす、深めるのが役目であり、うまく機能しないのは、中学で選択的な経験が乏しいからである。

この安彦氏の説を参考に、以下のような「アカデミックガイダンス」の構想をたてた。

- 3・4年の中学年において、異学年混合で短期集中型で開講する。
- 前・後期において各々1講座(0.5単位)を選択し、2年間で合計4講座(2単位)を履修する。
- 本学の教官を中心に、それぞれの研究分野・専門分野の講義および実験の指導を行う。
- 本校の教官は、大学の教官との連絡や援助を中心にするが、講義を行うこともある。
- 生徒が自分の将来を考え、職業を選択していく際の援助となるように、それぞれの学問の楽しさ、素晴らしさを生徒自身が感得する事を目標とする。したがって、膨大な、過酷なレポートは課さない。

次年度以降は、この計画の具体化を進めていきたい。

8 キャリアガイダンス

(1) キャリアガイダンスの必要性

本校では、生徒が自分の将来の生き方・職業を考える時間は、担任が中心となってHRで保証してきた。しかし、これからますます社会も生徒も多様化する中にあるのは、これらの指導を学校全体のカリキュラムの中に、「キャリアガイダンス」として組み込まなくてはならないと考えた。

そこで最初は、他校の総合学科で行われている「産業社会と人間」を参考に、1単位分を4年生で確保しようと構想した。しかし、授業時間数は週に30時間という制約などもあり、新カリキュラムでは短期集中的に行う形で出発することに合意した。

(2) キャリアガイダンスの試行

「キャリアガイダンス」の試行の1つとして、平成12年度は学務部・進路が中心となり、大学教官による学問の紹介を通じて将来の職業選択の参考となる以下のような「ガイダンス」を、5年生に対して実施した。

- 日 程 2000年11月4日(土) 3時間目 4時間目
- 企画内容 大学の教員による学問分野別のガイダンス、および質疑応答
- 目 的 各学問分野についての具体的内容と最新の研究について知る。
- 内 容
 - ・各学問分野の一般的な研究フィールド
 - ・どのような学生を求めているか
 - ・将来の進路はどのようにひらけていくのか
 - ・高校時代にどのような学習をしておくのが望ましいかなど
- 分科会：人文科学系、社会科学系、医療系、理学系、工学系（バイオ工学、情報工学）

このガイダンスに対する生徒の反応は非常によく、大学教官の先端分野の高度な話にもよく食いついていた。やはり、講演（講義）をする人間が興味を持っていることについて話すと、少々難しくても生徒の受けはいいようだ。この経験を、新しい試みである「アカデミックガイダンス」にも生かしていきたい。

9 少人数・習熟度別編成

学力検査が実施できない中等教育学校では、中学年(3・4年)頃から「学力」差が拡大すると予想される。そこで、中学年の国語科・数学科・英語科に、少人数授業を積極的に取り入れることにした。

(1) 国語科

国語科では、3年生の2単位分で1クラスを2分割した20人の授業を計画している。この授業では、「表現」に重点を置いて指導を行い、構想の整った400字程度の文章が書けることを目標とする。

さらに、教師の人員、時間、負担等が許せば、4年生の一部においても少人数授業を行うことを検討中である。

(2) 数学科

数学科では、4年の5単位分で1クラスを2分割した20人の授業を計画している。これは、高校数学を本格的に学習する4年からは、人数を少なくしてきめ細やかな指導を行うことによって「学力」差の拡大を防ぐとともに、あらゆる力の基本となる数学の力を全員に身につけさせるためである。

特に数学科に対しては、カリキュラム委員会から少人数授業でも習熟度別は考えないのか、あるいはチームティーチングは考えられないのかとの意見があった。それに対して数学科は、以下のような考え方で、クラス2分割の20人授業を選択した。

- ・40人から20人になるだけで、いままで以上に生徒に目が届き、丁寧な指導が行える。
- ・問題演習等で生徒が指名される機会も倍増し、それだけでも学習効果はかなり違ってくる。
- ・少人数授業は初めての経験であり、いちばんやりやすい単純な2分割でやる方が問題が少ない。
- ・TTは単純な2分割の少人数授業とは違った効果のある授業はできると考えるが、本校の生徒の実態を考えると、20人の少人数授業の方が効果があると判断した。

(3) 英語科

現在のカリキュラムでは、英語科は1年～3年で1クラスを2分割して20人で授業を実施している。これを4年まで拡大する予定で、カリキュラムを考えている。語学教育は、やはり少人数で行うことが何より効果的だと考えるからである。

本校では、技術・家庭科、保健体育科などで3クラスを4分割する30人授業の伝統がある。この少人数授業を英語科からさらには国語科、数学科にまで拡大していく。この少人数授業の方向は、これからの日本の学校での主流となっていくだろう。

本校の研究としては、以下のことを目指す。

- 20人でこそできるものを追究する
- そのために、40人ではできないことは何かを追究する
- そして、教科、内容に応じた最適な授業タイプを研究する

10 ホーム制の構想

(1) ホーム制とは

カリキュラムの議論の中で、6年一貫の中等教育学校の特性を生かし、生徒の縦のつながりを強化するものとして、以下のような「ホーム制」構想が現れた。

- 1学年男子2人、女子2人の1年～6年まで合計24人が1つのホームを構成、全体で30ホームを構成する。
- 各ホームには、1人ずつ教官がホーム担任として配当される。他の10数名はフリーマンとして、各ホームから出される企画のコーディネーターやホーム制担任の補助にあたる。
- 7月の午前中、12月の合計約2週間をホームによる活動期間とする。
- 基本的には、各ホームの活動内容はそれぞれのホームが自由に決める。例えば、宿泊行事なども可能である。
- 各ホームは上級生の生徒代表を1名決め、代表者会議等を開きながら、代表が中心となってホームを運営する。教官は、補助の立場をとる。
- この「ホーム」制を通じて、生徒の縦のつながりの強化を図る。

(2) ホーム制についての議論

「ホーム制」の目標とする縦のつながりの強化は、教官全員が賛成である。そして、そのための手段としての「ホーム制」に対しても、非常に魅力のある案だとの賛成も多かった。

しかし、短期集中方式で行った場合の「奈良学」「アカデミックガイダンス」と活動期間がバッティングする、30人のホーム担任の仕事の様子や負担の度合いが具体的にイメージできない、などの理由で、平成12年12月現在、心情は賛成、実施は躊躇という状況である。

それを打開するために、次のような改良案も現れた。

- 毎日30分間、朝の会を延長したような形として「ホーム制」を実施する。したがって、従来のような朝の会はなしとなる。活動内容はそのホームで考えて、自由に行う。
- 原案のような「ホーム制」を、「奈良学」「アカデミックガイダンス」も学習しながら行えるように追求すればいいのではないかという意見もある。しかし、これだと教官の負担はかなり増加し、7月と12月の実施期間中は慌ただしい感じとなり、原案の意図の1つと合わなくなる。

以上のように、明確な反対はないのであるが、他の構想との関係もあって実施には数々のハードルが立ちふさがっている。しかし、「ホーム制」の精神、目標とするところを、何とか新カリキュラムの中で生かすように研究を進めたい。

11 2期制

(1) 2期制への移行

週5日制の中等教育学校のカリキュラムを編成する上で、できる限り行事等を削ることなく授業時間数を確保するために、2期制への移行を検討した。

まず、2期制のメリット、デメリットを次のように整理し、議論を行った。

メリット

- 授業時間が確保できる。
- 定期考査の間隔が長くなるため、一夜漬けの学習では対応できないので、日常的な学習習慣が身に付く。

- 0.5単位の授業が設定できる。
- 1単位の授業でも、「前期に2時間続きの授業」という設定ができる。
- 後期課程3年間を6学期ととらえ、前半3学期は共通履修、後半3学期は文理別の選択履修ということも考えられる。

デメリット

- 定期考査の間隔が長くなるので、日常的な学習ができていない生徒の負担が増大する。
 - 定期考査が少なくなるため、成績不振者の発見が遅くなる。
 - 前期、後期での2回の時間割編成が必要となることも考えられ、時間割を組む者の負担が増える。
- ※どちらとも言えない事として、小テストの増加が考えられる。

その他、クラブの公式戦への影響、7月の暑いときの授業の対策などについても議論をし、その結果、平成12年6月に2期制への移行を決定した。しかし、実施時期は未定とし、もう少し時間をかけて、各分掌などでさらに問題点等を検討した。

そして、10月に実施時期について議論をし、平成13年度より2期制に移行することを決定した。その結果、前期、後期別々に単位認定を行ったり、1単位の授業を前期のみに2時間続きで行うなどの柔軟な時間割も組めることとなった。新カリキュラムでも、この利点を生かしていきたい。

第3章 カリキュラム編成作業

1 編成日程

- (1) 平成11年に研究推進委員（8名）、運営指導委員（12名）、平成13年にカリキュラム委員（3名）を決定する。
- (2) 研究推進委員会が中心になり、平成11年度中に「平成元年度より実施してきた2-2-2制を枠組みとする中高6年一貫教育の総括」を行う。
- (3) 教科カリキュラム担当者が中心となり、平成12年度中に各教科のカリキュラム細案を作成する。
- (4) カリキュラム委員会と教科カリキュラム担当者が中心となり、平成12年度中に新教科・科目の創設を行い、平成13年度中にそれらのカリキュラムの編成を行う。
- (5) カリキュラム委員会が中心となり、平成13年度中に新カリキュラムを編成する。
- (6) 研究推進委員会とカリキュラム委員会が中心となり、平成13年度中に「総合学習」の形態とカリキュラムを決定する。
- (7) 研究推進委員会が中心となり、平成12年度中に2期制・単位制への移行について決定する。
- (8) カリキュラム委員会が中心となり、平成12年度中に移行期のカリキュラムを決定する。
- (9) 平成14年度は1年～3年、平成15年度は1年～4年、平成16年度は1年～5年、平成17年度は全学年で新カリキュラムを実施する。
- (10) 新カリキュラム実施のための細目を決定する。

2 平成13年度までの作業日程

(1) 平成11年

- 4月 中等教育学校に向けての校内体制の見直しを始める。
- 5月 平成元年度より実施してきた2-2-2制を枠組みとする中高6年一貫教育の総括項目の洗い

出しを行う。

- 6月 中等教育学校の入学検査の方法と中等教育学校に向けてのカリキュラムの検討を始める。
- 7月 研究紀要執筆の共通項目とアンケートについて決定する。
- 8月 5日制における教育課程・授業時数について協議する。
- 9月 中等教育学校・5日制におけるカリキュラムの検討を行う。
文部省研究開発校実地調査が行われる。
- 10月 教官アンケート：「環境学」「奈良学」のアンケートの原案を作成する。
校内研修会（名古屋大学教授 安彦忠彦先生 「中等教育のカリキュラム構成」）
- 11月 6年一貫教育・総合教科についての教官アンケートを実施する。
学期制・授業時間・教官アンケートのまとめについて協議する。
- 12月 2期制を取り入れるかについて議論する（継続審議）。
新カリキュラムは50分の6限授業とすることに決定する。

(2) 平成12年

- 1月 総合教科「世界学」の公開授業と研究協議会を行う。
- 2月 新カリキュラム検討のための教科主任会を行う。
カリキュラム委員（3名）を選出する。
運営指導委員会を開催する。
総合学習を考える会を開催する。
- 3月 諸々の規定（内規）の検討、個別教科のカリキュラム作成について議論する。
カリキュラム委員が東京大学教育学部附属中・高校へ学校訪問する。
教科主任会で、各教科と総合学習との関係の一覧表提出を要請する。
- 4月 個別教科と総合学習「奈良学」、「情報学」との関連表をまとめる。
2期制について議論する（継続審議）。
- 5月 カリキュラム委員が名古屋大学附属中・高校へ学校訪問する。
- 6月 2期制への移行を決定する（移行時期は継続審議）。
- 7月 校内研修会（鳴門教育大学助教授 村川雅弘先生「中等教育における総合的な学習」）
新カリキュラムの方向性についてグループ別に議論（午前中）
運営指導委員も交えて全体で議論（午後）する。
文部省による研究開発進捗状況調査が実施される。
1993年度卒業生へ、本校教育課程へのアンケートを発送する。
- 8月 新カリキュラムの諸問題をまとめて提示し、共通認識を行う。
新教育課程表（案）を提示する。
- 9月 運営指導委員の長尾先生＋カリキュラム教科代表＋カリキュラム委員＋有志の研修会で、
新教育課程表（案）について議論を行う。
1993年度卒業生アンケートの集約ができあがる。
- 10月 平成13年度より、2期制に移行することを決定。
移行期のカリキュラムを決定する。
- 11月 新カリキュラムの課題を列挙し、「環境学」、「世界学」の合科的な形態などについて議論する。

来年度の3月までに単位数を決定し、講座編成条件などの細部も決定する事を確認する。
各教科で授業年間計画表の作成を開始する。

- 12月 カリキュラム委員会と各教科との、単位数、講座条件などに関する協議を開始する。
「いのち・暮らし」構想が挫折し、代わりに、「家族」構想が浮上する。
モジュール制も考慮して、45分×7限構想も平行して考えることに合意する。
「アカデミックガイダンス」構想の概略を決定する。
「ホーム制」構想に関して議論したため、新カリキュラムの大枠については継続審議となる。

(3) 平成13年

- 1月 各教科、カリキュラム編成の視点と授業年間計画表の概略を決定する。
短期集中方式の導入を決定する。
- 2月 カリキュラム委員会から、新カリキュラム案を提示し、議論する。
卒業に必要な単位数等、諸内規を改定する。
- 3月 各教科の単位数を決定し、講座編成条件などの細部も決定する。
- 9月 各教科のカリキュラムの編成を終了する予定。
- 12月 新教科・科目のカリキュラムの編成を終了する予定。

(4) 平成14年

- 1月 新カリキュラム全体の編成を終了する予定。

第2編 個別教科

第1章 各教科カリキュラムの編成

カリキュラム委員会

1 「2-2-2」制と「教科」カリキュラムの目標

本校では「2-2-2」制を柱とする6年一貫カリキュラムを作成し、各教科においても生徒の個性と能力を伸ばす授業づくりを試みてきた。生徒の成長は、3年と4年の間に断層が存在するわけではないのだが、中学と高校が制度的に分離していたために、カリキュラム編成にあたっていくつかの制約が生じていた。なかでも最大の問題点は、中学と高校に分かれている「学習指導要領」の内容を、大胆に逸脱できないことにあった。

中等教育学校への移行は、教育課程に関する「特例措置」を活用することによって、こうした「学習指導要領」上の制約を大きく緩和し、より自由なカリキュラム編成を可能にした。また、2002年からの学校5日制の実施ともあいまって、「新学習指導要領」が提示された。こうした状況をうけて、本校では「2-2-2制」のもとで6年一貫教育の徹底を図るとの合意のもとに、新カリキュラムづくりを進めた。新カリキュラムの構想は、教育活動の大部分を占める「教科」改革によって支えられなければ、「画餅」に終わってしまう。「教科」カリキュラム作成は、単なる科目の変更や単位数削減交渉ではなく、本質的な検討を踏まえたものにしたとの意気込みで進めてきた。

「教科」の各期目標は、以下のように定めることができる。

<1・2年>「周囲への依存と個の萌芽」期

→「基礎的能力」「基本的学力」「基本的な学習方法」の習得を図る。体験学習や調査活動を積極的に取り入れ、知的好奇心や各種学力の育成をめざす。

<3・4年>「個の形成と模索・探求」期

→「基礎・基本」に加え、「多面的な学力・学習方法」の習得を図る。初歩的な選択作業や「自主的な学習活動」を通して、自己理解・自己探求能力の育成をめざす。

<5・6年>「個の確立と自立への展望」期

→「個性・能力・進路」に応じた科目選択制を活用して、「深化した学力・学習方法」の習得を図る。広い視野と実践力を備えた「自立した人格の育成」をめざす。

なお、「教科」カリキュラムづくりにあたっては、工藤文三氏（国立教育研究所）の指摘「中高一貫教育における教育課程編成の在り方」（『中高一貫教育推進の手引』：学事出版2000.7）に学んで、次の6つの視点を立てながら進めている。

(1)「基礎基本の定着と1・2年」 (2)「中高内容の互換と3・4年」 (3)「選択制」の拡大

(4)「新教科」・「合科」構想 (5)「自己学習力」の育成 (6)「自己理解・自己探求」の課題

また、次章からは「各教科の構想」が詳述されているが、以下の項目については共通に記している。

(1)「中等教育における意義」 (2)「基本的な考え方」 (3)「カリキュラムの特徴」

(4)「新学習指導要領との違い」 (5)「指導内容一覧」

2 「教科」カリキュラム作成の基本的な考え方

2-1 基礎・基本の定着（1・2年を中心に）

(1) 「基礎・基本」は学校教育の不易の部分

「基礎・基本」の定着は、学校教育の不易の部分であると位置づけ、各教科とも1・2年期の中心目標に据えている。この姿勢は科目名にも反映されており、「国語基礎」「基礎理科」「技能基礎」「生活基礎」「Introductory English」などの名称がつけられている。また、社会・数学・芸術・体育の各教科でも1・2年の学習は「基礎・基本」重視の内容となっている。「基礎・基本」の内容については、習熟すべき「知識や概念」・「技能」、自己「学習力」・「思考力」・「表現力」などの諸点から、多面的に検討しようとしている。もっとも、なにが「基礎・基本」の学習内容かについては、教科・科目の事情や生徒の適性・進路によっても大きく違うが、ここでは詳しくふれない。

情報教育の「基礎・基本」については、技術・国語・数学科等に論及がある。1・2年でワープロソフト、表計算ソフト、インターネットと電子メール等、基本的な「コンピュータリテラシー」の習得をめざす点では、共通理解がみられる。しかし、「従来の国語教育にコンピュータをどのようにとりこもうかということよりも、ツールとしてのコンピュータを教育に利用する際に、国語科がどのような役割を果たすことができるのか」（国語科）といった、視点の転換は各教科の今後の課題であろう。

(2) 基礎・基本重視の姿勢と「評価」の課題

「新中学学習指導要領」に関して、いくつかの教科から、「基礎・基本部分を削減しすぎている」との批判が表明されている。数学科は「概して中学校の数学の内容は、義務教育終了時に習得しておくべきものとしては、甚だ不十分なもの」と記し、英語科は「語彙」の不足、社会科は「世界」学習の軽視を指摘している。これらの教科では、「基礎・基本」の内容を補うべく、6年一貫教育のメリットを生かしたカリキュラム内容上の組換を構想中である。なお、本校では履修時間を週30時間（HR・道徳を含む）とし、多めに設定している。「新学習指導要領」は、少なくとも2年以降に選択科目を義務づけているが、本校では「基礎・基本」を重視する立場から、1・2年はすべて必修科目としている。

性格や能力が異なる個々の生徒を相手に、「基礎・基本」の定着をどう図るかは、本校にとっても困難な課題である。まずは、生徒の「学力」を正確に把握することが必要であろう。きめ細かな「到達度評価」の実践や「ポートフォリオ」などの試みが有効であると考え、検討中である。しかし本校ではかつて、到達度評価をふまえた「標準学力テスト」が有効に機能しなかった経緯もあり、「評価」にとりくむにあたっては、多面的な分析にもとづいた「評価」研究を早急に進めたい。「基礎・基本」が定着しなかった生徒たちへの補充授業の制度化も重要な課題である。2期制導入によって生じた「ゆとり」や「半日授業」期間を利用したとりくみなどが考えられる。

2-2 中高カリキュラムの互換と3・4年期

(1) 選択性導入の教科・科目

3・4年期は、6年一貫教育の特色が一番出るところである。各教科とも、中学と高校の学習内容を整除して合理的で系統的なものに組替えることを強調している。3・4年「選択制」については、教科の性格を反映して、明確な方向性の違いが存在する。

芸術科は、3・4年期から科目選択制を導入して、「美術」・「音楽」・「書道」・「生活デザイン（後述するように、美術・技術・家庭による合科科目）」から1科目ずつ選択履修させる予定である。背

景には、芸術の「標準単位」が削減される結果、各科目・週1時間程度の授業では教育効果が期待できないという事情がある。しかしより本質的には、3・4年になると、「芸術」に対する生徒の興味関心格差が、他教科以上に開く傾向が顕著だからである。体育科も「体育」の授業において、男女別のゆるやかな種目選択制を導入しようとしている。種目別選択構想は事実上の「科目」選択制である。体育科は生涯教育との関係も視野に入れつつ、新カリキュラムを構想しているのだが、生徒の興味関心や主体性をより尊重しようという姿勢が表れている。

また、3・4年に「アカデミックガイダンス」を設置して、2年間に4講座を選択させ、3・4年生共通で履修できるようにした。生徒が学問の一端を体験できるように、大学や専門家の協力も得て進める予定である。狙いは、安彦忠彦氏の言う「広く、浅く、多く、短く、軽く」の視点から、選択履修を通して、生徒に自己決定・判断の体験をさせ、「自己」をより理解させたいという点にある。

(2) 必修教科における「総合」「統合」「融合」科目

芸術・体育以外の教科は、基本的に3・4年も必修継続という立場である。同時に多くの教科が、「総合」をキーワードに、学習領域・内容を広げ、深め、関連づけようとしている。科目名も「国語総合」「総合理科」「家庭総合」「技術総合」「Integrated English」とつづく。社会科の場合は「現代社会」「現代史」を併置しているが、両科目を、「中学社会各分野の学習を総合し、高校各科目履修の基礎」となる「融合」社会と位置づけている。「生活デザイン」も美術・技術・家庭基礎の内容をふまえた「総合」的科目といえよう。3・4年の「総合」「統合」「融合」科目設置の背景には、この時期の「学力」の持つ教科の枠を越えた、以下の「共通項」が存在する。

① 自己発見・自己探求との関連性

「自分をみつめ、自己と他者との関係の中で…自己実現を図っていく」(英語科)「自分なりに、学習の意味を自覚できれば、意欲的に学ぶ」(社会科)と述べられているように、教科の学習内容と生徒自身による自己発見・自己探求の課題との関連が強調されている。情報化の時代だからこそ、自己発見・探求の課題は重要との指摘もある。

② 現代的・世界的課題との関連性

「社会的視野の獲得」(国語)「知識の現実生活への適用と応用」(理科)「現代認識・世界認識の飛躍期」(社会)「Nature and Environment」「Society and Communication」(英語)「世界の健康課題」(保健)など、現代的課題との関連で教えることの重要性が、多くの教科で強調されている。

③ 教科内における諸学力の総合・融合・統合

「各分野で学習したことを自然科学として総合し」(理科)、「『聞く』・『話す』から『書く』へ」(国語)「聞く・話す・読む・書く＝4技能が統合されたかたち」(英語)「基本的知識から社会的概念へ」(社会)のように、教科内における各分野・知識・技能等の学力構造と3・4年期の学習との関係が、「総合」・「統合」・「融合」などの用語を通して、強調されている。

数学科は「2-2-2」制をふまえつつも、1～4年期の教育内容を大胆に再構成しようとしている。「世界に通用する人材の育成」のためには、「論理的抽象的思考力育成にもっとも適した教科である数学」がもっと重視される必要があるとの立場から、履修拡充を図っている。新カリキュラムでは、数学を「苦手」とする生徒を対象に、5年「総合数学」を置いて選択必修(6年は自由選択)制にする構想である。この主張は、早い時期からの選択制を推奨する今日の教育界の方向や、必修を4年までにとどめている現カリキュラムとは、異なる方向性を持っている。

(3) 少人数講座の拡大

新カリキュラムでは、英語科（1～3年）で実践してきた少人数講座の拡大が図られる予定である。新企画は、英語・数学・国語科とも3・4年期に集中している。英語科は、20人講座を4年に延長したいとの意向である。数学は、内容が難しくなる4年に、少人数講座による丁寧な指導をしたいとのことである。国語科は、「書く」力が急速に伸びる3年で、表現指導の徹底を図りたいとしている。理科も構想中だが、実験授業をTT方式で実施したい意向で、英語・数学・国語とは少々方向が違う。

習熟度別講座については、数学・英語科で話し合われたが見送られた。今後、生徒の「学力」状況の変化をみながら、再検討することもありえよう。

2-3 「選択制」の拡大と5・6年

5・6年では、新教科「情報」が必修として設置される。内容は後で詳しく述べるが、設置科目は「情報B」で、担当は数学の教員の予定である。現カリキュラムでは、5・6年に進路・適性に応じた大幅な選択制を導入した。新カリキュラムでは、今まで以上に教科・科目の選択制が拡大する。選択制拡大の狙いは、「個の確立」へと向かう5・6年期に、「狭く、深く、少なく、長く、重く」履修させることで、生徒の個性・適性をさらに伸ばしたいという点にある。

小規模校なので選択科目数には限界があるが、今までほとんど必修科目であった国語・英語科で、選択科目が大幅に増えている。国語科は、6年で「発展現代文」「基礎古文」「発展古文」「選択漢文」「小論文」を自由選択科目として設置し、進路・適性を意識した少人数講座を企画している。英語科は、5年で「LL Seminar」「Vocabulary」「Writing」「NET」の4講座から選択させるほか、6年の「LL Seminar」「Writing」「Reading」も選択制にしている。数学科では5年「総合数学」を新設して、選択必修科目とする予定である。今後とも、5・6年においても「学力」格差に応じた科目・講座構想を充実していく必要がある。

5・6年芸術・家庭の選択科目は、数学等との「組合せ選択」になることが多く、10人以上の講座成立条件を充たせないことも多かった。他教科とは違い事情を考慮して、講座成立条件の緩和を検討したい。現カリキュラムでは年度途中での「履修取消し」制度があるが、見直しの方向で検討する。

2-4 「自己学習力の育成」と2-2-2制

「カリキュラムやカバーすべき項目があらかじめプリセットされていて、生徒はこれをこなしていくだけでは、passive learnerの域を越えない。私たちは、学習者が自らの学習を自覚的・批判的に捉え、それらを積極的に組織化したり、計画していける自立したactive learnerもしくはcreatorを育てていきたい。」（英語科）のように、各教科で「自己学習力」育成の重要性が指摘されている。

また教科毎に、生徒に習得させたい「方法的学力・技能」についても、検討がなされている。例えば国語科では、「話すこと・聞くこと」に関して、2-2-2制各段階の目標を以下のように記している。

「1・2年は、自分の体験を相手に理解してもらえるように話したり、話し手の意図を考えながら聞き取ることに主眼をおき、事実と意見との関係に注意して話したり聞き取ったりすることを目指す。具体的には、3分間スピーチやインタビュー、テーマ研究に基づく発表などが考えられる。

3・4年は、話し合いの場を通して相手の意見を正しく聞き、自分の考えを効果的に主張することを、グループ活動や発表活動を通じて育成する。グループディスカッションやプレゼンテーション技法を意識した発表などが考えられる。

5・6年は、自己の主張が相手に認められるよう、説得する技能を身につけさせ、問題解決のため

に相手の立場や考えを尊重する聞き手であり、話し手を育成することを目指す。ディベートやシンポジウム形式のディスカッションなどが考えられる。」

各教科の「方法的学力・技能」についての考えは、第2章以降で詳しく述べられている。以下、中等教育学校の「自己学習力」育成に関して、検討課題を3点述べておく。

- ① 中等教育学校（少なくとも3年以降）の「自己学習力」は、小学校でいう「自己学習力」とは、相当に違う。後者が、いわば「教師のお膳立て」のなかで、「素朴な興味関心」から出発するのに対し、前者は、「教師の示唆」はあるにせよ、「自己」と結びついた「問題意識」からしか出発できない。こうした事情をよくふまえて、2-2-2制各期のとりくみを整合性のあるものにする必要がある。
- ② 「自己学習力」の内容・方法は、教科によって相当違う。抽象的・論理的思考が重要視され、学問的系統性の強い「数学」と、生活感覚や個人的価値観が大きく影響する「芸術」「現代社会」「倫理」等では、同じ「問題解決学習」といっても、そこには質的な差異が存在する。また、各教科のとりくみと「総合的な学習」との役割分担を明確にしておく必要がある。「自己学習力」育成の課題は、教科・科目の性格をよく考えて精選し、新カリキュラム全体で構造的に進める必要がある。
- ③ 「自己学習力」育成を標榜する学習活動が、あらゆる場面でとりくまれるようになると、一部生徒が「過密スケジュール」にふりまわされる事態が多発しかねない。国語科・社会科などで、指摘されているように、「試行錯誤し、迷い、安心して回り道ができ、葛藤して悩むことがゆるされる」時間的・精神的「ゆとり」の確保が必要である。また、生徒の「学校生活の実態と年間スケジュール」を尊重した、合理的で組織的な「自主的学習」活動計画の作成が必要不可欠である。

2-5 「自己理解・自己探求」の課題

中等教育段階における「自己学習力」育成の前提条件は、「基礎・基本」の定着と「自己理解・自己探求」の深化にある。この課題と関連性が深い社会科は、次のように指摘している。

『社会認識の育成→自己認識の深化』という方向で関わるのが、社会科の基本姿勢として臨んできたものの、『自己認識の深化』の課題については、ほとんど意識的なとりくみがない状況になっていた。しかし、近年の社会状況の変化と生徒の社会意識・自己意識の変化は、従来の基本姿勢に修正を迫っているように思える。『自己認識の育成→社会認識の深化』という逆の『論理』も、授業等において重視されるべきではないかと考えている。つまり、社会的・普遍的価値を重視する従来の社会科教育とは少し視点を代えた、個人的な生き方や価値観の交流に比重を置いた学習を幅広く展開できないか」

一般的に言って、1・2年では、まだ大人社会の「価値観」や「規範」に疑問をもつことが少なく、逸脱する場合も自己の「価値観」とのズレが自覚されていないことが多い。この時期、自立の基礎を築く上で大切なことは、依存している周囲への「安心」感「信頼感」の確保であろう。3・4年になると、自分の「あり方」や「生き方」を、考えはじめる。個人差は大きいですが、親から与えられた「所与の自己」を崩し、新たな「自己」を求めての試行錯誤がはじまる。大人社会の「価値観」や「規範」に反発しはじめ、個々人の「価値観」の相違も顕在化しはじめる。5・6年になると不充足さはあっても、ある程度「自己」が確立し、自分なりの「位置」や「価値観」をふまえて行動するようになる。自己主張も「根拠」をともなうようになる。

しかし、今日の社会では、こうした個人の「自己」確立や「価値観」深化の道筋が、順調に保障されているとは言えない。むしろ生徒の中には、自らの「価値判断」を放棄し、互いの「価値観」の交

流をさけるような傾向が多い。それだけに、「自己理解・自己探求」の課題は、中等教育における重要課題といえよう。「道徳」を含む特別活動、「総合的な学習」「アカデミックガイダンス」「キャリアガイダンス」などのとりくみや、関連教科・科目を含めた、総合的な検討の場が必要であろう。

3 各教科の性格と「教科」カリキュラム

3-1 各教科の性格とカリキュラムの構造化

各教科の性格やそれに伴う学習方法の違いについては、感覚的な共通理解は存在するものの、それを理論的に構成することは、相当困難な課題である。また、教科・科目の独立性が高い中等教育の現場では、各教科・科目は制度面では「平等」「横並び」という考え方が強かった。とくに、人員配置やカリキュラムにおける単位数交渉、「総合的な学習」の担当者決定など、教科の「実利」が絡む部分になると、こうした「横並び」の考え方が顔を出す傾向があった。

現カリキュラムは、教科の枠をこえた議論を行った結果、「総合教科」などの成果を生んだが、教科単位数の配分では「平等」「痛み分け」の傾向が強かった。しかし、学校週5日制の実施による総枠削減のもとで、教科カリキュラムをより構造的なものにする必要が生じた。新カリキュラム作成にあたっては、各教科の性格を吟味し、教科の担う役割を多少なりとも明確にして臨みたいと考えている。

仮説の域を出ないが、本校では各教科を(1)基礎的能力育成に関わる領域 (2)基本的学力に関わる領域 (3)多面的な学力に関わる領域に分けて、構造化を図っている。各教科の学力は全領域に及ぶことは確かだが、乱暴を承知で、教科の性格の焦点化を図っているのである。

3-2 基礎的能力形成に関わる領域

人間が生きていくのに必要な、身体・精神・技能の育成に深部に関わるもので、非言語的表現が中心である。「保健体育」「芸術」「技術家庭」科がこれに該当する。身体・精神・技能のどの部分に比重が高いか、言語的表現がどの程度かについては、教科によって異なる。人間の成長・発達上、もっとも早くから習得せねばならない領域である。また、家庭教育・社会教育との関連も深い。

入学時からすでに個人の興味関心・能力などに比較的格差がある領域である。また、個々の競技・作品等に対する、個人の価値判断がシャープに表明される。この傾向は成長とともに強まる傾向にあり、「芸術」「体育」で、3・4年から「選択制」を取り入れようとしている根拠がここにある。しかし、生徒の興味関心や能力に違いがあっても、その格差をこえて共同で学ぶことには大きな意味があり、クラス単位で長く実施されてきた「音楽会」の成功はその証明でもある。

また、基礎・基本をこえた部分では、現代社会の変化に対応できるような柔軟性が必要であろう。新カリキュラムで構想中の、生涯教育を展望した「体育」、健康を身体・精神・社会的側面から捉えようとする「保健」、美術・技術・家庭合同でファッションや住環境を学ぶ「生活デザイン」科、家庭科による新科目「家族」なども、こうした脈絡に位置づけることができよう。「総合的な学習」とも関連する領域・教科ではあるが、担当教員が少人数であることも考慮して、対応する必要があろう。

本校では講座編成条件の関係から、体育や技術・家庭科では30人規模の授業を行ってきたが、教育上の根拠を合意した上でのことではなかった。この領域では、授業の多くが実験・実習授業であり、カリキュラムから考えた、適正な生徒数の検討が必要であろう。

なお、カリキュラム委員会としては、技術・家庭・芸術科が、共同で「生活デザイン」を創設し、時に「教科群」として活動している事情を考え、いっそのこと非言語的表現に関する「教科（名称

は、創作科・表現科などが候補)」として一体化できないかとの提言をしている。

3-3 基本的学力形成に関わる領域

「読み、書き、そろばん」に属する領域で、人間が生きていく上で必要な学力・技能に属する部分である。中等教育における基本的学力を規定することは難しいが、教科では「国語」「英語」「数学」が該当し、「理科」の部分や「社会」の一部もこれにあてはまる。国語科は「思考のツールとしての言語習得」を基本とし、「表現」力育成を柱としている。英語科は「国際対話」を可能とするために、「実践的コミュニケーション能力」育成の課題が基本となろう。「人類の普遍的な言語」である数学科は、「人間の概念形成における根幹的な文化」であるとして、「思考力の部分から鍛えていく」と主張している。

こうした基本的学力が形成されないことには、中等教育学校が目指す個性に応じた多面的な学力は身につかない。また、この領域の学力習得には他教科以上に「反復による訓練」を必要とする。したがって、中等教育初期の段階において、必要以上に単位数を削減することはできない。また今後、「学力」差の拡大が予想される中で、「基本的な学力」定着のために、制度・頻度両面で、相当なエネルギーを注ぐ必要が生じるであろう。

第2章以降で詳述されているように、中等教育学校における「国語」「英語」「数学」科の意義や学習内容は、当然「基本的な学力」の形成だけにはとどまらない。この点については、「自己表現」「民族のアイデンティティ」（国語科）「自文化中心主義の克服」「世界を視野に」（英語科）「科学的思考を表現する普遍的な言語」（数学科）の文言を列挙するだけで充分であろう。こうした学際的な場面や生徒の価値判断と関わる側面については、他教科との合科構想や「総合的な学習」との接点といえよう。

3-4 多面的な学力形成に関わる領域

「理科」「社会」は、他の教科以上に「多面的な学力」形成に関わる教科である。「多面的な学力」という規定はいかにも曖昧だが、およそ以下のようなものとして捉えている。まずは、あらゆる自然現象・社会現象という非常に幅広い領域を対象としている。このことは、「理科」・「社会」の延長線上にある学問領域の広さが、「英語」・「国語」・「数学」のそれとは、比較にならないことでも明らかであろう。教科内「科目」の独立性が高いこともこうした事情に起因する。次いで、「教育が抱える今日的な問題を解決するために、理科教育においても考えるべき点がある」（理科）「複雑化する社会の構造と変化を、いくらかでも客観的に把握する」（社会）とあるように、現代社会の動向に左右されやすく、現代的課題や学問の動向等とも直結しやすい教科でもある。

「理科」「社会」にも、基本的学力に属する部分があり、数理的思考に関わる部分が多い「理科」の方が、「社会」よりその傾向は強いであろう。しかし両教科共に、前述の「基礎的能力」や「基本的学力」の領域を前提にして成り立つ教科であり、体験学習・観察学習による知的好奇心の育成が、大きな意味を持つ教科でもある。また、カリキュラム編成上「理科」「社会」の学習は、1・2年より3年以降に比重を高める方が有効と考えられる。

「現代社会の動向に近く」、「知的好奇心育成に大きな意味がある」ということは、「国際理解」「環境問題」「少子高齢化」などをテーマにした「総合的な学習」との関連が深い教科ということになる。本校の理科・社会科は、総合教科「奈良学」「環境学」の頃から大きな役割を果たしているが、今後とも教科の性格を自覚した参加が望まれる。また、社会科と芸術科共同で「芸術と社会」（5年）を

設け、個人的価値観の育成と交流をめざす企画が浮上している。

3-5 教科・科目再編に向けて

新カリキュラムでは、「総合的な学習」や各種ガイダンスの創設にとどまらず、「教科」カリキュラムなかで、いくつかの教科内「新科目」や合科「科目」が構想されている。この背景には「現代社会の変化」と、それともなう「生徒意識の変化」「学問体系の変化」がある。カリキュラム委員会では「教科」カリキュラムにおける「新科目」・「新教科」創造の動きは、今後とも強まると予想している。

こうした動向は、「基本的な学力に関する領域・教科」への影響は少ないであろうが、他の領域・教科への影響は大きく、将来教科再編が進むこともあり得る。その際、「人員削減の目標」や「個別教科の利益」を優先させるような、教育的原理に基づかない再編論は誤りであろう。しかし、教育的な論議をふまえた「改革」はおおいに推進すべきだと考えている。カリキュラム委員会による芸術・技術家庭合同による「創作科（表現科）」創設の提言も、上記の考え方に立脚してのことである。

また、「生命倫理」など現代的・学際的なテーマが次々と登場してきている。「保健」「社会」「家庭」による合科構想「いのち・暮らし」が未成立に終わった事情は後でふれるが、「理科」「社会」はもとより、「保健」「技術・家庭」「芸術」科なども含めた教科連携のとりくみが、今後いっそう必要になることは確かであろう。なお、「生活デザイン」（3・4年：美術・技術・家庭）「芸術と社会」（5年：芸術・社会）の合科科目や教科内新設科目等の「学校設定科目」については、後の章で詳述する。

4 「ゆとり」確保のための模索

本紀要では、現在のところ各教科の希望単位数をそのまま記している。本校では、多様な選択制導入と引き換えに、7限授業を導入した現カリキュラムへの反省から、総時間割を50分6限の枠内で収めることを決定していた。生徒の諸活動の「ゆとり」を保障するためにも、年度内にも大幅な単位数削減「交渉」を行う予定であった。

しかし、先日発表された国立大学協会によるセンター試験の5教科7科目構想は、「ゆとり」を生み出そうとする、本校の新カリキュラム作りにも大きな影響を与えている。今のところ、中等教育学校の「ゆとり」を持ってしても、後期課程で単位数がどうしても足りない。今まで進めてきた「進路・適性による5・6年の大幅選択構想」が、一定の「見直し」を迫られている。また議論は続行中であるが、教科や学年によって望ましい授業「時間」に開きがあることも鮮明になった。一定枠の授業時間にとらわれない「モジュール」制も含めて、早急に検討する予定である。

第2章 国語科

荒木由弥・有地秀樹・金沢節子
谷本文男・吉田隆

1 中等教育学校における国語学習の意義

中等教育学校の6年間において、私たちは何をなすべきかを考える時、本教育システムに何が求められているのかを考えなくてはならない。6年間という前期課程・後期課程を含めた長き期間において社会から求められているのは、「生徒が自分なり、あるいは自分たちなりの考えで試行錯誤し、迷い、安心して回り道ができ、葛藤して悩むことが許される心理的・精神的時間と余裕がある状態」(渡辺三枝子氏)という「ゆとり」の状態を生徒に提供できるかどうかということなのである。そして、その「ゆとり」の中で、子どもたちは自らを見つめ、向き合い、そして他とは違う自らの意見を自らの言葉で主張する人間となることが要請されているのである。そのように目的を捉えていく時、国語教育及び国語学習に課せられた使命と役割・目的は自ずとわかってくる。

すなわち、まずは、いかに自らを捉え、自分を取り巻く社会・世界(情報を含む)を認識し、そして思索していくのか。その時には感受性の豊かさなくしては世界を認識することも叶わない。その認識があることを前提に、自らの力で思索していくには、彼らがいかなる語彙を保有しているかが大切になってくる。自分にしろ、社会にしろ、その対象物を認識するにも、また思索を繰り広げ、自らの思想を紡いでいくにも言語が必要となってくるのである。そして、紡ぎあげられた思想は、現代社会においてはいかに他人に伝えていくことができるのかの問題となっている。いかに高邁な思想であれ、それが自らの範囲内で留まっていることはもはや許されない時代であると認識しないといけないのではないか。

とすると、国語教育及び国語学習に求められているものや、またその存する意義というものも見えてくるであろう。つまり、言語の獲得に始まり、「自らの感性を文章の中で磨き、考え得られた自らの思想を自らの言葉で表現する。そしてそれを他人に発信していく力を育てていく。」ことなのである。従来の中学校・高等学校という分離された教育課程では、重複したり、あるいはひょっとしたら欠落していたかも知れない文章体験とか表現指導が、6年間を通して教育することでより有効になり得る。社会から求められているものにもより応えられるものになっていく。

週5日制の導入により教材の精選が要求されているが、6年間の有利さの一つはこの上記の部分でもある。重複せぬ教材の精選と並び替え、そして6年間を見通した上での一貫した表現指導が十分可能となってくるのである。後者に挙げたこの「一貫した表現指導の可能」が、実は中等教育学校における国語教育の意義の具体的な面なのである。そして、その国語教育の意義のもと、学習していくことの意義はより豊かな表現力の獲得であろう。先に、現在の教育に求められている課題について、「いかに自らの思想を表現していけるのか」ということを挙げたように、今まさに子どもたちにも、私たちにも求められているのはこの「表現力」である。つまり本教育システムの6年間では、「表現することの獲得と鍛錬」こそ求められている。

その期待に対して、本校では以下に述べていくカリキュラム編成で応えていこうというのである。

2 国語科の基本的な考え方

2-1 国語教育の目指すもの

いつの時代でも、人は、母語のよりよい使い手たらんと心がけなければならない。時代の要請により、さまざまな新機軸が加わることや、従来伝統的に重んじられてきたもののウエイトが減じていくことはあるにせよ、人は母語話者（「話者」とは、音声として話すということのみを指すのではなく、思考のツールとして言語を習得することを指す）となることなしには、知的作業を営むことができない。母語の水準以上に外国語に練達することなどあり得ない。思考、表現、伝達、その他の知的活動を支える最も基礎となるものは母語の習得である。

平成14（2002）年4月1日より施行される中学校学習指導要領には次の記述がある。

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。」

また、平成15（2003）年4月1日より施行される高等学校学習指導要領には次の記述がある。

「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」

このように、中学から高校へと変遷するにつれ、より積極的に国語にかかわる姿勢を打ち出してはいるものの、基盤は共通するものがある。いわば、国語教育の目指すものの基本的な部分は、万古不易といえる。このようにして身につけた能力はまた、「自由で自立した人格と社会的責任の自覚」を養うために欠かせないものとなるだろう。

2-2 現代の社会と国語

『ことば』こそ民族のアイデンティティの中核といえるものであり、固有の文化・伝統を継承発展させていく上にも、感受性豊かな人間性を培うにも、国語の能力は重要であり、欠くべからざるものである。

人と人とのつながりや、個をとりまく環境が激変する現代にあって、自らの意思を外部に発信することなく、内に閉じこもる姿勢に終始してはならない。自分を他人に分からせること、これは自己表現に他ならない。

高度な情報処理能力を求められつつある社会においては、まず、己の立場を確定し、しかるのちに情報の洪水に対処する必要がある。個の確立なしに立ち向かうことは、ミサイルに対し徒手空拳で立ち向かうに等しく、実に愚かな結果を招くことは火を見るよりも明らかである。

以上により、確かな個を確立した上で、自己実現、自己表現を現代の社会の中で全うするにあたって、国語教育における表現の指導について改めて考える必要がある。

国語教育における表現活動を仮に次の二つの種類にわけて考えてみる。

(1) 文学的表現

具体的な例を挙げるならば、俳句、短歌、あるいは詩の単元を学習した際に、生徒個人に作品の創作を命じ、冊子にまとめる。あるいは、何かの行事の感想文を書かせる。小学校から高等学校まで、頻度や量的な差はありながら、一度ならず、現代の生徒は経験したものである。課題として与えられた読書感想文もこれに相当するかもしれない。これらの作品において要求されることは、何よりもその人自身の考え、思いであり、言い換えればオリジナリティ、独創性である。つまり個性的であればあるほど評価される性質のものである。

また、作品の命は、よほど優れた作品、高名な作者の作品でない限り、多くの者に共有され、永続することはあり得ない。視点を変えれば、個人的表現と言い換えた方が適当であるかもしれない。

(2) 社会的表現

何よりも重要なことは、多くの人に分かってもらうことであり、コミュニケーションが円滑に行われることである。したがって、表現におけるオリジナリティは尊重されない。むしろ独善に陥る危険を排除するためには個性的な部分を消し去った方が望ましい。

その上で、わかりやすさとは何か、簡潔に書くとはどういうことか、等々の表現に意を凝らす必要がある。できあがったものは、多くの者に共有されることをこそ眼目として作成されている。また、よくできたものであれば、その内容・表現の骨子は長い命を持ち、共有の財産として受け継がれていく可能性がある。

従来国語教育における表現は、(1)を多とする傾向なしとしない。しかしながら、現代の社会においては、(2)に積極的に参画すべきであるという認識をもたねばならない。ただし、ここで忘れてはならないのは、(1)はほぼ国語のみに与えられた課題であるのに対し、(2)は国語のみでなく他教科との、就中、社会科との連携を視野に入れたものでなければならないということである。

2-3 情報機器と国語

学校の授業の中にコンピュータを導入する割合でいうと、積極的、有効に利用している他教科に比べ、極めて低いと言わざるをえない。調べもの学習をする利点においても、例えば社会科には遠くおよびない。コンピュータを利用した教育の先頭ランナーにはどう考えてもなれない。

国語科とコンピュータの関係をワープロソフトに限定し、文房具が変わるだけで、教育の中身に本質的な変化なしと言い切る態度もあり得るが、筆記具と文字体系の関係は密接なものであることを念頭に置けば、やはり何らかの影響はあるものと考えねばなるまい。

むしろここで求められている視点は、従来の国語科教育にコンピュータをどのようにとりこもうかということよりも、ツールとしてのコンピュータを教育に利用する際に、国語科がどのような役割を果たすことができるかということである。

3 中等教育学校における国語科6年一貫カリキュラムの特徴

3-1 目標

前述のように、国語教育の基盤となる部分は時代や趨勢に左右されることなく、いつの世にも一貫したものがあるが、中等教育学校における6年一貫カリキュラムとしては次の二つのことを特に強調したい。

(1) 情報処理能力を高めよう

発達段階に応じた課題を設定し、段階を追って情報処理能力が向上するようにつとめる。主なテーマとしては、『課題作文のデジタル化』と『情報化社会への対応』の二つがある。

① 課題作文のデジタル化

始めは下書きも、推敲も手で行い、清書をコンピュータ入力することから始めることになろうが、最終的には、初期の構成段階からすべてコンピュータを利用することとする。

② 情報化社会への対応

『情報』の持つ可能性、問題点を考えることから始めて、ネット上で意見を交換し、議論に参加していく。

(2) 表現の力をつけよう

広い意味では、上記の情報処理能力も表現力のうちに含めて考えることができる。情報処理能力を向上させるとともに、構成の整った文章を書くことを主眼として取り組む。特に前期課程においては表現力の育成を第一の目標とし、文章の読解における詳細な分析に基づく理解までは求めない。

3-2 総合的な学習の時間との関連

たとえば、総合的な学習において、フィールドワークにでかけたとして、インタビューの仕方、対人関係における挨拶などを教えることが国語科の主たる役割であるとは思えない。これらは、独り国語科のみならず、大人が子供に教えることである。また、レポートの書き方、まとめ方、あるいはプレゼンテーションの方法への助言等にも当然一定の役割を果たすことになるだろうが、これもまた、教科の特性と言うべきものでもない。

国語科が総合的な学習の時間に参画する際に、ツールとしての側面のみを強調することは的外れであり、いかなる教科も、総合的な学習に関わるのは、そのコンテンツに積極的に関与せねばならない。

(1) 奈良学から世界学へ

これこそ、奈良に生きる日本人としてのアイデンティティを求める道筋である。主なテーマと内容には、次のようなものがある。

- ① 身近な奈良
 - ・我が町紹介レポート作成・スピーチ
- ② 奈良を見つめて
 - ・奈良に関わる随筆からテーマを絞って調べる・景観論争や文化財の保存が抱える問題を探る。
- ③ 奈良と言葉
 - ・方言としての大和言葉、ビデオの作成
- ④ 奈良と文学
 - ・各時代別に奈良と文学作品の関わりを調べ、考察する。
- ⑤ 日本の伝統文化を世界へ
 - ・伝統文化紹介ビデオ作成、能と謡曲、源氏物語の世界、歌舞伎鑑賞法
- ⑥ 私とアイデンティティ
 - ・世界からみた日本人像を調べ、自分の置かれている位置を知る。

(2) 環境学

今日、地球的な規模で問題になっている『環境』について国語科の立場から関与するなら、次のようなことが考えられる。

- ① 生き物と環境との関わりについて書かれた文章を読み、関心を深める。
- ② 環境への適応ということを考察する。
- ③ 人類が抱えている課題を認識し、かつ未来に向かってなすべきことを考える。

3-3 古典教材の扱い

従来、中学校における古典教材は、扱い方として紹介程度に終わることが多く、お目見えはするものの、本格的な扱いはしなかった。結果として教材が高等学校と重なることもあり、中途半端に終わっていた。

今後は、6年間のスパンの中で考えて、無理のない程度に、古典教材を前期課程においても本格的

に扱うこととする。そして、後期課程になると、より深く古典教材を読み込むことを目指す。そのため、前期課程のうちに古典文法を習得できるよう計画的に学習する。

3-4 国語科における2-2-2制

6年間の基礎・充実・発展の3段階に分けて考える。基礎期(1・2年)では、6年間の学習のものとなる心構え、学習習慣、有効なツールを身につけることを目指す。充実期(3・4年)は通常の中学・高校では截然と分かれてしまうが、有機的に継続させることにより、個人的な興味関心から、社会的・総合的な学習への進化をねらう。発展期(5・6年)では、将来の進路を視野に入れつつ、適性に応じた学習の深化を目標とする。

(1) 1・2年…国語基礎

『聞く・話す』ことに重点をおいて展開する。学習形態としてグループ学習などもとりいれて、国語に関する興味関心を掘り起こす。扱う材料は、身の回りのもの、個人的なものでよい。

国語に関する認識を確実なものとするため、口語文法はこの時期に習得させる。古典にふれるため、その導入として、百人一首の暗唱、有名古典の暗唱などにも取り組む。図書館やインターネットを利用して、情報の収集・選択・発信・交流を行う。

(2) 3・4年…国語総合

1・2年の基礎の上に、社会的な視野を獲得する。『聞く・話す』から『書く』ことへと重心を移動させる。3年では400字程度の構成の整った文を書き、4年では1000字程度の、自分の考えを主張する小論文を書けるようになることを目指す。そのためには、3年においてTTで授業を展開することが望ましい。

古典文法は、この時期に完全に身につけるようにする。したがって、その学習は3年から計画的に始め、1年間で一通りは習得を終えることとする。4年において繰り返し古典学習の中で文法にふれることにより、より高度な古典学習である5・6年に備える。

(3) 5・6年

現代に生きる日本人としての母語(国語)の能力は、いかなる人にも必須のものである。その意味で、生徒の側からみれば選択の幅をあまり大きくすることはできない。ただし、主として大学入試との関連で、進路・適性に応じた学習の幅を設けることは可能な措置である。内容としては、『現代文』『古典』『古典講読』を、2年間継続履修し、6年においてさまざまな選択科目を開講する。

現代文

近現代の文学的文章の精読をはじめとして、現代的テーマである「環境」や「国際理解」、「人間関係」等を取り挙げた質・量ともに重い教材を読み深め、自己の認識を深化し、アイデンティティの確立を目指す。

古典

日本の古典作品を読解し、古典に表れた思想や感情の特徴から現代に生きる人間の見方、感じ方、考え方の底流に流れる不易なるものを読みとり、日本文化の特質や国語の変遷に関心を深める。

古典講読

主に漢文を読むことに重点をおき、さまざまな時代の人々の生き方について考えたり、日本文化と中国などの外国文化の関心に理解を深める。句法を中心に漢文特有の表現を理解し、作品や文章に表れた思想や感情を的確に読みとることを目指す。

□ 6年選択科目

① 発展現代文

必修の現代文では時間的な制約の中で読むことができない、小説や随筆をはじめとして、日本文化論、芸術論、哲学評論など広く、深く読み進めることを目指す。

② 基礎古文

物語や説話、随筆など中古・中世の有名な作品を読む中で、基礎的な読解力を養い、古典常識を理解し、古文特有の表現に慣れることを目指す。

③ 発展古文

「源氏物語」の読解を中心として、敬語や古典常識を理解し、日本文化や国語の変遷に関心をもち、現代人の考え方や感じ方の底流をなすものに目を向ける。

④ 小論文

表現に重点をおいた低学年（1・2年次）、中学年（3・4年次）の学習の発展型として、6年次において表現力の完成を目指す。高学年の現代文や古典で、自己の認識を深化してきたことを総合して、思考力・表現力を生かし、現代的な課題に各自のテーマを持って迫る。

⑤ 選択漢文

言語事項にも留意し、基本的な句法の確認をしながら、文章を多く読むことを目指す。歴史の文章や思想的な文章など、まとまったものとして読み進めることで、漢文が日本語や日本文化に与えた影響について興味や関心を持つようにする。

4 カリキュラム一覧表

科目	1年		2年		3年		4年		5年			6年						
	国語基礎	国語基礎	国語総合	国語総合	現代文	現代文	現代文	現代文	文	理	文	必	選	自	理	必	選	自
科目	国語基礎	国語基礎	国語総合	国語総合	現代文	現代文	現代文	現代文	現代文	現代文	現代文	○			現代文	○		
単位数	4	4	4	4	2	2	2	2	2	2	2				2			
科目					古典	古典	古典	古典	古典	古典	古典	○			古典	○		
単位数					2	2	2	2	2	2	2				2			
科目					古典講読	古典講読	古典講読	古典講読	古典講読	古典講読	古典講読	○			古典講読		○	
単位数					1	1	1	1	1	1	1				1			
科目											選択漢文		○		選択漢文			○
単位数											2				2			
科目											発展現代文		○		発展現代文			○
単位数											2				2			
科目											基礎古文		○		基礎古文			○
単位数											2				2			
科目											発展古文		○		発展古文			○
単位数											2				2			
科目											小論文		○		小論文			○
単位数											2				2			

国語科では、社会生活の基本となる言語能力の育成が重要であるという観点から、1年から5年までの科目をすべて必修科目として設定した。同様に6年においても現代文・古典・古典講読（文系）を必修科目とした。理系の古典講読については進路選択との関係で、他教科との選択必修科目とした。また、6年には自由選択科目を設定し、生徒の多様な要望に応えられるように配慮した。

5 指導要領との差異の一覧表

2年の国語基礎は標準単位である3単位を1単位上回っているが、国語基礎の4単位の中の1単位は、総合的学習の系統性の中で、1年の情報入門で培った情報操作技能を使って、表現能力を高めていくための時間として設定している。また、

	2年	3年
科目	国語基礎	国語総合
単位数	4	4
標準単位数	3	3

3年の国語総合も標準単位数3を上回っているが、これは4年の国語総合における学習を容易ならしめるために、古典文法の導入を3年に行い、詰め込み型の文法指導を廃し、古典を主体的に学習する意欲を喚起するためである。

6 指導内容一覧表

	聞くこと・話すこと	書くこと	読むこと	言語事項	書写	古文・漢文	読書指導
1年 4単位	(1年、2年) ○自分の体験を相手にわかりやすく説明する練習をする。 ○調べたことを相手に効果的に説明する練習をする。 ・3分間スピーチ ・話し合い ・テーマ研究と発表 ・チェンジングインタビュー	(1年、2年) ○身の回りのことを報告する文章を書く。 ○文章構成に注意して文章をかく練習をする。 ○調べたことを効果的に説明する文章を書く。 ○文章構成に注意して文章をかく練習をする。 ・自分新聞を作る ・テーマ研究の記録作成 ・聞き書き集制作	○文章の構成や筋道をとらえる。 ○登場人物の心情をとらえる。 ・自然の小さな診断役 ・本当に必要なものは ・少年の日の思い出 ・私の周りにはいつもあなたがいる	○口語文法の理解 ・文、文章、文節、単語 ○学年配当漢字を学ぶ ○語彙に関心を持つ	○字形を整え、文字の大きさ、配列配置に気を付けて書く。 ○文字を大切に扱う心を養う。	○古典を読み慣れ、その世界に触れ、面白さを味わう ・お伽草子 ・竹取物語 ・百人一首 ・故事成語	(1年、2年) ○課題図書を決めて読書を習慣づける。
2年 4単位			○文章の要旨をとらえる。 ○場面や人物描写に即して読み味わう。 ・春の郊外電車 ・「開いた社会」に向けて ・トレーニングの適量 ・一塁手の生還	○口語文法の理解 ・単語の活用、助詞、助動詞 ○学年配当漢字を学ぶ ○語彙を増やす ・抽象的な概念を表す語彙に注意する。	○字形、文字の大きさ、配列配置などの適不適を判断して、効果的に書く。	○暗唱を中心に古典に親しむ。 ○語注、鑑賞文を手がかりに古典を読む。 ・百人一首 ・平家物語 ・枕草子 ・徒然草 ・漢詩	
3年 4単位	(3年、4年) ○話し合いの場を通して、相手の意見を正しく聞き、自分の考えを効果的に主張する練習をする。 ○他人と協力し、わかりやすい発表を工夫する練習をする。 ・グループディスカッション ・グループ研究	(3年、4年) ○起承転結の構成を理解する。 ・4行文で学校紹介をする。 ・4コマ漫画を説明する。 ・テーマに沿って400字作文を書く。 ○文章構成に注意して文章をかく練習をする。 ・800字で自分の考えを書く。 ○小説、評論、詩集を読んで、自分の考えをまとめる。 ・1000字作文を書く。	○文章の内容を、言語表現を通じて正確に読みとる。 ○社会・歴史・自然との関わりを深い文章を読み、自己の考えを深める。 ・三十五億光年の命 ・ヒロシマ神話 ・故郷	○語彙を増やす。 ・同音異義語や多義的な意味を表す言葉に注意する。 ○常用漢字に習熟する。	○目的や必要に応じて適切な形式や文字の書き方を考え、調和よく書くとともに、書写された文字の形、大きさ、配列配置の調和などについて理解を深める。	○親しみやすい古典をもとに、古典の世界・発想を知る。 ○基本的な古典文法を学ぶ。 ・徒然草 ・宇治拾遺物語 ・百人一首 ・論語	(3年、4年) ○興味・関心に応じて本を選び読書をし、知的世界を広げる。
4年 4単位			○説明的文章から、事例や考察の関係を論証の過程などを読みとる。 ○文○文学的文章に描かれた登場人物、情景、心情などを表現に即して読みとる。 ・羅生門、蜜柑、地獄変 ・青き夏雨ゆ ・りんごのほっぺ ・千三百年のヒノキ ・消えたモアイの森 ・居心地のいい距離 ・悪い距離 ・セメント樽の中の手紙	○語彙を増やす。 ・英社会において必要な語力を身につける。 ・敬語 ・慣用句、ことわざ ・その他国語常識		○文章読解に必要な古典文法、漢文の句法を学ぶ。 ・宇治拾遺物語 ・伊勢物語 ・平家物語 ・枕草子 ・奥の細道 ・故事成語 ・漢詩 ・文章	

	聞くこと・話すこと	書くこと	読むこと	言語事項	書写	古文・漢文	総合指導
5年 5単位 現代文2 古典2 古典講読1	(5年、6年) ○自己を主張し相手を説得するために必要な技能を身につけるためのパブリックスピーキングを経験する。 ○話題を選び、互いの考え方を傾いたり、深めたりする話し合いを経験する。 ・ディベート ・プレゼンテーション技法を意識した発表 ○自分の意見を人間的な情感に訴える豊かさとともに論理的に話し、問題解決に導く話し合いを経験する。 ・シンボジュウム形式のディスカッション	(5年、8年) ○各自の問題意識に基づき、自らテーマを設定して意見文を書く練習をする。 ○豊かな創造力を養うために、積極的に創作活動を取り入れる。 ○豊かな構成力と豊かな構想力を身につけ、論理的で説得力のある文章を書く練習をする。 ・詩や短歌、俳句などの創作。 ・小論文	○文学的文章から、ことばに対する感受性を磨き、自己の認識を拡充するよう、読みの深化を図る。 ・山月記 ・名人伝 ・こころ ・駒子戸の中 ○説明的文章について、表現やことばを手がかりに筆者の発想の独自性や思想を読みとる。 ・失われた肉腕 ・宮廻と記号 ・ことばの影法師	○国際化の中で自国の文化や伝統に関心と理解を深める。 ・平仮名とカタカナの成立 ・方宮とコミュニケーション		○作品のテーマ・作者の思想を読みとる。 ○原文にこだわらず、古文・漢文の世界・思想や考え方をとらえる。 ・枕草子 ・源氏物語 ・方丈記 ・和歌と俳諧 ・古事記伝 ・世間胸算用 ・歴史、文学、思想の文章(漢文) ・漢詩	(5年、6年) ○一人の文学者・評論家の文章をまとまった形で読み、思想・人間性を知る。
6年5単位 現代文2 古典2 古典講読1 選択漢文2 発展現代文2 基礎古文2 発展古文2 小論文2			○作品のテーマ・作家の思想を読みとる。 【文系】明治以降の作品を取り上げ、認識の拡充と深化を図る。 ・舞姫 ・野火 ・雑種文化 ・現代日本の開化 ・枯野抄 ・無常といふこと ・日本の耳 ・中江五右衛門 【理系】現代の作品を中心に論理的な読みと創造的な読みの統合を図る。 ・龍 ・なめとこやまの熊 ・青春という「生」の季節 ・現代の神話 ・自然と人間 ・であることとすること ・人間の時間について	○文章解釈に役立てる観点で、古典文法を学習する。 ○時代の推移や社会の変化に伴う言語の諸問題に積極的に関心を持ち、豊かな言語感覚を身につける。 ・話し言葉とアクセント ・情報処理能力と読書		○まとまりのある作品を読み、古典に親しむとともに、文化と伝統に対する関心を深める。 【文系】作品のテーマ・作者の思想を読みとる。 上代から江戸期までの文学史を系統的に学ぶ。 ・源氏物語 ・大鏡 ・歌論俳論 ・中古女流日記文学 ・玉勝間 ・歴史、文学、思想の文章(漢文) 【理系】文章のあらすじを理解し、興味関心を深める。 ・源氏物語 ・大鏡 ・歌論俳論 ・且安花伝 ・花月草子 ・歴史、文学、思想の文章(漢文)	

6年一貫カリキュラムにおける2-2-2制を基本として、国語科指導内容を、「聞くこと・話すこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」「書写」「古文・漢文」「読書指導」という七つの観点から編成した。ここでは、「聞くこと・話すこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」の3領域1事項について詳説する。

6-1 話すこと・聞くこと

1・2年は、自分の体験を相手に理解してもらえるように話したり、話し手の意図を考えながら聞き取ることに主眼をおき、事実と意見との関係に注意して話したり聞き取ったりすることを目指す。具体的には、3分間スピーチやインタビュー、テーマ研究に基づく発表などが考えられる。

3・4年は、話し合いの場を通して相手の意見を正しく聞き、自分の考えを効果的に主張することを、グループ活動や発表活動を通じて育成する。グループディスカッションやプレゼンテーション技法を意識した発表などが考えられる。

5・6年は、自己の主張が相手に認められるよう、説得する技能を身につけさせ、問題解決のために相手の立場や考えを尊重する聞き手であり、話し手を育成することを目指す。ディベートやシンポジウム形式のディスカッションなどが考えられる。

6-2 書くこと

1・2年は、身の回りにある事柄から広く取材し、相手にわかりやすく伝えられる文章を書けるようにする。3・4年は、文章の構成に注意しながら自分の考えが相手に正確に伝えられるように、400字から1000字程度の決められた枠の中でまとまった文章が書けるように段階を追って学習する。5・6年は各自の問題意識に基づき、自らテーマを設定して自己の思想を表現力豊かに伝えられる能力を培い、確かな構成力と豊かな発想力を身につけ、論理的で説得力のある文章が書けることを目指す。

6-3 読むこと

1・2年次は、文章の構成や筋道をとらえ、目的や必要に応じて要約することができるよう、さまざまな種類の文章を読む。3・4年は、文章の内容を言語表現に注意しながら正確に読みとり、社会・歴史・自然との関わりの中で自己の考えを深める。5・6年は、文学的な文章から言葉に対する感受性を磨き、言葉にならない心情を理解し、自己の認識の深化を図る。また、説明的文章から筆者の独自性や思想を読み取り、自己の精神世界の拡充につとめる。

6-4 言語事項

1・2年において、口語文法の理解につとめ、日本語のしくみに関心を持ち、抽象的な概念を持つ語彙に注意する。3年から古典文法の学習を系統的に行い、4年までに基本的な文法事項の習得を目指す。5・6年では、古典の文章解釈を深めるための文法習得の完成を目指す。言語の歴史的変遷を理解し、日本語に対する関心を深め、豊かな言語感覚を養う。

漢字学習については、小学校学習指導要領との関連で学年別配当漢字の習熟につとめ、文や文章の中で漢字を適切に使うセンスを養う。書写に関しては、特別な時間をもうけず、字形や配列、配置に注意して書くことに配慮し、後期課程の芸術科書道との連携を深める方向で考えている。

第3章 社会科

落葉典雄・笠井智代・勝山元照
鮫島京一・武田章・吉田裕

1 中等教育学校における社会科学習の意義

21世紀に入り、複雑に変化する社会状況のなかで、確固とした自己認識・社会認識を持つ自立した個人の育成が求められている。

「情報化」「グローバルゼーション」「少子高齢化」「環境問題」等のキーワードで語られる社会変動の中で、生徒は将来の主権者として生きていくために、複雑化する社会の構造と変化を、いくらかでも客観的に把握できる力を身につけることが必要である。人間関係のあり方が変化し、「個の孤立」が進行する時代だからこそ、問題を内向・内閉して考えるだけではなく、社会的視野のなかで、自己を相対化して把握する力が必要である。いわゆる「生きる力」は社会的視野を持つことなしに育たない。こうした社会認識や個人認識は、思春期から青年期にいたる中等教育段階において、飛躍的に伸びるものと考えられる。ここに中等教育学校における社会科学習の根本的な意義が存在する。

「現代」に通じる社会認識育成のためには、小学校段階の基礎学力に加えて、中等教育段階での社会科の基本的「知識」や豊富な「想念（イメージ）」、社会科的「基礎概念」の理解や習得が必要である。また、自ら課題を設定し対象に働きかけ、分析・統合していくための体験や「方法」的学力の習得が必要である。さらに、教科の枠をこえた各種「基礎的能力」「基本的学力」等の習得が前提になる。

社会科の学習を支える各種「基礎的能力」「基本的学力」は、単に社会科学習にとりくむだけでは身につかない。社会科の学習領域は、他教科以上に多面的かつ総合的である。逆に、社会科の学習が他教科や「総合的な学習」に還元されることも多い。したがって、社会科各分野・科目間ではもちろんのこと、他教科との連携や「総合的な学習」との関係を強化していく必要がある。また、いわゆる「学際化」の進行は、学問体系上からも社会科各科目・分野の構造的改革や、授業で扱うべき基本的「知識」や「概念」の再検討を迫っている。

こうした中等教育学校における社会科学習の意義は、この間実践してきた本校の「2-2-2制」構想を発展させることによって、いっそう系統的でみのあるものになると思われる。後述するように、社会認識力は「2-2-2制」の各段階で独自の特色がみられるが、なかでも中間の3・4年間に、社会認識能力の大きな飛躍がある。この時期に「現代」的「世界」的視点を積極的に取り上げ、社会科的「基礎概念」に対する理解力と「方法」的学力を育成することを通して、社会科学習の意義はいっそう効果的なものになると考えている。

2 社会科の基本的な考え方

2-1 6年一貫社会科として

(1) 6年一貫社会科と必修「現代社会」

本校社会科では、高等学校社会科の「地理歴史科」「公民科」分割決定（実施は94年）以降も、「社会科」としての一体性を重視して、6年一貫教育に臨んできた。中学「社会科」が分割されなかったという事情もあるが、より本質的には、高校各科目の系統性よりも社会科各科目・分野の連関性の方が重要と考えたからである。

1973年、本校では文部省指導要領改定による必修化に先駆けて4年「現代社会」を設置した。「現代社会」では、現代の諸問題に対する生徒の問題意識の育成にこだわったほか、中心的なとりくみとして「フィールドワーク」を実施した。総合教科「奈良学」「環境学」が誕生するまで、4年「フィールドワーク」は3年「歴史スライドづくり」と並んで、社会科における「方法」的学力育成のための二大実践であった。これらの実践は、本校の総合教科の成立に貢献し、「フィールドワーク」は「総合教科」の中心的活動として実践されることになった。「現代社会」が必修科目から外れた後も、本校では4年「現代社会」を、6年一貫社会科の「要」科目と位置づけ、必修を継続した。「要」科目とは、中学社会各分野を総合し、高校各科目の方法的前提となる「融合社会科」ということである。

(2) 3・4年「現代史」「現代社会」構想

新カリキュラムでは、1年「地理」2年「歴史」の基礎学習をふまえた上で、3・4年を社会科の「要」と位置づけている。まず「中学公民的分野」「中学地理的分野（一部）」と高校「現代社会」の融合を進めて、「現代社会」を置く。また、「中学歴史的分野（近現代史部分）」と高校「日本史A」「世界史A」の内容を融合して、「現代史」を創設する。本校は以前から近現代史学習を重視してきたが、「現代社会」と並行履修することによって、現代的課題といっそう連関し、課題解決学習を盛込んだ歴史学習が可能になると考えている。同時に、「現代史」学習によって「現代社会」理解も深まるだろうと、両科目の相乗効果を期待している。

5年「倫理」や6年「政治経済」はもちろん、5・6年履修の「日本史」「世界史」「地理」各科目においても、現代的課題や課題解決学習を積極的に位置づけようとしている。「男女同権」の学習が基礎となって「女性史」が理解できるのであって、その逆ではない。「環境問題」を学習するから、「自然と社会」のとらえ方、「歴史」の観方が変わるのである。社会科では、新カリキュラムにおいて「現代社会」「現代史」学習を「要」とする6年一貫社会科の姿勢は継続したいと考えている。

(3) 世界認識の系統的育成

社会情勢の変化は、従来の「国家」や「地域」のとらえ方の見直しを迫っており、一国的枠組みで国家や社会をとらえることの限界を明らかにしつつある。本校社会科では、以前から「世界」認識の育成を重視して、中学各分野で「世界」学習の比重を多くしてきたほか、高校「日本史」でも不十分ながら「世界史」との関連を重視するなどしてきた。また「奈良学」「環境学」「世界学」等の「総合的な学習」に積極的に参加し、世界認識の育成に関わってきた。新カリキュラムにおいても、時間数削減もあって事情は厳しいが、各科目・分野で「世界」学習の比重をたかめて対応する。内容面では修学旅行とも関係して、「アジア」認識の強化を図りたい。

1・2年の「地理的分野」「歴史的分野」では、「新中学指導要領」のように、「世界」に関する学習を「日本理解」のための背景説明的なレベルにとどめない方針である。「世界」学習の時間確保のために、教科内容の組換を行なう。「地理的分野」では、人口問題や地域間の結びつきに関する部分を「現代社会」に、「歴史的分野」では、産業革命以降の学習を「現代史」で扱って、時間的なゆとりを生み出す予定である。1・2年で、「世界」に関する学習を薄くして「基本的知識」を軽視することは、世界の人々の自立した暮らしや歴史の歩みに対する理解を困難なものにさせる。習得される「基本的知識」が必要以上に少なくなれば、3年以降の世界学習に過負担を生じさせることになる。「総合的な学習」との関連も重視して、「世界認識」重視の姿勢を継続・発展させる予定である。

(4) 自己認識育成との関連

自己認識と社会認識を結びつける試みは、吉田裕（現副校長）担当の「倫理」「現代社会」等の学習を除けば、不十分なものであった。「社会認識の育成→自己認識の深化」という方向で関わるのが、社会科の基本姿勢として臨んできたものの、「自己認識の深化」の課題については、ほとんど意識的などりくみがない状況になっていた。

しかし、近年の社会状況の変化と生徒の社会意識・自己意識の変化は、従来の基本姿勢に修正を迫っているように思える。「自己認識の育成→社会認識の深化」という逆の「論理」も、授業等において重視されるべきではないかと考えている。つまり、社会的・普遍的価値を重視する従来の社会科教育とは少し視点を代えた、個人的な生き方や価値観の交流に比重を置いた学習を幅広く展開できないかということである。社会科では「倫理」を中心科目としつつ、他の科目・分野においても、どう関わるかが可能かを検討していく予定である。また、後述するように芸術科との合科科目「芸術と社会」において、自己認識と社会認識との関係を正面から扱う予定である。自己認識育成の課題は、「芸術」「現代国語」「家庭」「保健」等の教科・科目や「総合的な学習」「特別活動」などとも関係する分野なので、教科の枠をこえたカリキュラム全体での本格的な検討が必要であろう。

2-2 「合科」構想と「総合的な学習」への参加

(1) 「合科」構想と社会科

いわゆる「学際化」の進展は、学問体系の上からも従来の教科構成の見直しを迫っている。例えば現代「考古学」の水準は、自然科学的諸学問との関係なしに語ることはできない。「民主主義」や「人権」といった概念も時代と共に変化する。以前なら、「社会科」で対処できたものが、「環境」「生命倫理」のように教科を超えて扱わねば対応できないテーマが次々と登場してきている。学問の最先端の動きと「教科」は区分して論じるべきであって、人類の普遍的価値としての「文化」を効率的に学ぶ「教科」の構成は、より安定的・固定的であって当然であろう。しかし、社会科は学際化＝学問的再編の動きに、最も敏感でなくてはならない教科であると考えている。

こうした前提に立って、新カリキュラムでは5年を対象に、「自己認識の育成→社会認識の深化」の課題を正面にすえた合科科目「芸術と社会（仮称）」や家庭科内科目「家族」への参加協力を構想している。後述するように、「芸術と社会（仮称）」は、美術科と社会科の教員が、それぞれの立場から「文化」の問題を取り上げ、個人の価値判断を引き出した上で、受講者の相互理解を深めようとする授業構想である。5年「家族」は、テーマによって社会科が協力（出講）しようとするもので、個と社会をつなぐ「家族共同体」についての理解を深める上で、有効な手立てになると考えている。

なお一時、新カリキュラム作成にあたって、社会科・家庭科・保健体育科の3教科で、5年の新科目「いのち・暮らし」の構想を持ったが、3教科の姿勢の違いや時間割編成上の問題などがあって、今回は実を結ばなかった。

3・4年で実施予定の「アカデミックガイダンス」は、生徒に学問的興しろさの一端を体験させようという意図に加えて、受講するテーマの「取捨選択」作業を通して、「自己」や「自己の関心」について考えさせようとするものである。大学の研究者や専門家の協力を得て実施する予定だが、社会科ではできるだけ「学際的な分野」で開設したいと考えている。

(2) 「総合的な学習」への参加

「総合的な学習」については、別項で詳しく取り上げるが、問題解決学習や体験学習を重視する

「総合的な学習」は、いずれをとっても、内容・方法両面で「世界認識」や「現代認識」を重視する本校社会科の基本的方向性との関連が高い。

「奈良」（1・2年）では、世界遺産にも登録されている「文化財」や「自然環境」及び「奈良町」フィールドワーク等を行うほか、生活上の興味関心からテーマを決定して、調査活動を行う予定である。これらのとりくみは、社会科の「地理的分野」「歴史的分野」との関連が深く、地域学習の基礎にもなるわけで、今後「社会科」と「総合的な学習」との役割分担を検討していきたい。「情報」（1・2年）は、技術と国語が中心になってとりくむ予定だが、社会科でも情報機器の活用を進める予定である。また、新教科「情報」（5年）は「情報B」が中心となる予定だが、「情報と倫理」「情報と地域再編」「情報と軍事史」などのテーマをあげて、社会科各科目でどう扱うか検討中である。

「環境学」（3年）「世界学」（4年）については、社会科は積極的に参加しており、この間のとりくみについては、過去の本校『研究紀要』に詳しい。ただ、「総合的な学習」における社会認識・方法的学力の育成を考えた場合、固定的な現状の班編成（男女4名ずつの8名班）の再検討も含め、問題解決学習の徹底をどう図るかが今後の課題であろう。個人的なテーマ研究の必要性から、5・6年で自由選択科目「卒業研究」が創設される構想があるが、社会科も参加の方向で検討している。

体験学習、問題解決学習が強調される「総合的な学習」だが、中等教育学校では小学校とは違った論理が要求される。児島邦宏は『総合的学習』（ぎょうせい：1998.11）のなかで、「総合学習と発達段階」について論及し、以下の道筋を主張している。

「生活総合学習」（小学校前期）→「課題総合学習」（小学校後期～中学校前期）→「教科総合学習」（中学校後期～高校前期）→「総合教科」（高校後期～）

本校では「奈良学」「環境学」が、学際的視点からの総合「教科」としてスタートした経緯もあり、社会科としても、児島氏の指摘を参考に、「発達段階と総合的な学習の関連」について、検証を進めたい。いずれにせよ、中等教育特有の困難や負担増の問題は残るものの、社会科は全教科の中でも「総合的な学習」との関連が最も深い教科との認識に立って、実践していく予定である。

2-3 社会科の学力と2-2-2制

(1) 社会認識の発達と2-2-2制

社会科では、6年一貫のカリキュラムづくりを推進するにあたって、従来から生徒の社会認識上の発達課題を重視し、多くの実践を試みてきた。生徒の社会認識の発達は個人差が大きく、機械的に論じることは誤りであるが、学習集団としては、1・2年、3・4年、5・6年で、段階的な格差が見られることを確認し、公開研究会や各種研究会などでたびたび問題提起も行ってきた。いまだ仮説の域を出ないが、1年～6年の社会科の学力には、次節に述べるような特徴があると思われる。

なお社会認識に関わって、本稿では一応以下のように規定して論じている。

- ・「想念（イメージ）」→「○○想像図」など、非言語的で感覚・知覚的認識に属するもの。
- ・「基本的知識」→「裁判官」など認識上具体物への復帰が容易で、社会認識の基本となるもの。
- ・「基礎概念」→「司法」など抽象度が高く、高次の社会的分析方法のツールとして必要なもの。

同時に、2-2-2制における各段階の特徴を、「低次の社会認識→高次の社会認識」という脈絡でとらえるのではなく、1年生なら1年生なりに、5年生なら5年生なりに、「成長段階固有の理解の権利」としてとらえる必要があると考えている。また今後は、奈良女子大学・附属校園間の連携はもちろん、小学校や大学教育との関係も視野に入れた「社会認識」についての検討を進めていきたいと考えている。

(2) 1・2年の学力の特徴

自分なりの興味関心に基づいて、「知る」ことが楽しい傾向にある。3年以上に比べると、教師サイドの狙いには敏感で、素直に「おもしろいに違いない」と信じて、「指示」に従う傾向が強い。

「鎌倉武士」「地方裁判所」「総理大臣」などの各種「基本的知識」の習得は可能である。大切なことは「知識」が羅列的暗記物として習得されるのではなく、いかに具体的な資料（史料）に基づいて「想念（イメージ）」が豊かに習得されるかであろう。またこの時期は、具体物に触れることや体験学習・交流教育等の持つ意義も大きい。

しかし、具体物から遠く、抽象度の高い「在地領主」「司法」「行政」などの「社会科的基礎概念」になると、理解や習得は困難である。

思考方法では、授業に登場する人物などに対して、自ら身を寄せながら考えようとする「共感的思考」傾向が強い。あまり周りの目が気にならないのか、「思いつき」も含めて授業中の発言は多く、「意見表明」が苦にならない様子である。しかし、問題を持続的に考え、互いに思考を練り上げていくようなテーマ性の高い討論は苦手である。調査・発表学習では、長期間・長時間によるものは苦手で、個人よりグループ活動が効果的な場合が多い。

(3) 3・4年の学力の特徴

自分なりに、学習の「意味」を感じることができれば、意欲的に学ぶ年頃である。逆に「意味」が自覚できない目的不明の学習を嫌うようになる。しかし、自分の関心がどちらを向いているのかを自覚できない模索の段階でもある。

「鎌倉武士」「地方裁判所」等の基本的知識をもとに、「在地領主」「司法」など「社会科的基礎概念」の入口に到達することは可能である。しかし在地領主と司法（検断権）の関連を扱うことは、無理である。大切なことは「基本的知識」と「基礎概念」が、生徒自身の中で立体的に結びつくかどうかである。その際、現代的課題を踏まえた問題解決の学習方法による訓練が、重要な意味を持つと考える。知識や概念の羅列的・一方的注入では内実のある「社会科的基礎概念」は形成されない。

思考方法では、「共感的思考」に代わって「分析的思考」が目立ってくる。論理的な文章表現力も急成長する。一方で「信長の気持ちになって発言なんかできない」と醒めてくる。クラスの雰囲気にもよるが、周りの目がとても気になるのか「思いつき」的発言は大きく減少する。教師サイドからうまく組織できれば、賛成・反対、AかBか、といった2項討論（ディベート）は可能になる。しかし、生徒自らが討論を組織しつつ、多岐にわたったテーマやスタイルで討論するのはまだ荷が重い。

(4) 5・6年の学力の特徴

1～4年以上に個人差は大きい。社会科や各科目に対する興味関心格差が明確になる。自分の将来の方向性や目的意識もはっきりしてくる段階でもある。テーマが明確で意欲があれば、かなり高度な探求的能力を発揮できる。逆に生徒に目的意識が育たなければ、瑣末な受験情報などを信じて、「どの科目が一番楽で、点が稼げますか?」といった「安楽な」履修選択を求める傾向も出てくる。

今までに習得した「基本的知識」や「社会科的基礎概念」を用いて、「荘園領主と在地領主（貴族身分と武士身分）の関係」といった体系的な学習もそれなりに可能になる。問題点は大学入試の影響もあって、歴史学習等では知識・概念を羅列・注入しがちな「モザイク的通史」学習に陥りやすいことである。5・6年段階にふさわしい豊かで多面的な学力育成のためにも、「テーマ」性が高く、考える授業を創造していく必要がある。

分析的でより広い視野からの複眼的思考ができるようになり、「テーマ」性の高い発表も可能になる。発表の主体性・論理性・実証性などのレベルが上がり、生徒自身による討論運営や1～2名による50分間の模擬授業形式等も可能になる。社会科各科目間による差異はあるが、慣れてくれば二項討論に加えて多項討論、対話的議論などケースバイケースで多用な方法が展開できる。

(5) 「自己学習力」の育成と2-2-2制

2-2-2制における生徒の理解や思考力、討論・発表等を通した各種表現力の特色については述べてきたが、決定的な発達段階上の違いは、「教師から進められて、疑わずに面白いと思ってやる」段階と「自分で面白い課題を発見しなくては、探求する気にならない」段階の違いであろう。

前者の重要性は否定しないが、後者の段階になってはじめて「自己学習力」と呼べるのであろう。後者の「自己学習力」が育つためには、各種の基礎・基本的な力が身につけていないといけない。単なる興味関心だけでは、3年以降の課題解決学習は難しい。1・2年の調査・発表学習で大活躍している生徒が、3・4年になると急に失速することある。これらのケース多くは、各種の基礎・基本的な力が定着していない場合である。

また、基本的知識が定着したからといって、それだけで「自己学習力」はつかない。思春期特有の自分理解や自己探求の営為と、「現代」や「世界」に関する関心が触れあったときに、自発的な課題探求能力が形成されるのではないかと思われる。そして、この「自己学習力」の揺籃期にあたるのが、中等教育学校における3・4年段階ではないかと、本校社会科では理解している。

この時期の生徒は、「うろつき」「むだ」「ゆとり」等の営みを決定的に必要とする。教師は効率を求めすぎてはいけない。現在でも本校の各種活動が重なって、一部の生徒が「課題解決学習」という名の「詰込み」教育に、四苦八苦していることもある。新カリキュラムでは、「自己学習力育成」を意図したとりくみが、どの分野でも大幅に増加する勢いである。社会科に限ったことではないが、「課題学習」の実施時期の調整・精選も今後の重要な検討課題となろう。

3 社会科6年一貫カリキュラムの特徴

3-1 社会科各科目の構成

(1) 現代認識に関する科目・分野

社会「地理的分野」(1年)「現代社会」(3・4年)「倫理」(5年)「政治経済」(6年)「地理」(5・6年)※「芸術と社会」(5年)が該当する。

地理と公民的各科目の連携を強化し、共に現代理解のための科目・分野としての融合・連携を進める。1年「地理的分野」では、テーマ学習的要素は重視しつつも、今後の社会科学学習に必要な基本的知識の習得をめざす。小学校での「地理」的内容の履修が断片的であることを考えると、中学である程度の知識習得の課題は重要と考える。もちろん、世界や日本の各地域を網羅的に学習する、従来の地理学習スタイルはとらないが、前期「世界地理」・後期「日本地理」学習とし、「新指導要領」の方向より「世界地理」学習の比重を高くする。

3・4年「現代社会」では、今まで地理分野で扱ってきた「人口問題」や公民的分野で扱ってきた「憲法学習」や「経済学習」の基本的知識をふまえる。さらに、「現代社会」学習の基本として15～20程度のテーマを選んで単元を構成し、生徒の調査・発表活動や討論を組み込んで、課題解決学習に力を入れる。NHK特集『世紀を越えて』などの映像教材も積極的に活用する。討論を重視するためには、20人程度の少人数授業が理想であるが、社会科までは条件整備が難しいのが現状である。

5・6年においては、各科目の系統性を重視するが、「地理B」については現代的課題をより重視した「地理A」的な要素を取り入れた融合的な科目とする。「政治経済」においても、国際理解関係の比重を高くする。「倫理」や合科科目「芸術と社会」では、前述したように「個人認識と社会認識」との関係正面から扱う。

(2) 歴史認識に関する科目・分野

社会「歴史的分野」(2年)「現代史」(3・4年)「日本史」「世界史」(5・6年)が該当する。「日本史」「世界史」の一体化を進めるために各科目・分野の再構成を図る。

2年「歴史的分野」では、前近代の世界と日本の歴史を学ぶ。小学校での歴史学習が人物史・文化史の断片的学習であることをふまえて、「地理」と同じく「基本的知識」の習得を重視する。前述したように新指導要領の方向よりは「世界史」学習の比重を高くする。日本史は原始～明治期までを単元的に構成する「通史」学習をめざすが、「世界史」学習との関連部分や社会生活史を増やし、以前より政治事件史学習の大幅削減を図る。

「現代社会」との連携を図るためにも、3・4年に「現代史」を新設し、中学社会「歴史的分野(近現代部分)」高校「日本史A」「世界史A」を融合した内容とする。「現代史」は、本来なら20世紀初頭から始めるべきであろうが、2.3.4年の単位数のことも絡んで、どこから始めるかは今後の検討課題である。またNHK特集『映像の世紀』などの映像教材を積極的に活用するほか、15～20程度の単元を設け、討論なども組み込んだ「テーマ性」の高い内容をめざす。

5・6年においても「日本史」「世界史」のつながりを重視した構成とする。受験体制の制約はあるが、「日本史」「世界史」でもB科目を基調としながらも、各A科目の視点や主題学習を取り入れた「単元的日本史」「構造的な世界史」の完成をめざす。

(3) 社会科の2-2-2制と新カリキュラム

社会「地理的分野」「歴史的分野」(1・2年必修)では、社会科にとって必要不可欠な基本的知識の習得を目標とする。「総合的な学習：奈良」との役割分担をはかりつつ、「世界国調べ」「歴史新聞作り」「世界遺産フィールドワーク」などの各種調査活動や体験学習を行なう。週4時間から3時間履修への削減をうけて、歴史では「日本政治事件史」部分を中心に教育内容の大胆な削減を検討中である。いずれにせよ精選した「基本的知識の習得」がこの時期の学習の基本である。

「現代社会」「現代史」(3・4年必修)では、基本的知識の習得に関わる部分は継続しつつも、現代分析の基本となる課題解決学習の方法と社会科的基礎概念の習得をめざす。授業は、意見表明や討論、各種発表を取り入れたテーマ性の高い学習内容となる予定である。また、「総合的な学習：環境学・世界学」との連携を図る。

「地理」「世界史」「日本史」(5・6年)「政治経済」(6年)については、生徒の関心に応じて深く学ぶための選択科目とする。これら各科目においては、教育内容の系統性を重視すると共に、「現代史」「現代社会」で培った現代的関心や問題意識を尊重しつつ、概念的思考力育成のために「深く考える学習」をめざす。「倫理」(5年)では、自己認識と社会認識の関係を正面から扱う。

3-2 新科目および合科・連携をめざす科目

(1) 「現代社会」(3・4年)

現在は、3年で「中学社会公民的分野」を置き、憲法学習や経済学習の基礎を学習している。「少

年犯罪と少年法改定問題」など、現代社会的な事象はよく取り上げられるが、「刑法」「裁判」「議会」等に関する「基本的知識」の習得と、「司法」「立法」等の「社会科的基礎概念」をまず理解することに、公民学習の重点が置かれている。これに対し4年「現代社会」では、まず「少年犯罪をどう考えるか」といったテーマがあり、新聞記事を読んだり、調査活動等を行って必要な「知識」や「概念」を入手しつつ、考えたり議論したりすることによって、認識を深めていくということに学習の力点がある。

新カリキュラムでは、「公民的分野」や一部「地理的分野」の学習内容を、基本的に「現代社会」に取り込み、3・4年全体を通して「現代社会」的な「テーマ学習」として実施しようと考えている。その際、憲法や経済に関する学習などで、系統的な知識・概念を重視せねばならない分野もあり、授業スタイルの上でも臨機応変な対応が求められる。テーマに基づく、各学習方法の質的な「腑分け作業」が、現在進行中の「社会科カリキュラム」作りの緊急課題である。

(2) 「現代史」(3・4年)

近現代史学習を軽視しないために、本校では3年で「中学社会歴史的分野」を継続履修して近現代史学習をていねいに扱っているほか、5・6年「日本史B」「世界史B」の学習においても近現代史先習を試みてきた。しかし、近現代認識育成という観点から見た場合、3年と5年の間で1年間の間隔が空いて履修が散漫になる上に、内容によっては重複するものも多かった。また、5年の近現代史先習では、「日本史」の場合は、幕末明治維新时期という節目があり、中学での基本的知識が豊富なことから、比較的スムーズであったが、逆に「節目」が難しく、基本的知識が比較的希薄な「世界史」の場合は困難も多かった。

また、政治史中心で日本史中心の「中学社会歴史的分野」の学習から、いきなり文明史的視点や「社会・生活・文化に関する事柄にも焦点を当てた近現代世界の学習を」と、多角的な視点を強調する高校「世界史A」学習に跳ぶのでは、生徒の歴史認識育成にとってかなりの無理があると考えた。

そこで新カリキュラムでは、中等教育学校の利点を生かして、3・4年履修科目「現代史」創設を決定した。「現代史」は今のところ産業革命以降20世紀末までの「世界と日本」の歴史を対象とする予定である。理論的には20世紀初頭から始めるのが正しいのであろうが、2年歴史の時間数の問題もあって、一部近代史を含む構成になる予定である。なお、「世界史学習」の比重が高く、60%以上になる予定である。各単元4～6時間構成を基本に、講義・調査活動・討論などの時間を組み込んだ「単元史」学習にしようとする構想している。『映像の20世紀』など映像資料も取り入れ、「現代社会」との連携も図りつつ、課題意識と「方法」的能力の育成に務める予定である。

(3) 「芸術と社会」(5年)

新カリキュラムのめざす、「個の確立」「自立した人格の形成」に近づくために芸術科と社会科による合科科目「芸術と社会(仮称)」を創設する。「倫理」との共通性も多いが、「倫理」が文献資料をもとに人間関係の問題を正面から扱うのに対し、「芸術と社会」は非言語的資料を用いて社会的問題まで扱おうとする点が違う。現在両科目を、5年自由選択科目として予定しているが、「倫理」を6年履修にして、現在以上に思想史学習を盛り込むことも検討している。

「芸術と社会」は二つの視座に基づいている。一つは、現代世界が当面している諸問題を根本的には価値の問題としてとらえる視座である。たとえば環境問題を解決するためには、私たちの生活様式そのものを問わなければならない。どのような生活様式に高い価値をおくかということである。いま

一つは、「個の確立」や「自立した人格の形成」を、体験と通した価値との出会い、自己認識、表現という過程としてとらえる視座である。具体的には、ある作品が表象している価値や価値体系をとりあげ、それに対する生徒一人ひとりの価値判断を問うことである。

上記に述べた二つの視座が交錯する地点を「humanities（人文）」と理解したい。ここでいうhumanitiesとは、文学などの言語的表現だけでなく、ダンスや映画や音楽などといった非言語的表現をも含むものであり、そのいずれもが現代世界を表象している。したがってhumanitiesは、私たちが現代世界認識を深め、個の確立を試みるにあたって、格好の素材を用意しているといえよう。たとえば、エロス（愛）とタナトス（死）を扱うにあたって、ムソクの『叫び』をとりあげる。エロスとタナトスとは何か、ムソクはどのような歴史社会的文脈でこの二つのテーマに取り組んだのか、その現代的意義はどこにあるのか、などを検討する。

社会にはいたるところに解決すべき問題がある。それらを自分の知識と結びつけて解決してゆく力が「学力」であろう。本科目ではさまざまなhumanitiesをとりあげ、現代世界の仕組みや既存の価値観の矛盾を学び、現代世界が抱える諸問題を乗り越えてゆく構想力をつけたい。

(4) 「家族」（5年）

従来から、本校家庭科では「家庭生活における男女の役割」などをテーマに、グループ毎による調査・発表活動にとりくんできた。この分野は社会科の学習領域とも関連するだけに、以前から教育実践レベルでの情報交換を行ってきた。

新カリキュラム作成にあたって、家庭科から5年で「家族」をテーマにした新科目を設けないかとの構想があり、合科科目構想も含めて検討した。しかし、今回社会科が多くの新構想に着手しようとしていることから、当面は家庭科内新科目「家族」に、テーマによっては社会科が協力する提携科目として構想できないかと考えている。

社会科では、現代の家族の問題を深めることは、生徒の生活や将来にとってはもちろん、自己認識や社会認識形成の媒介項としても極めて重要であると考えている。また、教育方法的にも多くの可能性を秘めているテーマであるので、今後とも前向きな検討を重ねたいと考えている。

社会科の新カリキュラム									
育てたい学力内容				歴史理解		現代理解		個の理解	
特徴	知識・概念	各種技能	思考力	日本	世界	地理	公民		
小低	具体相を通して、「興味」をもつ	体験・疑似体験			断面的 人物文化史	諸産業 主な国	憲法入門？		
小中		生活の「具体相」・書きことば・イメージ							
小高		「具体相」→ 基本的知識		なぜ、どうして どうするの？					
1年	自分なりに 興味をもって 「知る」	基本的知識 の習得 (鎌倉武士) (裁判所)	視点の広がり まとめ・発表 意見表明 体験・交流	共感的 思考方法 社会への 知的好奇心		多文化世界 と日本社会 →			
2年					社会史的 「通史」	文化圏的 「断片史」 →			
3年	自分なりに、 「意味」をもつ て学ぶ	知識から基礎 概念へ (在地領主) (司法)	課題学習 多様な表現 二項討論 協同・主張	分析的 思考方法 現代的課題 の認識	(世界史の中の日本史) - (同時代史的世界近現代史) (「映像の世紀」的)	現代社会の諸問題 (含む憲法・経済の基礎知識) ← (「世紀を越えて」的)	「個」と人権	「個」と社会	
4年									
5年	自分の目的 意識をもって、 「探究」する	基礎概念の 習得・応用 (荘園制) (国家権力)	課題追究 主題的表現 多様な討論 模擬授業等 相互認識	系統的 思考方法 現代的課題 との関連把握 及び追求	単元的通史 (主題学習 を盛り込む)	構造的通史 (主題学習を 盛り込む)	系統地理 (主題学習を 盛り込む)	人間関係論 (ゼミ形式)	個・共同体・ 国家の関連
6年									
学問									
視点					2歴史でも日本・世界の関 連重視。地域の視点、調査 発表学習重視。	世界的視野重視の問題は 「現代社会」で、「公民」は 相対的に「知識」重視	「共同体」→ 「個」の時代 社会的把握		
	※5・6年(とくに6年)は、受験との関係が「概念」「探究」「討論」の方向性の障害となろう。								
要検討		知識(生活的 概念)→概念 (社会科学的 概念)どう？	「自己主張」と 「他者理解」の 相互育成	自己にとって 社会を考える 意味＝どう育 成？	世界史の理論的枠組？ 世界前近代史の扱い？ 国家・地域・都市・身分制 などの検討			現代文学・ 映画など芸 術との連携	

社会科の新カリキュラム									
	育てたい学力内容				歴史理解		現代理解		個の理解
	特徴	知識・概念	各種技能	思考力	日本	世界	地理	公民	
小低	具体相を通して、「興味」をもつ	体験・疑似体験			断面的 人物文化史		諸産業 主な国		憲法入門？
小中		生活の「具体相」・書きことば・イメージ							
小高		「具体相」→ 基本的知識		なぜ、どうして どうするの？					
1年	自分なりに 興味をもって	基本的知識 の習得 (鎌倉武士) (裁判所)	視点の広がり まとめ・発表 意見表明 体験・交流	共感的 思考方法 社会への 知的好奇心			多文化世界 と日本社会 →		
2年	「知る」				社会史的 「通史」	文化圏的 「断片史」 →			
3年	自分なりに、 「意味」をもつ	知識から基礎 概念へ (在地領主) (司法)	課題学習 多様な表現 二項討論 協同・主張	分析的 思考方法 現代的課題 の認識	(世界史の中の日本史) - (同時代史的世界近現代史) (「映像の世紀」的)		現代社会の諸問題 (含む憲法・経済の基礎知識 ← (「世紀を越えて」的)		「個」と人権
4年	て学ぶ								「個」と社会
5年	自分の目的 意識をもって、	基礎概念の 習得・応用 (荘園制) (国家権力)	課題追究 主題的表現 多様な討論 模擬授業等 相互認識	系統的 思考方法 現代的課題 との関連把握 及び追求	単元的通史 (主題学習 を盛り込む)	構造的通史 (主題学習を 盛り込む)	系統地理 (主題学習を 盛り込む)	人間関係論 (ゼミ形式) 国際関係論 (ゼミ形式)	個・共同体・ 国家の関連 社会的な 「自我」
6年	「探究」する								
学問									
視点					2歴史でも日本・世界の関 連重視。地域の視点、調査 発表学習重視。		世界的視野重視の問題は 「現代社会」で、「公民」は 相対的に「知識」重視		「共同体」→ 「個」の時代 社会的把握
※5・6年(とくに6年)は、受験との関係が「概念」「探究」「討論」の方向性の障害となる。									
要検討		知識(生活的 概念)→概念 (社会科学的 概念)どう？	「自己主張」と 「他者理解」の 相互育成	自己にとって 社会を考える 意味=どう育 成？	世界史の理論的枠組？ 世界前近代史の扱い？ 国家・地域・都市・身分制 などの検討				現代文学・ 映画など芸 術との連携

	総合学習との関連							生徒の生活意識
	統合型		分散型			他「構想」(即実現しない)		
	環境	世界	奈良	情報	人権・福祉・身体・家族			
小低								
小中								
小高								
1年	自然と生活の調和	多文化地域存在を紹介	奈良の人々の生活	▽世界国調べ(パソコンで)		多文化理解 人権の状況 人権の歴史 (知識習得)	他との相違 性の相違 性差の歴史 (知識習得)	新生活開始
2年	自然と生活関係史	多文化地域の歴史	奈良の文化財学習	▽コミュニケーションの歴史				自分崩し・思春期最中
3年	各環境問題の学習	◎普遍的課題の学習	奈良の今日的課題	情報化社会の学習		自由・平等 生存・友愛 (各「人権」 問題の学習)	個・家族・性 問題等の学 習	自我の形成・孤独 クラブ・生徒会の中心
4年	(ゴミ・森林公害等)	(平和・環境南北等)	◎(文化財保存問題)	(マスコミ→相互発信)			※	科目選択(文理)
5年	主題的科目学習(構造)	主題的科目学習(構造)	世界・日本・地域の連関	情報化社会の問題点	◎	主題的科目学習(構造)	主題的科目学習(構造)	※ G・C、修学旅行 学園祭の中心
6年	(大量生産→消費→廃棄)メカニズム	(多文化共生人類普遍的課題の相克)	(世界遺産・ユネスコ活動日本・奈良)	(情報化と国際的課題)軍事・資本		(身分制社会→市民社会)「人権」概念	(ジェンダー、家→家族→??)	進路決定・受験 社会的自我の形成
学問								
視点	自然と人・社会関係からのアプローチ	多文化共生普遍的課題素材提供	文化財学習奈良の課題地域の視点と素材提供	「情報」の相対化、「情報」と意思の視点提供		「人権＝差別」の克服、自己愛と友愛の視点提供	「個」と共同体をつなぐ。家族崩壊・男女共生等	
要検討	「環境問題」の社会的解決・実践的課題	「世界」をどう把握するか？アジアの視点	奈良の地域的課題とはなにか？	ツールの習得が大前提、でなければ、論議にならず		「人権」概念の見直し必要HR学習から総合的学習へ	家庭・保健と合科的に、5年で設定できないか？	

「新指導要領」に基づく「カリキュラム」例

本校社会科「カリキュラム」構想

学年	分野・科目	単位	分野・科目	単位	分野・科目	単位	学年	分野・科目	単位	分野・科目	単位	分野・科目	単位
中1			地理的分野	1.5	歴史的分野	1.5	1年			地理的分野	3		
中2			地理的分野	1.5	歴史的分野	1.5	2年					歴史的分野	3
中3	公民的分野	2.4					3年	現代社会	2			現代史	2
高1	現代社会	2			世界史A	2	4年	現代社会	2			現代史	2
高2	倫理	2	地理A	2	日本史A	2	5年	倫理	2	地理B	3	世界史B	3
高3	政治経済	2	地理B	4	世界史B	4	6年	芸術と社会	2			日本史B	3
					日本史B	4		政治経済	3	地理B	3	世界史B	3
												日本史B	3

[公民科]

[地理歴史科]

※太字は必修、下線は選択必修、他は自由選択科目
 ※中学は便宜的に1週間あたりの時間数に修正している

※太字は必修、下線は選択必修、他は自由選択科目
 ※中学は便宜的に1週間あたりの時間数に修正している
 ※単位数は要求段階→削減の可能性あり

- [1] 「新指導要領」では、当然のことながら、中学高校間に断絶があるのに対し、6年一貫(2-2-2制)カリキュラムである。高校では、公民科・地理歴史科に分かれているのに対し、6年一貫社会科の構成になっている。
- [2] 1年「地理的分野」は世界学習の比重を高めている。人口問題や地域間の結合については、「現代社会」で履修する。2年「歴史的分野」は世界史学習の比重を高めている。19世紀末以降の歴史は、「現代史」で履修する。
- [3] 3・4年「現代社会」は、中学「公民的分野」「地理的分野」の一部、高校「現代社会」の融合科目である。3・4年「現代史」は、中学「歴史的分野」高校「世界史A」「日本史A」の融合的科目である。
- [4] 5年「芸術と社会」は、芸術科との合科科目である。家庭科内科目「家族」への協力も検討中である。5・6年「地理B」「世界史B」「日本史B」各B科目では、各A科目的な課題学習的要素を盛り込む予定である。

6 指導内容一覧表

	1年		2年		3年		4年	
	科目(単位数) 社会:地理(3)	使用検査 HR	科目(単位数) 社会:歴史(3)	使用検査 HR	科目(単位数) 現代史(2)	使用検査	科目(単位数) 現代史(2)	使用検査
4月	地球と人類 地形と生活		書き換えられる歴史 サルから人へ		産業革命と欧米社会		冷戦の開始 日本の戦後	
5月	気候と文明 産業と生活		古代文明		欧米とアジア・アフリカ			
6月	日本地域 (北海道 (東北 (関東)		古代アジア的世界 古代日本社会		近代日本の成立		アフリカの時代 60年代の欧米とアジア	
7月	(中部) (近畿)				近代日本とアジア			
9月	(中国・四国) (九州・沖縄)		イスラム世界の成立 キリスト教世界の成立		第1次世界大戦 大戦間時代とアメリカ		高度経済成長と日本	
10月	日本と世界のつながり 世界地図 (東アジア) (東南アジア)		東アジア諸民族の自立 中世日本社会		アジアの独立運動 大正期の日本		社会主義の混迷 オイルショックと世界	
11月	(南アジア) (西アジア・北アフリカ)		大航海時代				80年代の日本・アジア	
12月	(中南アフリカ) (ヨーロッパ)		近世日本社会		ナチスと第2次大戦		冷戦の終結	
1月	(北米) (中南米)		近世日本社会		アジア太平洋戦争		高度情報化社会	
2月	(オセアニア) 地図と地域調査		市民革命の時代		戦争の時代を考える		20世紀を考える	
3月								

総合学習との関係で
「地図と地域調査」の
実施時期を前倒し可能

歴史新聞作り(3時間)

映像の20世紀(6時間)
※35分観賞+解説

映像の20世紀(6時間)
※35分観賞+解説

3年	4年	5年	5年	6年	6年	6年	6年	6年	
科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室
現代社会(2)		現代社会(2)		日本史B(3)		日本史B(2)		日本史B(3)	
				原典社会		基本的に同左		近代社会の成立と展開	
憲法を学ぶ 人権思想と憲法		日本経済の問題と世界						時間と空間 先史時代 古代オリエント	
								基本的に同左	
主権者は君だ! 基本的人権を守る		国際経済の動向		古代社会の成立と展開		同上		古代地中海世界 アジアの古典文明	
								"	自由主義とナショナリズム
									植民地支配
同上		国際協力とは?		同上		同上		"	
								内陸アジア	
								イスラム世界	帝国主義と民族運動
平和に生きる		変容する国際経済		同上		同上		同上	同上
政治をわが手に! 一国民主権の政治		日本政治の問題と世界		封建社会の成立と展開		同上		西ヨーロッパ世界	2つの世界大戦
		国際政治の動向		同上		現代社会の成立と展開		東西交流	冷戦
								近代ヨーロッパの成立	
批判とは		変容する国際政治		同上		同上		ヨーロッパ近代国家	現代の世界
このまちをもっと美しく 一地方自治を考える		国際社会と地域社会		同上		同上		同上	同上
経済のしくみ1		国際社会の倫理		同上		実質的に無い		アジア諸帝国	実質的にない
経済のしくみ2		21世紀を構想する		同上		実質的に無い		同上	実質的にない
				同上		実質的に無い		同上	実質的にない

【5年日本史の補注】

文が3、理が2の差異を解決するのが難儀
本来「文系の日本史」「理系の日本史」などありえないから
解決方法案
・定期的に理系のみ補習をする
→試験は同じ内容に出来るが補習が「必修」になるのはいかなものか
・試験を文理別にする→実質的に2種類になってしまい、負担増
→文の1単位を別のものにしてしまう
→この1単位分の試験は「しない」か、
「文は50分試験」「理は30分試験」のようにしてしまうか

【6年日本史の補注】

現状は、a3単位+b演習2単位(文系)+c補習(理系希望者)+d国立二次に必要な者の個別補習
新カリでは、bcdの解決が必要。
aでの精選をしつつも限界があり、bcdは時間外補習にならざるを得ないか

【5年世界史の注】 文が3、理が2の差異を解決するのが難儀
解決方法案

・定期的に理系のみ補習をする
→試験は同じ内容に出来るが補習が「必修」になるのはいかなものか
・試験を文理別にする→実質的に2種類になってしまい、負担増
→文の1単位を別のものにしてしまう→不可能

5年		5年		6年		5年		6年		5年	
科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室
地理B(3)	注(2)	地理B(2)	同左	地理B(3)	注(1)	倫理(2)	社会科教室	政治経済(2)	社会科教室	芸術と社会(3)	社会科教室
人類と地球		基本的に同左		世界の農・林・水産業		人はなぜ倫理を必要とするのか		政治とは何か 「憲法第13条の矛盾」 時事問題研究		感情と身体表現 ・「笑い」の身体表現 ・「怒り」の身体表現	
世界の大地形				同上				政治とは何か 「憲法第13条の矛盾」 時事問題研究 小説文演習 (小説演習・時事問題研究は各週)		*作品の鑑賞と解説 同上	
世界の小地形				同上		人間とは何か?				・モダン・パフォーマンス ・狂言 ・ビデオ作家など	
世界の気候				同上				経済とは何か 「市場経済の原理と その修正」		*作品の鑑賞と解説 「笑い」「怒り」をテーマとした身体表現	
国家と民族				エネルギー資源		君はだれだ! —自己との対話—				・人を笑わせる ・人を怒らせる *能動的表現と受動的表現	
交通と通信						仲間あるいは社会とは?				同上 「笑い」と「怒り」を身体で表現する	
世界の陸地域 (東アジア)				世界の鉱工業		「愛」の断章		平和と戦争、その現 実と理想 ビデオと討論		体だけをつかった音楽づくり *自由制作	
(東南アジア)				同上							
(南アフリカ) (西アジア・北アフリカ)				村落と都市		グループ研究		世界がひとつの市場 になった ドル・ユーロ・エン		沖縄から日本を考える ・島屋敏雄の「ヤポネシア」論 ・なんくる組「沖縄が独立する日」 ・島嶼の世界 など	社会科教室
(中東アフリカ)				地理開発と環境保全		存在しない存在について —神あるいは宗教—		世界の貧困		民族の対立を越えて ・バルトクの脱皮 ・Mダルウィーシュとパレスチナ ・ジョン・レノンとその時代 など	
(ヨーロッパ)				地図と空中写真		はじめに言葉ありき? —「言葉」のか		21世紀を読む		南北関係を越えて ・ホルダーとタゴール ・ボブ・マーリー ・リーバイス工場の子どもたち ・辺見庸「もの境う人々」など アイデンティティを求めて ・グローバルな文化とローカルな文化 ・サルトル「キーン」 ・日本文学のゆくえ など	
同上											
(北米)				実質的に無い (国公立2次・私立対策)		文学にあらわれたる 生死観				自由研究	
(中南米)				実質的に無い (国公立2次・私立対策)		資本主義における倫理 —共感あるいは賢慮—					
(オセアニア)				実質的に無い (国公立2次・私立対策)		個人研究				自由研究	

【5年地理の注】

(1)文が3、理が2の差異を解決するのが難関
＜解決策＞
・文系で実施予定の「読図」「シミュレーション教材」を理系で削除
する予定であるが、内容を厳選しないと苦しいか
(1単位を別物にすることも考えられる)
・5年生でのみ地理を学習する生徒を考慮して、現在は地誌において
調べ学習を取り入れているが、その見直しを迫られる可能性もある
(2)どの単元というのではなく、視聴覚機器が使用できる教室がよい

【6年地理の注】

どの単元というのではなく、視聴覚機器が使用できる教室がよい

倫理のテーマは生徒と相談して決めるので流動的である。

*前期を長谷、後期を飯島が担当

第4章 数学科

大西俊弘・河合士郎・佐藤大典
山上成美・横弥直浩・吉田信也

1 中等教育における数学学習の意義

1-1 国際社会で通用する人材育成

「国際化」・「情報化」の進展に伴い、経済活動においては、既に個々の国レベルではなく「全世界」が単一の市場として機能している。21世紀の中等教育を考える際には、「国際化」・「情報化」の視点が、今後ますます重要となってくる。従来日本の教育界においては、有名大学への進学率を上げることが最終目標であるような風潮があったが、今後はそのような些末な目標ではなく、世界の中で通用する人材の育成こそが最重要の課題となってくるであろう。

諸外国においては、数学は人間の概念形成における根幹的な文化の一つと捉えられている。また、数学には、芸術や文学と同様に人類の文化遺産としての側面、思考を表現する普遍的な言語としての側面もあり、数学は高等教育を受ける者の共通の素養として重視されている。国際社会の中で通用する人材を育成していくためには、単に語学学習の奨励といった表面的な取り組みだけでは不十分であり、様々な活動の基礎となる思考力の部分から鍛えていくことが肝要である。そのためには、論理的思考力育成にもっとも適した教科である数学が、今まで以上に重視されるようになってくる。

1-2 数学的な考え方の社会的需要の増大

「情報技術社会」・「IT革命」などといわれる昨今、コンピュータ・情報関連機器の利用が急速に日常化・高度化してきている。また、例えば表計算ソフトにおける「関数」の概念のように、数学的な概念が社会生活の中で使われる場面が、年を追うごとに増加してきている。また、「ベクトル」の概念は、高等学校以上の教育を受けた層にはかなり定着してきており、日常的な会話の中でも「一定の方向性」といったような意味で比喩表現として使われるようになってきている。

従来は、普通の企業で仕事をするに際しては、高等数学は不要であると考えられていた。しかし、例えば金融機関における「金融工学」のように、最先端の高等数学が多くの産業で実際に使われており、門外漢の想像を遙かに超える速さで一般産業への数学の浸透は進んでいる。

また、業務用ソフトウェア開発やその利用は、今では業種に関係なく必要不可欠なものとなっている。これらのソフトウェアの開発者に数学的な素養や論理的思考力が求められるのは当然であるが、ソフトウェアの一般ユーザーにとっても使いこなしていくためには、数学的な素養や論理的思考力が求められている。それらが企業人の一般的な素養として求められる社会が到来してきたと言えるであろう。すなわち、我々の営む複雑な現実社会を理解し、生き抜いていくためには、文系・理系を問わず、数学的な素養が必要であり、その素養を常に育成・発展させていかねばならない。そのため、中等教育段階から生涯教育の基礎となる十分な下地を作り、考える力を醸成することが大切となってくる。

1-3 入試科目数削減と大学生の学力低下

諸外国の大学では、入学後に直接的に数学が必要な分野であるかどうかに関わらず、入学に際しては、必ず一定の数学的知識・数学に対する理解を要求するのが普通である。また、文系の学部であっ

ても、数学の講義が用意されているのが普通である。そのため、中等教育段階においても、数学に関して十分な授業時間数を確保しているところがほとんどである。中等教育で扱う教材のレベルが日本よりも低い国もあるが、ほとんどの国の生徒は数学嫌いになっておらず、大学に入ってから積極的に学習を進めているようである。

ところが、日本では、受験に向けた数学が幅を利かし、一般には数学は選別の道具としてのみ存在理由があるように受け止められている。そのため、「受験生の過負担を軽減する」という一見もっともらしい建前のもとに受験科目数の削減が続き、文科系においては、数学を全く課さない学部や、数学の比重が極端に低い学部が大勢を占めるにいたった。国公立大学においても、センター試験で数学を課していない大学・学部が存在する。また、理科系においてすら、数学Ⅲや数学Cを入試に課さない大学が増加してきた。ある科目を「入試に課さない」ことは、その科目を「高等学校で履修しなくてよい」と解釈されてしまい、その結果「数学Ⅲを履修していない工学部生」などが出現してしまうことになった。数学に限ったことではないが、入試科目数の削減により、大学生の基礎学力が著しく低下してきていることが各方面から報告されており、国大協でもセンター試験において再び5教科7科目を標準とするようにする動きがあるなど、入試科目数の見直しが進んでいる。

したがって、今後は、文系の進路を希望する生徒にも十分な数学的素養を身につけさせる必要がある。

2 数学科の基本的な考え方

2-1 新学習指導要領の問題点

(1) 中学校段階の内容の希薄化

今回の学習指導要領の改訂では、学校週5日制の完全実施や総合的な学習の時間の導入により、義務教育段階では、各教科の授業時間数や内容が約3割削減された。その結果、低学年での内容がたいへんに薄いものとなっている。特に、小学校における授業時間数削減により、今後中学校に入学してくる生徒の基礎学力は、現在よりも平均して低下することが予想される。また、小学校の教材の一部が中学校に移行されたことにより、中学校での授業のスタートラインは従来より下がり、より基本的な内容から教え始めなければならなくなる。さらに、中学校の教材の一部が高等学校に移行されるため、概して中学校の数学の内容は、義務教育終了時に修得しておくべきものとしては、甚だ不十分なものとなる。

(2) 高等学校段階の内容の過密化

ところがその一方で、今回の改訂では、高等学校卒業時の理科系の数学・理科のレベルは下げないという基本方針があるようである。そのため、高等学校の数学は、授業時間数の総枠が減り、中学校からの移行内容も加わるにも拘わらず、従来と同じ程度（具体的には、数学Ⅲの微分・積分）まで到達しなければならないという、甚だ矛盾に満ちたものとなっている。内容が減らずに、授業時間数だけが減れば、当然のことながら授業内容は以前にも増して過密なものとなるであろう。

高等学校の数学は、中学校の数学よりも抽象度が上がるため、生徒にとっては内容的に急に難しくなる印象があり、現在でも理解するのに時間がかかる生徒が多い。その上、今後新学習指導要領のもとで中学校時代にゆっくり勉強してきた生徒が高等学校に入学してきた場合、高等学校での急激な授業のスピードアップについていけず、適応できない者が多くなることが予想される。

(3) 発達段階を無視した内容の先送り

中学校から、高等学校に移行された内容は多岐にわたるが、その中には生徒の発達段階をあまり考慮せず移されたものが多い。

例えば、円に内接する四角形の性質などは、高等学校でやるよりは、中学校で他の平面図形の性質と一緒にして系統的に学習の方が学びやすいであろう。

また、不等式の性質や一次不等式の解法は、現在は中学校で7～8時間かけて指導している内容であるが、高等学校の数学Ⅰに移行された場合には、2時間程度で消化せざるをえなくなってしまう。考え方や計算技法に生徒が慣れたり、思考を熟成させる時間をとることなく、一次不等式→連立不等式→絶対値の不等式→二次不等式と授業が進んでいくなれば、多くの生徒が消化不良を起こす可能性がある。

次に、統計分野に関しては、中学校の内容から削除され、高等学校の「数学B」・「数学C」に移行されたが、これらの科目は内容選択の科目であり、一般的な生徒がこの分野を選択する可能性は非常に低い。情報化社会の進展と共に、統計教育の重要性が叫ばれているにも拘わらず、多くの生徒が中等教育6年間で統計分野を全く学習しないことになってしまう可能性が高い。

2-2 中等教育学校としてのカリキュラムの編成

前述のように、中学校・高等学校と分断して考えた場合には、新学習指導要領には様々な問題点がある。しかしながら、6年一貫教育である中等教育学校の場合には、自由に教材の配列順序等を入れ替えることができるため、バランスのよい教育課程を編成することが可能となる。また、中等教育学校は高等学校入試にも拘束されないため、一般の中学校よりも時間的ゆとりが生じ、課題学習等にゆとりをもって取り組むことが可能となる。中学校・高等学校の新学習指導要領の目標・内容に関して、十分に理解・咀嚼した上であえてそれを有機的に組み替えることによって、生徒の発達段階にとって無理のない数学の学習体系を構築したい。

具体的には、まず、1年からしっかりと基礎学力（思考力・計算力・洞察力など）をつけていくことを重視する。本校は入学に際して学力検査を課さない中等教育学校となり、今後入学してくる生徒の学力幅が広がっていくことが予想される。そのため、1年では、標準単位数3を超えて、4単位の数学を設置する。また、前期課程（中学校段階）の3年間は、全て4単位を設置し、ゆとりをもって数学教育を進めていきたいと考えている。ただし、この段階で標準単位数以上を設置する理由は、あくまで基礎学力の充実と後期課程（高等学校段階）の内容の過密の緩和が目的であり、一部の私立学校に見られるような単なる高等学校の内容の前倒しが目的ではない。

前期課程の到達目標は「関数で世界を見る考え方」の陶冶、後期課程の到達目標は「微分積分」の概念理解においている。また、本校の6年一貫教育を行う際の基本的な理念である2-2-2制と組み合わせて構想したのが、下記の新カリキュラム表（案）である。

数学科新カリキュラム案一覧表

学年	科目名	単位数	選択・必修		文系1	文系2	理系
1年	代 数 学 I	2	必修				
	幾 何 学 I	2	必修				
2年	代 数 学 II	2	必修				
	幾 何 学 II	2	必修				
3年	代数・幾何学 I	2	必修	特設的には少人数授業			
	解 析 学 I	2	必修				
4年	代数・幾何学 II	3	必修	少人数授業 (IT)			
	解 析 学 II	2	必修				
5年	代数・幾何学 III	3	選択必修			○	○
	解 析 学 III	3	選択必修			○	○
	総 合 数 学 I	3	選択必修		○		
	(情 報 B *)	2	必修				
6年	代数・幾何学 IV	3	自由選択				○
	解 析 学 IV	4	自由選択				○
	総 合 数 学 II	2	自由選択		△		
	演 習 I	3	自由選択			△	
	演 習 II	2	自由選択			△	

(注) 教科「情報」の授業は、数学科の教員が担当予定

指導内容等に関するより詳しい一覧は、p.66～の表に示す。

3 中等教育学校における数学科6年一貫カリキュラムの特徴

3-1 系統カリキュラム

数学科では、2-2-2制に対応して、別表のように2学年ごとの段階に分けて、カリキュラムを編成した。その際に、教材を精選し、生徒の発達段階を考慮するとともに、教材の一貫性、数学的な系統性にも留意して教材を再構成した。学習指導要領では、中学校の各学年に分散している関数教材（比例・反比例、1次関数、2次関数）を、3年でまとめて扱うのが大きな特徴である。そのため、指導内容の順序が学習指導要領とは大幅に異なるため、通常の市販の教科書では対応できないことが予想されるので、授業書（学校で作成した教科書）の作成に今後は取り組んでいく予定である。また、科目の名称も学習指導要領とは別のものとし、「代数学I」等の名前を学校独自に付けることによって、名称からも科目の内容・系統性及び2-2-2制が明確に分かるようにした。

3-2 選択必修制

現在のカリキュラムでは、後期課程の数学においては、5年（高等学校2年）から自由選択制をとっており、数学を全く履修しないことも可能であった。しかし、先に述べたように、今後は、数学的な素養の重要性がますます増してくると予想されるので、5年までは数学を全員に必修とし、論理的思考力と表現力を育成したい。これらの力の育成は、当然、他教科の学習や社会生活にとっても有用であると確信している。

現行のカリキュラムで5年に設置していた数学の科目は、「数学II・数学A」（4単位）・「数学B」（2単位）であり、どちらも主として、理科系の生徒と大学入試センター試験程度の数学を大学受験に必要とする文系の生徒を対象としていた。本校の生徒の実態を考えた場合、上記のような科目設定が大多数の生徒の要望に最も適していると思われるが、一部の生徒には荷が重い現実もある。また、数学的な力があっても、進路希望の実現のためには、それほど数学が必要でない生徒もいる。それら

の生徒への現実的な対応も考えながら、全ての生徒に、人類の文化として数学の持つ面白さや価値を伝えたいという思いから、5年以降には2つの数学学習のコースを設定することにした。

具体的には、5年で数学を選択必修とし、1つは従来型の受験にも十分に対応できる科目「代数・幾何学Ⅲ」・「解析学Ⅲ」と、もう1つは受験を意識しないで数学を楽しむ科目「総合数学」を設置する。

3-3 総合数学

この科目（コース）は、大学入試等においてそれほど数学を必要としない文科系の生徒を対象にして、前述のように国際化・情報化社会で生きていく素養を育成することを目標とする。具体的には、別表のように、数学を使って現実社会や自然界の問題を解決する体験ができる単元・教材で構成する。

5年に設置する「総合数学Ⅰ」は選択必修であるため、従来型の科目を選択しない生徒は全員選択するものとする。また、6年に設置する「総合数学Ⅱ」は、自由選択科目とし、数学に興味関心のある生徒が継続して学習を進めていくものとする。当然のことながら、6年では選択しないことも認める。

3-4 少人数授業

6年一貫教育は、長期的な教育活動の結果、生徒の「学力」差が次第に開いていきやすい傾向がある。その傾向を打破していくには、教師が「学力」差が開きにくい分かりやすい授業をすることはもちろんであるが、「学力」差が開いてしまった場合には、それを回復する手だてを早めに講じることが必要となってくる。また、生徒の進路保障もきわめて重大なことである。これらのためには、少人数でのきめ細かな指導が必要になる。

本来ならば、少人数授業としてさまざまなレベルの講座を各学年で多数開講できればよい（習熟度別講座編成）のであるが、1学年3学級という本校の学級規模では教室・教員の手配等の問題があり、全て一度に解決することは難しい面がある。そこで、当面は20人編成の少人数講座（40人に対する2人でのTeam Teachingも可能である）を、学力差が開きやすい4年の授業に取り入れてみたい。その結果を踏まえて、将来的には3年にも拡大していく方向で研究を進めたい。

3-5 テクノロジーの利用・課題学習

コンピュータやグラフ電卓をはじめとするテクノロジーに関しては、本校は全国的に見ても比較的早い時期から積極的に研究・活用してきた実績がある。近年は、3年の3学期に作図ツール（GSP）を用いた平面幾何の課題学習を実施している。

平成13年度に完成する予定の総合教育棟には、複数のコンピュータ室ができるため、他教科と時間的・場所的に競合することなく利用できる体制が整う。今後も、テクノロジーの利用が効果的な場面においては、それらの機器を一層活用していきたい。また、そのための十分な教育環境（設備・スタッフ・教材開発）もあわせて追求していく。

3-6 教科「情報」との関連

新設される教科「情報」の授業は、本校では、数学科の教員が行う予定である。そのため、数学科の教員全員が情報科の免許の取得を目指すように申し合わせている。

教科「情報」には、当然のことながら独自の目標があり、数学科の目指すものとは異なっているが、

内容的には数学的な思考を要求される可能性が高い教科である。特に、「情報B」は、コンピュータの原理の基本的な部分や数理科学的な考え方や方法を扱うため、数学との関連が深い。

数学科においても、「数学B」の中に、「(3)統計とコンピュータ、(4)数値計算とコンピュータ」という項目があるが、これらは授業時間数の制約から数学の授業の中では扱うことが困難である。特に、統計分野に関しては、中学校の内容から削除されたので、ここで履修しない場合には、中等教育6年間で全く学習しないことになってしまう可能性が高い。そこで、本校では、「情報B」の授業の中で、コンピュータを利用しながら統計的な題材を扱いたいと考えている。

4 カリキュラム一覧表

学年	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
分野	科目	内容	科目	内容	科目	内容	科目	内容	科目	内容	科目	内容
代数学	代数学Ⅰ (2)	1. 正の数・負の数 2. 文字式 3. 1元1次方程式	代数学Ⅱ (2)	1. 連立2元1次方程式 2. 1次不等式 3. 式の計算 4. 平方根 5. 2次方程式	代数・幾何学Ⅰ (2)	1. 三平方の定理 2. 空間図形 3. 課題学習 4. 確率	代数・幾何学Ⅱ (3)	1. 三角比 2. 式と証明 3. 図形と方程式	代数・幾何学Ⅲ (3)☆	1. 高次方程式 2. ベクトル 3. 行列	代数・幾何学Ⅳ (3)※	1. 式と曲線 2. 演習
		幾何学Ⅰ (2)		1. 平面図形 2. 三角形・四角形		幾何学Ⅱ (2)		1. 相似と平行線 2. 五心 3. 円の性質		解析学Ⅰ (2)		1. 2次関数と方程式・不等式 2. 三角関数 3. 指数・対数関数
解析学												
総合数学									総合数学Ⅰ (3)☆	1. 数列と自然・社会 2. 関数と増え方・減り方 3. 確率とギャンブル	総合数学Ⅱ (2)※	1. 幾何学を追求 2. 無限を追求 3. 自然現象を追求
演習											(3)※ 演習Ⅰ	文系センター対策
											(2)※ 演習Ⅱ	文系二次対策

☆ 必修選択
※ 自由選択

数学科新カリキュラム案と学習指導要領の差異の一覧

1年		2年		3年		4年		5年		6年							
本校	内容	指導要領	本校	内容	指導要領	本校	内容	指導要領	本校	内容	指導要領						
代数学Ⅰ (2)	1. 正の数・負の数 正の数と負の数 加法と減法 乗法と除法 2. 文字式 文字と式 1次式の計算 文字式の計算 3. 1元1次方程式 1次方程式 1次方程式の利用 文字式の利用	1 1 1 1 1 2 1 1 2	代数学Ⅱ (2)	1. 連立2元1次方程式 連立方程式 連立方程式の利用 2. 1次不等式 不等式 不等式の解き方 3. 式の計算 式の展開 因数分解 4. 平方根 素因数分解 平方根 平方根の計算 5. 2次方程式 2次方程式 2次方程式の利用	2 2 2 1 1 3 3 3 3 3 3.1 3.1	代数学・幾何学Ⅰ (2)	1. 三平方の定理 三平方の定理 三平方の定理の応用 2. 空間図形 空間の図形 立体 図形の計量 3. 課題学習 GSPによる課題学習 4. 確率 集合と要素の関数 順列と組合せ 確率	3 3 3 1 1 1, I 1 1 A A A	代数学・幾何学Ⅱ (3)	1. 三角比 三角比 三角形への応用 2. 式と証明 因数分解 整式の除法・分方程式 等式、不等式の証明 命題と集合 3. 図形と方程式 点と直線 円 軌跡と領域	I I I II II A II II II	代数学・幾何学Ⅲ (3)	1. 高次方程式 複素数と2次方程式 高次方程式 2. ベクトル 平面上のベクトル ベクトルと平面図形 空間におけるベクトル 3. 行列 行列の計算・逆行列 連立1次方程式 点の移動	II II B B B C C C	代数学・幾何学Ⅳ (3)	1. 式と曲線 2次曲線 媒介変数表示 極座標 2. 演習 入試問題演習	C C C
	幾何学Ⅰ (2)	1. 平面図形 点の集まりと基本の図形 点の集まりと作図 図形の移動 角と平行線 2. 三角形・四角形 三角形と合同 証明の仕組み 三角形 平行四辺形		1 1 1 1 2 2 2 2	幾何学Ⅱ (2)		1. 相似と平行線 相似な図形 平行線と線分の比 2. 五心 三角形の五心 3. 円の性質 円の性質 円周角 円と四角形	3 3 A 1 2 A		解析学Ⅰ (2)	1. 比例・反比例 変化のようす 比例・反比例 2. 1次関数 事象の中に見いだす 1次関数 1次方程式と1次関数 3. 2次関数 事象の中に見いだす 2次関数 4. 関数のメカネ 数学と環境		1 1 2 2 2 3 3, I	解析学Ⅱ (2)		1. 2次関数と方程式・不等式 2次不等式 種々の問題 2. 三角関数 三角関数 加法定理 3. 指数・対数関数 指数関数 対数関数	I I II II II II
総合数学Ⅰ (3)		1. 数列と自然・社会 フィボナッチ数列 自然の中の数列 黄金分割 元利均等返済 2. 関数と増え方・減り方 バクテリア 放射性物質 人口増加 3. 確率とギャンブル どっちが得?		総合数学Ⅱ (2)		1. 幾何学を追求 多面体 サッカーボール 螺旋 2. 無限を追求 無限個たすには? 無限個を数えるには? 無限いろいろ 3. 自然現象を追求 兩粒で死ぬ?		～ 3 ～ 2 ～ 1	文系センター対策			～ 2 ～ 1	文系二次対策				

記号の意味

学習指導要領上の規定	記号
中学1年の内容	1
中学2年の内容	2
中学3年の内容	3
数学Ⅰの内容	I
数学Ⅱの内容	II
数学Ⅲの内容	III
数学Aの内容	A
数学Bの内容	B
数学Cの内容	C

数学科新カリキュラム案の指導内容一覧表

学年	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
分野	科目	内容	科目	内容	科目	内容	科目	内容	科目	内容	科目	内容
代数学	代数学 I (2)	1. 正の数・負の数 正の数と負の数 加法と減法 乗法と除法 2. 文字式 文字と式 1次式の計算 文字式の計算 3. 1元1次方程式 1次方程式 1次方程式の利用 文字式の利用	代数学 II (2)	1. 連立2元1次方程式 連立方程式 連立方程式の利用 2. 1次不等式 不等式 不等式の解き方 3. 式の計算 式の展開 因数分解 4. 平方根 累因数分解 平方根 平方根の計算 5. 2次方程式 2次方程式 2次方程式の利用	代数学 I (2)	1. 三平方の定理 三平方の定理 三平方の定理の応用 2. 空間図形 空間の図形 立体 図形の計量 3. 課題学習 GSPによる課題学習 4. 確率 集合と要素の個数 置列と組合せ 確率	代数学 II (3)	1. 三角比 三角比 三角比への応用 2. 式と証明 因数分解 整式の除法・分式 等式、不等式の証明 命題と集合 3. 図形と方程式 点と直線 円 軌跡と領域	代数学 III (3) ☆	1. 高次方程式 複素数と2次方程式 高次方程式 2. ベクトル 平面上のベクトル ベクトルと平面図形 空間におけるベクトル 3. 行列 行列の計算・逆行列 連立1次方程式 点の移動	代数学 IV (3) ※	1. 式と曲線 2次曲線 媒介変数表示 極座標 2. 演習 入試問題演習
		計 59	計 59	計 65		計 88		計 78		計 92		
幾何学	幾何学 I (2)	1. 平面図形 点の集まりと基本の図形 点の集まりと作図 図形の移動 角と平行線 2. 三角形・四角形 三角形と合同 証明の仕組み 三角形 平行四辺形	幾何学 II (2)	1. 相似と平行線 相似な図形 平行線と線分の比 2. 五心 三角形の五心 3. 円の性質 円の性質 円周角 円と四角形	幾何学 I (2)	1. 比例・反比例 変化のようす 比例・反比例 2. 1次関数 事象の中に見いだす 1次関数 1次方程式と1次関数 3. 2次関数 事象の中に見いだす 2次関数 4. 関数のメガネ 数学と環境	幾何学 II (2)	1. 2次関数と方程式・不等式 2次不等式 種々の問題 2. 三角関数 加法定理 3. 指数・対数関数 指数関数 対数関数	幾何学 III (3) ☆	1. 数列 数列とその和 数学的帰納法 二項定理 2. 微積分法 微分係数と導関数 導関数の応用 積分法 積分法の実用	幾何学 IV (4) ※	1. 極限 数列の極限 関数の極限 2. 微分法 微分法 微分法の実用 3. 積分法 不定積分 定積分 積分法の実用 4. 演習 入試問題演習
		計 48	計 55	計 52		計 57		計 108				
解析学	解析学 I (2)	1. 比例・反比例 変化のようす 比例・反比例 2. 1次関数 事象の中に見いだす 1次関数 1次方程式と1次関数 3. 2次関数 事象の中に見いだす 2次関数 4. 関数のメガネ 数学と環境	解析学 II (2)	1. 2次関数と方程式・不等式 2次不等式 種々の問題 2. 三角関数 加法定理 3. 指数・対数関数 指数関数 対数関数	解析学 III (3) ☆	1. 数列 数列とその和 数学的帰納法 二項定理 2. 微積分法 微分係数と導関数 導関数の応用 積分法 積分法の実用	解析学 IV (4) ※	1. 極限 数列の極限 関数の極限 2. 微分法 微分法 微分法の実用 3. 積分法 不定積分 定積分 積分法の実用 4. 演習 入試問題演習				
		計 52	計 57	計 108								
総合数学	総合数学 I (3) ☆	1. 数列と自然・社会 フィボナッチ数列 自然の中の数列 黄金分割 元利均等返済 2. 関数と増え方・減り方 バクテリア 放射線物質 人口増加 3. 確率とギャンブル どっちが得?	総合数学 II (2) ※	1. 幾何学を追求 多面体 サッカーボール 螺旋 2. 無限を追求 無限超たすには? 無限個を数えるには? 無限いろいろ 3. 自然現象を追求 両粒で死ぬ?	総合数学 I (3) ☆	1. 数列と自然・社会 フィボナッチ数列 自然の中の数列 黄金分割 元利均等返済 2. 関数と増え方・減り方 バクテリア 放射線物質 人口増加 3. 確率とギャンブル どっちが得?	総合数学 II (2) ※	1. 幾何学を追求 多面体 サッカーボール 螺旋 2. 無限を追求 無限超たすには? 無限個を数えるには? 無限いろいろ 3. 自然現象を追求 両粒で死ぬ?				
		計	計	計								
演習	文系センター対策	文系センター対策	文系二次対策									

☆ 必修選択
※ 自由選択

6 指導内容一覧表

第5章 理科

越 野 省 三・中 道 貞 子・林 良 樹
屋 鋪 増 弘・矢 野 幸 洋

1 中等教育学校における理科学習の意義

1-1 理科教育の目標

1989年度に本校カリキュラムを検討した折にまとめた理科教育の目標を次に示す。

- (1) 自然現象に対する興味を大切に、さらに深く知りたいという学習意欲を引き出すこと。
- (2) 自然の事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則を系統的に理解させ、自然科学の基礎的な知識を身につけさせること。
- (3) 科学の方法を習得させること。すなわち、自然の事物・現象の中に問題を見出し、観察や実験を行い、情報を集め、推論し、仮説をたて、検証を行うという一連の方法を身につけさせる。
- (4) 自然のしくみやはたらきを分析的ならびに総合的に考察することにより、科学的な思考力を養うこと。

理科教育本来の目標は、時代が移っても変わらない部分であり、以上にあげたものは先ず確認すべき理科の教育目標である。しかし、21世紀を迎えて理科教育に要求される課題はさらにふくらんでいるといえよう。一方で、教育が抱える今日的な問題を解決するために、理科教育においても考えるべき点があると思われるので、次にそれらの点について言及したい。

1-2 現代社会に対応できる科学的な能力の育成

現代社会は発達した科学技術に支えられている。科学技術により物を生産する人と生産された物を使用する大多数の人がいる。物を生産する人には、科学的知識や思考力が不可欠で、それらを使って新しい物を作り出す。資源の乏しい我が国は、物の生産により国際社会で生きてきたが、物を生産する人材を養成するために理科教育を大いに貢献させたい。一方、物を使用する一般の人も、生活のいろいろな場面で問題や課題に遭遇したとき、科学的知識は大いに役立つし、科学的な方法・考え方でそれらを解決することができる。また、日常生活で使用する機械の仕組みを理解するには、科学的知識や思考力が不可欠である。科学技術に支えられた現代社会で生きていくために、科学的な能力を育成し、科学が社会にもたらす諸問題についても関心をもたせたい。

20世紀は科学技術の急速な発達によって即物的欲求が満たされるようになった。その結果、文化的利便性が得られるようになった一方で、様々な環境問題をはじめとする弊害も生じてきた。しかし、科学の利便性を捨て、何十年も前の生活に戻ることはできないだろう。今後は、科学により生じた弊害をも視野に入れた、バランスのとれた発展を目指すという視点が重要になるだろう。そのために、科学的自然観を養い、自然の仕組みと本来のありようを科学的に探究する能力と態度を育てたい。

科学が発展していく一方で、近年、自然との共生ということが重要視され始めた。自然との共生を考えるためには、自然のすばらしさを認識する必要がある。理科教育の原点は、自然現象をじっくり見ることから始まり、そこから、驚きと感動が生まれる。自然のすばらしさを感じ、さらに自然への畏敬の念を抱くことができる人間を育成したい。

1-3 子供たちの現状の分析とそれに応えるための理科教育

教師が望ましいと考える理科教育も、それを受ける側の現状把握が正確でなければ空回りするであろう。現代の子供たちの現状についても考えておきたい。

子供たちの理科離れが言われるようになって久しいが、中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申 1996年7月）」の中では、次のような分析がある。<子供たちが学問的あるいは知的な関心を持って問題を真剣に考える姿勢が希薄になっているという「知離れ」といった現象が生じてきており、それが「理科離れ」として指摘されているのではないかと

このことは、日々教室で対応している生徒たちを見たとき、あるいは彼らを取り巻く環境を考えたときに納得できることである。多くの情報を得ることはできても実物を知らないで育ってくる子供。有機的な感触のない映像や刺激的な情報を満載したゲームなどに多くの興味関心を示す子供。便利に利用できる多くのものがブラックボックス化していて、その原理については疑問を挟む余地もなく、ただ利便性だけが追求されるものに囲まれた生活。こうした現代の子供にとっては、自然界に存在し、以前の生活の中では知的好奇心を満たすための対象物であったものが、容易に彼らの興味関心の対象となり得ないのではないかと。

豊かな物質に囲まれ、我慢をすることの訓練を受けていない子供たちが、従来型の講義を中心とした授業に興味を示さないことは当然ともいえよう。理科教育においても、子供たちを取り巻く現状を十分認識した上で、先に挙げた理科の目標を達成させるための手段を講じなければならない。幸い、本校では、従来から観察・実験を重視した教育、生徒自らに疑問をもたせ、自らの頭で考えさせる理科教育を実施しており、今後もこうした教育を積極的に取り入れていきたい。

ノーベル化学賞受賞者である白川氏が、テレビ番組で司会者の「理科の学習でいちばん大切なことは何ですか？」の質問に答えて、「自然に触れること、自然を自分の目でしっかり見ること」と発言されていたことは、まさに本校理科教育の取り組みのバックボーンであり、今後も大切にしていきたいことである。生徒たちを取り巻く状況がそれを難しくしていることを考えれば、意識的に彼らに実物に触れさせ、彼らの中に眠っている知的好奇心を揺さぶる理科教育こそ、現代の子供たちに必要なものであると考える。

1-4 中等教育学校における理科学習の特色

1972年以来、中高6年一貫校として教育を行ってきた本校では、理科のカリキュラムにおいても、高校入試がない点を生かし、中高で重複している内容を精選し、生み出された時間を観察や実験に当てる様に努力をしてきた。

1989年から実施されている現行カリキュラムにおいては、4年（高校1年）に総合理科を開設した。多くの学校で理科Iがなくなったことに伴い、高校1年から選択制が導入されて、高校理科は2科目選択が主流となった。その中で、本校では4年の理科が必修であり、しかも物理・化学・生物・地学の4分野を網羅した内容で学習させたことは、他校にない特色であった。理科2科目選択の弊害として以下のような意見がある中で、本校の選択は評価できるものと考えている。

高等教育フォーラムホームページ「日本の理科教育が危ない」問題多い2科目選択制

松田良一（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部助教授） より

高校で1度も生物の教科書を開かなかった学生が医学部に行き、物理学を勉強したことのない学生が機械工学を専攻する……。こんな事態が、全国の大学とりわけ理工系学部で生じ、少なからぬ混乱を起こしている。4年前に施行された理科2科目選択制を内容とする新学習指導要領で育った学生

達が、昨年4月から大学で学び始めたためだ。選択しなかった科目については中学校卒業レベルの知識しかないため、大学の講義を高校レベルの理科の補習から始めないと、全く理解できない学生が多数出現している。このまま現在の理科2科目選択制が続けば、「科学技術創造立国」の将来にも大きな影を落としかねない。

生徒の進路保障という点から、学習指導要領にある内容を削減することはできない。しかし、6年間という長いタイムスパンの中で教える内容を組み直し、精選することができる点は、6年一貫教育の魅力であり、利点である。中等教育学校においてもこの点を生かしたカリキュラムづくりを目指した。

2 理科の基本的な考え方

2-1 自然科学の基礎・基本の習得

1で述べた理科教育の目標実現のため、自然科学における基礎・基本が何かを検討し、6年間のそれぞれの段階に適した学習内容を配置する。

2-2 観察・実験の重視

- ・観察・実験を通し、科学的な自然観を養うとともに、科学的な思考力を育成する。
- ・一人ひとりがしっかりとした技術を身につけられるよう、また、安全に実験に取り組めるよう、少人数学級(20人)やティームティーチングで、きめの細かい指導を行うことを目指す。
- ・問題解決の手段として、自然現象のモデル化とシミュレーションをも活用する。

2-3 探究活動と課題研究の重視

- ・生徒自らが課題をもち、仮説の設定・実験の計画・実験結果の考察・研究報告書の作成・研究発表等により、科学的な思考力を養うと共に、科学的に議論をする力、意見をまとめる力、発表する力などを養う。

2-4 総合学習とのかかわり

- ・総合学習の中でも、環境学と理科とのかかわりは大である。また、世界学や分散型総合学習に位置づけている奈良学とも積極的にかかわり、教科の枠内だけではできない今日的な課題と教科学習の連携をはかる。

2-5 情報教育とのかかわり

- ・実験・観測の計測や自然現象のモデル化、シミュレーションに情報機器を活用し、その技法や有効性について理解させる。
- ・表計算ソフトを使って実験・観測データをグラフ化したり、分析したりすることにより、情報の分析力を養う。
- ・実験や観察の結果を情報機器を使ってプレゼンテーションすることにより、得られた情報を表現しそれを他人に伝える能力を養う。
- ・理科の学習のために、インターネットを利用し、情報の収集や発信の方法を習得させる。また、このときインターネット情報の信頼性の問題や情報発信のモラルについても考えさせる。
- ・情報化を支える科学技術に関連した基礎的な内容をカリキュラム内に組み込む。

2-6 進路に対応した選択制の導入

- ・医歯薬系の大学では、理科3科目履修が望ましいとされている。こうした大学の動きにも対応できるカリキュラムを検討する。

3 中等教育学校における理科6年一貫カリキュラムの特徴

3-1 単位数および学力の内容

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年		
科 目	基礎理科 I	基礎理科 II	総合理科 I	総合理科 II		
単位数	4	3	4	3		
学 年	5 年					
科 目	物理 I	化学 I	生物 I	地学 I		
単位数	3	3	3	3		
学 年	6 年					
科 目	物理 II	化学 I	化学 II	生物 I	生物 II	地学 I
単位数	4	2	4	2	4	2

5 年は、2 または 1 科目選択

6 年は、理系は理科 II から、1 または 2 科目選択。文系は理科 I から 0 または 1 科目選択

低学年（1・2年）～高学年（5・6年）における各科目において育てたい学力内容は、以下の表に示す通りである。

	実験・観察技能	科学的知識・概念	科学的思考力
低学年 基礎理科	基礎的観察・実験技能の習得 ・器具の扱いの基礎 ・測定の仕方の基礎 ・スケッチの仕方 ・表やグラフの作成	経験に基づく知識の習得 ・光／音／力／電気 ・身のまわりの物質 ・身のまわりの生物 ・岩石／天気の変化 など	身のまわりの自然現象に対する思考力の育成 ・原因と結果をつなぐ論理的思考 ・比較と分類
中学年 総合理科	生徒自身による観察実験の計画と実施 より高度な観察実験技能の習得 ・器具の扱い方の習熟 ・より正確な観察や測定 ・レポートの作成 ・発表	経験的な知識の抽象化と一般化 ・力・物質質量・細胞 など 知識の現実生活への適用と応用 ・エネルギー利用 ・自然と人間 など	より抽象的な科学的思考力の育成 ・自然現象の本質を理解する能力 ・自然界の一様性と多様性を理解する能力 ・時間軸をもとにした生物／地学現象を理解する能力
高学年 選択理科	仮説に基づく観察・実験の課題の設定とその検証 ・観察・実験の計画と器具の準備 ・観察・実験の実施 ・観察・実験結果の考察とレポート作成 ・研究発表と討論	科学概念の習得 ・場、エネルギー量子 ・生命の本質の理解 ・プレート運動 など ・物質の構造と化学変化 現象の法則化と原理の発見	科学的な概念をモデル化する能力 仮説の設定、推論

3-2 カリキュラムの基本的な流れ

1・2年

- 「基礎理科」は、基本的には中学校の学習指導要領の内容に準拠している。ここでは、物理・化学・生物・地学の各分野の概念形成の基礎を作るとともに、基本的な実験操作や観察方法を習得させる。特に、基本操作・基礎知識の習得には十分な時間を確保したい。

さらに、奈良の自然についての学習と「奈良学」との有機的な関連づけに配慮したい。

3・4年

- 「総合理科」は、基本的には中学校の学習指導要領の内容と、高校の学習指導要領「理科総合A」および「理科総合B」の内容に準拠している。ここでは、生活体験だけによる浅い認識から、より深い科学的な認識を育て、実験においても定量的な取り扱いができるようにする。
- 学習指導要領においては、「理科総合A」または「理科総合B」のいずれかを選択すればよいことになっている。しかし、本校理科では、これらの内容を再構成し、4年までは、理科4領域にわたる学習を全員必修の形で履修させたい。このことの第1の理由は、1-4で述べたように現在まで

実施してきたカリキュラムの中で4領域を必修にしてきたことが有意義であったと考えるからである。第2に、4年までを全員必修のカリキュラムにすることにより、内容を組み替える際の自由度が増し、独自のカリキュラムを組んだり、精選が行いやすいという利点がある。このことは中学年における自主活動をするゆとりを生み出すのにも役立つ。第3の理由は、もし、4年の理科を選択科目にすれば、3年の段階で科目選択を余儀なくされ、このことは、前期課程の段階ですでに理系・文系のいずれに進路をとるかの選択を迫ることになる。本校生の現状から考えてこれは非常に難しい選択であり、6年一貫教育の利点をそいでしまうことになりかねないと考えるからである。

- これまで物理・化学・生物・地学の各分野で学習したことを自然科学として総合し、5・6年の専門的な選択科目の学習のための基礎固めを行う。そして、この年次までに一般社会人に必要な基礎的な自然科学の内容を全員に習得させたいと考えている。
- 中学年の「多様な自主的学習方法を取り入れる」という教育目標をうけ、生徒が主体的に学習に取り組む学習方法を導入する。さらに、総合教科で実施しているフィールドワークなどで実験を行うにあたっては、教科の授業を発展させ、生徒たち自身の自主的な計画や方法を教師がサポートする形になるよう配慮していく。
- 3年では「環境学」との密接な連携をとり、理科の教授内容の中に、環境学に必要な基礎的知識を含めるように配慮する。
- 開講予定のアカデミックガイダンスにおける理科の内容については、「科学する目」を育てるために、様々な試みをしていきたいと考えている。私たちが日常生活で目にしたり聞いたりしていることの中には、現代科学の第一線の研究と関わることも多い。遺伝子組み換え食品、クローン、ロボット、内分泌攪乱物質（いわゆる環境ホルモン）、プレートと地震などについては、一般の新聞にも登場する話題である。大学や研究所での研究の一端に直接触れることは、大きな刺激になるものと期待している。講師を招くだけでなく、生徒たち自身が直接研究施設や企業などを訪問するような企画も実現できればと思っている。

5・6年

- 今までに学んだ知識をより系統化・深化させるとともに、探究活動・課題研究に積極的に取り組ませたい。1999年度に告示された新学習指導要領においても探究活動・課題研究は重要視されており、1～4年の理科や総合教科で培った能力を基礎に、探究活動・課題研究を通して、科学技術の発達した社会に生きるものとして、真に応用力のある科学的なものの考え方や行動のできる生徒を育てたい。
- 6年間の学習内容について、重複を避け、総合学習との関わりを考え、中学及び高校学習指導要領にある内容を組みかえていく。

次に、各科目におけるカリキュラムの特色について述べる。

3-3 物理分野

今回の6カ年一貫カリキュラムを構成するにあたって前提としたことは、中学および高校の新学習指導要領の内容を大きく逸脱しないということである。すなわち、内容は変えずに学習する時期に部分的に変更を加えた。特に、中学後半と高校前半において変更が著しく、1年や6年ではあまり変更はない。1年から4年までは理科が必修であり、5・6年では選択となるため、必修事項をどのような内容とするか、また、どのように扱うかという点を重視した。すなわち、5年で物理を選択しない生徒は卒業後も物理を学習する機会がない可能性があるために、全員が学習すべき内容として何を選

ぶかを熟慮、検討した。たとえば、物理Ⅰのはじめに置かれている「電気」の内容は、電磁気学の知識というより、生活の中の電気が中心となっているので、必修とするのが適切であると考えられる。また、この部分を必修期間である3・4年に下ろすことによって、5・6年における実験時間を確保することができる。もちろん、物理Ⅰの内容であるから、この項目全体を移動させることはできないので、残りの部分は6年の「電気と磁気」に移動させた。

理科が必修である1～4年で、1・2年を「基礎理科」、3・4年を「総合理科」としているが、「基礎理科」における物理の内容は光・音・力・電気などで、身近な物理現象を扱う。これに続く「総合理科」では、「基礎理科」の基礎事項を総合的に考えること、およびその展開ということが主眼となっているが、具体的には、3年で「エネルギー」、4年で「運動と力」を学習する。

学習指導要領では、2年において電気を扱い、「電流」と「電流の利用」を学習することになっているが、本校では前者を2年で、後者を3年で学習することにした。この理由は、2年では第1分野の時間が1時間しかないということもあるが、「電流の利用」とは電気のエネルギー利用ということであるから、エネルギーを中心とした3年の「総合理科Ⅰ」で学習するのがよいと考えたからである。

「エネルギー」の考えは力学においても用いられるが、もともと電気や熱、光などのいろいろな物理分野の内容を総合的に考えるために重要な概念であり、1・2年で本校の「基礎理科」を学習した後で、これらを総合的に理解するために学習するのが適切であると考えられる。

学習指導要領の「理科総合A」は4年で学習し、物理分野の内容は「環境問題としてのエネルギー」であるが、本校では3年で「環境学」が設けられているので、3年「総合理科Ⅰ」において「エネルギー」、それも「生活や社会との関連を重視したエネルギー」を扱うこととした。したがって、「理科総合A」の中の「資源開発と利用」、「いろいろなエネルギー」の項目が3年で学習されることになる。すなわち、本校の「総合理科Ⅰ」の物理分野はエネルギーを中心とした内容になる。しかし、3年であることから、あまり定量的な展開はしたくない。おもに「エネルギーの変換」を扱い、定量的な扱いは「エネルギーの保存」として、4年で運動の法則の後で学習することにした。したがって、本校の「総合理科Ⅱ」の物理分野は力学が中心となる内容となっている。

学習指導要領では、3年において学習する事項として、「運動の規則性」と「科学技術と人間」を置いているが、「運動の規則性」の中の「運動と力」の内容は3年では理解しにくいものであることが、さまざまな調査や授業経験からわかっている。特に運動する物体にはたらく力について、静止している場合と違い、運動する方向に何らかの力がはたらくと考える生徒が非常に多い。しかし、理解しにくいからといって、これまでの学習指導要領のように、この項目を必修からはずすべきではない。力と運動の関係は物理的分野の中でも特に基本的な内容であるので、全員が学習した方がよいと考えられる。そこで、本校では、「運動と力」は、4年で扱うこととした。

5・6年の選択理科の中の物理Ⅰ・物理Ⅱについては、学習する順序を学習指導要領どおりにしないで、波動・力学を5年で、熱・電気・原子を6年で行う。これは本校では文系の物理選択者がほとんどいないために、單元ごとの展開が可能となり、5・6年を通して物理を学習する方が理解しやすいと思われるからである。また、6年における「物質と原子」か「原子と原子核」の選択については、現代物理学の量子論的な考えを学習し、大学での物理につなげるという点から、「原子と原子核」の方を採用した。

3-4 化学分野

1・2年では、できるだけ多くの身のまわりの物質に触れさせることにより化学反応の面白さに気

づかせることを目標としている。多くの化学反応を扱う目的で、学習指導要領では3年で学習することになっている酸化還元反応の一部を扱うことにしている。また、実験を多く行うことにより、各種器具の扱い方、試薬の扱い方などの基礎技術や器具の洗い方など、化学実験のマナーの習得も目標としている。実験を行う際、本来、生徒がもっている個人の興味に根ざす好奇心を大切にするため、実験時間を十分に確保するようにした。

3・4年では、より確実な粒子概念の確立を目標に、イオンが関与するさまざまな化学反応を取りあげる。3年で「環境学」を履修するため、学習指導要領においては中学では扱わないことになっている酸・塩基反応について学習させることにした。またその際、定義などの理解がスムーズに進むように、イオンについても扱うことにした。物質の化学的性質と原子の電子配置の関係も考えさせる。化学反応の観点を定性的なものから定量的なものに移す過程として不可欠な「モルの概念」は特に重要視したい。また、概念の確立と同時に多くの物質を実際に扱うことにした。これは低学年においては物質を巨視的にとらえているが、高学年になるに従い微視的にとらえることになってくる。中学年においては視点は違えど同じものを見ているのであるということを確認にさせたいためである。ここでは現実に扱う物質と抽象的概念とを的確に結びつけられるように配慮したい。

5・6年では、今までの学習を基礎に、系統立てて学習させたい。物質の構造と性質は密接に関係しているため、先に物質の構造と状態を、後に物質の性質を学習するようにした。ここでは基礎知識、実験技術を修得させると共に、物質観を確立させたい。また、自然現象の理解を深め、興味、関心を呼び起こし、探究の意欲を高めるために、探究活動・課題研究に積極的に取り組ませたい。これは、生徒が本当に自然現象に好奇心を働かせ、この面白い現象や事象に疑問を抱き、追究してみようとする姿勢を持てるようにすることを第一の目標に、またそれにより、正確に物事を見る力および考える力が育成され、問題解決の手順がとれるようになることを期待して実施する。

3-5 生物分野

1・2年では、基礎知識・基礎技能の修得に重点をおいて学習を進める。1年「植物の世界」、2年「動物の世界」の学習の中で、私たちの身近に生息している生き物の観察を中心にした学習を行い、身近な自然に親しむとともに、生物界の見方を養う。また、「奈良学」とも連携し、郷土奈良の自然に対する理解を深め、郷土との関わり方を考える機会にするとともに、愛着心を育成する。さらに、実験・観察を通し、理科の学習に必要とされる実験・観察技術の基礎を身につけさせ、また、結果のまとめ方や考察の仕方についても習得をはかる。

3・4年では、生徒自身に課題を設定させて実験を行わせるなど、自主的な学習態度を身につけさせるように配慮した学習方法を取り入れる。3年では、生物体の基本単位である細胞を中心に生殖についても学習させる。また、「環境学」を進めるのに必要な基礎的内容を理解するために、学習指導要領では高校に設置された科目である「理科総合B」の生態系に関する内容を3年で学習するよう配慮した。4年では、必修理科の仕上げとして、生物のもつ一様性と多様性の両面からアプローチすることにより生物の本質の一端に触れられるようにした。つまり、遺伝現象に見る一様性や生物界を歴史的・空間的に見る多様性を理解させるとともに、それらの学習を通して科学の方法を身につけさせることである。特に、遺伝現象については、5・6年で学習する内容の一部を取り込んで、できるだけ最新の情報を与えていきたい。

5・6年では、系統だった学習をさせ、入試にも対応できる学力をつけるよう配慮する。5年では、生物Iの学習内容である「生命の連続性」および「環境と生物の反応」を扱う。また、6年では、生

物Ⅱの内容である「生物現象と物質」および「生物の集団」を扱うこととした。生物Ⅱでは、「生物の分類と進化」「生物の集団」のいずれかを選択できることになっている。課題研究に十分な時間を確保するためにも、両方を学習させるための時間はない。「生物の集団」の学習は、今日の環境問題を考える上でも重要であり、本校ではこの単元を取り上げることにした。しかし、進化の概念は、生物というものを理解する上で重要な基本概念でもあるので、「生物の分類と進化」は、2年の「生物の分類と変遷」や4年の「生物の変遷」の中で学習させることにした。また、課題研究は、これまでの生物の学習を総括する意味を持たせ、十分な時間を確保して5年後半から6年前半で実施したい。

6年では、文系のための生物の時間を2単位開講する。その第1の目的は、クローンやヒトゲノム計画が一般の新聞紙上にも登場し、生物学の最先端は複雑で難しくなっており、それらを正確に理解するためである。第2には、5年の授業では演習は全くできないので、受験対策としての演習をここで行おうと思う。また、将来センター試験で理科2科目が課されたときには、「理科総合B」の復習と演習も行う予定である。

3-6 地学分野

地学分野の内容は、認識の対象が空間的及び時間的に広がっていくことに特徴がある。つまり、日常の経験的な世界にある岩石・地層、天気の変化、天体の動きから出発して、認識の対象は地球から宇宙へと空間的に広がる。また、時間的な認識の対象も、現在観察している岩石・地層から、それらがつくられた何千万年も前の世界へ、さらに46億年間の地球の歴史へと広がっていく。このような空間的及び時間的な認識の広がり方が、生徒の発達段階にできるだけ適合するようにカリキュラムを編成した。

1・2年では、岩石・地層や天気の変化など生徒が直接体験できる身のまわりの自然を扱うようにした。1年では「奈良学」との関連で、学習指導要領では高等学校の地学Ⅱで扱う奈良の岩石と地層を学習させる。変成岩も学習指導要領では高等学校の地学Ⅰで扱う内容であるが、変成岩の一種である片麻岩は奈良の基盤岩で、本校の生徒が普通に目にしている岩石であるので取り上げた。また、学習指導要領では1年で地質年代を扱うようになっているが、地質年代の区分は生物の進化の歴史と関連させないと理解が難しいので4年に移した。1年では絶対的な年数を中心に大地の歴史を扱い、地質年代の区分はごく簡単に触れるだけにとどめる。次に鉱物や岩石、気圧や前線など、基礎的な科学概念の習得にも力を注ぎたい。

3・4年では身のまわりの自然から、地球へと認識の対象を広げる。天体の動きから地球の運動を考え、太陽系から宇宙へと視野を広げていくようにした。恒星と宇宙は高等学校の地学Ⅰで扱う内容であるが、私たちが生きている世界（空間）の広がりを認識するためには、恒星と宇宙の学習は必要不可欠であるので、その基礎的な内容を3年で取り上げた。また、3年では「環境学」との関連で、理科総合Bの内容である地球環境に関する内容を4年から移して扱うことにした。4年では地球の形、内部、その変動や歴史など地球そのものを扱う。

5・6年では、地学Ⅰを自由選択させる。地学Ⅰを選択するのは文系の生徒で、地学Ⅱは文系の生徒にとって高度で難し過ぎるので、地学Ⅱは選択科目に入れていない。地学Ⅰが扱っている内容は、固体地球、大気や海洋、宇宙である。認識の対象は空間的及び時間的に最大限に広がり、現在得られる様々な自然界の情報から、何億年も前のことや何百光年も離れたところのことがどのようにして分かるのか、基本的な科学の方法、考え方を学習させる。また、プレートテクトニクスなど地球科学や宇宙科学の新しい知識から科学的な自然観を養う。

	物理分野	化学分野	生物分野	地学分野
1年	身近な物理現象1 ア. 光と音 イ. 力と圧力	身の回りの物質 ア. 物質のすがた イ. 水溶液	植物の生活と種類 ア. 身近な植物 イ. 植物の体のつくりと働き ウ. 植物の仲間	大地の変化 ア. 地層と大地の歴史 イ. 火山とマグマの活動 ウ. 地震
2年	身近な物理現象2 ア. 電流	化学変化と原子・分子 ア. 物質の成り立ち	動物の生活と種類 ア. 身近な動物 イ. 動物の体のつくりと働き ウ. 動物の仲間 エ. 生物の分類と変遷	天気とその変化 ア. 気象観測と天気 イ. 大気中の水 ウ. 天気の変化
3年	エネルギーと生活 ア. 電流の利用 イ. 仕事とエネルギー ウ. エネルギー資源	化学変化と原子・分子 ア. 化学変化と物質の質量 物質と化学反応の利用 ア. 物質と化学反応の利用 イ. 物質と化学反応	細胞と生殖 ア. 生物と細胞 イ. 生物の殖え方 自然と人間 ア. 生態系 イ. 自然界のつり合い ウ. 人間の活動と地球環境の変化	現在の地球環境 ア. 多様な地球の景観 イ. 大気と水の循環 地球と宇宙 ア. 天体の動きと地球の運動 イ. 太陽系と宇宙
4年	運動の規則性 ア. 運動と力 イ. エネルギーの保存	自然の探究 物質と人間生活 ア. 物質の構成と変化 物質の構成 ア. 物質と人間生活 イ. 物質の構成粒子 科学技術の進歩と人間生活	生物の移り変わり ア. 生物の変遷 イ. 遺伝の規則性 生物の多様性	移り変わる地球 ア. 地球の形とその内部 イ. 地球の変動 ウ. 地球の歴史と生物
5年	波・力学 ア. 波 イ. 運動とエネルギー ウ. いろいろなエネルギー	物質の種類と性質 ア. 化学反応 物質の構造 ア. 物質の構造 物質の種類と性質 ア. 無機物質 イ. 物質の種類と性質に関する探究活動	生命の連続性 ア. 細胞 イ. 生殖と発生 環境と生物の反応 ア. 環境と動物の反応 イ. 環境と植物の反応	地球の構成 ア. 地球の概観 イ. 地球内部の活動 ウ. 地層と地質時代 課題研究
6年	熱・電気・原子 ア. 熱 イ. 電気と磁気 ウ. 原子と原子核 課題研究	物質の種類と性質 ア. 有機化合物 化学平衡 生活と物質 ア. 天然物質 イ. 合成物質 ウ. 生活と物質に関する探究活動 課題研究 ア. 特定の化学的事象に関する探究活動 イ. 化学の歴史的実験例の研究	生物現象と物質 ア. タンパク質と生物体の機能 イ. 遺伝情報とその発現 生物の集団 ア. 個体群の構造と維持 イ. 生物群集と生態系 課題研究	天気・海洋と宇宙 ア. 大気と海洋 イ. 宇宙の構成

化学分野

物理分野

学年	指導要領	本校のカリキュラム
1年	物質のすがた	物質のすがた
	水溶液	水溶液
2年	物質の成り立ち	物質の成り立ち
	化学変化と物質の質量	化学変化と物質の質量1
3年	物質と化学反応の利用 (酸化還元)	物質と化学反応の利用 (酸化還元)
	物質と化学反応の利用 (熱・電気)	物質と化学反応の利用 (熱・電気)
4年	物質の構成と変化	物質の構成と変化
	物質の利用	物質の利用
5年	物質と人間生活	物質と人間生活
	物質の構成粒子	物質の構造
	無機物質	無機物質
	有機化合物	有機化合物
	物質の種類と性質に関する探究活動	物質に関する探究活動
	化学変化 (反応熱・酸化と還元)	化学変化 (反応熱・酸化と還元)
	酸・塩基、中和	酸・塩基、中和
	物質の変化に関する探究活動	物質に関する探究活動
6年		有機化合物
	物質の構造と化学平衡	化学平衡
	生活と物質	生活と物質
	課題研究	課題研究

学年	指導要領	本校のカリキュラム
1年	光と音	光と音
	力と圧力	力と圧力
2年	電流	電流
	電流の利用	電流の利用
3年	運動の規則性・力と運動	電流の利用
	運動の規則性・エネルギー	仕事とエネルギー
	科学技術と人間	エネルギー資源
4年	資源開発と利用	運動と力
	いろいろなエネルギー	エネルギーの保存
5年	電気	電流の利用
	波	波
	運動とエネルギー・力と仕事	運動とエネルギー
	運動とエネルギー・熱、電気	力と運動
6年	力と運動	熱
	電気と磁気	電気と磁気
	原子と原子核	原子と原子核
	課題研究	課題研究

地学分野

学年	指導要領	本校のカリキュラム
1年	大地の歴史	大地の歴史、変成岩
	示相化石、示準化石、地質年代	奈良の地層と岩石
	マグマの活動	マグマの活動
	地震	地震
2年	気象観測と天気	気象観測と天気
	大気中の水	大気中の水
	天気の変化	天気の変化
3年	天体の動きと地球の運動	天体の動きと地球の運動
	太陽系と惑星	太陽系と惑星
		恒星と宇宙
		現在の地球環境
4年	地球、地球の変動	地球、地球の変動
	現在の地球環境	
	地球の歴史と生物	地球の歴史と生物
5年	地球の内部	地球の内部
	プレートの運動、変成岩	プレートの運動、変成岩
	地層と地質時代	地層と地質時代
6年	奈良の地層と岩石	
	大気と海洋	大気と海洋
	宇宙の構成	宇宙の構成

生物分野

学年	指導要領	本校のカリキュラム
1年	生物の観察	身近な植物
	植物の体のつくりと働き	植物の体のつくりと働き
	植物の仲間	植物の仲間
2年		身近な動物
	動物の体のつくりと働き	動物の体のつくりと働き
	動物の仲間	動物の仲間
		生物の分類と変遷
3年	生物と細胞	生物と細胞
	生物の殖え方	生物の殖え方
		生態系・自然界のつり合い
		人間の活動と地球環境の変化
4年	生物の変遷	生物の変遷
	遺伝の規則性	遺伝の規則性
	生物の多様性	生物の多様性
	生物と環境との関わり	
	人間の活動と地球環境の変化	
5年	細胞	細胞
	生殖と発生	生殖と発生
	遺伝	
	環境と動物の反応	環境と動物の反応
	環境と植物の反応	環境と植物の反応
6年	タンパク質と生物体の機能	タンパク質と生物体の機能
	遺伝情報とその発現	遺伝情報とその発現
	生物の分類と系統	
	生物の進化	
	個体群の構造と維持	個体群の構造と維持
	生物群集と生態系	生物群集と生態系
	課題研究	課題研究

6 指導内容一覧表

6-1 物理的内容

学年	項目	時間数	内容	実験・観察
1	1. 光と音 ア. 光の反射と屈折 イ. 凸レンズのはたらき ウ. 音 2. 力と圧力 ア. 力と変形 イ. 力のつりあい ウ. 圧力	[17] 7 4 6 [18] 5 8 5	直進、反射、屈折 実像・虚像の位置 空気の振動、音の高さ、楽器 フックの法則 直線上の力のつりあい 圧力、大気圧	・光の反射と屈折 ・物体と像の位置 ・音の伝わり方、音の高さ ・ばねののびと力 ・2力のつりあい ・トリチェリーの実験
2	1. 電流 ア. 静電気 イ. 電圧と電流 ウ. 電気抵抗	[17] 3 7 7	摩擦電気 回路と電圧、電流 オームの法則	・摩擦電気発生 ・直列・並列回路と電圧・電流 ・ニクロム線の電圧と電流
3	1. 電流の利用 ア. 磁界 イ. 電磁力 ウ. 電磁誘導 エ. 電流と熱 ウ. 交流 2. 仕事とエネルギー ア. 仕事 イ. エネルギーの種類 ウ. エネルギーの変換 3. エネルギー資源 ア. エネルギーと生活 イ. エネルギー資源の利用	[18] 3 4 3 5 3 [10] 3 3 4 [7] 2 5	磁石・電流と磁界 モーター 発電機 ジュール熱 直流と交流 仕事、仕事率 力学的・電気・熱・化学エネルギー いろいろなエネルギーの変換 エネルギーの消費、 石油、原子力、太陽、水力、風力 波力	・磁石の磁界 ・磁界中の電流 ・誘導電流 ・電気器具と熱 ・階段を上がる運動 ・熱による仕事 ・発電と電気の利用 ・太陽電池、風力発電、原子力発電
4	1. 運動と力 ア. 力の種類と性質 イ. 直線上の運動 ウ. 力と運動 2. エネルギーの保存 ア. 力学的エネルギー イ. 熱エネルギー ウ. 電気エネルギー	[20] 6 7 7 [15] 5 5 5	重力、摩擦力、作用反作用 速度、等速運動、落下運動、 力と運動の変化 運動エネルギー、位置エネルギー、 エネルギー保存法則 熱と仕事、電流と熱 電流と仕事	・静止摩擦力 ・落下運動、斜面の球の運動 ・台車の運動 ・台車の運動エネルギー ・摩擦による熱の発生 ・ジュールの法則
5	1. 波 ア. 波動 イ. 音波 ウ. 光波 2. 運動とエネルギー ア. 運動 イ. 運動の法則 ウ. 力学的エネルギー エ. 運動量 3. いろいろな運動 ア. 放物運動 イ. 円運動 ウ. 単振動 エ. 万有引力	[30] 10 7 13 [30] 5 8 7 10 [30] 7 7 7 7	波の性質、波の伝わり方 音の性質、共振、ドップラー効果 反射、屈折、回折、干渉、偏光 運動の3法則 力学的エネルギーと保存 運動量と保存 水平投射、斜方投射 角速度、向心力 単振り子、ばね振り子 ケプラーの法則、万有引力	・水波の観察 ・音速の測定 ・光の波長測定 ・力と加速度 ・力学的エネルギー保存 ・運動量の保存 ・投げられた球の距離と時間 ・向心力 ・単振り子・ばね振り子の周期
6	1. 熱 ア. 熱現象 イ. 分子運動 ウ. エネルギー保存	[15] 6 7 2	温度と熱、膨張 分子運動、内部エネルギー	・比熱の測定

2. 電気と磁気 ア. 電界 イ. 電流 ウ. 磁界 エ. 電磁誘導 オ. 交流と電磁波	[53]	19 電界、電位、コンデンサー 8 電圧と電流 11 電流と磁界、電磁力 8 電磁誘導の法則 7 交流、電気振動、電磁波	・クーロンの法則 ・直線電流と磁界 ・レンツの法則 ・電気共振
	[22]	6 陰極線、放射線、X線 2 光電効果 6 原子模型 6 核の構造、核反応 2 核子、クォークとレプトン	・光電効果 ・放射線
	[10]		
	3. 原子と原子核 ア. 電子と放射線 イ. 粒子性と波動性 ウ. 原子の構造 エ. 原子核 オ. 素粒子と宇宙		
4. 課題研究			

6-2 化学的内容

学年	項目	時間数	内容	実験・観察
1	1. 身の回りの物質 ア. 物質のすがた イ. 水溶液	[35] 20 15	純物質と混合物 純物質の性質・混合物の性質 (融点・凝固点 沸点) 分 離 気体の生成とその性質 溶 液 拡散、溶解度、溶解度曲線、再結晶	・食塩水の性質 ・融解・凝固のときの温度変化 ・沸騰のときの温度変化 ・混合物の融点・沸点 ・ワインの蒸留・分留 ・昇華 ・水素・アンモニア・塩化水素・ 二酸化炭素の生成と性質 ・二酸化硫黄・窒素の性質 ・大気中の二酸化窒素量の測定 ・再結晶
2	1. 化学変化と原子・分子 ア. 物質の成り立ち イ. 化学変化と物質の質量	[18] 13 5	単体、化合物 物質の燃焼、酸化、還元 原子説、分子説 原子記号、モデルと化学式、 分子式、組成式、化学反応式	・銅粉と硫黄の反応 ・木炭・硫黄・マグネシウム・鉄・ アルミニウムの燃焼 ・アルミニウムの再生 ・エタノール・ろうの燃焼 ・銅粉の酸化 ・水の合成
3	1. 物質と化学反応の利用 ア. 物質と化学反応の利用 イ. 物質と化学反応	[35] 18 17	電解質と非電解質 イオン 電気分解、熱分解 電池 酸の特性、アルカリの特性 酸性・アルカリ性指示薬 酸・塩基と環境 中和反応、中和熱	・電気を通す水溶液と通さない 水溶液 ・水の電気分解 ・塩化銅(II)水溶液・塩酸の電気 分解 ・炭酸水素ナトリウムの熱分解 ・ニッケルメッキ ・電解質水溶液と二種の金属の組合 せによる電気の取り出し ・薄い酸・アルカリの性質 ・身近な酸・アルカリ・指示薬 ・雨水のpH測定 ・塩酸と水酸化ナトリウム水溶液の 中和 ・中和反応による発熱の測定

4	<p>1. 化学変化と原子・分子 ア. 化学変化と物質の質量</p> <p>2. 自然の探究</p> <p>3. 物質と人間生活 ア. 物質の構成と変化</p> <p>4. 物質の構成 ア. 物質と人間生活 イ. 物質の構成粒子</p> <p>5. 科学技術の進歩と人間生活</p>	<p>[5] 5 質量保存の法則</p> <p>定比例の法則 気体反応の法則</p> <p>[2] 自然の見方・探究の仕方</p> <p>[10] 10 元素の概念、単体と原子、原子の構造（ボーアモデルまで） イオン</p> <p>三態変化、化学反応式とその意味</p> <p>[14] 4 化学の人間生活への貢献 実験の基本操作と物質の探求方法</p> <p>10 原子、分子、イオン 第3周期までの元素、およびアルカリ金属、ハロゲン、希ガス元素 原子量、分子量、式量および物質質量</p> <p>[4] 形状記憶合金、水素貯蔵合金、磁性金属、磁性流体、超伝導体、高性能分離膜、合成紙、高吸水性高分子、磁性高分子、電導性高分子、メモリー・プラスチック、ニューセラミックス、液晶ポリマーなど マイクロカプセル、光ファイバー 新しい電池など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・硝酸銀水溶液と塩酸との反応 ・炭酸ナトリウム水溶液と塩酸の反応 ・炭酸ナトリウムと塩酸との反応 ・スチールウールの燃焼 ・炎色反応 ・元素のスペクトル ・バイルシュタイン試験（塩素の検出） ・身の回りの物質から成分を取り出す（分離操作） ・ハロゲンとその化合物 ・ナトリウムの性質 ・反応における物質量の関係 ・形状記憶合金、水素貯蔵合金、磁性流体、超伝導体、低融点合金、高吸水性樹脂、磁性高分子、感光性樹脂、自由樹脂、化学発光、形状記憶プラスチック、光ファイバ
5	<p>1. 物質の変化 ア. 化学反応</p> <p>2. 物質の構造 ア. 物質の構造</p>	<p>[40] 40 反応熱、熱化学方程式、ヘスの法則</p> <p>結合エネルギー 酸、塩基、pH、中和滴定、滴定曲線、塩の加水分解、緩衝溶液</p> <p>酸化還元、酸化剤・還元剤、</p> <p>金属のイオン化傾向、電池、電気分解</p> <p>[40] 40 イオン結合、共有結合、電気陰性度、極性分子、水素結合、金属結合 ボイル・シャルルの法則、気体の状態方程式、理想気体と実在気体、分圧 無定形固体、結晶 溶解平衡、溶解度、濃度、気体の溶解、希薄溶液の性質、コロイド溶液</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄による発熱反応 ・ヘスの法則の確認 ・中和滴定 ・中和と電導性・滴定曲線 ・塩の加水分解とpH測定 ・酸化還元反応 ・CODの測定（酸化還元滴定） ・金属のイオン化傾向 ・金属とイオンの反応 ・酸化還元反応は電子の移動 ・ボルタ電池とダニエル電池 ・燃料電池 ・ファラデーの法則 ・極性分子と無極性分子 ・結合の違いによる性質の違い ・ボイルの法則 ・二酸化炭素の分子量測定 ・凝固点降下による分子量の測定 ・水酸化鉄(III)コロイドの生成とその性質

	3. 物質の種類と性質 ア. 無機物質	[25] 20	非金属元素、金属元素の単体 非金属元素、金属元素の化合物 錯体、無機高分子化合物	<ul style="list-style-type: none"> 液体窒素 アルミニウム・亜鉛・銅・銀 金属イオンの反応 河川に含まれる金属イオンの検出 硫化水素・二酸化硫黄・硫酸の性質、窒素酸化物と硝酸 フッ化水素酸の反応 陰イオンの反応 錯体の合成 研究発表
	イ. 物質に関する探究活動	5		
6	1. 物質の種類と性質 ア. 有機化合物	[53] 35	脂肪族炭化水素 アルカン、アルケン、アルキン アルコールとエーテル アルデヒドとケトン カルボン酸とエステル、油脂 芳香族炭化水素 フェノール類、ニトロ化合物、アミン	<ul style="list-style-type: none"> 分子構造モデルの組立 メタン・アセチレンの生成とその性質 アルコールの酸化 アルデヒドの性質 エステルの合成とケン化 石鹸の合成 フェノール類の性質 ベンゼンのニトロ化 ニトロベンゼンの還元 化学反応速さ 化学平衡の移動 塩化物イオン濃度の測定(モール法)
	2. 化学平衡	18	反応の速さ、活性化エネルギー 可逆反応、化学平衡、質量作用の法則、平衡の移動	<ul style="list-style-type: none"> 天然ゴムの加工 銅アンモニアレーヨンの合成 糖類の性質 タンパク質の性質 牛乳成分の分離と検出 ナイロンの合成 ジアゾ化とカップリング反応 樹脂の合成と性質
	3. 生活と物質 ア. 天然物質	[35] 20	絹、綿、羊毛、天然ゴムの構造と性質 糖類、タンパク質、炭水化物、脂肪の構造、性質、反応	<ul style="list-style-type: none"> 研究発表
	イ. 合成物質	10	アゾ染料、ナイロン、ビニロン等の合成繊維 合成樹脂、合成ゴム、ポリエチレン等の特徴や用途	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活で興味・関心のある事象について各自で実験・観察を行い発表
	ウ. 生活と物質に関する探究活動	5		
	3. 課題研究 ア. 特定の化学的事象に関する探究活動 イ. 化学の歴史的実験例の研究	[12] 8 4	化学的な事象に関する応用的、発展的な観察、実験 化学の歴史における著名な実験の再現などによる原理・法則の確率の経緯	

6-3 生物的内容

学年	項目	時間数	内容	実験・観察
1	1. 植物の生活と種類 ア. 身近な植物観察 イ. 植物の体のつくりと働き	[35] 2 3 3 5 5 1	植物採集・標本作成の方法 校庭の植物同定 タンポポ調査・帰化植物の話 奈良公園の植物 花のつくりと働き 顕微鏡の使い方	植物採集 PCによる植物の同定 学校周辺のタンポポ調査 奈良公園の植物観察 アブラナ・タンポポ・エンドウ・ユリの花の観察 赤糸・白糸の観察

	ウ. 植物の仲間	<ul style="list-style-type: none"> 3 根・茎・葉のつくりとはたらき 3 1 2 2 被子植物 1 裸子植物 2 日陰で生活する植物 2 水中で生活する植物 	<ul style="list-style-type: none"> 維管束の観察 光合成の実験 呼吸の実験 蒸散の実験 イチョウ・マツの観察 コケ・シダの観察 サギ池のプランクトンの観察
2	<ul style="list-style-type: none"> 1. 動物の種類と生活 ア. 身近な動物観察 イ. 動物の体のつくりと働き ウ. 動物の仲間 エ 生物の分類と変遷 	<ul style="list-style-type: none"> [35] 2 昆虫採集・標本作成の方法 3 校庭の動物 4 奈良公園の動物 感覚器官・神経系・運動器官 3 10 消化・呼吸・血液循環・排出 5 生活場所、体のつくりと特徴、増え方 2 無脊椎動物 2 生物の分類 4 地球上の生物の変遷 	<ul style="list-style-type: none"> 骨格標本、神経標本の観察 消化酵素の実験 血球の観察 いろいろな脊椎動物の観察
3	<ul style="list-style-type: none"> 1. 生物の細胞と生殖 ア. 生物と細胞 イ. 生物の殖え方 2. 自然と人間 ア. 生態系 イ. 自然界のつりあい ウ. 人間の活動と地球環境の変化 	<ul style="list-style-type: none"> [12] 5 生物体を構成する細胞 3 体細胞分裂 4 身近な生物の殖え方 [23] 5 生産者・消費者・分解者 8 学校の周りの環境 2 生物どうしのつりあい 3 物質循環 2 人間と環境 3 環境の保全 	<ul style="list-style-type: none"> 植物細胞・動物細胞の観察 タマネギの体細胞分裂の観察 減数分裂の観察 分解者の働きの実験 学校の周りの環境調査
4	<ul style="list-style-type: none"> 1. 生物の移り変わり ア. 生物の変遷 イ. 遺伝の規則性 2. 生物の多様性 	<ul style="list-style-type: none"> [11] 1 地球上の生命の誕生 1 陸上への生物の進出 2 現在の生物の世界へ 4 遺伝の法則性 3 遺伝子の本体 [7] 生物界の多様性 	<ul style="list-style-type: none"> エンドウの観察 ショウジョウバエの観察 DNAの抽出実験
5	<ul style="list-style-type: none"> 1. 細胞 ア. 細胞の構造と機能 イ. 細胞の増殖と生物体の構造 2. 生殖と発生 ア. 生殖細胞の形成と受精 イ. 発生とその仕組み 3. 環境と動物の反応 ア. 体液とその恒常性 	<ul style="list-style-type: none"> [26] 13 細胞の構造と機能 酵素 細胞膜の性質とはたらき 13 染色体、減数分裂 [26] 13 生殖細胞の形成、動物の受精 13 動物の発生、分化のしくみ [27] 14 血液とその働き、循環、生体防御 排出の仕組みと体液の調節 動物のホルモン、自律神経 	<ul style="list-style-type: none"> 細胞の観察・細胞の大きさの測定 DNAとRNAの染め分け 酵素のはたらき 原形質分離の観察 減数分裂の観察 ウニ、カエルの発生の観察 カエルの血球観察 ゾウリムシの浸透圧調節 メダカの体色変化

	イ. 刺激の受容と反応 4. 環境と植物の反応 ア. 植物の生活と環境 イ. 植物の反応と調節	13 受容体、作動体、神経系 動物の行動 [26] 12 水分の吸収、移動、光合成と環境との関係 14 植物の発芽、成長、花芽形成 植物ホルモン	ウシの眼球の観察、光受容体の働き 筋収縮とATP 走性の実験、迷路実験 補償点の実験 オーキシンの働き
6 (理系)	1. タンパク質と生物体の機能 ア. 生物体内の化学反応と酵素 イ. 同化と異化 ウ. タンパク質の機能 2. 遺伝情報とその発現 ア. 遺伝情報とタンパク質の合成 イ. 形質発現の調節と形態形成 ウ. バイオテクノロジー 3. 個体群の構造と維持 ア. 個体群の維持と適応 イ. 物質生産と植物の生活 4. 生物群集と生態系 ア. 生物群集の維持と変化 イ. 生態系とその平衡 5. 課題研究	[30] 10 生物体を作る物質、生体内の化学反応と酵素 10 呼吸、光合成、窒素同化 10 免疫、筋収縮、細胞間情報伝達 [30] 12 遺伝子と遺伝情報 12 タンパク質合成のしくみ 12 遺伝形質の発現と調節 6 遺伝子操作、細胞融合 [16] 8 個体群の成長様式や維持される仕組み 8 光合成による植物の物質生産 植物の形態、生活との関連 [16] 8 個体群間の相互作用 植物群落の遷移や生態分布 8 食物網、物質循環、エネルギーの流れ [8] 8 特定の生物や生物現象に関する研究 自然環境に関する調査	脱水素酵素の実験 アルコール発酵、色素の抽出 DNA模型の作製、DNA抽出 組織培養、細胞融合の実験 ウキクサ個体群の調査 植物群落の調査
6 (文系)	1. 生命の連続性 ア. 細胞の微細構造 イ. 生物体内の化学反応と酵素 ウ. 同化と異化 エ. タンパク質の機能 2. 遺伝情報とその発現 ア. 遺伝の法則 イ. 遺伝子と染色体 ウ. 遺伝情報とタンパク質の合成 エ. バイオテクノロジー 3. 生物の移り変わり ア. 生物の変遷 4. 生物と環境 ア. 生物の多様性 イ. 生物と環境とのかわり ウ. 生態系とその平衡	[17] 4 細胞構造 4 生物体を作る物質、生体内の化学反応と酵素 4 呼吸、光合成、窒素同化 5 免疫、細胞間情報伝達 [19] 5 メンデルの法則 5 染色体説 5 タンパク質合成 4 遺伝子操作、細胞融合 [5] 5 生物の誕生から現在の生物まで [9] 3 多様な生物と生活の多様性 3 個体群の成長様式や維持される仕組み 3 食物網、物質循環、エネルギーの流れ	脱水素酵素の実験 アルコール発酵、色素の抽出 DNA模型の作製 DNA抽出 組織培養、細胞融合の実験 ウキクサ個体群の調査

6-4 地学的内容

学年	項目	時間数	内容	実験・観察
1	1. 大地の変化 ア. 地層と大地の歴史	[25] 9	土と岩石の風化、	・土と風化した岩石の観察

	<p>イ. マグマの活動</p> <p>ウ. 地震</p>	<p>流水のはたらき、 地層の成り立ちとそのでき方 化石からわかること、堆積岩 地形、地層の積み重なり方 大地の歴史、変成岩</p> <p>9 火山の分布、火山噴出物、 火山の形、 溶岩の性質と火山活動 鉱物と岩石、 火山岩と深成岩 奈良の地層と岩石</p> <p>7 地震のゆれとその伝わり方 震度とマグニチュード 震源の分布、地震と断層 地震の災害、土地の動き</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・流水の作用の実験 ・地層形成の実験 ・化石と堆積岩の観察 ・地形の観察 ・火山噴出物の観察 ・火山地形の観察 ・造岩鉱物の観察 ・火山岩と深成岩の観察 ・火山岩と深成岩のでき方を調べるモデル実験 ・地震計の実験 ・等震時線の作図 ・地震のゆれの伝わり方を調べるグラフの作成
2	<p>1. 天気とその変化 ア. 気象観測と天気</p> <p>イ. 大気中の水</p> <p>ウ. 天気の変化</p>	<p>[25]</p> <p>4 気象観測、雲の種類 気圧の変化と天気</p> <p>10 湿度と露点、飽和水蒸気量 雲のでき方、雨</p> <p>11 等圧線と風、前線 高気圧と低気圧、天気図 天気図の変化と季節の天気</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校庭での気象観測 ・観測データのグラフ作成 ・雨水のpH測定 ・露点と湿度の測定 ・雲をつくるモデル実験 ・断熱膨張の実験 ・陸と海の暖まり方のモデル実験 ・前線のモデル実験
3	<p>1. 地球と宇宙 ア. 天体の動きと地球の運動</p> <p>イ. 太陽系と惑星</p> <p>ウ. 恒星と宇宙</p> <p>2. 現在の地球環境 ア. 多様な地表の景観 イ. 大気環境</p> <p>ウ. 人間の活動と地球環境</p>	<p>[25]</p> <p>12 天体の日周運動と地球の自転</p> <p>四季の星座の移り変わり 1年間の太陽の動き 地軸の傾きと地球の公転</p> <p>8 太陽と月、惑星の見え方 太陽系の構造、惑星の世界</p> <p>5 恒星とその距離 星雲と星団、銀河系</p> <p>[8]</p> <p>1 大陸、大陸棚、島弧、海洋底</p> <p>4 大気の大気層構造、オゾン層 大気の温室効果 大気と水の循環、</p> <p>3 森林破壊、オゾン層の破壊 酸性雨</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・太陽の日周運動の観測 ・パソコンによる天体の動きのシミュレーション ・太陽の観測、惑星の観測 ・パソコンによる惑星の運動のシミュレーション ・インターネットによる地球環境情報の収集
4	<p>1. 移り変わる地球 ア. 生物がすむ惑星、地球</p> <p>イ. 地球の変動</p> <p>ウ. 地球の歴史と生物の変遷</p>	<p>[12]</p> <p>3 惑星、地球の特徴 地球の形と大きさ 地球の内部</p> <p>5 世界の震源分布とプレート プレートの動き、大陸の移動、 山脈の形成</p> <p>4 地球の誕生、生命の誕生 先カンブリア時代、古生代 中生代、新生代 氷河時代と人類の進化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地形図から地球の半径を求める実習 ・示準化石の観察

<p>5 1.地球の構成</p> <p>ア. 太陽系の中の地球</p> <p>イ. 地球の形状</p> <p>ウ. 地球の内部</p> <p>エ. 火山とマグマの活動</p> <p>オ. 地震</p> <p>カ. 地層の形成</p> <p>キ. 地殻変動</p> <p>ク. 化石と地質時代</p>	<p>[105]</p> <p>10 地球の自転と公転 地球と惑星の運動</p> <p>3 地球楕円体、ジオイド</p> <p>10 地球の内部構造 地球の構成物質</p> <p>20 溶岩の化学組成と火山活動 プレートと火山の分布 火山災害、マグマの発生 火成岩の鉱物組成と 化学組成、マグマの分化</p> <p>20 地震発生の仕組み 地震の震度とM 地震のエネルギー 地震の発生頻度 地震とプレート 日本列島の地震 地震にともなう地殻変動 地震災害</p> <p>10 風化作用、流水の3作用 地層の構造、地層の形成 続成作用と堆積岩</p> <p>12 断層と褶曲、整合と不整合 造山運動、 変成作用と変成岩</p> <p>20 地質図、 示相化石と示準化石 絶対年代と相対年代 地質時代</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フーコーの振り子の実験 ・パソコンによる太陽の動きのシミュレーション ・地球の形の探究活動 ・パソコンによる地球内部を伝わる地震波のシミュレーション ・火成岩の偏光顕微鏡観察 ・岩石の探究活動 ・地震データの統計分析 ・堆積岩の偏光顕微鏡観察 ・変成岩の偏光顕微鏡観察 ・地質図の作図 ・示準化石の観察
<p>6 1. 大気と海洋</p> <p>ア. 大気の熱収支</p> <p>イ. 大気の運動</p> <p>ウ. 海水の運動</p> <p>2. 宇宙の構成</p> <p>ア. 太陽の活動</p> <p>イ. 恒星の性質と進化</p> <p>ウ. 銀河系と宇宙</p>	<p>[20]</p> <p>5 太陽放射、太陽定数 地表と大気と熱の流れ</p> <p>10 大気の大循環、 大気の断熱変化、雲と降雨 気団と前線、温帯低気圧</p> <p>5 海洋の構造、世界の海流 風浪とうねり、津波、潮汐</p> <p>[30]</p> <p>10 太陽の表面、太陽の構造 太陽光のスペクトル 太陽のエネルギー源</p> <p>16 恒星の年周視差と距離 実視等級と絶対等級 恒星のスペクトル型とHR図 星雲と星団、恒星の進化</p> <p>4 銀河系、銀河系外星雲 宇宙の成り立ち</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・直達日射量の測定 ・太陽光発電の発電量の分析 ・パソコンによる地球と月の運動のシミュレーション ・太陽黒点の観察 ・太陽スペクトルの観察 ・吸収線をつくる実験 ・恒星のHR図の作成

第6章 英語科

秋山啓子・荒木孝子・加藤 勇・塩川 史
平田健治・前田哲宏・南 美佐江

1 中等教育学校における英語学習の意義

1-1 ことばの学習として

人間の精神生活において、ことばは切り離せない重要な意味を持ち、問題を解決したり物語を話したり方策を練ったりするときの理性に関わる思考には、ことばが重要な役割を果たす。この点で、ことばの学習そのものに意味がある。

しかし日本語だけの学習では思考を日本語の枠の中に閉じこめてしまうことになり、自文化中心主義 (ethnocentrism) に陥る危険性を伴う。ここに外国語 (英語) を学習する意味がある。

また、学ぶ対象としてのことばを与えられることにより、生徒が、社会交渉のほとんどがことばを通じてなされるということに気づき、ことばに対する感性、言語観を得る可能性があるという点でも有意義である。

さらに、英語の学習過程で、将来新たに英語以外の外国語を学ぶために必要なストラテジーを学ぶことができる。

1-2 グローバル・リテラシー (国際対話能力) のために

英語は、現実問題として国際共通語 (lingua franca) としての性格を帯びており、インターネットの世界的な普及はその流れを加速した。英語を学ぶことにより、接触可能な文化圏を広げ、情報を自在に入手し、理解し、意思を明確に表明できる可能性を持つ。すなわち「世界へアクセス」し「世界と対話」できるグローバル・リテラシーを身につけることができる。

さらに、異言語理解を通じて異文化としての言語の存在に気づき、理解し、その知的活動の中で、母語とそれを取りまく文化を客体化してみることができる。例えば、英語の文法体系には英語の思想が反映されており、また、表現形式には英語での思考決定のプロセスや思考が具現しているのである。それらを学ぶことを通じて、我々は日本語をことばとして再認識し、特徴を知り、さらに日本語により形作られた文化の存在に気づくのである。英語を学ぶ中で育った、このカルチュラル・リテラシーを基礎にグローバル・リテラシーが生まれ、世界を視野に入れて活躍できる人間となる可能性を持つ。

2 英語科の基本的な考え方

英語科6年間の目標を「コミュニケーション能力の育成」と、「認識の世界の拡大と深化」とする。そのためには、生徒にとって意味・内容のあるコミュニケーションを大切にしたいと考える。

教室は、言語面に重点を置いた、英語を「学ぶ」場ではなく英語を「使う」場、すなわちコミュニケーションを実践する場でなければならない。生徒はコミュニケーションを通して、自分自身が持っている英語を活性化していくなかで、実践的コミュニケーション能力をつけていく。

また、意味・内容のあるコミュニケーションを実践するためには、さまざまな状況での会話表現を練習するような、「英会話」では不十分である。theme-based instructionを重視し、プロジェクトにより内容のある自己表現をしたり、学びたいテーマを生徒が選べる機会を作りたい。

「英語」については、idealized native speakerの幻想を捨て、英・米語だけでなくworld

Englishesをさして「英語」とする。したがって、my Englishとyour English間でコミュニケーションできること（communicability）を重視する。教室では、拙い英語ではあっても、生徒間、教師－生徒間の英語でのインタラクションを大切にしたい。

以上に述べた本校英語科のねらいを、より効果的に実現するため、少人数の学習環境を整えることが必要である。そのため、1991年度より前期課程で実施している20人単位の授業形態を継続すると共に、その学年枠を広げて、できるだけ多くの生徒に理想的な語学学習の環境を提供する努力をしたい。

3 中等教育学校における英語科6年一貫カリキュラムの特徴

3-1 実践的コミュニケーション能力の養成を目指したカリキュラム

新学習指導要領では、外国語の目標として、中学校学習指導要領で「実践的コミュニケーション能力の基礎」を、高等学校学習指導要領で「実践的コミュニケーション能力」を養うことが謳われている。本校のカリキュラムでも、「実践的コミュニケーション能力」を養うことを目指している。

まず、「実践的コミュニケーション能力」であるが、それは特定の技能を指しているのでも、特定の英語の種類を指しているものでもないと考える。

従来から「コミュニケーション能力」を、speaking, listening, reading, writingという4技能に分けたり、言語的能力／社会言語能力／談話能力／方略的能力などに分けたりしてきた。そのような解析はそれなりに有効だが、あくまでも理念形に過ぎない。コミュニケーションとは常に総合的なものであるのだから、4技能をバラバラに習得した後で足し算をして本当にコミュニケーション能力が向上しているかどうかはなはだ疑問である。実践的コミュニケーション能力とは、従来のこのようなコミュニケーション観を批判的に乗り越え、言語の使用、使用場面、技能をも巻き込んだダイナミックな全体的能力である、と捉えなければならない。

このような考えから本校のカリキュラムでは、コミュニケーション能力を下位区分することなく提示した。原則として、4技能の全てを実際に総合的・有機的に用いると同時に教材への理解や知識を深めていく。部分から全体ではなく、全体から部分へと考えていきたい。結果的にはいわゆる統合的アプローチを取ることになる。

3-2 弾力性に富んだカリキュラム

6年一貫教育の趣旨に基づいた2-2-2制に従って、それぞれをIntroductory English, Integrated English, Topic Studiesの3段階に分けた。従来のカリキュラムでは、3年から4年になるときに英語が質量ともに急に変わり、生徒がとまどうことがあった。6年間を見通した一貫性のあるカリキュラムを作ることでそのような弊害をなくしたい。

従来のカリキュラム作成と言えば、言語材料の配置が大きくウエイトを占めていた観が否めない。このような旧来のカリキュラムでは、文法項目を細分化し、それを積み上げ式に配置する。その結果それぞれの項目を終えること自体が目的化してしまう傾向があった。それは一見精緻・整然としているようだが、言語学習を連続的・直線的・分割的に捉えており、本当の言語学習の姿とはほど遠い。それでは実践的コミュニケーション能力を養うことはできない。

だからといって、このカリキュラムが文法の学習を軽視しているのではない。事実、1・2年では、後に示す通り、文法構造を基本にした構造シラバスになっている。しかし、そうであっても、文法や文型といった言語材料の知識の習得が最終目標ではなく、あくまでもそれはコミュニケーションを成立させるための手段であるということを強調しておきたい。

またあらかじめ全てがプリセットされたシラバスの下で生徒がそれを教師から与えられてこなしていくだけでは、自らの学習に責任を持つことのできる、いわゆる自立した学習者を育てることはできない。教師と学習者との「交渉」の余地も残しておかなければならない。あまりに細分化されたカリキュラムでは実際の運用で困難に陥りやすい。現実的にも運用可能なカリキュラムでないと意味がないのである。このような考えに基づいて全体的・発達的に言語学習を捉えたカリキュラムを作成した。

3-3 「聞くこと・話すこと」に重点をおいたカリキュラム

中学校学習指導要領では、特に「聞くこと・話すこと」を重視するように謳っている。私たちも、常日頃から、英語習得に関して、特に低学年での音声指導がたいへん重要であることを実感してきた。年齢が上がるに従って音声言語の習得が困難になることは研究によっても経験によっても明らかである。本校のカリキュラムではまず、1・2年で、特に音声を伴った活動を積極的に導入し自然な英語のリズム、イントネーション、発音を身につけることを目指している。

ただ、このことによって、コミュニケーションはオーラルだけに限られたり、インフォメーションギャップのようなことを主体とした活動ばかりやっていたらよいと考えたとすると、それはコミュニケーションというものを一面的にしか捉えていないことになる。インターネットを通じたメールなどの普及を見れば分かるように、「読む・書く」という能力も同じように必要であるし、前述したように、4技能をバラバラに学習しても全体としてコミュニケーション能力はつかない、というのが私たちの基本的な考え方になっている。「聞く・話す」ことに重点があると言っても、それらは「読む・話す」ことと有機的に連関していなければならない。実際、高校の学習指導要領では、「情報や相手の意向などを理解したり、自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う」とあり、4技能には分かれていない。

同時に、1・2年は「聞くこと・話すこと」に重点を置くといっても、それ以降は音声を軽視することではない。それ以降も、学習者が自然に英語を発話できるような環境づくり、英語による授業、6年間を通じたマルチメディア語学教室での演習などを行うことで、音声指導の充実を図りたいと考えている。

3-4 theme-based instructionを行うカリキュラム

コミュニケーションをするには、確かに「意欲」や「技術」も必要だが、その「内容」もそれにも増して重要である。本当に伝えなければならない、または伝えたい「内容」を持っていれば「意欲」もそれに伴うはずである。「内容」の伴わない「意欲」や「技術」など考えられない。英語授業が英語によるコミュニケーション能力を高めようとするのなら、授業の中で本物のコミュニケーションが成立している、または授業そのものがコミュニケーションになっていないといけない。

生徒が主体的に考え、自分の意見を発表し、また他者の意見を聴きながら再び自分に返っていく、そのようなまさに実践的なコミュニケーションが成立するためには、生徒が考える対象や座標軸のようなものが必要である。それがいわゆるthemeである。

3～6年に共通するthemeとして、Life and Culture, Society and Communication, Science and Technology, Nature & Environmentの4つを設定した。学習者が、英語学習の過程でコミュニケーション能力を高めつつ、それと同時に、自己を見つめ、自己と他者との関係の中で、新しい世界に向かって自らを変革しながら、自己実現を図っていく。それに必要な領域をカバーするに足るthemeであると考えている。themeはそのための契機としてはたらくものである。

3・4年のIntegrated Englishではそのthemeに関連したtopicを扱い、5・6年のTopic Studiesでは生徒自らがthemeに基づいてtopicや課題を見つけていく。

これらを実際に授業で実践していくためには、4技能を自然に使えるような場を提供できる統合教材が必要になってくる。また、トピックの選択・決定についても教師と生徒との共同作業という要素が高まってくると、それに応じた教材も必要になってくる。中学・高校の検定教科書だけではなく、教師自らが、生徒の意見や状況を考慮にいれながら、適切な教材を見つけてきたり作成したりすることがますます必要になってくるだろう。学習者のレベルや状況に応じて自主教材を作成するには確かに多くの労力が伴うであろうが、逆に、タイムリーなtopic、新鮮なtopic、自分の教室の、自分の生徒にまさしくピッタリなtopicを即座に扱うことができるという大きな利点がある。

3-5 学習者中心のカリキュラム

このカリキュラムでは、学習者中心のカリキュラムを目指した。学習者をwhole peopleとして捉え、授業はあくまでも学習者中心であり、教師は生徒とともに授業を作り上げていく、その援助者としての役割を果たすべきであると考えている。

本校のカリキュラムでは、学年が上がるに従い、ある程度の枠組みの中から生徒がトピックを選んだり、またもっと自由に、自分にとって意味のある課題を見つけたりする中で、教師と一緒に授業を作り上げていく授業を目指している。それと平行して5・6年ではReading, LL Seminar, Vocabulary, NET, Writingなどの様々な科目を設置し、生徒が自らの興味や必要に応じて履修を選択できるようにしている。

カリキュラムやカバーすべき項目があらかじめプリセットされていて、生徒はこれをこなしていくだけでは、passive learnersの域を越えない。私たちは、学習者が自らの学習を自覚的・批判的に捉え、それらを積極的に組織化したり、計画していける自立したactive learnersもしくはcreatorsを育てていきたい。それならば、学習者中心のカリキュラムになることは必然的な要請である。

3-6 自己学習能力の育成を目指したカリキュラム

コミュニケーション能力を養うことが英語教育の使命であることは今更言うまでもない。その背景には「使える英語を」という社会的要請があるのも確かである。しかし、学校教育である以上、英語能力があれば就職に有利という次元に終始するものであってはならない。

ことばというものは、人のアイデンティティを担うものである。外国語学習は、就職や海外旅行に役立つためのだけの技能やスキルの習得に終わるのではなく、自己イメージの変換、自己実現、生き方などをも含むものでなければならないと考える。まさにこれは学習指導要領の理念の一つである「生きる力」につながるものでないだろうか。

また、新学習指導要領では教育内容の厳選と同時に基礎・基本の定着が謳われている。カリキュラム作成にあたっては往々にして「あれも教えたい、これもやりたい」という思いからどんどん詰め込んでしまいがちではあるが、それではいくら時間があっても足りないことはない。いかに自立した学習者を育てるか、ということが生涯教育の観点から考えて重要だと思う。

「基礎・基本」とは特定の文法項目や技能を指すのではなく、学校を卒業してからも自らの必要や目的に合わせて学習を継続していくことができる自己学習能力であると考えたい。学習者は常に自分の学習方法を点検しながら、自己評価を行っていく。ポートフォリオによる評価も積極的に導入していきたい。学習者はその事によって自分の学習に対する責任を自覚し、学習の軌跡を展望しながら将

来計画を立てることも可能になる。そのような自立した学習者を育てるために、このカリキュラムではwhat to learnとhow to learnのバランスの取れたカリキュラムを目指した。

3-7 少人数クラス

21世紀が始まった今、外国語教育の将来を考える時、クラスサイズの縮小は本校のみならず、日本の英語教育にとっても、是非とも達成しなければならない目標のひとつである。

本校の英語科では何十年も前から20人で英語授業を行うことの意義と有効性を訴えてきた。その結果、1991年度より、1・2年において英語授業の20人クラスを導入した。その成果や有効性が本校の教師、保護者に認められ、1993年度からは1～3年で20人クラスを導入することになった。教育改革の一つとして小・中学校の少人数クラスが導入されるというが、特に外国語教育にとっては喜ばしい改革である。私たちは、この方向性を追及すべく、さらに4年でも20人クラスを導入することを考えている。

私たちが今まで行ってきた20人クラスでは、次のような利点を確認されている。

- (1) 学習者の心理的束縛からの開放
- (2) 教師と生徒のより望ましい人間関係の構築
- (3) 生徒同士のより密接な人間関係の構築
- (4) 4技能のバランスのとれた授業が容易になること
- (5) 学習者中心、学習者参加型の授業がより容易になる
- (6) 自己表現の場の増加
- (7) 発話回数の増加
- (8) より細やかな指導が可能になること
- (9) 多様な角度からの評価が可能になること

4 カリキュラム一覧表

章末のカリキュラム表参照

5 学習指導要領との関連性

基本的にこのカリキュラムは、新学習指導要領の理念に合致したカリキュラムであると考えている。

今回の中学校学習指導要領には、「生徒の実態や地域の実情に応じて、学年毎の目標を適切に定め、3年間を通して英語の目標の実現を図るようにすること」と述べられている。つまり、学習の指導計画の作成について教師の裁量が増えたのであり、このカリキュラム作成にあたって、この教師の裁量を最大限に生かした特色のあるカリキュラムを作ったと自負している。これからは、教師が、「カリキュラムデザイナー」として、学校の状況、「生徒の実態」「地域の実情」などに応じて独自のカリキュラムを作成していくことが求められてくると考えている。

前述したように、従来のカリキュラム作成では、文法・文型や語彙、発音などの言語材料や場面・機能などの言語活動の「配列」や「指導順序」に多大の関心が注がれる傾向にあった。しかし、コミュニケーション能力という極めてダイナミックな能力の育成という観点にたった場合、果たしてそれがどれくらい有効であったのだろうか疑問である。

実際、今回の学習指導要領では文法項目の配列順序がなくなった。私たちは、このカリキュラムを作成するにあたり、まず「コミュニケーションする」とはどういうことか、その能力はどのように育

成できるのかを考えるとところから始めたが、その過程で細目積み上げ式のカリキュラムを否定した。今回の学習指導要領のキーワードとなった「実践的コミュニケーション能力」や「基礎・基本」に対する私たちの考え方は「3. 中等教育学校における英語科6年一貫カリキュラムの特徴」で示しており、その限りにおいて、本校のカリキュラムは学習指導要領の理念に沿ったものであると考えている。

しかし、学習指導要領の「考え方」との差異を一つだけ挙げるとするならば、それは語彙指導である。新学習指導要領では使える語彙を中学では100語も減らしている。コミュニケーション活動をするにはそれ以上の語彙が必要だろうし、また、コミュニケーション能力そのものに関して言っても、従来以上に語彙力が深く関係しているのではないかと考えている。

このカリキュラムでは、1・2年から語彙指導の充実を図るよう計画している。その時期は特に身近な話題について話したり聞いたりという活動が多くなると考えられるが、身近なことを表現する時にはかえって、ある程度の語彙が必要なのである。3年・4年生のIntegrated English、5・6年のTopic Studiesでは、そのトピックや話題に応じて必要な語彙を学習していかなければならないだろう。しかし学習指導要領の語彙数も、具体的にどの語を使ってよいとか使ってはいけないと言っているのではない。どんな単語が必要かはまさしく「生徒の実態や地域の実情に応じて」指導していくべきなのである。

6 指導内容一覧表

章末の指導内容一覧表参照

6-1 1・2年のシラバスについて

英語を学習する上での入門期にあたるこの時期は、特に英語特有の音声やイントネーション、リズムを徹底的に訓練する必要がある。同時に、語彙や文法といった基礎・基本をしっかりと指導することも忘れてはならない。したがって、他学年（3・4・5・6年）とはちがひ、文法構造を基本にした年間授業計画（構造シラバス）となっている。これまでも、特に中学校の文部省検定教科書に従えば、同じような構造シラバスであったが、ここで注意したいのは、指導期間と文法配列順序が若干従来のものとは異なる点である。

本シラバスの最大の特徴は、これまで中学校3年間をかけて指導してきた文法構造を2年までの2年間で網羅していることである。したがって、本シラバスを作成する上で最初に考慮した点は、文法指導にかける絶対的時間が減少することで、指導すべきことを全て指導できるかということである。このことを考えた場合、従来のように文法項目を一つ一つ積み上げていくような配列順序ではなく、螺旋状に習った文法を復習しながら新出文法項目と比較して学習していくような配列順序にし、先に述べた量的減少に対応した指導方法の質的変化が重要となってくる。また、様々な第2言語習得研究成果を考慮に入れ、できるだけ自然な第2言語習得順序と並列するように配列順序を考えた。その特徴を以下に述べたい。

まず、配列された文法項目は1年の4月から時間が経過していくにしたがって、比較的簡単なものから構造が複雑で難しいものへと移行している。例えば、1年の4月では、基本的な語彙学習やあいさつといった日常的に使われる定型表現から始まり、2年の3月では2つ以上の節から成る関係代名詞を学習する。ただし、ここで言う比較的簡単な文法や難しい文法というのは、ただ単に語彙から文レベルにわたることだけを意味するのではなく、構造と意味の属性の強いものやそうでないもの、日本語にもあり、同じような構造を用いて表現するものやそうでないもの、さらには日常の英語でのコ

コミュニケーション場面において使用頻度が高いと思われるものやそうでないもの、まで多岐にわたっていることに注意したい。

また、前述したように、時間的な制限からできるだけまとめて指導できる文法項目はまとめて指導するよう配列した。例えば、従来であれば1年の2学期に指導される現在進行形と2年の2学期に指導される動名詞をまとめて-ing formとし、1年の6月に指導する。その他、法助動詞の過去形(could, would, should)の指導とともに、それらと関係の深いと思われる仮定法の指導を同時期(2年7月)に行う。ただし、前にも述べたように、本当に2年間で全ての文法項目を網羅するためには、これまで以上に指導方法の模索をし、授業内容そのものの質的な変化が必要とされるであろう。

6-2 3・4年のシラバスについて

この時期は、1、2年で学んだ英語の構造面(文法項目)を、文脈の中で読んだり聞いたりする中で確認し、自らそれを使って話したり書いたりすることの中で適切な使い方を学んでいく。6年間の中では、どんな場面で、どのように使われており、使うのか、機能面に最も重点が置かれる時期である。また、意味のつながりや論理の一貫性を考えながらまとまりのあることを述べたり、文章に表したり、理解したりすることができること(談話能力の育成)を目指す。

3、4年は、1、2年のhere and nowの世界から、次第に視野を広げてゆき、5、6年での自らの課題を設定するために、さまざまな題材にふれるべき時期である。したがって、英語科で6年間の英語学習のthemeとして設定した、Life and Culture, Society and Communication, Science and Technology, Nature and Environmentの4つを網羅する、さまざまなtopicを、教師の方から、数多く、比較的浅く、幅広く与えていく。総合教科として「環境学」、「世界学」を学んでいること、キャリアガイダンスを行っていること、4年ではGlobal Classroomに向けての準備としての学習が始まることに留意し、topicを設定した。

教室は、このtopicについての英語を読み、聞き、考え、話し、書き、発表するコミュニケーションの場になる。topicにより、4技能が統合された形である。さらに、自己表現を大切にするため、topicによっては、プロジェクトを実施し、他の生徒とも成果を分かち合う。

6-3 5・6年のシラバスについて

5・6年の必修の英語科目をTopic Studiesと名付けた。その特徴は、科目名から想像できるように、さまざまなtopicを中心にしたtopic studiesであること、4技能を統合的に扱うこと、theme-based instructionによって授業を行うこと、などである。このことは基本的に3・4年のIntegrated Englishにも当てはまる。

このカリキュラムでは、3～6年を通してまず、Life and Culture, Society and Communication, Science and Technology, Nature and Environmentの4つのthemeを設定した。

Integrated Englishでは、教師がthemeと関連させたトピックを投げかける。出来るだけ多様なトピックを扱いたいと考えている。すると、必然的にそれぞれのトピックの扱いが軽くなる。それに対してTopic Studiesでまず、4つのthemeの下で扱うトピックを絞り、より深く探求していきたい。Topic Studiesでは、どんなトピックをどのように扱うか、学習者と教師との「交渉」の余地を大きく取った。今回は、より学習者中心のカリキュラム、自己学習能力を養うためのカリキュラムを目指したが、そのためには学習者がトピックの選択に主体的に関わることのできるような場を提供することも必要である。また、たとえ、トピックを1度選んでも、生徒の様子や意見、状況に応じてよりふ

さわしいものに変えたり、手を加えたりしていく柔軟性や勇気を持つことも必要だと考えられる。以上のことからできるだけプリセットされている項目や事項を少なくし、弾力的に使えるシラバスになった。

5年も6年も同じシラバスに従うことになっているが、このカリキュラムが細目積み上げ式のカリキュラムでないことを想起すれば、その事はそれほど奇異なことではないはずである。5年でどんなトピックを扱い、どんな活動をしてきたかで、6年で扱うトピックも変わってきて当然だし、学習者もそれぞれの段階の応じて発達してきているのである。

topicと平行してlanguage, activitiesという項目を並べた。languageにはどのような種類の英語を扱うか、activitiesにはどのような活動を行うかが挙げられている。しかし、どれをとっても網羅的なものでもなければ、これ以外は扱ってはならないという制限的なものでもない。つまり、ここに挙げられている以外の種類の英語を扱ってもいいだろうし、ここに挙げられたactivities以外はしてはいけないというものでもない。現場の状況、生徒の好み、それまで扱ってきたtopicなどによって柔軟にtopicや、それに相応しい英語教材、活動を選んでいけばよいと考えている。

従来のようなぎっしりと項目が書き込まれている細目積み上げ式のシラバスのほうが優れているという保証は全くない。言語学習は元来的に連続的・分割的なものでも、あらかじめ方向づけられているものでもなく、全体的・発達の・予測不可能なものであるとの考えからこのようなシラバスになったのである。

6-4 リーディングのシラバスについて

(1) 5年

3・4年で基本的なリーディングスキルは習得している。5年では、一步進めてリーディングスキルを体系的に学習していくことを念頭において、シラバスを作成した。様々な種類の英語に接し、その英語の種類や状況に応じてスキルを使い分けるよう指導する。また、比較的長い英文にも触れ、英文を読む楽しさや喜びを体験することができるようにしたいと考えている。

(2) 6年

6年では今まで以上に学習者の自律が求められる。学習者が自らの好みやこれからやろうとしていることの目的を客観的に捉え、一人一人の状況に応じた英文を自分で見つけてきたり、自分の学習スタイルや学習方法に十分に自覚的になり、better learnersになることを目指す。

単に情報を得るために読むだけではなく、自分の意見や考えを持って、批判的に掘り下げて読むいわゆる「批評読み」が重要な活動になる。また、優れた文学作品にも触れ、人生について考える機会を提供したいと考えている。

本校の生徒の多くは大学進学を希望している。それに必要なだけの英語力を習得することもこの学年の大きな目標である。

6-5 ライティングのシラバスについて

従来、英作文では、和文英訳が中心的な活動になっていた。和文英訳は語順や文法、語法などを正確に習得することには確かに役に立つ。しかし、これからは学習者中心の英語教育、発信型の英語教育が求められている。従来の和文英訳は真のライティングではない。積極的に自分の意見や考えを英語によって表現できる機会を設けていくことが必要である。またインターネットなどの発展によりe-mailによるコミュニケーションもますます重要になるであろう。コミュニケーションというオー

ラル・コミュニケーションだと狭義に誤解する傾向があるが、ライティングも重要なコミュニケーション手段である。リーディング、リスニング、スピーキングなどと有機的に関連しながらライティングを指導していきたい。

ライティングを指導する時には、(1)文法上の正確さ (grammatical correctness)、(2)文脈上の適切さ (contextual appropriateness)、(3)テキスト上の結束性 (textual coherence)、(4)話題別の語彙 (topic-based vocabulary)、の4つの指導が重要だと考える。

(1)については、6年ということもあり、シラバスには明記しなかった。しかし、話すことに較べて正確さがより一層要求されるのが書くという作業なので、あらゆる局面で、臨機応変に指導することとしたい。

(2)については、オーラル・コミュニケーションにおける文脈や状況に適切な表現を選択する重要性を考慮に入れている。これを機能別表現 (functional expressions) として構造化した。トピックもこれに併せて記載したが、もちろんそれは状況や生徒の実情などに応じて弾力的に扱うものだと考えている。

(3)については、従来からも言われて来ているのだが、paragraph writingの技術を、空間的配列、時間的配列、比較・対照などに分類しながら、系統的に指導したい。そして、最後には、理由を並べて一定の自己主張ができる所まで進みたい。そのことで、状況や場面に合わせてそれにふさわしいライティングを行えるように指導する。

(4)については、特にシラバスには明示しなかった。しかし、語彙指導も重要であることは言うまでもない。Topic Studiesで扱うtopicに関する語彙を学習することで、リーディング、スピーキング、リスニングなどとも連動した指導を考えている。

1・2年Introductory English

学年	学期	月	Language	Functions	Topics	Projects
1年	前期	4月	Alphabets, Basic words (nouns, adjectives, verbs+ing), Numbers, Days of the week, Months			
		5月	Copula Be, Plural, Prepositions, Wh-question forms (what, where, when)	Introducing oneself, Describing, Inquiring	Family, Relatives, Friends, Oneself	
		6月	ing form	Describing,	Actions	Self-introduction cards
		7月	Present Form, Articles (a/the)	Expressing likes and dislikes, Referencing	Foods, Beverage, Entertainment, Weather,	
		9月	助動詞 Modals (can/can't; may/may not; must/must not), Past Tense	Expressing ability and inability, Giving and requiring permission, Reporting	Schools of the world	
	後期	10月	Wh-question forms (when, who, whose, which, why) Possessives (-'s)	Inquiring, Reasoning	The world map	Research report
		11月	how much, how many, Existential there	Inquiring, Describing, Expressing existence	A guide to Nara	Map of Nara
		12月	want to, plan to, Comparative	Expressing intention, Comparing	Professions	
		1月	Superlative Pronoun (something, someone)	Comparing	Travelling	Recitation contest
		2月	Modals (will/going to) and (have to/must) Indirect Objectives	Expressing and asking intention, Inviting	Dreams	
2年	前期	3月	Indirect Objects	Expressing attitudes	School life	
		4月	Conjunction (when)	Reporting	Schedule	Diary
		5月	Indirect Objects some and any	Directing others to do something	Events	
		6月	Infinitives So do I, neither do I	Expressing intention and attitudes, Expressing agreement and disagreement	Places, Services, Language, Personal preferences	
		7月	Modals (past tense: would, should, could), Conditionals (real/unreal)	Expressing emotional attitudes, Speculating, Making suggestions,	Future Plans	
	後期	9月	Passive Voice, Reflective Pronouns	Expressing emotional attitudes, Reporting	World heritage	Summary of research
		10月	Present Perfect (経験)	Expressing experiences, Reporting, Inquiring	Personal experiences	
		11月	Present Perfect (完了・結果)	Reporting results	Photographs	
		12月				
		1月	Tag Questions Relative Clauses	Inquiring, Comparing	Art	Skit contest
後期	2月	Relative Clauses	Describing	Geography		
	3月	Relative Clauses	Imparting factual information	Science		

3・4年Integrated English

学年	学期	月	Topics	Themes	Language and Skills	Communicative Activities	Projects
3年	前期	4月	Tastes and Preferences	Life and Culture	Scanning for information Writing sentences about oneself	Giving personal information	Interviewing
		5月	Friends and Family	Life and Culture	Drama Making inferences / Writing	Describing people	Making a skit
		6月	History - Heritage	Life and Culture	Looking for topics Writing sentences about the	Describing past events	Making a poster
		7月					
		9月	Special Occasion	Life and Culture	Paragraph form Writing a paragraph about special	Describing special occasions	Making a poster
	後期	10月	Endangered Species	Nature and Environment	Topics of paragraphs Writing a paragraph about extinct	Clarifying facts and ideas	Search on internet
		11月	Recycling	Nature and Environment	Texts from internet /Main ideas of paragraphs	Collecting information	TV conference
		12月					
		1月	Into Space	Science and Technology	Scientific writing / Main ideas of paragraphs	Taking a survey	
		2月	Great people	Life and Culture	Biography / Organization of paragraphs	Relating chronological information	
		3月	Jobs and Professions	Life and Culture	Newspaper Scanning / Writing a speech	Giving reasons	Making a speech
4年	前期	4月	Language	Society and Communication	Guessing word meanings / Organization of paragraphs	Agreeing and disagreeing	
		5月	Smoking	Society and Communication	Letters / Expressing opinions	Giving advice	Writing a letter
		6月	Computer Science	Science and Technology	Guessing word meanings / Writing about Japanese culture	Giving cause and effect	
		7月					
		9月	Education	Society and Communication	Newspaper / Organization of paragraphs	Taking a survey Expressing ideas	TV conference
	後期	10月	Global Warming	Nature and Environment	TV program / Organization of paragraphs	Giving information	E-mail communication
		11月	The Media	Society and Communication	Newspaper Organization of paragraphs /	Expressing opinions	Making a class newspaper
		12月					
		1月	Gender	Society and Communication	TV program / Organization of para	Holding discussions	Discussion
		2月	Prejudice	Society and Communication Life and Culture	Speech/Song/Non fiction Finding the pattern of organization	Holding discussions	Discussion
		3月	(Reviewing)				

5.6年Topic Studies

学年	学期		Themes	Topics	Language	Activities
5·6年	前期	4月	Life and Culture	daily life, food, entertainment, TV, sports, fashion, youth culture, family, friends, school life, human relations, personality, housing	advertisement, newspaper writing, TV & radio program, letters, biography, autobiography,	describing your lifestyles, designing presentation, expressing one's ideas, public speaking, using an effective delivery, group discussion, critical writing
		5月				
		6月				
		7月	Society and Communication	the English language, literature, internet, globalism, mass media, information age, nonverbal communication, travel, industry, transportation, crime, politics	novels, poems, dramas, historically important documents and speech, documents on the Web	listening to poems, watching movies and videos, reading aloud literary text, appreciation of literary text, recitation, creative writing, expressing one's opinion, discussion
		9月				
	後期	10月	Science and Technology	tradition and technology, genetic engineering, computer science, cyberspace, industry, medical science, evolution, energy, black hole, Darwinism	newspaper writing, scientific writing, documents on the Web, TV program, lecture	listening to lectures, reading scientific writing, researching using internet, scanning, taking notes listening to lecture, summarizing, expressing one's opinion, discussion
		11月				
		12月				
		1月	Nature and Environment	global warming, pollution, outer space, green revolution, geography, ecology, acid rain, ozone layer, natural resources, energy, climate, species, genetics, population, explosion	natural writing, documents on the Web, lecture, movie, TV program	reading scientific and nature writing, summarizing, describing figures and graphs, analyzing data, thinking logically, poster session, discussion
		2月				
3月						

5・6年Reading

			Purpose	Skills	Detailed Skills	Topic
5年	前期	4月	Improving Reading Skills	Searching for Information	1)Previewing & Predicting 2)Scanning & Skimming	Various Materials (Language & Communication, History, Civilization, Culture, Nature, Life, Science, Industry, Modern Living.)
		5月		Recognizing Organization	3)Main Ideas & Topic Sentences 4)Patterns	
		6月			5)Making Inferences	
		7月	Reading for Pleasure	Novels, Historical Writings, etc.(Life, Art, Literature)		
	後期	9月	Intensive Reading	Making Outlines & Summarizing Passages	Short Stories, Biographies, etc.(Life, Art, Literature Part 2)	Various Materials (Human Relations, Daily Life Language & Language Learning, Society, Topics of the Day)
		10月				
		11月				
		12月	Reading for Pleasure			
		1月	Reading Faster	Reading Speed, Skimming, Reading Comprehension (Answering 'True or False')	Various Materials (Part 2)	
		2月				
3月						
6年	前期	Critical Reading (Reading Faster & Intensive Reading)				Various Materials
	後期	Reading for Specific Purpose (Reading for Entrance Examinations)				

6年Writing

Term	Month	Functional Expressions (contextual appropriateness)		Paragraph Writing (textual coherence)	
		Language	Topic	Language	Topic
1st	4	1)Appreciation,Celebration,Pleasure	Good News	Introduction	
		2)Apology,Regret,Sympathy,Condolences	Bad News		
	5	3)Plan,Prediction,Intention	Transportation Problem	Space	Community Introduction
		4)Permission,Prohibition	Shopping		
	6	5)Invitation,Suggestion,Proposition	Invitation	Time	Postwar Japanese History
		6)Request,Demand,Advice,Recommendation	Rubbish		
	7	7)Necessity,Obligation	Mass Media	Comparison,Contrast	Britain and Japan
		8)Hope,Wish	Crosscultural Understanding		
	9	9)Assurance,Expectation	Future Life	Reason	Hair styles
		10)Agreement,Disagreement,Support,Opposition	Lifetime Employment		
2nd	10			Reason	Waste out of Our School
				Reason	Global Warming
	11			Reason	Teasing and Bullying
				Reason	Gender,Handicapped People,etc.
	12			Reason	Cell Phones,Internet
	1				My 6-Year Secondary School Life

英語科カリキュラム

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
科目(単位)	Introductory English(3) TT(1)		Integrated English(3) TT(1)		Topic Studies(必3)*6年のみ文理別	
					Reading (選2、コース別) Intensive/Rapid 下記から1単位選択 LLSeminar(0.5) Vocabulary(0.5) NTE(0.5) Writing(0.5)	Writing(選2、習熟度別) Guided/ Creative LL Seminar(自2) Reading(自2)
目標	英語特有のリズム・イントネーションに親しみ、身近な話題について、簡単な日常会話ができる。 自己の発見・確立。 学習事項としての英語ではなく、英語は使うものとして認識する。 基本的な英語の構造について学ぶ。学習方法を学ぶ。		まとまった内容の英文を理解し、自分の意見を簡単な英語で述べることができる。 自己から視野を広げ、世界を知る。		抽象的な概念を含む相当量の情報を収集、加工、発信することができ、場面・状況を考慮した高度で総合的な言語運用能力を身につける。 広い世界との関わりを考えた自己の再認識	
場面トピック	具体的事象・場面Here and now			抽象的事象・場面		
	あいさつ、自己紹介、第3者の紹介、日常生活、学校行事、過去の出来事、買い物、食事、道案内、旅行など		文化・習慣・科学・情報・環境・教育・人権など 広く・浅くflexibleなトピックを行う。		自分にとって意味のある課題を見つける。	
活動	Basic Communication, Presentation		Basic Communication and Debate, Presentation Guided Discussion		Free Discussion	
コミュニケーション能力	<p>入門期</p> <ul style="list-style-type: none"> 特に英語の音声・リズム・イントネーションに慣れる。 英語の基本的語彙が理解できる。 英語での基本的な会話や自己紹介ができる。 身近な単語を聞き、理解できる。 		<ul style="list-style-type: none"> 現在と過去の基本的概念とその形態が理解できる。 身近で具体的な文を音読する際、語句や文を正しく発音する。 身近な生活で使う会話に慣れ、簡単な英語で事柄を説明し、適切な応答ができる。 単文の発話にとどまるだけでなく、1つの節からなる文を、2つ以上使った応答ができる。 身近なトピックに基づいたスピーチやスキット原稿が書ける。 Varietyに富んだ英語を聞き、大意を掴むことができ、社会場面に応じた言葉があることを知る。 Eye-contactやGestureを交えて話す。 		<ul style="list-style-type: none"> Natural Speedの英語を聞き、大意を掴む。 音声変化(弱化、連結、同化、脱落、短縮など)に留意して、英語を聞く。 時制の概念だけでなく、英語特有の相の概念とその形態が理解できる。 2つ以上の節からなる英文を理解し、表現できる。 Paragraph Readingの基本を身につける。 大まかな話の内容が把握でき、メモがとれる。 Paragraphが書ける。 比較的抽象的な場面やトピックについての会話やプレゼンテーションができる。 ある程度の理論的思考に基づく表現ができる。 会話をしている相手を意識した表現ができる。 	
IT教育	Typingによるアルファベット指導、E-mailを使った自己紹介、LL機器を使った音声練習(正しく聞き取る練習)		E-mailを使った意見交換、インターネットを使った情報収集、マルチメディア(音声教材・ビデオ・映画)を使った語学演習		マルチメディアを使った情報収集と情報発信	
授業	20人学級、NETとのTT		20人学級、NTEとのTT		選択クラス	
プロジェクト	スキット作り、ポスター作り、自由課題(夏休み課題)、Show and Tell(自己紹介、日記、自分史、道案内、奈良の紹介、世界文化遺産の紹介など)		ポスター作り、ビデオ作り、英語俳句作り、自由課題(夏休み課題)、壁新聞、1分間スピーチ		課題研究(卒論)	
行事	Recitation Contest		Skit Contest		ACJC, Anderson H. S. との交流	
					Global Classroom (4年2学期～5年1学期)	
総合教科	奈良学(奈良の地理・歴史について)		環境学(Global warming, Garbageなど)		世界学(異文化コミュニケーション能力の育成)	
						情報学(WWW検索)

*言語材料については、教材の内容に沿ったものを扱う。
*6年生のTopic Studiesは、文系では人文科学(Ideas)、理系では自然科学(Facts)的なものをトピックとして扱う。

第7章 芸術科

長谷圭城・森田昌利

2-2-2制にあわせたカリキュラムについて

－3年での必修選択制の導入－

芸術科は、本校カリキュラムの重要なポイントである2-2-2制において、必修、選択必修、自由選択の3段階で、それぞれ十分な単位数を確保したいと考えた。現在のカリキュラムでは1、2年が2時間、3年が1時間（以上必修）、選択となる4年が2時間、5年が1時間であり、2-2-2制とは、時間的にもシステムのにも整合性に欠ける単位数となっている。特に、実技教科での週1時間という枠では、生徒が作業の準備や片付けに要する時間も惜しまれる上、行事や休日で授業が欠けた場合の非継続性のことを考えると、いずれの学年においても2時間の確保が必要であった。そこで、各学年ともに2時間を保証し、各段階で十分な課題をこなせるようにした。そのためには、各段階で以下のようなことが重要であると考えた。

1・2年の必修段階では、基礎的技能や知識などを習得するために、発達段階に応じた課題について、個人差に応じた適切な指導が必要であり、選択段階に対する十分な準備も含む。

3・4年の必修選択の段階では、必修段階での学習の成果を生かした上で、生徒が選択した課題なども取り入れて、自主制を生かした活動を重視したい。新カリキュラムでは、「浅く広く」という3・4年での選択の特性を生かし、3年終了時での選択変更も認める事とした。

5・6年は、基本的に進路を視野に入れた生徒を対象とし、個人的課題に対応した演習をこなすものとした。

芸術科・音楽

森田昌利

1 中等教育学校における音楽学習の意義

学校という環境で音楽を学習する場合、一番重要と考えられるのは、生涯的に音楽に関心を持ち続け、愛好しつづける動機づけや、基本的な技能や教養の修得にあると考える。授業の学習成果が、刹那的なその場限りの活動にとどまらず、生涯にわたって音楽的活動を続けていける素地をつくりたい。

一般的に音楽的教養や能力は、各家庭における個別的なレッスンで養われる場合が多く、すでに小学校時代から個人差は非常に大きいものである。幼少のころから、ピアノやバイオリンなどを個人レッスンで学びながら、基本的なソルフェージュの能力や音楽的な感受性や関心などを身につけている生徒と、まったく経験のない生徒では、授業に臨む際にいろいろな面で差異がある。そのような理由で、生徒の音楽を学習する上での能力差は、5教科におけるそれよりより大きいと考えられる。中学校と高校の接続ということだけで考えても、さまざまな実状のいろいろな中学校から高校へ進学するそれぞれの生徒の能力に対応するという事は、非常に困難な現実的問題をかかえているといわざるをえない。

しかし、家庭環境の違いにより、生涯にわたって音楽を楽しむ可能性を限られたものにするのは、

非常に残念なことである。幼少時からの音楽活動や体験の欠如を補うべく、学校教育が担うべき責任は、非常に大きいというべきであろう。

6年一貫にすることでその能力差を少しでも解消し、個々の課題に対してより有効な指導が実現しうるといえる。また、6年という長い期間にわたって継続的に学習することにより、生徒の発達段階や個人差に応じて柔軟に指導する事で、より効果的な学習が期待できると考える。

2 音楽科の基本的な考え方

音楽活動を個人的な楽しみにとどめず、能動的に演奏をして楽しむ場合にも、受動的に演奏を聞いて楽しむ場合においても、共同体験を重視したい。その際、活動単位があまりに大集団になると、個性的表現の発露が困難になると考えられるため、小人数のグループ活動を重視したい。

1・2年の必修段階では、器楽、歌唱の基本的な技能修得をめざすという観点から、課題とする曲はあまり演奏が困難にならないように平易なものとする。特に器楽の場合は、それぞれの楽器のリーダーを養成し、効率的に学習できるようにする。また、自分の楽器だけではなく、他の楽器の特徴も理解し、音色を楽しめるようにしたい。

3・4年の選択必修段階では、アンサンブルの楽しみや、表現の多様性などを追求するため、多少は演奏に困難を伴う曲にも取り組みたい。また編成や、能力に応じた曲のアレンジも必要な課題である。

5・6年の自由選択段階は、個人的な進路や能力に応じたそれぞれの課題を設定する。専門実技のレッスンの準備、必要なソルフェージュの演習、音楽通論の課題、生徒の人数によるアンサンブルなどを予定している。

3 中等教育学校における音楽科6年一貫のカリキュラムの特徴

- 1・2年の必修の期間には、基本的な技能・知識の学習をめざす。
- 3・4年の選択必修の段階では、表現の多様な可能性や、アンサンブルの楽しさを追求する。
- 5・6年の選択では、進路に沿った個人演習を課題とする。

4 カリキュラム一覧表

1年前期	器楽基本練習（二部合奏）・二部合唱・鑑賞
1年後期	二部合奏・二部合唱・鑑賞
2年前期	グループ合奏・鑑賞
2年後期	合唱（グループ）・鑑賞
3年前期	合奏（グループ）・合唱（3部）
3年後期	アンサンブル（全体）・鑑賞
4年	3年と同じ
5・6年	専門実技・音楽通論・ソルフェージュ・アンサンブル

5 学習指導要領との差異

本校の単位数は、標準単位に比べて1・2年で余裕があるため、中学の3年分を全員必修の1・2年に割り当てた。各項目は、個々の生徒の実体や教材に応じて、柔軟に対応することとする。

高校の音楽Ⅰ・Ⅱが選択必修の3・4年に相当する。

音楽Ⅲは、5・6年でそれぞれの進路に応じて、内容を精選する。

6 指導内容一覧

1年	器楽	楽器の基礎的な演奏法を身につけ、音色に気をつけて演奏する。
	声乐	曲種に応じた発声により、言葉の表現に気をつけて歌う。
	鑑賞	バロックの時代背景(1)・歌曲の伴奏について
2年	器楽	楽器の特徴を生かし、曲にふさわしい音色や奏法を工夫して表現する。
	声乐	曲種に応じた発声により、美しい言葉の表現に気をつけて歌う。
	共通	声部の役割を生かし、全体の響きに調和させて演奏する。
	鑑賞	バロックの時代背(2)・古典派の作曲法
3年	器楽	曲の構成、曲想の把握とその表現の工夫
	声乐	歌詞、曲想の把握とその表現の工夫
	鑑賞	音楽の美しさと構造のかかわり
4年	器楽	重奏・合奏における豊かな表現
	声乐	声域の拡張と曲種に応じた豊かな発声
	鑑賞	3年に同じ
5・6年		専門実技課題曲の個人練習
		個人的課題のソルフェージュ
		音楽通論の演習問題

芸術科・美術

長谷圭城

1 中等教育における美術学習の意義

人間のコミュニケーションには、言語を通じたものと、視覚・触覚といった非言語的なものがある。言語的表現については国語、数学、英語などで取り組まれており、非言語的表現についての教育の中核を担うのが美術教育である。

中等教育において非言語領域を対象とする美術学習の役割は、生徒の成長段階に応じて2つある。1つは1・2年の必修段階である。この段階では、発展途中のあらゆる感覚を知覚することを豊かにすることが目標となる。視覚や触覚だけでなく、身体的感覚を含む非言語的領域について知り、体験し、学ぶことは、自由なものから見方から自由な発想・着想・表現へといざなうことである。それらは、言語的領域を学ぶにあたっての基礎を用意すると同時に、豊かな人格形成にとってもかかせないものである。もう一つは3年以降の選択段階である。この段階では自己認識と他者理解が目標となる。自己と他者を同化したり、異化したりすることは、この成長段階では日々おこなわれている。この反復運動は、自己の形成、他者理解、世界認識と不可分である。今後、生徒達が営む社会は、多様な文化

につつまれることが予想される。その中で自己の考えを構成する時に必要な、異質なものへの理解と寛容は、このような運動のなかから育てられる。自らの認識を超えた未知なるものへの探究心、またそれらへの寛容心を、表現された作品、つまり実体あるものから培える場として、美術学習は深い意味を持つ。

2 美術科の基本的な考え方と中等教育学校における美術科6年一貫カリキュラムの特徴

美術科では、以下のような視点から、カリキュラムの作成を試みている。

人間の何かを表現したいという欲求や、過去に表現されてきた作品の背景をさまざまな観点から理解させることで、文化的表現へのリアリティーを持たせる。また、芸術に対する理解と活動をすすめることで、生涯を通して表現活動を愛好する文化的素養を身につける。

1・2年（必修）

さまざまな素材への興味づけと基礎的な技法・知識の理解

3・4年（選択必修）

自己世界の形成と他者世界の理解

歴史的な作品の成立とその背景の理解

5・6年（自由選択）

コンセプト考案から作品完成までの体験

生涯を通じての美的興味の確立

4 カリキュラム一覧表

	1年美術	2年美術	3年美術	4年美術	5・6年美術
4月	晴天・校内写生 色彩、平面	記録と記憶 長巻き平面、フロッタージュ	卵を割らないで落とす (パッケージングデザイン) 立体、班制作	コマーシャルづくり (テーマとシナリオ決定) 映像、班制作	個人制作 個人指導
5月	晴天・校内写生 色彩、平面	記録と記憶 長巻き平面、フロッタージュ	卵を割らないで落とす 立体・班制作	コマーシャルづくり (絵コンテ)	個人制作 個人指導
6月	晴天・校内写生 色彩、平面	ひもを使った空間構成 立体、班制作	卵を割らないで落とす	コマーシャルづくり (撮影、編集)	個人制作 個人指導
	レタリング 色彩、平面		24枚の写真をとる (擬人化と物語性)		
7月	木と遊ぶ 色彩、立体	ひもを使った空間構成 立体、班制作		コマーシャルづくり (撮影、編集)	個人制作 個人指導
			夏休み課題		
9月	木と遊ぶ 色彩、立体	ひもを使った空間構成 立体、班制作	24枚の写真をとる 写真	コマーシャルづくり (撮影、編集)	個人制作 個人指導
10月	自然の素材から、絵の具づくり 色彩、平面	キャラクターづくり 色彩、平面	15才の自画像 人数によって油or水彩、平面	校内ポスターをつくる 平面・デザイン	個人制作 個人指導
11月	幾何形態を使って模様をつくる 色彩、平面	写生会・春日大社 キャラクターづくり 色彩、立体	15才の自画像 人数によって油or水彩、平面	校内ポスターをつくる 平面・デザイン	個人制作 個人指導
12月	幾何形態を使って模様をつくる 色彩、平面	キャラクターづくり 色彩、立体	15才の自画像 人数によって油or水彩、平面	校内ポスターをつくる 平面・デザイン	個人制作 個人指導
1月	目を閉じてつくる 粘土・立体	コラージュ(写真の合成) 平面、構成	自己の曼陀羅 色彩、平面	自由制作 自由制作	個人制作 個人指導
2月	目を閉じてつくる 粘土・立体	コラージュ(写真の合成) 平面、構成	自己の曼陀羅 色彩、平面	自由制作 自由制作	個人制作 個人指導
3月	目を閉じてつくる 粘土・立体	マルチメディア掲示板 平面、構成	自己の曼陀羅 色彩、平面	自由制作 自由制作	個人制作 個人指導

1 中等教育における技術学習の意義

昨今の科学技術はかつて人類が経験したことがないスピードで進化し続けている。インターネットの普及率は特に急速で、2000年秋の電話による調査で3割を越えた。また、20代では6割を越えた結果が出ており、もはや現在の中等教育の年代にとっては趣味で扱うものではなく、生活に必要な能力として必修指導の対象となるべきものとなった。コンピュータ以外でも電気エネルギーを利用した生活用具は激増している。

手先の不器用な子どもが本当に多くなった。ただ、そのほとんどが「やったことがない」事に起因するものである。つまり体験不足である。労働体験だけでなく遊び体験までもが欠如している。生活を営む上で、私たちは自分の生活環境をつくっていかなければならない。そのためにはどういう能力が必要なのか。20世紀は「買って、使って、捨てる」生活を評価したまま終わったわけではない。生活を工夫し、向上させる姿勢と能力を身につけることが必要なのではあるまいか。この力を生活向上力と呼ぶこととする。生活向上力は知識と工夫・実践能力・出来映えの3つの要素によって構成される。これらを総合的に体験し、かつ興味深く学習を進めていくには、もの作りに取り組む事が必要である。手を動かし、素材に触れることが人間として大切である。そしてそれは同時に人間性を豊かにする取り組みでもある。人生の中での中等教育期にあたる6年間は、人間形成にとって非常に大きな意味を持つ期間である。理論を踏まえ、材料からものを作り上げるという作業が、手先の器用さだけにとどまらず、脳の発達にも非常に効果的である。

技術を学ぶことは個々の生活を高めるにとどまるものではない。ヒトは人間として「生産」という活動をつくり出した。そしてこれは人類が存在する限り行われ続けるものである。環境・エネルギー・資源といった今日的な課題に技術的に向き合い、生産のためのよりよい技術の発達についての考え方を学ぶものである。

科学は自然におこるさまざまな現象や法則を理解するものであって、技術は人間の生活や生産に役立つものである。家庭教育力が低下していると声が挙がる今日、中等教育期に学校教育の中でのもの作りの体験を持つことは、今まで以上に重要視されるべき教育内容だと考える。

2 技術科の基本的な考え方

もの作りを通して基本的な生活向上力を育成することを目標とする。また、次々に出てくる新技術が私たちの生活にどのような影響を及ぼし、そしていかに対処すればよいかを的確に判断する能力を培う。素材、技術への興味関心を喚起し、実践していく自己教育能力の育成を目標とする。なお、学習効果を高めるために、以下のことに留意する。

- (1) 生徒の発達段階、興味、関心を重視して学習内容を精選・工夫する。
- (2) 実験・実習の中で主体的に学習する姿勢を育て、創造性・応用力・判断力・協調性を養う。
- (3) 体験的学習を通して生徒が課題を発見し、問題解決する姿勢を育て、習得した知識・技能を家庭生活及び社会の中で生かし、実践できる力と態度を育てる。
- (4) 学習内容を基礎から発展応用できるようにして、個性を尊重する。
- (5) 創る喜び、働く喜びを感じられる機会や場を提供して人との関わり方を学び、すすんで仕事

できるようにする。

(6) 総合学習とリンクし、さらに応用・発展させる態度を養う。

3 中等教育における技術カリキュラムの一覧と特徴

2-2-2制の本校の目標の中において、技術は教科性より早期の技能修得をめざし、3年までの必修科目として次のように設定した。

1年【工創基礎1】(1.5単位) 2年【工創基礎2】(1単位) 3年【技術総合1】(1単位)

また芸術の必修選択科目として美術との合科で生活デザインを新設した。

4年【生活デザイン】(1単位)

それぞれの科目の目標については、以下のとおりである。

【工創基礎】工創とは「わざをもってつくり出す」意の造語である。コンピュータを活用することにより、情報社会を創造することも、この中では大きな目標としており、「創」を用いた言葉とした。身のまわりの生活と飛躍的な進歩を見せる科学技術とをリンクさせることにより、科学技術への興味・関心を高め、よりよい暮らしを求める態度を培う。また、日常的な工具の使用法、情報学の基礎となるコンピュータの基本的な使用法について実験的・体験的学習を通じて基礎的な技能を習得する。

【技術総合】技術を総合的にとらえ、必要な知識と技術を習得させ、製作実習を通してものづくりの大切さ、楽しさを学び、具体的な生活向上の能力と実践力を育てると共に、生産の社会的役割を知る。

【生活デザイン】美術で学んだ知識やデザイン力を活かして、技能習得を目的としたもの作りではなく、暮らしにゆとりをもたらすもの作りへと幅を飛躍的に広げ、個性と創造性を育てる。また、生涯学習の基礎を作る。

4 学習指導要領との差異

中等教育の中においても技術は3年までの履修とし、本校の6年一貫カリキュラムとしての特徴は発揮できていない。その中で、2-2-2制に合わせて設定した技術のカリキュラムには、学習指導要領と比較して次のような特徴を持たせた。

1・2年を「工創基礎」と位置づけ、技術に対する知識・理論・考え方等および技能修得のための実験的・体験的な学習を行うこととした。ただし、他教科のコンピュータ利用のタイミング等も考慮に入れながら内容の進行を設定したため、履修学年の規定をなくした学習指導要領を超越し、学年内でも非常に複雑かつ整理された形で履修は行われる。単位数は1.5単位を必要とする。

3年は「技術総合」と位置づけ一貫した製作実習を展開する。単位数は1単位を必要とする。

指導内容は、生徒の発達段階や興味・関心とを考慮して、次の内容を組みかえた。

中学校の学習指導要領「A技術とものづくり」については、まず「ものの形を正しく捉える力」を重視したいと考えた。そのため、中学校では扱わない内容となっているキャビネット図、等角図、及び第三角法についても扱うこととし、比較的多くの時間を取ることとしている。木材加工・金属加工は、木材・金属を生活空間の中の材料としてその性質等を扱うと共に、さまざまな工具の実験・体験を積極的に取り入れ、取り扱い及び手入れ・保管について学ぶ。電気回路及び半導体については現在の日本産業の発展やコンピュータとも関連させながら取り扱う。また深化のためにIC工場の見学を年間プログラムに組み入れる。電気事故の防止と共に、環境問題と発電、屋内配線については自分の生活つくる上で必要と考えられるため取り扱うこととした。従来技術の授業の中核をなしてきたリンク機構・エンジンなどの機械についてはトピックスとして取り扱うのみで、系統的な履修は行わな

い。ただし、機構的な部分を始め、必要に応じて生活デザインの中に組み込まれることも構想中である。栽培は技術室前にボランティアの菜園と花壇を整備中で、観察の呼びかけを行うにとどめる。

3年間の技術のまとめとして3年では作品作りに取り組む。

中学校の学習指導要領「B情報とコンピュータ」においては、本校の新たな取り組みである「情報学」との関連を念頭に置く必要がある。「情報学」とは現段階では構想段階ではあるが、中学校の技術、国語、総合及び高等学校に新設される教科「情報」を中心とした、情報教育構想である。本校では、「環境学」「世界学」といった総合学習をはじめとして、殆どの教科でコンピュータを利用した学習が行われている。これらは学校教育にコンピュータが取り入れられて以来、本校をはじめ、どの学校でも現在進められつつある取り組みであろう。教科の単元内でのコンピュータの利用が研究されている現段階では、教科を越え、また中学・高校の境界を越えて、コンピュータ学習を系統的に整理し、推進されている学校は殆どない。しかし、汎用性が特性のコンピュータが、多岐に利用されれば利用されるほど、学習の系統性がより必要となる。そしてこれは、重複する教材の精選による、授業数の削減への対応でもある。現構想の中では、コンピュータをツールとして駆使できる力の基本として、コンピュータの構造、概念から基本操作、ネチケットまでを「技能基礎」の一つとして「情報入門」と位置づけ、1年を中心に技術の授業内でサポートする。具体的には、本校のコンピュータシステムの利用方法、ワープロの技能向上、情報収集手段としてのインターネットを取り扱う。これらで学ぶ内容は、2年での「情報と表現」、5年での「情報B」をはじめ、6年間の本校でのコンピュータの利用の基礎となるべきものである。学習指導要領では(1)から(4)とされている中身を本校なりに取り扱い、高めていくものとした。ただし、これから4、5年のうちに各小学校のコンピュータ授業の普及が飛躍的に伸びることや、本校の設備の充実などコンピュータ教育を取り巻く環境は大きく変化することが予想されるので、現在行っている履修内容は非常に流動的である。

5 指導内容一覧表

	1年工創基礎1 1.5単位	2年工創基礎2 1単位	3年技術総合1 1単位
学 習 内 容	<p><ものを捉える> ①キャビネット図 ②等角図 ③第三角法</p> <p><ものに触れる> ①材料を知る ・木材の性質と利用 ・金属の性質と利用 ・その他の材料 ②工具の扱い ・木工具の扱い方と実習 ・金工具の扱い方 ・電気工具の扱い方と実習</p> <p><コンピュータの利用> ①コンピュータの構成 ②自己紹介カードの製作 ・タイプ速度の向上 ・文章の加工 ・デジタルカメラの利用 ・画面構成 ・印刷処理</p>	<p><コンピュータの利用> ①インターネットの特徴 ②インターネットのモラル ③インターネットの利用 ・ホームページ ・検索実習 ・レポート作り ④メールの利用 ・アカウント取得 ・受送信</p> <p><ものを作る> ①コンピュータを使用したもの作り</p>	<p><コンピュータの利用> ①構想と設計</p> <p><ものを作る> ①製作 ・材料の選択 ・加工法の確認 ・加工</p>

第9章 家庭科

永 曾 義 子・原 田 美知子

1 中等教育における家庭科学習の意義

自己中心・過食・拒食症・引きこもり・不登校・いじめ・児童虐待・過保護・少年犯罪の増加・凶悪化など、種々の問題が近年、子ども達に起こっている。また一方、日本の社会は少子化・高齢化へと急速に進んでいる。そして、不況・環境問題を抱えている。これらの問題を考える時、当然のことながら、社会の基本単位である家庭が注目される。人間関係をつくり出す第一歩は家庭であるが、その家庭の教育力は残念ながら低下して、子ども達の生活体験不足も深刻である。日本の文化や生活力を受け継いでいく家庭の機能は弱くなり、家庭生活の在り方も多様化して、種々の問題を提起している。中等教育期を迎えた子ども達は、家族・家庭の在り方、家族と自分との関係、自分の存在などについて、深く考え、悩み、だんだんと家族・家庭を客観的に考えられる時期へと成長する。この時期に学校教育において、衣・食・住を中心とした生活の知識や技術を習得させ、家族・家庭の意義や社会との関わりを理解させて、生活の自立をはかると共に、男女が協力して家庭や社会を創造する能力や実践的な態度を育てることは、現代において、より重要になってきている。学校教育の中で主体的・積極的に実験・実習・研究を通して、男女相互の理解を深め、将来に向けて家庭生活の在り方を考えていくことは、自分の家庭教育だけでは味わえない多くの示唆を与えることになる。また、この中等教育期の6年間で繰り返し継続学習することにより、技術の習得もめざましいものがある。体験学習する中で、創意工夫する力・問題解決能力・協調性・社会性などの総合力を身につけていくのである。これらはすべて将来の生活にとって役立つものである。さらに「心」・「頭」・「手」を生かした人間として基本的な生活力を家庭・学校・社会との連携の中で習得していくことが今後ますます重要になるだろう。また学校生活の中でも、子ども達が受験科目だけに偏らず、情操の発達・身体機能の発達・将来の生活能力の発達などの教科をバランスよく組み合わせて、健全な精神構造の中で過ごすことが重要である。人間の健全な発達・人格形成上からも、家庭科を学ぶ意義は大きい。

2 家庭科の基本的な考え方

男女が協力して家庭生活や社会生活を築いていくことができるようにするため、男女共学として男女相互の理解を深めながら、基本的な生活力を育成することを目標とする。さらに人間の健全な発達と生活、家族・家庭の意義や社会との関わりについて理解を深め、今後どのような生き方をすべきかを広い視野から考え、実践していけるような自己教育力の育成を目標とする。

なお学習効果を高めるために、以下のことに留意する。

- (1) 生徒の発達段階、興味、関心を重視して学習内容を精選・工夫する。
- (2) 学習形態はすべて男女共学として男女相互の理解を深め、協力する姿勢を育てる。
- (3) 実験・実習・研究を多く設定して主体的に学習する姿勢を育て、協調性・創造性・応用力・判断力を養う。
- (4) 体験的学習を通して習得した知識・技能を家庭生活の中でも生かし、将来の生活の中で実践できる力を育てる。
- (5) 個人研究・グループ研究などを通して、生徒が課題を発見し、研究して前向きに問題解決する姿勢を育てる。

- (6) 生徒の個性を大切に、学習内容の基礎を重視し、発展応用できるようにする。
- (7) 創る喜び、働く喜びを感じられる機会や場を提供して人との関わり方を学び、すすんで仕事ができるようにする。
- (8) 家庭科で学んだ内容を、総合学習で生かし、さらに総合学習で学んだことを、家庭科で応用・発展させて深化・探究する姿勢を養う。

なお、家庭科と総合学習との関係については次の通りである。生きることを対象とする家庭科そのものが総合的学習であると、考えている。各教科で学んだ知識を生活に生かす工夫をしたり、逆に生活する上で悩み、考えて解決しようとする時、各教科で学んだ知識を応用して解決することも多い。人間が生きていく上で、学んだことや培った感性を総合的に生かして、知・徳・体のバランスをとることが重要である。生きることを対象にしている家庭科は、各教科と相互に深く関連しあうものである。その意味で、家庭科を学習することが総合的学習であると考えられる。

今回の新カリキュラム作成にあたり、保健体育科との合科として「食と健康」、社会科との合科として「家族」を考えた。これに対して保健体育科より、「いのち・暮らし・健康」という科目名が提案された。さらにカリキュラム委員・保健体育科・社会科・家庭科で、検討した結果、「いのちと暮らし」に決定された。しかし、再度検討すると、合科そのものに対する考え方の相違、6年一貫の小規模校であるが故の教師の過負担、今後の総合学習の担当方法が未定であるなどの理由で、合意に至らなかった。以上の経緯から、家庭科として「食と健康」・「家族」の中から、今後ますます生き方が問われるであろう「家族」に焦点をあてることにした。そして、生徒の発達段階を重視して5年で「家族」を教科として取り組むこととした。

3 中等教育における家庭科6年一貫カリキュラムの一覧と特徴

2-2-2制の本校の目標に合わせて必修科目として次のように設定した。

1年【生活基礎1】(1.5単位) 2年【生活基礎2】(1単位) 3年【家庭総合1】(1単位)
 4年【家庭総合2】(2単位) 5年【家族】(2単位)

また芸術の必修選択科目として、美術との合科で【生活デザイン】を新設した。

3年【生活デザイン】(1単位)

さらに自由選択科目として【生活学】を設定した。

5年【生活学】(2単位) 6年【生活学】(2単位)

それぞれの科目の目標については、以下のとおりである。

【生活基礎】自分の生活をよりよくするために実験的・体験的学習を通じ、基礎的な生活技術を習得させて、身のまわりの生活への関心を高め、生活的自立をはかる。

【家庭総合】人間の健全な発達と生活を総合的にとらえ、家族・家庭の意義や社会との関わりについて理解させると共に生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して生活を創造する能力と実践力を育てる。

【家族】家族・家庭・社会について、広い視野から考察して、今後の家族の在り方、関わり方や将来の自分の生き方を考え、課題を主体的に解決し、さらに生活の充実向上を図る態度を養う。

【生活デザイン】美術で学んだ知識やデザイン力を生かして、被服を製作し、創る楽しさ・喜びを感じさせ、個性と創造性を育てる。また、食生活や住生活への応用・生涯学習の基礎をも作る。

【生活学】1, 2年の生活基礎や3, 4年の家庭総合・総合学習によって習得した知識や技術を応用・発展させて、将来の生活設計を構築する上で必要な実践力を養う。

4 学習指導要領との差異

本校の6年一貫カリキュラムの特徴である2-2-2制に合わせて設定した家庭科のカリキュラムには、学習指導要領と比較して次のような特徴がある。

1・2年を「生活基礎」として、中学校の学習指導要領の内容を取り上げ、単位数も中学校の標準単位2.5単位を学習することとした。

3・4年を「家庭総合」として、高等学校の学習指導要領の家庭総合の内容を取り上げ、単位数は高等学校の標準単位の4単位のうち3単位を学習することとした。

5年を「家族」として、3・4年で不足する家庭総合の単位を補い、「家族」を中心として、さらに応用・発展させる内容を取り上げ、2単位を学習することとした。

指導内容は、6年一貫カリキュラムを生かし、重複する内容は精選し、生徒の発達段階や興味・関心を考慮して、次の内容を組みかえた。

- ・中学校の学習指導要領「B家族と家庭生活の(2)幼児の発達と家族、(5)幼児の生活と幼児のふれあい、(6)家庭生活と地域とのかかわり」の内容を、高等学校の学習指導要領「(1)人の一生と家族・家庭、(2)子どもの発達と保育・福祉、(3)高齢者の生活と福祉」の中に組み入れることとした。ただし、3・4年の家庭総合で扱うには単位数が不足する上、生徒の発達段階を考慮すれば、できるだけ高学年で扱うことが望ましい内容でもあるので、3・4年では導入部分を扱うこととし、5年の「家族」の中で発展させて扱うこととした。
- ・中学校の学習指導要領の「B家族と家庭生活の(4)家庭生活と消費」の内容を高等学校の学習指導要領「(5)消費生活と資源・環境」の中に組み入れ、若者に関わりの深い販売方法や消費生活・消費者としての意志決定、消費行動について中学年の適切な時期に扱うこととした。
- ・高等学校の学習指導要領「イ衣生活の科学と文化の被服材料、被服の構成、被服整理」については、中学校の学習指導要領「A生活の自立と衣食住（衣生活）」でまとめて学習し、重複を避けた。

5 指導内容一覧表

	生活の自立と食生活	生活の自立と衣生活	生活の自立と住生活	家族と家庭生活
1 年 生 活 基 礎 1		①衣服の選択と手入れ (15) ・衣服と社会生活との関わり ・目的に応じた着用と工夫 ・衣服材料の種類と特徴 ・日常着の手入れと管理 ・日常着の計画的な活用と選択	①室内環境の整備と住まい方(4) ・住居の機能 ・室内環境と住まい方の工夫	①自分の成長と家族・家庭生活との関わり(1) ②家庭と家族関係(3) ・家庭・家族の機能 ・家族のよりよい関係作り 家庭生活と地域社会
1.5 単 位		②簡単な衣服の製作 (20) ・衣服の構成 ・エプロン製作 ・手入れのための実習		③家庭生活と消費(2) ・環境に配慮した消費生活の工夫

2 年 生 活 基 礎 2 1 単 位	①中学生の栄養と食事(8) ・栄養と食事・健康 ・栄養素の種類と働き ・中学生の栄養の特徴 ・食品の栄養的特質 ・1日分の献立作成 ②食品の選択と日常食の調理(14) ・食生活の安全と衛生・管理		①家庭生活と地域とのかわり(5) ・環境や資源に配慮した生活の工夫	①家族へのプレゼント作り(5)
3 年 家 庭 総 合 1 1 単 位	①食生活の課題と調理の応用(20) ・食生活調査と研究 ・日常食の調理と工夫 ・会食の計画と実践			①消費生活と資源環境(10) ・家庭の経済生活 ・消費者の権利と責任 ・消費行動と資源・環境
4 年 家 庭 総 合 2 2 単 位	①食生活の科学と文化(20) ・生活文化の伝承と創造 ・食生活の設計と調理 ・家族の食生活と栄養	①衣生活の科学と文化(15) ・作品製作(被服製作・手芸など) ・生活文化の伝承	①住生活の科学と文化(15) ・住居の機能 ・住空間の計画 ・住環境の整備 ・住生活の課題研究	①生き方を考える(10) ・青年期の生き方と結婚 ・人の一生と発達課題

<p>5 年 家 族</p> <p>2 単 位</p>	<p>①家族のための食事作り (30)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・離乳食と病人食 ・幼児の食事とおやつ ・1週間の献立と昼食作り ・生活習慣病を予防するための献立と実習 ・もてなし料理の企画と実習 ・行事食・郷土料理の実習 ・老人食の特徴と実習 			<p>①人の一生と家族・家庭 (4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の一生と発達課題 ・家族・家庭と社会 ・生活設計 <p>②子どもの発達と保育・福祉(4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達 ・親の役割と保育 ・子どもの福祉 <p>③高齢者の生活と福祉 (2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の心身の特徴と生活 ・高齢者の福祉 ・高齢者の介護の基礎 <p>④課題研究とホームプロジェクト(20)</p> <p>(施設の見学・実習とボランティア活動を含む)</p>
<p>5 年 生 活 学</p> <p>2 単 位</p>	<p>青年期の健康と生活の自立 (30)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・青年期の朝食と調理 ・青年期の昼食と調理 ・青年期の夕食と調理 ・調理の栄養評価 ・家計の中の生活費と食費 	<p>個性を伸ばす手芸作品の製作 (20)</p> <p>例：被服製作・編み物・刺繍・パッチワーク・染色等</p>	<p>快適な住まいの工夫 (5)</p>	<p>生活的自立をめざして (5)</p>
<p>6 年 生 活 学</p> <p>2 単 位</p>	<p>食文化の伝承と発展 (30)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・季節と行事食 ・日本料理の特徴と実習 ・西洋料理の特徴と実習 ・中国料理の特徴と実習 ・手作りのお菓子、パン、デザート ・家庭料理の工夫 	<p>将来の衣生活への応用 (10)</p>	<p>住生活の工夫 (10)</p>	<p>生活的自立のために (10)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1人暮らしのマニュアル ・1人暮らしの経済観念 ・1人暮らしの食生活 ・仲間と集う会食作り

() は時間数

第10章 保健体育科

大内 淳也・出野上 良子・中 司 みずほ
奈良 重幸・松田 正昭

1 中等教育における保健体育学習の意義

最近の子ども達は様々な問題を抱えている。いじめ、不登校、青少年犯罪の凶悪化など枚挙にいとまがない。また、昔に比して年々、人間関係を結ぶことがうまくできなくなっている。その結果引き起こされるストレスに対しても適切に対処することができず、心身ともに傷つきやすくなっている。

このような状況のなかで保健体育学習の担う役割は重要度を増している。なぜなら、単に体力の向上や運動技能の獲得、運動文化の享受だけではなく、学習を通じて、どう人間関係を築いていくのか、築いていけばいいのかを具体的に体験し、獲得することができるからである。また、そのことを一番期待されている教科なのである。

以下、保健体育学習の意義について具体的に述べていく。

(1) 運動や健康についての理解と実践を通して、体と心を一体としてとらえる能力を育てる。

自分の体に関心を持ち、変化に気付き、体の調子を整えることで心の健康を保つ。また、仲間の体にも関心を持ち、様々な運動を通して交流することで、心身のつながりを得て、コミュニケーション能力を養う。

(2) 変化する現代社会において、近代スポーツの意義や必要性を理解するとともに、自己の状況や能力に応じてスポーツに親しみ、生活を明るく健全にする態度を育てる。

運動の歴史・文化的な意義などへの理解を深め、自然との関わりにも着目し、自己の体力や生活に応じてより広い視野でスポーツに取り組む。

(3) 心身の発達にとまらぬ、生きる力を身につけた、調和のとれた人間を育てる。

仲間との運動を通しての交流の中で、公正、協力、責任などの態度を育て、適切な判断を下すことができる知識を身につける。また、体力の向上を図り、健康に生きる力、明るく活動的に生きる力を身につける。

(4) 心（精神）の健康に留意する態度を育てる。

現代の子ども達の精神的な未熟さは「キレる」などという表現をされるが、心身の調和を保ち、自己の欲求やストレスをコントロールし適切に対処する方法を知る必要がある。また、自己の欲求を正しく導き、意欲、生きがいへと昇華し自己実現を図る力をつける。

(5) ヘルスプロモーションの観点に立ち、健康に関する様々な知識を基盤として、適切な生活行動を選択し実践する力を育てる。

適切な生活行動を自ら選ぶためにはその礎となる正しい知識が必要である。また、その知識は実を伴うものでなければならない。自ら学び、感じ取る学習活動を通して、生涯を通じて健康に生きるための基盤となる知識を習得する。

(6) 現代社会の変化にとまらぬ現れる様々な問題を正しく理解し、自己の意志を確立する力を育てる。

生命、環境問題、科学の発達と倫理観などの問題などにも視野を広げ、事実を知り、他者の意見を聞き、自らの問題として考えることにより、社会の中の人間存在としての正しい自己を確立する。

上記の保健体育学習を通じて、生徒個々の「クオリティ・オブ・ライフ：quality of life」の向上、

充実を生涯にわたって指向する態度を育成することが目標である。

2 保健体育科の基本的な考え方

以下のような基本的視点をベースにしてカリキュラムを組んでいる。

- (1) 自ら進んで運動に親しむ能力や態度を育成する。
- (2) 多種多様な運動を経験させることにより、心身の調和的発達を促進する。
- (3) 自らの興味・適性に応じた種目をさらに深め、運動能力や技能を高めるとともに、運動の喜びを体験させる。
- (4) 男女共習により、運動やスポーツの共有と実践への理解を深め、そのおもしろさや楽しさを実感させる。
- (5) 自ら進んで行事に参加するとともに、自主的な企画運営を行える能力を育成する。
- (6) 生涯を通じて、健康な生活を営む知識と能力を体得させる。

3 中等教育学校における保健体育科6年一貫カリキュラムの特徴

- (1) 6年を3つの時期に分ける2-2-2制の目標がそれぞれにつながりを持っている。

低学年（1・2年）：従来より基礎的な学力育成を主眼としているが、様々なスポーツの基礎となるスキル習得にさらに重点をおいた学習内容となっている。これにより中学年以降の運動技能の向上がスムーズにいく。また、仲間との人間関係づくりに配慮して通年固定の講座編成とし、基礎的な運動を通して心身のつながりが深まるようにしている。

中学年（3・4年）：様々なスポーツ文化にふれることに主眼をおいている。近代スポーツを実践するためのルールや技術を学び、仲間とともに活動することで運動技能の向上を目指す。また、高学年での選択制にスムーズにつなげるために、ここでは制限をもうけての選択制を実施する。生徒が自ら選び学ぶことを大切にしたいが、中学年では様々な形のスポーツを習得するためにメニューを用意し、年間を通して偏った選択にならないように配慮している。

高学年（5・6年）：従来行ってきた選択制をさらに発展させて行っていく。4年までに学習してきたスポーツから自分に適したものを選び、将来の生活の中に根ざしていくことができるように高めていくことを目標とする。また、近代スポーツの枠に制限されない自由な発想に基づくスポーツの楽しみ方も追求していく。自分の能力や状況に応じてスポーツの生活化を目指す。

- (2) 講座編成条件をカリキュラムの目標に合わせて変えていく。

前述したとおり、低学年では通年固定で1クラス30名の講座である。また、心身の発達に大きな差異が生ずる時期でもあるため、男女別習で実施する。中学年では、選択制を導入し1年を4期に分け授業のメンバーはその都度入れ替わる。3年では男女別習、4年では男女共習とし心身の発達段階に合わせてスポーツを通しての体と心のつながりを深めていく。従って、3年では60人の生徒を2人の教師で分担して担当し、4年以降では120人の生徒を4人の教師で担当することになる。高学年では自由な選択制を基本とし、1年を3期（6年は2期）に分け男女共習の授業を実施する。

- (3) 保健のカリキュラム～現代化とグローバル化～

保健のカリキュラムは2・3・4・5年で週1時間実施する。体育と異なり6学年を2-2-2に分けることはできないが、4年間の授業のなかで、学習の視点は3段階に発展させて取り組んでいく。

- ① 自らの心と身体についての理解を深める。
- ② 自己をとりまく家族や地域社会に関わる健康課題について理解を深める。

③ 日本から世界へと視野を広げ、健康課題について理解を深める。

取り上げる内容については、教科書で取り扱っている基本的な保健知識をふまえたうえで、現在及び今後我々が直面していくであろう諸問題（例えば医療の発展と生命倫理の問題など）にまでふみこんで取り扱っていく。現代に生きる生徒達につぎつぎ現れる健康課題について、必要な知識を与え、共に考えていきたいからである。

そのような我々の方向性から、総合教科「いのち・暮らし」という発想が生まれた。様々な健康課題を保健科だけではなく家庭科、社会科と共に、大きな視野から再考することにより、深化できるのではないかと考えた。しかし、3教科の事情が異なり、教科の内容について具体的に検討する前に新カリキュラムでは総合教科として取り上げないという結論に達した。

保健体育科では従来より「環境学」に参加してきた。今後どのような形で総合教科に参加していくのかは未定であるが、柔軟な姿勢で取り組んでいきたいと考えている。

4 カリキュラム一覧表

学年	教育内容	学習目標	備考
1年	トレーニングⅠ 体ほぐし、体づくり運動 ジムナスティックスⅠ 体操の導入 ランニング・スキルⅠ 走運動の導入 ジャンピング・スキルⅠ 跳躍運動の導入 スローイング・スキルⅠ 投運動の導入 ハンド・ゲームⅠ バレーボール、ハンドボール、バスケットボールの導入 フット・ゲームⅠ サッカーの導入 ラケット・ゲームⅠ テニス、バドミントン、卓球、ソフトボールの導入 スイミングⅠ	3年生以降で行う運動種目の基本的技術を学ぶ 基礎的な運動能力の向上	男女別習 30人授業
2年	トレーニングⅡ ジムナスティックスⅡ ランニング・スキルⅡ ジャンピング・スキルⅡ スローイング・スキルⅡ ハンド・ゲームⅡ フット・ゲームⅡ ラケット・ゲームⅡ スイミングⅡ	学習を通して他人の体への気づきや思いやり（＝人間関係づくり）	それぞれⅠとⅡは異種目の運動を行う。 もしくはⅡはⅠより高度なことを行う
3年	男女別習選択制(2種目より1選択) Ⅰ期(8週) 男子個人種目1期 陸上・体操・ラケット種目より2種目を開講 女子団体種目1期 球技より2種目を開講 Ⅱ期(11週) 男子団体種目1期及び水泳 球技より2種目を開講 水泳は必修 女子個人種目1及び水泳 陸上・体操・ラケット種目より2種目を開講 水泳は必修 Ⅲ期(7週) 男子個人種目2期及び体づくり運動 陸上・体操・ラケット種目より2種目を開講 体づくり運動は必修 女子団体種目2期 球技より2種目を開講 Ⅳ期(9週) 男子団体種目2期 球技より2種目を開講 女子個人種目2及び体づくり運動 陸上・体操・ラケット種目より2種目を開講 体づくり運動は必修	多様なスポーツ文化に親しむ (ルールも含む)	教師横並び

4年	男女共習選択制(4種目より1選択) スポーツⅠ(8週) 体操競技 陸上競技 武道 ダンス 球技 ニュースポーツより4種目	学習を通して自己の体(体力、体調、健康)への気づき 運動技能の向上	120人一斉授業 1時間授業を週2単位行う
	スポーツⅡ(8週) 水泳・トレーニング 体操競技 陸上競技 武道 ダンス 球技 ニュースポーツより4種目		
	スポーツⅢ(10週) 体操競技 陸上競技 武道 ダンス 球技 ニュースポーツより4種目 スポーツⅣ(9週) 体操競技 陸上競技 武道 ダンス 球技 ニュースポーツより4種目		
5年	男女共習完全選択制(教師主導) Ⅰ期(12週) 体づくり運動 器械運動 陸上競技 球技 武道 ダンス ニュースポーツ Ⅱ期(12週) 体づくり運動 器械運動 陸上競技 球技 ダンス ニュースポーツ 水泳・トレーニング Ⅲ期(11週) 体づくり運動 器械運動 陸上競技 球技 ダンス ニュースポーツ	スポーツの生活化(生涯スポーツ)をめざして運動技能・技術の定着をはかる スポーツ(運動文化)を通しての自己実現をはかる	教師横並び 120人一斉授業
	男女共習完全選択制(生徒主導) Ⅰ期(12週) 体づくり運動 器械運動 陸上競技 球技 武道 ダンス スポーツ・体育理論 Ⅱ期(12週) 体づくり運動 器械運動 陸上競技 球技 武道 ダンス スポーツ・体育理論	スポーツ・運動文化の継承・発展に積極的に関わる力量を高める	体育・スポーツ理論(文化史、歴史、運動技術分析など)のグループ研究
6年			

保健科カリキュラム案

2年	心身のはたらきと発達 障害の防止	個人(自分)と健康 個人生活における健康 安全に関する理解を通して、健康に生き抜く資質 能力の基礎をつくる。
3年	健康な生活と疾病の予防	社会と健康 自分をとりまく社会の健康 課題について考える。
4年	現代社会と健康	世界の健康課題 世界のかかえる今日的 健康問題を理解し、生涯を 通じて自らの健康を管理、 改善していく資質、能力を 能力を高める。
5年	生涯を通じる健康 社会生活と健康	

5 学習指導要領と本校カリキュラムとの差異

(1) 中学校学習指導要領との違い

体育においては大きな違いはない。武道の取り扱いについては本校の実状にあわせて検討していきたい。

保健は指導要領においては「3学年で48時間程度を配当すること」となっているが、本校では2・3年で週1時間の授業を配当している。従って、2学年あわせて70時間を配当していることになり、指導要領に比して多くの時間を割いている。本校では従来よりこの形での授業を実施してきた。心身の発達が著しい2・3年においては自分の心と体の変化についてじっくりと理解を深める必要があり、妥当な時間配当だと考えている。また、3の「カリキュラムの特徴」の項でも述べているとおり、4年間の保健学習内容を考慮すると、時間数が必要である。

(2) 高等学校学習指導要領との違い

体育においては、近代スポーツの「運動の合理的な実践を通して運動技能を高め運動の楽しさや喜びを深く味わう」ということのみにとらわれることなく、自ら運動をプロデュースする力も育成していきたい。時には「運動の不合理な実践」になることもあるかもしれないが、そこから生み出される新たな楽しさや喜びにも注目していきたい。具体的には5・6年の選択制授業での実施を考えている。

保健は大きな違いはないが、取り扱う内容をグローバルな視野にたったものにまで発展させていきたいと考えている。また、社会問題についても随時取りあげ、生徒達に考える機会を与えていきたい。

6 指導内容一覧表

	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室
4月	トレーニングⅠ 体育	体育館 グラウンド	トレーニングⅡ 体育	体育館 グラウンド	男女別選抜制 体育	体育館 グラウンド	男女共選抜制 体育	体育館 グラウンド	男女共選抜制 (教師主導) I期 テニス・ コート	男女共選抜制 (生徒主導) I期 体づくり運動 器械運動 陸上競技 球技 武道 ダンス ニュースポーツ	男女共選抜制 (生徒主導) I期 体づくり運動 器械運動 陸上競技 ダンス スポーツ・体育理論	
5月	ジャンピングスキルⅠ グラウンド	グラウンド	スローイングスキルⅡ グラウンド	グラウンド	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	
6月	スライディングⅠ プール	プール	スライディングⅡ プール	プール	男子団体種目Ⅰ 女子個人種目Ⅰ	体育館 プール	スポーツ2 同上	体育館 グラウンド テニス・ コート プール	同上	同上	同上	
7月	スライディングⅠ プール	プール	スライディングⅡ プール	プール	水泳	プール	スポーツ3 同上	体育館 グラウンド テニス・ コート	II期 体づくり運動 器械運動 陸上競技 球技 ダンス ニュースポーツ (水泳・トレーニング)	II期 体づくり運動 器械運動 陸上競技 球技 武道 ダンス スポーツ・体育理論		
9月	スローイングスキルⅠ グラウンド	グラウンド	ハンドゲームⅡ グラウンド	グラウンド	男子団体種目Ⅰ 女子個人種目Ⅰ	体育館 グラウンド	同上	同上	同上	同上	同上	
10月	スローイングスキルⅠ グラウンド	グラウンド	ハンドゲームⅡ グラウンド	グラウンド	男子個人種目Ⅱ及び 体づくり運動 女子団体種目Ⅱ	体育館 グラウンド	同上	同上	同上	同上	同上	
11月	ハンドゲームⅠ グラウンド	グラウンド	ラケットゲーム グラウンド	グラウンド	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	
12月	トレーニングⅠ グラウンド	グラウンド	ラケットゲーム グラウンド	グラウンド	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	
1月	ランニングスキルⅠ グラウンド	グラウンド	トレーニングⅡ グラウンド	グラウンド	男子団体種目Ⅱ 女子個人種目Ⅱ及び 体づくり運動	体育館 グラウンド	スポーツ4 同上	体育館 グラウンド	III期 体づくり運動 器械運動 陸上競技 球技 ダンス ニュースポーツ	同上	同上	
2月	フットゲームⅠ グラウンド	グラウンド	フットゲームⅡ グラウンド	グラウンド	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	
3月	フットゲームⅠ グラウンド	グラウンド	フットゲームⅡ グラウンド	グラウンド	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	

2年		3年		4年		5年	
使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)	使用教室	科目(単位数)
	保健	HR	保健	HR	保健	HR	保健
	からだと各器官の発達		病気の移り変わりの特徴		欲求と欲求不満		職業病とその予防
	からだのはたらき		病気の移り変わり		欲求不満と葛藤		労働災害とその防止
体育館	からだの大きさの変化		中学生のころの病気		青年の欲求と現代社会		
グラウンド	精霊の発達		病気の原因				
テニス・コート	循環器系と呼吸器系の発達		感染症とその予防		遺伝機制		職場の健康と労働安全衛生管理
	循環器系の発達、血圧の変化		からだを守るはたらき		適応機制とその種類		障害について
	血圧測定(実習)		エイズ		不適応症状と青少年犯罪		障害とは
	リンパ系のはたらき、呼吸器系の発達、肺活量の測定		エイズの予防と性教育		自己理解		障害者について
	神経系と内分泌系の発達		エイズへの正しい理解		青年期の精神的特徴		障害者差別と人権
	神経系のはたらきと発達		生活習慣病(成人病)とその予防		自己受容と自己一致		バリアフリーの社会とは
	内分泌系の発達と二次成長の発現		心臓病・脳卒中・ガンとその予防		自己理解と他者理解		死の教育
同上	生殖系の発達と成熟		病気と食生活		自己実現		人間にとっての死とは
	自分自身の体の発達を考える				自己実現と価値観の変化		
	心の発達		病気と運動		自己実現と精神の健康		
	知能、感情、意志の発達		病気と労働		ライフステージと健康		現代社会と死
					思春期後期と性意識と性行動		死の受容
					健康能とその成熟		ホスピスとは
							幸福な人生とは
体育館	社会性の発達		病気の発見と悪化の防止		受胎と妊娠		集団の健康
グラウンド	欲求		健康診断		避妊法		公衆衛生活動
テニス・コート	様々な欲求		病気を治すには		出産		ウイルスとの闘い
	中学生の心の健康		自然治癒力		経産と健康		エボラ出血熱、エイズ、狂牛病
	自分自身の心の発達を考える						
	けがのようすと原因		喫煙と健康		家族計画		食品衛生活動(食品添加物など)
	けがのようすと原因防止		飲酒と健康		避妊法		保健・医療制度
	交通事故のようす		薬物乱用と健康		人工妊婦中絶		インフォームドコンセントなど
					人工授精、代理母、不妊治療など		医療保険(医療保険制度など)
	交通事故の原因		運動とエネルギー		どの現代的医学的課題		保健に関する国際活動
	交通事故の原因の防止		エネルギーの消費		環境ホルモン		WHOなど
	救急処置とは		エネルギーの補給		社会変化と結婚観		NGOの活動
	救急処置のしかた		日常生活の中の運動		母子の健康		
同上	けがの種類と手当の仕方(実習)		食生活と健康		乳幼児の健		
	包帯の仕方(実習)		腸知のとれた食事		中高年の健康(突然死、過労死、自殺、生活習慣病、腰痛、家庭崩壊などの防止と対策)		余暇活動と健康
	出血の手当(実習)		楽しい食生活				人間にとっての余暇活動とは
							大衆消費社会と余暇
							レジャー産業と余暇
	患者の運搬のしかた		疲労と休養		高齢と健康(人生80年を考える)		ボランティア活動
	人工呼吸(理論と実習)		疲労とその原因		老化に伴う心身の老化		ボランティア活動の意義
			疲労とその原因その現れ方		高齢化社会と老人保健		ボランティア活動の実践を通しての学び、社会的行動力の体得
	その他の応急処置のしかた		疲労の回復				
	環境への適応能力		じょうずな休養、睡眠の効果				
	からだの適応力		脳の話		リハビリテーション		自由研究
	気温の変化への適応		大脳新皮質、大脳辺縁系、人間にとっての脳		リハビリテーションの実態		いのちに関わる現代的な問題をより広いグローバルな視点をもって考える
	適応の限界、適応できない環境		心身相関		高齢とリハビリテーション		
	暑さと寒さの調節		精神と身体のかかわり				
	適切な明るさと騒音の防止		心身相関のしくみ		労働と健康問題		同上
			いろいろなストレス		労働の変化と健康問題		
			心身症				

第3編 総合学習

カリキュラム委員会

第1章 総合学習の構造化について

1 総合学習についての基本的な考え方

本校では1990年度から3年配当の「奈良学」、1991年度から4年配当の「環境学」という2つの総合教科を実施してきた。1999年度からは、3年配当を「環境学」、4年配当を「世界学」に変更し、「奈良学」は1・2年の各教科においてその内容を実施することになった。

本校のこれまでの総合学習は、環境や国際理解などの学際的な学習内容と、フィールドワークなど一般の教科活動ではできない学習方法の導入により、約10年間で一定の成果を収めてきた。しかし、これらの総合学習は、新学習指導要領の「総合的な学習の時間」を意識したものではないため、「生きる力の育成」よりは「学際的内容」に重点を置いてきた。その呼称を総合教科と称してきたことも、そのことをあらわしているといつてよいであろう。今後、これまでの経験をふまえて、新課程においてどのように総合学習のカリキュラムを編成していくのが、本校に課された大きな課題である。現在は、過去の総合学習を総括した上で、時間をかけて慎重に全校的議論がなされているところである。そのため、本報告には未確定な部分があり、新課程実施時には多少内容が異なる可能性がある。

新カリキュラムにおける総合学習の基本的な考え方としては、6年一貫の中等教育学校としていかに総合学習を構造化するかにある。その際、学校全体のカリキュラム編成の基本方針である2-2-2制に則って行う。まず、低学年（1・2年）において、分散型総合学習「奈良学」・「情報学」を設置し、フィールドワークを中心に据えたりサーチ学習の基礎になる能力を身につけさせる。書物やインターネットを使った情報の収集から情報処理やさまざまな方法での発表の能力をつけることが目的である。学習は基本的に学級単位とし、その活動内容によって班別活動を取り入れる。

次に、中学年（3・4年）においては、2年間で培った能力を生かして統合型総合学習と称する「環境学」・「世界学」を実施する。基本的には現在の内容を継承する。この2つの総合教科は、過去11年間本校が積み重ねてきた、フィールドワークを中心とした総合学習の形態である。新カリキュラムになって多少内容が異なっても、これまで総合教科の中心に据えてきた、フィールドワークをその学習の中心に据えることに変わりはない。情報が簡単に手にはいる世の中であるからこそ、直接の聞き取り調査がいかに大切であるかを実感させることが重要であるからである。学習の基本単位は3～8人程度の班で、低学年時よりも焦点を絞った内容について、より深い理解を得ることを目標とする。

高学年（5・6年）においては「卒業研究」を設定し、生徒個人の興味関心の強い分野において、これまでの総合学習などで習得した能力を深めさせることをねらいとする。ただし、「卒業研究」は、生徒の意欲を重視して自由選択科目にするため、「総合的な学習の時間」にカウントすることはできない。

また、現代の社会において、医学・心理学・社会学などさまざまな側面から重要視されている「生命」の問題について、保健体育科・家庭科・社会（地歴・公民）科による総合学習「いのち・暮らし」を企画したが、種々の条件が整わずに成立にはいたらなかった。そこで、現代的課題である家族の間

題に家庭科を中心にアプローチする「家族」を総合学習として立ち上げることを構想している。「核家族化」「個人主義」「文化の継承」「少子化」「老人介護」「家庭内暴力」などをキーワードに、生徒個人が抱える家族についての課題について、それぞれが個々に考えていく学習を企図している。

このように、本校の総合学習は6年間の中で、学習内容は探究的なものから教科的なものへ、学習単位は大きな集団から個人へ志向することを意図している。学習方法としては、フィールドワークなど自主的な活動を中心に据えつつ、必要に応じて講義・講演・見学・観察などを取り入れている。また、近年、学校だけでなくさまざまな教育現場で取り入れられている参加型学習も、積極的に取り入れ、開発がすすむ多様な参加型の学習方法を取り入れ、それを各教科の授業において援用することも総合学習の目的のひとつである。学習方法や学習内容について、「教科から総合へ」「総合から教科へ」ということが相互に行われることが、これから求められる開かれた学校づくりにとって必要なことであろう。

「総合的な学習の時間」においては数値による評価はしないということであるが、本校の総合学習の経験から、まったく評価をしないのは教育的効果が得にくいと言える。生徒の学習意欲を高める現実的な理由からも、評価は必要であろう。また、たとえば大学の推薦入試の際も、何らかの評価が残っていないと、総合学習での成果が加味されないということもおこってくる。これまで本校では、フィールドワークでの活動の状況を中心に、さまざまな活動における学習のようすを総合的に見て、ABCの3段階で評価をしてきた。しかし、それだけではなく、自己評価や相互評価が可能なポートフォリオ評価を本年度の「世界学」において試行している。総合学習ではどのような評価方法が最適なのかを探ることは、今後の大きな課題である。

ところで、2002年度から全国の小学校で「総合的な学習の時間」が開始され、全ての児童が総合学習の経験者となったときには、これまでとは異なった対応を迫られる可能性も十分に考えられる。特に、低学年における「学び方を学ぶ」力をつけさせる面において、小学校での活動と重複せず、しかも発達段階に応じた力を身につけさせることは、容易なことではないであろう。

2 統合型総合学習

本校のこれまでの総合学習の最大の特徴であった、多教科乗り入れの特設教科（学校設定教科）という形態のものを「統合型総合学習」と称する。複数の教科・科目の学習内容のあるテーマで統合した形態という意味である。1990年度から1998年度までの「奈良学」と現在の「環境学」・「世界学」がそれに該当する。つまり、従来の教科の壁を取り払い、複数教科の教員がそれぞれの専門を生かしつつ、話し合いを積み重ねながら1年間の学習内容をつくっていく（チーム制）というものである。他教科の教員と話し合いながらひとつのカリキュラムをつくっていく作業は、困難を伴い時間と労力、精神的負担を担当教員に強い。そのことを全教科の教員が理解するためにも、1999年度より7教科群（国語・社会・数学・理科・英語・保健体育・技術家庭+芸術）から必ず1人は総合教科担当者を出すという原則が合意されている。たとえば、2000年度の「環境学」と「世界学」担当者の教科は、それぞれ理科・社会科・保健体育科・国語科と英語科・社会科・数学科・芸術科（音楽）である。この方式の最も大きな課題は、各教科の特性をどのように出すか、あるいは、いかに自らの教科にこだわらないで関わっていけるかということである。学級担任制の小学校と違い、教科担任制の中学・高校は教科の垣根が高いため、自分の教科の専門を生かすことを考えがちである。一時的にでもそれを捨て、ひとりの大人として環境や国際理解の問題に関わっていくことは容易ではない。

新カリキュラムにおいても、「環境学」と「世界学」は基本的に統合型で行う予定である。しかし、

その担当教員については校内にいくつかの意見があり、これまでのようなチーム制、原則的に2人で1学年を担当するTT制などの案がある。内容だけを考えるのであれば、これまでの総合学習担当者の大部分は従来のチーム制を支持している。しかし、チーム制は担当教員への負担が大きく、研究開発校として本校が新たに取り組むカリキュラムにおける教員への負担からすると、「環境学」「世界学」ともチーム制で行うのは実際問題としてたいへん苦しいと言わざるを得ない。また、1学年を学級の垣根を取り払って4つ（環境学）ないし5つのクラス（世界学）で同時開講するため、時間割変更が事実上不可能であるなどの問題点もある。チーム制の総合学習はたいへん大きな意義も効果もあるが、それによる影響も大きく、学校の教育活動全体のバランスを十分考慮して決定しなくてはならない。今後、「環境学」と「世界学」の担当方法をどのようにするかは、早急に解決すべき課題である。

さらに、担当教員の教科を固定するかどうかも議論のあるところである。「環境学」は、1991年度に理科2名・社会科1名・保健体育科1名で始まり、教員が少ないことから負担感が大きいという理由で当初参加していなかった家庭科の教員が、1997年度からできる範囲で参加することになった。実際には1997年度・1998年度家庭科1名、1999年度技術科1名が担当した。しかし、1999年度に配当学年が3年になることでそれまで「奈良学」が担っていた「学び方を学ぶ」ことが「環境学」に要求されるようになった。さらに、7教科群から「環境学」「世界学」のどちらかに少なくとも1名は出る原則が決定され、以前よりも担当者の専門性の必要性は薄まった。また、このとき「世界学」には英語科の教員が少なくとも1名は担当することも決まった。つまり、現在は「世界学」担当の英語科教員1名以外は担当教科は決まっていない。このため、新カリキュラムにおいては、チーム制かTT制かということとともに、担当教科を固定するかどうか大きなポイントである。

3 分散型総合学習

1999年度から「奈良学」は、特別に時間を設けずに各教科で「奈良学」的な学習内容を行うという方式に変えた。つまり、「奈良学」の内容を各教科に分けた「分散型総合学習」である。1・2年においては、リサーチ方法の習得などいわゆる「学び方を学ぶ」ことを主眼とする総合学習を実施することは、以後の「環境学」や「世界学」において大きなプラスとなる。2000年度の各教科における奈良に関係する内容は、1年理科での校内および奈良公園における植物観察、1年社会科における奈良町フィールドワークや2年における東大寺フィールドワークなどである。しかし、これだけでは総合することは困難で、各教科活動におけるさまざまな奈良についての学習をまとめる時間が必要である。新カリキュラムにおいては、7月と12月にそれぞれ5日ずつフィールドワークや発表をする時間を設定することで、この問題をクリアしていきたいと考えている。

「奈良学」以外にも分散型総合学習としては「情報学」を設け、技術の時間の「情報入門」と国語における「情報と表現」を中心に、さまざまな教科で情報に関する学習をして、それらを総合していきたいと考えている。情報化社会といわれる現代において、あふれる情報の中からの的確な情報を入手していく力と情報を発信していく力は、すべての教科に必要なものであろう。

これら分散型総合学習は、「環境学」や「世界学」が学際的内容を重視するのとは異なり、リサーチ方法の習得に重点を置いている。そのため、7月と12月に設定する短期集中期間の「奈良学」は学級担任が担当し、「情報学」はすべての教科で取り組むなど、教科の専門性にこだわらずに担当できる性格のものである。

しかし、先述した小学校で総合学習が行き渡ったときの問題は、内容的にも配当学年からも、分散的総合学習に対する影響が大きいと言える。

第2章 統合型総合学習

1 環境学

(1) 理念

環境に関する問題は、生徒にとって身近であり世界的な課題でもある。また、21世紀に解決が求められている重要な問題である。教育の場においてもこの問題を取り上げる必要があることは、現在広く認識されている。それゆえ、理科・社会（地歴・公民）科・保健体育科・家庭科など多くの教科で環境に関する内容を扱っている。

また、教育現場の閉塞状況を打開するために学習方法の転換が求められており、生徒の自主性や体験学習を重視した総合教科として1991年度から本校で実践してきた「環境学」は、新カリキュラムにおいていよいよ重要性を増すであろう。

さらに、環境の問題について学習して知識を得ることも重要ではあるが、問題を学んで、自分には何ができるかを考え、行動をおこすことが必要であろう。そのことが、これまでの「環境学」では十分に果たされてこなかったという反省の上に立って、今後のカリキュラム編成を考えていかななくてはならない。

(2) カリキュラム

「環境学」のカリキュラムの中心はフィールドワークであることは、「環境学」開設当時から一貫して続けてきたことであり、新カリキュラムになっても同様である。なぜなら、総合学習の本質は、他の教科活動ではなしえない生徒の自主性を重んじた活動にあり、その時間を十分に保障することが必要不可欠であるからである。そのことを「環境学」では、学校外での聞き取り調査を主な活動とするフィールドワークの時間を十分確保することで実現してきた。

ただし、4年配当であった1991年度～1998年度までと、3年配当になった1999年度・2000年度において、その内容と役割に変質がある。それは、3年と4年の発達段階の違いという点もある。しかし、それ以上に総合教科のカリキュラム上、主に「学び方を学ぶ」力を獲得する時間であった「奈良学」の代わりをしなくならなければならなくなった点が大きいと考えられる。ところが、今後の小学校や本校の低学年における総合学習の進展次第では、「環境学」の役割が再度大きく変質することも考えられる。「環境学」における教科的色彩の濃淡は、このように3年までに生徒が身につけた力の内容によって決定される部分があり、カリキュラムについても柔軟に対応する用意が必要である。

なお、1991年度～1999年度の「環境学」の実践は、毎年の本校の紀要に詳しく報告されている。

(3) 他教科との連携

1998年度までの「環境学」は理科・社会科・保健体育科・家庭科の教員が担当していたことからわかるとおり、これらの教科と密接な関わりを持って行われてきた。しかし、これ以外の教科も参加することは可能である。たとえば、1999年度の「環境学」において、ゴミ問題がテーマになったとき、「環境学」担当者から全教員に協力依頼があった。これに呼応して、国語科・数学科・理科・社会（公民）科・保健体育科・技術家庭科の授業で関連した内容の授業が実践された。（本年度紀要「環境学」の項参照）このような教科との連携により、他教科の学習内容のより深い理解にも役立つものであり、教員の担当方法が変化しても必要不可欠である。

また、その関わり方について、国語科は本紀要で述べているように、ツールとしての側面だけでな

く、そのコンテンツに積極的に関与することが国語科の総合学習へのかかわり方であるとしている。つまり、インタビューやプレゼンテーションの方法などを教えることのみが、国語科の総合学習における役割でなく、その教育内容においても積極的に関わるとしている。さらに、英語科の新カリキュラムはトピック学習を基本としており、Nature & Environmentを3～6年に共通のテーマとして設定している。英語で書かれた文章を通して世界の環境問題へのアプローチがなされ、「環境学」との連携がうまく進めば、大きな成果が得られるであろう。

このように、直接担当している教科以外でも積極的に関わることができ、それによって「環境学」とともに、各教科活動の質もおおいに高められると考えられる。

2 世界学

(1) 理念

「世界学」創設の理由は、国際教育に対する時代の要請の高まりと、教科活動における国際教育の必要性からである。本校では修学旅行の行き先は生徒が決定するが、結果として1995年度から隔年でシンガポール修学旅行を実施してきた。また、日本を含め6ヶ国の高校生が世界の諸問題について話し合うグローバルクラスルームも、本校で開催した2000年度で4年目となる。このような本校の国際教育プログラムの充実により、教科における活動において、これら諸活動と連携しつつ国際教育の質の向上を目指すものが必要となった。

現在の高校生が外国との接触なしに、これからの社会生活を営んでいくことは考えられない。さまざまな場面で異文化に接し、何らかの価値判断を迫られることになるだろう。そのような場合、文化やそれに基づく価値観が異なる人々と分かり合うためには何が必要かを考えることが大切である。他国や他の文化について理解することも大切であるが、その先には、異文化を持った人同士が分かり合う異文化間理解があることを認識しておくことが重要である。

また、先進工業国としての日本の姿しか知らないこれからの生徒たちにとっては、過去の日本を知ることも重要なことである。それにより、世界は相互依存関係によって成り立っていることを認識し、異なった価値観を許容する寛容さが育つのであろう。寛容さが身につけば、多文化共生ということについても議論が成立するであろう。ただし、多文化共生という言葉については、「多文化共生社会をめざす」ことの是非も含めた判断をさせていきたいと考えている。

このように「世界学」では、異文化間理解・自国理解・現代認識・歴史認識といったキーワードを含んだ内容についての学習を進める。それにより、相互依存関係で成り立つ現代世界には多様な価値観が存在することを認識し、自らの考えを構築していける人間づくりを最終的な目標とする。

(2) カリキュラム

本校の国際教育の特徴として、先述した海外修学旅行とグローバルクラスルームがある。これらの活動とリンクさせることにより、「世界学」をさらに質の高いものにすることができる。修学旅行やグローバルクラスルームの交流校とのネットワークを活用して、外国の高校生と意見交換など深い交流をすることが比較的容易である。もちろん、これら6ヶ国に含まれない地域や異なった文化を持つ国々についての理解も必要である。さらに、このようにして意見交換するなどの情報を共有する手段さえ持たない人々の存在を強く認識しておくことも大切である。

「世界学」は、まだ2000年度で創設2年目であり、カリキュラムも定まっていない。新カリキュラムにおいても、具体的にどのような内容にするかは決まっていないし、担当者によってその内容は工

夫されることになっている。もちろん、理念に示したような内容がその中心になるが、それをいかに生徒に提示し、理解させるかという点に考慮した年間カリキュラムと教材づくりが必要である。

(3) 他教科との連携

「世界学」はこれまでも積極的に多くの教科との連携を図ってきた。たとえば、2000年度には「現代社会」との共催でクロアチアのNGOスタッフの講演会を実施した。来日中のクロアチア難民支援NGOのスタッフに講演を依頼し、その事前事後学習を「現代社会」とタイアップすることで行ったものである。つまり、クロアチアの地理的・歴史的背景を「現代社会」で学習して、講演は「世界学」を担当する英語教員の司会と通訳によって進めた。このように、実際の授業構成の中で各教科が協力することもできる。

また、各教科で行った手法を取り入れることも大切である。たとえば、「在日外国人の話をきく」プログラムの中で、いくつかのグループに分かれて話を聞いた後、内容を共有するために行ったスキット（寸劇）は、英語科で2年生時に実施している手法であることから、生徒たちはスムーズに実行できた。もちろん、その逆も重要であり、「世界学」で行ったロールディスカッションなどの参加型学習を各教科活動の中に取り入れている。

さらに、本校では新課程において学校設定科目として3・4年に「現代史」を設ける予定である。「世界学」の理解をより深いものにするために、この科目との連携は欠かせないものとなるであろう。

第3章 分散型総合学習

1 奈良学

(1) 理念

1998年度までの「奈良学」が「学び方を学ぶ」力を生徒につけ、翌年の「環境学」においてその力が発揮されたように、新カリキュラムにおいても、リサーチの基礎を身につけることが大きなねらいである。従来型の一斉授業方式がチョークアンドトークという名で、一方的伝達でしかないと批判される中、自ら調べる学習方法は重要な意味を持つ。その学習方法を身につけることは、4年の「世界学」や各教科での学習のみならず、卒業後もさまざまな場面で生かされるであろう。新カリキュラムにおける「奈良学」は、1990年度から1998年度まで実施した「奈良学」とは形態が大きく異なるが、そのめざすところは大きくは変化しない。

「分散型総合学習」における学習活動は、各教科活動の一環としてあるため、フィールドワークなどまとまった時間を必要とする学習活動ができない。しかも、総合学習を設定する最も大きな理由のひとつは、そのような学習活動にこそあるといっても過言ではない。そのため、新課程においては次ページのような短期集中方式によるカリキュラムの開発をめざしている。

総合学習短期集中方式(案)

		1 年	2 年
7 月	1	総合学習ガイダンスなど	フィールドワークガイダンス
	2	見学・体験学習<自然>(奈良公園・春日奥山など)	班分け・テーマ設定
	3	見学・体験学習<社会>(地場産業・学研都市など)	フィールドワーク(聞き取り調査)
	4	見学・体験学習<人文>(奈良町・奈良公園など)	〃
	5	班分け・テーマ設定	〃
12 月	6	リサーチ活動(図書館・インターネット)	〃
	7	〃	〃
	8	〃	〃
	9	〃 +発表準備	発表準備
	10	発表	発表

*7月午前中授業の5日間+12月の3限授業の午後5日間(一回あたり3時間相当)

(2) 各教科における奈良学

1999年度以降は時間割に「奈良学」の時間はない。各教科でできるだけ奈良に関する内容を取り上げて、それを全教員が共通に認識しつつ、総合していく方向を模索するというのが現在の状態である。

たとえば、社会科においては1年生で奈良町、2年生で東大寺をフィールドにした調査学習を実施している。また、理科では1年生で校内・奈良公園の植物観察を行い、奈良の自然についての理解を深めている。各教科でそれぞれ独立して実施されているこれらの活動を総合していくには、どのような方法が適当であるかを探っている。しかし、何らかのまとまった時間をとらなくては、それらを総合することは困難である。

この2年間の試行により、分散的に各教科で行っている奈良に関する学習内容のまとめとして、分散型総合学習においても核となる教科や時間が不可欠であることが明らかになってきた。この2つの課題を解決するため、短期集中方式が考案された。

しかし、各教科において「奈良学」との関わりを重視しなくてはならないことには変わりはなく、今後も短期集中の内容といかに連携できるか継続して研究して行かなくてはならない。

2 情報学

(1) 「情報学」と教科「情報」

新学習指導要領では、教科「情報」が新設される。ここでは、まず教科「情報」と本校独自の総合学習「情報学」との関係について述べる。

新学習指導要領によれば、教科「情報」のA・B・Cの目標は、次の通りである。

「情報A」

コンピュータや情報通信ネットワークなどの活用を通して、情報を適切に収集・処理・発信するための基礎的な知識と技能を習得させるとともに、情報を主体的に活用しようとする態度を育てる。

「情報B」

コンピュータにおける情報の表し方や処理の仕組み、情報社会を支える情報技術の役割や影響を理解させ、問題解決においてコンピュータを効果的に活用するための科学的な考え方や方法を習得させる。

「情報C」

情報のデジタル化や情報通信ネットワークの特性を理解させ、表現やコミュニケーションにおいてコンピュータなどを効果的に活用する能力を養うとともに、情報化の進展が社会に及ぼす影響を理

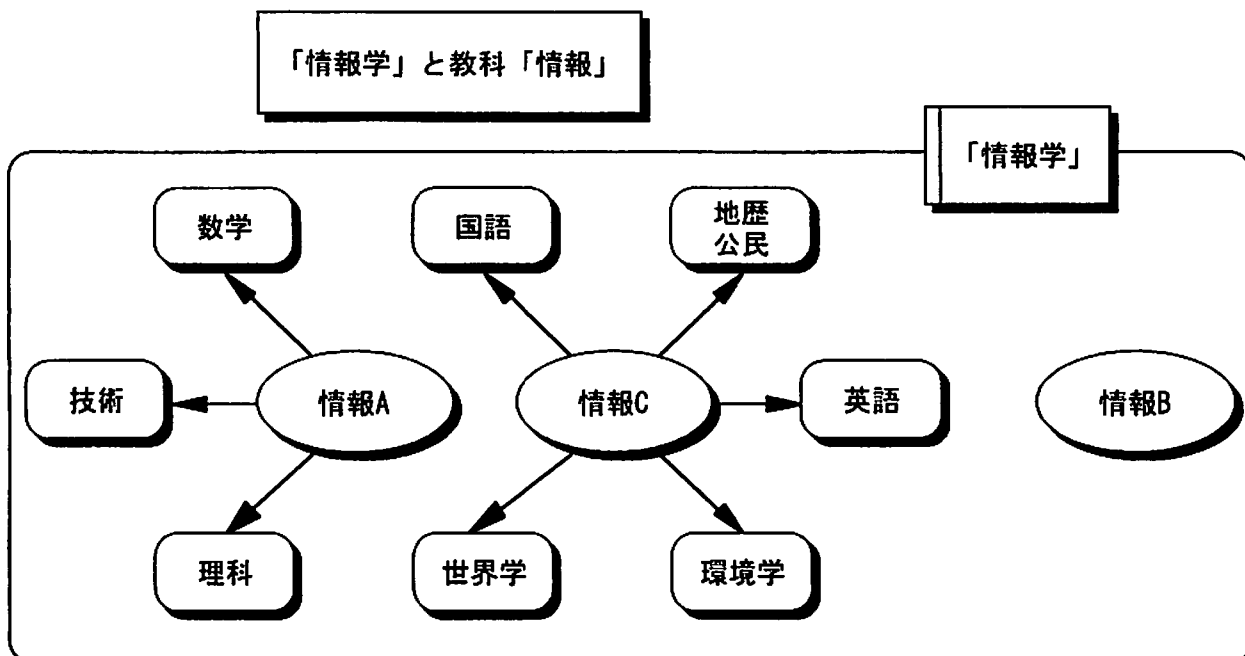
解させ、情報社会に参加する上での望ましい態度を育てる。

これらの目標から見ても、「情報」は本来、総合的な側面をもっており、総合学習的に扱うべきものであると考える。つまり、本校では、教科「情報」の性格を<手段>としての情報と、<目的>としての情報を融合・総合したものにとらえている。

そして、具体的な内容を検討した結果、「情報A」「情報C」の内容は関係教科、関係分野、関係学年に分散させて学習するのが最適であるという仮説を立てた。つまり、各教科の様々な場面で「情報A」「情報C」の内容に気づかせ、浮かび上がらせることができ、そうすることで「情報A」「情報C」の内容を学習することができると考えた。具体的には、「情報A」の内容は技術科等が中心となり、「情報C」の内容は社会・地歴・公民科等が中心となって実施できると考えた。

それに対し、「情報B」は数理科学的である。問題解決においてコンピュータを効果的に活用するための科学的な考え方や方法を習得するためには、集中的・統合的に学習する方が学習効果が上がる。

以上のような意図で、総合的な学習の時間と「情報B」を統合して「情報学」を開設する。



(2) 「情報学」の構想

以上の考えをもとに、次のように「情報学」の構想をたてた。

① 理念

ますます情報化の進むこれからの社会で生きていく生徒たちにとって、過剰な情報を取捨選択し、必要な情報のみを取り出し、有益な情報を発信できる力は必須のものである。そのような力をつけるためには、情報や情報手段に関する知識・技能、情報に関する科学的な見方・考え方を獲得しなければならない。

そのために、本校では6年一貫教育を見通し、クロスカリキュラムと総合的な学習、及び新設の必修教科である「情報」を統合して、「情報学」を開設する（分散型総合学習）。

② 構造

1・2年

- 目的
- ・コンピュータをツールとして駆使できる力の基本を身につける。
 - ・ネットワーク社会の情報に関するエチケットを身につける。

・情報を自らの考えでまとめ、表現し、発信する力を身につける。

方法 技術・国語・英語・社会を中心とした教科とのクロスカリキュラムで、「情報学」の基礎を構成する。

3・4年

目的 ・様々な場面で、コンピュータをツールとして駆使する。
・インターネットを通じて、情報を収集し発信する。

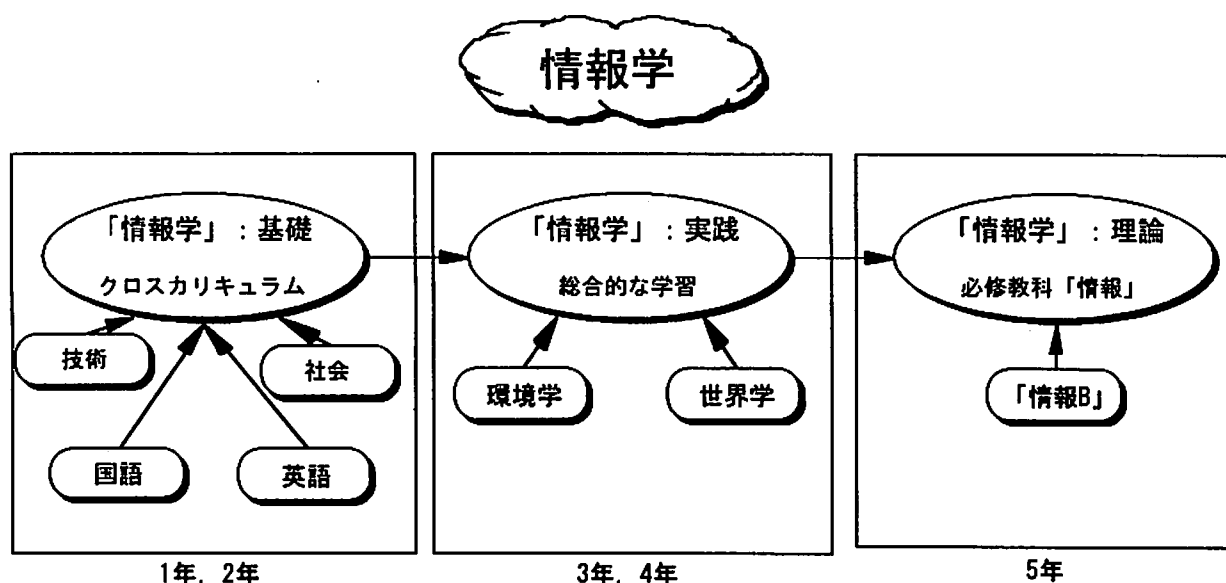
方法 総合学習「環境学」、「世界学」を通じて、「情報学」の実践を行う。

5年

目的 ・コンピュータの機能や科学的な活用方法について理解する。
・課題を設定し、それをコンピュータを利用して解決する力を養う。

方法 必修教科「情報」の科目「情報B」の学習を通じて、「情報学」の理論的な面の強化を図る（本来は「教科」であるが、これを解体して分散型で実施することを研究開発する）。

この構想を図で表すと、次のようになる。



(3) 具体的な展開案

「情報学」の具体的な展開については、平成12年度に以下のように決定した。

① 実施学年

1年：情報入門 2年：情報と表現

② 実施態様

年間を通して、適当な時期、場面で実施

③ 主たる担当教科

情報入門：技術科が中心 情報と表現：国語科が中心

この展開方法に基づいて、具体的な内容・カリキュラムを平成13年度に決定する。その際、各教科とのクロスカリキュラム、他の総合教科との連携などに留意して研究を進める。

第4章 卒業研究

1 個人での総合学習

10数年の歴史を持つ本校の総合学習「奈良学」・「環境学」・「世界学」は、いずれもグループごとに調べ・まとめ・発表するという形態である。つまり、生徒個人一人ひとりが調査・研究を行い、個人でまとめるという場面が設定されていなかった。

東京学芸大学の児島邦宏氏による、次ページのような「総合的学習の学習段階」（児島邦宏『総合的学習』ぎょうせい 1998）を見ても、個人で追求する総合学習が必要だと考えた。

2 「卒業研究」の案

上で述べた考えにより、5年までの教科学習や総合学習で培った力をもとに、個人の興味・関心で選んだテーマを研究して深め、一人でまとめる「卒業研究」を構想した。現在のカリキュラムを編成した研究開発においても、「卒業研究」は構想されていたのだが、総合教科との絡みで実現しなかった。カリキュラム委員会から「卒業研究」の構想を出し、議論したところ、多くの教官が今回はぜひ実現したいと考えていた。

国立の附属では、東京大学附属中等教育学校が、すでに「卒業研究」の長い歴史を持っている。その実践を参考にしながら、本校の「卒業研究」の形態を模索していった。

東京大学附属中等教育学校では、「卒業研究」が必修となっている。本校もその方向で考えていたのであるが、他にも新構想がたくさんある上に初めての試みでもあるので、生徒・教官の負担を考えて次のように予定している。

- 5年、6年の自由選択科目とする。
 - ひとりの教員の持つ生徒の下限は設けない（1名でもよい）。
 - 単位認定と評価については、今後の検討課題とする。
- 平成13年度は、以下の事項について研究を深める。
- 生徒がテーマを決定する際の指導方法
 - 生徒が研究をすすめ、深めていく際の指導方法
 - 生徒を担当する教官の決定方法
 - 評価方法
 - 自由選択ではあるが、できるだけたくさんの生徒に履修させるための方法

	「総合」の形態	学習の方法
小学校 (低) (中) (高)	生活総合学習	共通学習
	課題総合学習	グループ学習 課題選択学習
中学校	教科総合学習	問題設定学習
高校	総合教科	個人(テーマ)学習

第4編 新教科・合科構想

第1章 生活デザイン

長谷圭城

1 創設の意義・ねらい

科学技術や工業、情報と流通の発達により、現代世界の生活スタイルは大きく変化している。気候や地理的要因によって生活の営みのなかでつくられた文化も、その影響を大きく受けている。今後の生活文化は、世界的文脈と地域的文脈との相互関係の中で形成されていくと予想される。こうした変化の過程のなかで、生活文化におけるデザインの性質も大きく変わってきている。デザインとは、生活に必要な製品を製作するにあたり、その材質・機能・技術および、美的造形などの諸要素と、生産・消費面からの要求を検討、調整する総合的造形計画である。また近年では、その美的造形や諸要素の中に、環境問題などの地球規模的なものが強く含まれてきている。身近なものづくりの基礎を理解するには、科学技術や工業生産とのかかわりを無視することはできない。それに加えて、そのモノが考案された理由、それらを受け入れる時代背景、また普遍的なものとして今まで受け継がれている価値など一連の過程や歴史を通して学ぶことも多い。今日にいたっても評価され使用されつづけるデザインからは、創造的・美的価値だけではない、人間の連綿と造られてきた思想をも読み取ることができる。

また、中等教育学校の3・4年は肉体が完成されつつある時期である。椅子のデザインの豊富さからも考えられるように、デザインと身体との関係は深い。また、ドアのかたち、大きさなどの歴史的な変化、昔の日本家屋の特徴・性質などを、社会構造からだけではなく体のサイズや能力など身体性から考察することも重要である。身体とデザイン・デザインと社会の関係性を、身をもって学ぶ最適な時期であり、実体の作業を通して思索・表現することの意義は大きい。そこで今回の新カリキュラム作成にあわせ、6年間を通じたものづくりの学習・活動の場としての新科目「生活デザイン」を提案する。

2 生活デザインの基本的な考え方

デザイン全般を人間の歴史の表象として見つめ、それらの持つ時代背景を把握することで現代の文化を捉え直し、生活の営みへの先駆の精神を培うことを目標とする。また、この「生活デザイン」での体験が、今後、生徒達が形成していくであろうモノの価値判断基準の一因になることを期待する。

3 指導方法について

中等教育の中で、手作業を通してものづくりにかかわる実習教科には、美術、工芸、技術家庭科などがある。そこでの重複した関係性の深い課題について、お互いに協力して指導にあたることで、計画から制作までの内容を充実させたいと考える。そのために、技術・家庭科からの協力を出講というかたちで願います。1・2年段階で学ぶ美術的基礎、技術・家庭科で学ぶ技術基礎や生活基礎を受

けて、3・4年の授業を進めたい。工芸、技術、家庭の重複範囲を再編成することで各科目のもつモノづくり・デザインに対する課題が、生徒達にとってよりリアリティーをもって深められることを意図する。

4 指導内容・カリキュラム

中学校美術に含まれる工芸、高等学校での工芸1、2、3を「生活デザイン」として統合する。対象範囲は、服飾・インテリア・プロダクト・環境・建築デザインとする。生活の中にあるデザインの、伝統的な歴史的基礎から現代の作品までを含め、地理的・文化的背景までを認識させる。また、その制作を目的とする。

5 年次目標

3年（選択必修）

身近な生活の中でのデザインを通じて、文化的認識を深める。

服飾デザインを主とする。

4年（選択必修）

生活世界全般の中でのデザインを通じて、文化的認識を深める。

インテリア・住居デザインを主とする。

5・6年（芸術科として統合し、自由選択）

コンセプト考案から作品完成までを体験する

生涯を通しての造形的興味を確立する

6 授業年間計画表

	3年生活デザイン	工芸科担当	4年生活デザイン	工芸科担当	5、6年生活デザイン
4月	ガイダンス ファッションデザインについて (原価、アジア、ヨーロッパ) (現代) 4		ガイダンス 住居のデザインについて (世界の住居・現代) 4		芸術科と統合
5月	バスケットリー (編む、紡ぐ行為) (体を覆うものをつくる)		レゴ・ブロックを使った住居モデル (100分の1スケール) レゴ立体・編製作 (編テーマ決定) (デザイン決定)		
6月	バスケットリー (編む、紡ぐ行為) (体を覆うものをつくる) 作品鑑賞		(スケッチ、図面) (制作)		
7月	アクセサリー (真鍮針金、皮ヒモ)		(制作)		
9月	アクセサリー (真鍮針金、皮ヒモ)		(制作)		
10月	衣服制作 体着型・ホームウェア等の制作 (デザイン決定) (採寸、型紙づくり)	家庭科担当	インテリアデザインについて あかりの歴史 (2) (舞台からランプシェード) (2)		
11月	(裁断としるしつけ)		イサム・野口あかりについて (2) (間接照明、日本照明) (2) 和紙を使ったランプシェード (デザイン決定)		
12月	(制作)		(スケッチ、図面) (制作)	芸術科担当	
1月	(制作)		(制作)		
2月	(発表、評価) 食をデザインする		発表・鑑賞 椅子の歴史 椅子のデザイン (スケッチ)		
3月	食をデザインする		(発表)		

7 これまでの経緯と今後について

当初、「生活デザイン」を創設するにあたって目標にしたのは、6年一貫教育での、「ものづくり学習」であった。本校には工芸科の専任教諭がないため、美術教諭が工芸の指導を担当している。そのため、美術教諭と技術教諭が中心となりカリキュラム開発にあたった。まず、中学領域で終了する技術と、高校領域で始まる工芸との接続の可能性から探られた。2つの科目がもつ重複範囲の再編成、連続性を目的とした教科の合科構想から始めて議論を重ねる中で、生活文化全般をとらえるために家庭科への協力をお願いした。現在は、「表現科」、「創作科」(いずれも仮称)などとして、教科の再編の可能性などが話し合われ進められている。しかし各教科の考え方の違い、芸術科としての単位認定の扱い方、各教科ともに人員が少ないことによる今後の教諭への過負担などの問題が現段階で出てきている。今後は、生徒達にとっての効果的な学習形態を探ることを最優先とし、他教科の授業の進度にあわせた内容面の調整が課題とされる。

第2章 「芸術と社会」(仮称)

鮫島京一・長谷圭城

1 創設の意義・ねらい

新カリキュラムでは、5・6年生時における目標として「個の確立と将来の展望——個性、能力、進路に応じた学力の習得と自立した人格の形成」ということを掲げている。この目標に少しでも接近するために、新科目「芸術と社会」(仮称)を5年生の自由選択(社会科枠)で設置したい。

本科目で核となる概念は「humanities(人文)」である。それは、音楽や美術などの芸術の領域と、詩、小説など狭い意味での文学、さらに歴史の領域の大部分、哲学の領域の多くの部分を含んだ広い意味である。このなかで芸術が他の領域と違うのは、言語を媒介にしないことである。新科目「芸術と社会」では非言語的領域も対象としてとりあげる。なぜ「芸術と社会」なのか。そこには二つの理由がある。

第一に、「個の確立」や「自立した人格の形成」をめざすのであれば、生徒一人ひとりの価値の問題(価値判断)に関わる対象をとりあげなければなるまい。humanitiesはその格好の対象であると考えられる。

すぐれた個々の作品には普遍的価値が個性的に表現されている。私たちがそのような作品に心を動かされるのは、自分の体験との間に共通の価値を見出すからである。すなわち私たちはhumanitiesとの出会いを通じて、どのような物語(価値)が自分にとって大切なのか、どのような物語(価値)を自分は語るることができるのか、どのような物語(価値)なら自分の生きる糧になるのか、どのようなものなら耐えられ、どのようなものなら耐えられないのかを自らに問いかけるのである。この問いは「個の確立」や「自立した人格の形成」を模索するのであれば常についてまわる問題であり、容易に答えが出ない問題である。humanitiesを対象とした授業は、生徒が自らの価値観を形成するにあたっての手助けになると考える。

第二に、現代世界の問題は根本的には価値をめぐる問題であり、humanitiesは価値の問題に関わっているからである。たとえば南北問題である。それはただ単に貧富の格差があるだけではない。北側の豊かさ(われわれの豊かさ)の大部分が南側の犠牲に基づいているのである。南北問題を解決するためには価値観の転換が不可欠である。すなわち、南北の格差を縮めることの方が私たちが豊かになることよりも大事なのだという考え方にならないかぎり、格差の問題は解決できないのである。これはまさに価値観の革命である。そして価値の問題に関わっているのがhumanitiesなのである。

前述の5・6年生時における目標にある「個性、能力、進路に応じた学力の習得」は、現代世界の問題に関係づけられていなければならない。社会をみわたせばいたるところに解決すべき問題がある。それらを自分の知識と結びつけて解決してゆく力が「学力」であろう。現代世界の問題が多様なものであるから、各教科はそれぞれの特性に応じて「個性、能力、進路に応じた学力の習得」をめざすのである。新科目「芸術と社会」では、さまざまなhumanitiesをとりあげることを通じて、現代世界の仕組みや既存の価値観の矛盾を学び、新しい価値観(オルターナティブ)を形成する力をつけたいと考える。

2 授業年間計画表

	科目(単位数)	使用教室
	5年芸術と社会(3)	
4月	感情と身体表現	社会科教室
	・「笑い」の身体表現	
	・「怒り」の身体表現	
	* 作品の鑑賞と解説	
5月	同上	
	・モダン・パフォーマンス	
	・狂言	
	・ビデオ作家など	
	* 作品の鑑賞と解説	
6月	感情をテーマとした身体表現	
	「笑い」と「怒り」	
	・人を笑わせる	
	・人を怒らせる	
	* 能動的表現と受動的表現	
7月	同上	
	「笑い」と「怒り」を身体で表現する	
9月	身体をつかった音楽づくり	
	* 自由制作	
10月	沖縄から日本を考える	社会科教室
	・島尾敏雄の「ヤポネシア」論	
	・なんくる組「沖縄が独立する日」	
	・島唄の世界	
	など	
11月	民族の対立を越えて	
	・バルトークの試み	
	・M.ダルウィーシュとパレスチナ	
	・ジョン・レノンとその時代	
	など	
12月	南北問題を越えて	
	・ネルーダとタゴール	
	・ボブ・マーリー	
	・リーバイス工場の子どもたち	
	・辺見庸「もの喰う人々」など	
1月	アイデンティティを求めて	
	・グローバルな文化とローカルな文化	
	・サルトル『キーン』	
	・日本文学のゆくえ	
	など	
2月	自由研究	
3月	自由研究	

* 前期を長谷、後期を鮫島が担当

第5編 総合学習センター構想

松本博史

第1章 総合学習センターの理念

1 意義

本校では、平成14年度からの新指導要領の「総合的な学習の時間」実施に呼応して、これまでの総合学習「奈良学」(3年)、「環境学」(4年)を、新たな教育課程の全体構想のもと、「奈良学」(1、2年)、「環境学」(3年)、「世界学」(4年)、「情報学」(1、2、5年)、「卒業研究」(5、6年)として発展的に再構成した。そして、これらを中等教育学校における「総合的な学習の時間」として、6年一貫カリキュラムに位置づけた。

「総合的な学習」の内容や方法の構造化は、6年間の生徒の成長、発達を見通した「発達の論理」と、学問的系統性に関する「教科の論理」の双方を視野に入れてなされなければならない。また、「総合的な学習」では、生徒達の主体的な参加・協働型の問題解決的アプローチやフィールドワークが中心となる。そこでの「学習方法の習得」は、特定の教科だけではなく全ての教科に還元され、結果として、学校全体で教師主導型の授業から生徒主体の探求的授業へと〈学習の質〉、〈授業の質〉の改善、向上を招来する。

このように「総合的な学習」は、本校の教育の質的転換を迫る一方で、奈良女子大学と附属校園の関係そのものの変革をも迫る。これまでの本校と大学との連携は、主として文学部を中心としたものであった。しかし、全ての教科・学年でより充実した「総合的な学習の時間」を実践するためには、「教科の論理」の部分で、理学部・生活環境学部・人間文化研究科等の専門的で幅広い全学的な支援を必要とする。

また、附属小学校における「総合的な学習＝しごと」の歴史は、木下竹次の大正9年からの「合科学習」に始まり、戦後の「奈良プラン」を経て、「けいこ・しごと・なかよし」に継承されている。今や、この「しごと」の伝統に、本校の「総合学習」の教育的成果を付加し、奈良女子大学へと接続する「発達の論理」の連続性と「教科の論理」の発展性とを構想する時である。

2 活動内容

附属幼稚園・附属小学校・大学・大学院との全学的な連携によって、総合的な学習の教材開発とその実践、地域や全国の総合的な学習の資料の収集・理論的研究・文献的研究・歴史研究等を通して、「発達の論理」と「教科の論理」を統一的に融合し、地域教育に資するために「総合的な学習」の実践的研究の中核となる「総合学習センター」を設置する。「総合的な学習」に関わる総合学習センターの主な活動内容としては、以下のようなものが考えられる。

- (1) 総合的学習のカリキュラム開発とその研究
- (2) 総合的学習のカリキュラム開発の支援
- (3) 総合的学習カリキュラムの収集とその閲覧

(4) 総合的学習の実践と共同研究

また、センターの構成員は、本中等教育学校教官、本学大学・大学院教官と学生、附属幼稚園、附属小学校教官からなるが、公立学校からの教員の研修も受け入れ、総合的学習の具体的教材の共同研究・開発を行う。

第2章 総合学習センターの必要性

1 教育研究と実践の観点から

本校は、平成元年度から研究開発学校として、6年一貫制のもとで〈2-2-2年制・総合学習・選択制〉を研究課題として実践してきた。6年一貫の実践は、平成10年の学校教育法一部改正による中等教育学校新設に際してのモデルとなった。また、総合学習は、平成14年度からの新学習指導要領における「総合的な学習の時間」の先導的試行となった。平成11年度から再度、文部省研究開発学校の指定を受け、中等教育学校としてより連続性と全一性に留意した6年一貫カリキュラムの編成、教科と教科を繋ぐ〈梁〉としての多様な総合学習のカリキュラム開発を行い、21世紀の我が国における中等教育学校のモデルとなるべく研究中である。

このとき、研究のための研究ではなく、生徒たちの実態を観察し、その身体的・精神的状況を把握し、彼らの成長・発達を支援する教育の在り方や生徒の実態に即した個性・能力の伸長を図る生徒サイドでの実践的研究は、総合学習センターのようなく教育現場〉と〈研究者〉との交流が図られる場ではじめて可能となる。

2 大学・大学院との連携の観点から

附属中等教育学校と大学との間には、以下のような関係が考えられる。

- a. 大学・大学院の教育・研究のフィールドとしての附属学校園
- b. 附属教官の大学での教科教育法等の講義の担当
- c. 大学・大学院の研究成果を附属学校園での教育に反映するための方策
- d. 附属学校園の生徒・教官・保護者の大学・大学院での学習・研究
- e. 附属学校園から大学までの生徒の接続

特に、リカレント教育体制の観点からは、附属学校園の教官だけでなく、広く全国の現職教員の大学院での研究や専修免許取得のための講義や演習を総合学習センターで開講したい。教育・研究のフィールドとしての附属校園でこそ、理論的研究と実践的研究を統一的に捉えることができ、教育現場から発想した教育学を構築することが可能となる。

第3章 総合学習センターの業務内容

1 総合的学習のカリキュラム開発とその研究

総合的学習の性質上、教科書やテキストを固定化し、授業をルーティン化することはできない。しかし、優れた実践の内容と方法は継承・深化させねばならない。従って、奈良学・環境学・世界学・情報学について、前年度の実践を反省・総括し、その各担当者と協力して次年度の実践を組み立てて、

それぞれのカリキュラムを開発する。その過程でこそ、総合的学習の教育学的な理論的研究がなされる。

2 総合的学習のカリキュラム開発の支援

本校での10年以上にわたる総合的学習の実践的経験を生かし、公立中・高等学校の先生方を対象に、「on-the-job-training」（実務訓練）の形で本校教官との共同研究によってカリキュラム開発を支援する。また、総合学習センターで開発されたカリキュラムをリソースとして公立学校へ提供する。

3 総合的学習カリキュラムの収集とその閲覧

全国各地の総合的学習のカリキュラム、実践報告やそのデジタルデータを収集し、それを一般に公開する。また、グローバルクラスルーム、ラーニングスクールを通して、各国の総合的学習の実践との比較研究を行う。それは、本校の総合学習の国際世界への発信でもある。

4 本学附幼・附小・大学・大学院との連携

センターの構成員は、本校教官、本学大学・大学院教官と学生、附属幼稚園、附属小学校教官からなる。これらの構成員が協力して、上記のセンター業務を行い、定期的に研究会を開催し総合的学習の理論的研究・調査活動を行う。また、「総合的学習の時間」の講師として、大学教官や附属校園の教官を招聘する。

5 総合的学習の共同実践・研究

センターは、公立学校からの内地留学長期研修教員を受け入れ、総合学習の授業、フィールドワークの指導、プレゼンテーションの指導等、総合学習全体に渡る本校教官との共同研究を組織化する。

6 総合学習センター（総合学習棟）の運営・管理

総合学習棟は、次のような施設からなる。

- 総合的学習を実践・研究する場としての「マルチメディア図書館」
- 教育の国際化を進めるために語学学習を行う場の「マルチメディア語学教室」
- 本校の情報化と国際交流の手段となる「コンピュータールーム」
- 本大学と連携・協力し、総合学習に関する研究や発表を行う場「多目的ホール」
- 大学と協力し、相談事業を行う場としての「カウンセラー室」

これらの施設・設備の管理を行う。

第6編 現行カリキュラムの生徒による評価

中道貞子

過去10年間における本校の6年一貫教育を総括するにあたり、研究紀要第41集では、教官アンケートを実施して報告をした。ここでは、生徒が現在のカリキュラムをどのようにとらえているのかを知る目的で実施したアンケートの結果について報告する。

現在の教育課程は、1989年から3年間にわたって委嘱された「研究開発学校における研究」を、委嘱期間終了後も継続しておこなってきたものである。このカリキュラム下で最初に学習した生徒は、1994年3月に卒業した。彼らを対象に1994年2月22日に本校教育についてのアンケートを実施した。また、2000年2月28日には、これとほぼ同じ内容のアンケートを、同年3月に卒業する生徒を対象に実施した。

アンケート結果から、本校カリキュラムが生徒自身にどのように評価されたかをまとめたい。

さらに、1999年8月には、94年3月に卒業した卒業生にアンケートを郵送して回答を依頼し、6年後の変化を調査しようとした。残念ながら、回収率が非常に悪く、約100名の卒業生に送ったアンケートへの回答は、15名にすぎなかった。そのため、回答には偏りが見られると思うが、これについても考察したい。なお、質問項目の後の数値は、質問事項に対し、

①そう思う ②どちらともいえない ③そうは思わない を%で示している。

I 1994年・2000年実施アンケート結果の比較

1 基本方針について

(1) 6年間は2年単位に区切られていたことを知っていた。	00年	①25	②8	③67
	94年	①37	②8	③55
(2) 低学年の目標は基礎学力の定着であったことを知っていた。	00年	①22	②32	③46
	94年	①25	②31	③44
(3) 中学年の目標は自主的学習を取り入れるであることを知っていた。	00年	①24	②27	③49
	94年	①18	②25	③57
(4) 高学年の目標は大幅な選択制を取り入れるであることを知っていた。	00年	①52	②21	③27
	94年	①70	②16	③14

2-2-2制であることについて、この制度を始めた頃より、現在のほうが知らない生徒が増えている。その中で、5・6年の大幅な選択制については、知っていると答えた生徒が比較的多い。2-2-2制の特色を生かし、生徒にも明確にそれぞれの特色が伝わるカリキュラム編成が望まれる。

2 低学年（1・2年）について

(5) 現在の1・2・3年の英語の授業は20人クラスになっています。 これはよいことだ。	00年 ①76 ②18 ③5
(6) 低学年には朝の会があります。5・6年のように朝の会はな くともよい。	94年 ①76 ②16 ③8
(7) 昼の会や昼の掃除をやめて、終わりの会や終わりの掃除にす ればよい。	00年 ①34 ②17 ③49
(8) 低学年にも選択科目を置くとよい。	94年 ①43 ②12 ③45
	00年 ①19 ②18 ③63
	94年 ①18 ②16 ③66
	00年 ①25 ②25 ③50
	94年 ①26 ②22 ③52

英語の20人学級については肯定的である。しかし、後の項目については、いずれも半分近くまたは、半分以上が否定的意見を述べている。なかでも、終わりの会や終わりの掃除にすることには反対が多い。これらの項目については、2つの年度間でほとんど意見の差がない。

3 中学年（3・4年）について

※奈良学について

(9) 奈良学をやってよかった。	00年 ①41 ②33 ③27
(10) 奈良学でやる内容が多すぎた。	94年 ①31 ②43 ③27
(11) 奈良学は、課題を解決するため、生徒の自主的活動に期待するこ とが多い科目です。このことはよかった。	00年 ①26 ②42 ③32
(12) 奈良学は<社会・国語・美術工芸・英語>の内容で実施しています。 内容的に適切だったと思う。	94年 ①25 ②49 ③26
	00年 ①62 ②29 ③9
	94年 ①60 ②28 ③12
	00年 ①42 ②47 ③11
	94年 ①64 ②31 ③6

★(12)で、3と答えた人は、他にどんな分野が良いと思いますか。

・どの分野が良いというより、英語の分野の必要性がいまいち ・分野に分ける必要なし ・体育

(13) 奈良学が6・7時限目にあったのはよかった。	00年 ①65 ②20 ③14
	94年 ①28 ②18 ③55

奈良学を肯定的に受けとめている生徒は、今回の方が増えている。一方で、内容が適切だったとい
う意見は減少しているのが不思議だ。また、6・7時間目にあることに対しても、肯定的意見が大き
く増加している。これらのことは、奈良学の内容が変化したことと関連するのだろうか。

教師側から見ると、総合教科の内容は多くなりがちで、フィールドワーク時などは、特に、生徒達
は忙しそうに見えるが、内容が多すぎたと答えている生徒は、約4分の1で、2回のアンケートで変
化がない。「自主的活動」という観点からは、いずれの学年も肯定的に受けとめている。

※環境学について

(14) 環境学をやってよかった。	00年	①57	②28	③15
	94年	①52	②28	③20
(15) 環境学の講義の内容はよかった。	00年	①46	②37	③16
	94年	①39	②38	③24
(16) 環境学におけるフィールドワークはよかった。	00年	①58	②29	③13
	94年	①53	②27	③20
(17) 講演や川の見学はよかった。	00年	①56	②33	③11
	94年	①53	②30	③18
(18) 理科・社会科・保健体育科・家庭科の内容で実施したのはよかった。(94年は家庭科はなし)	00年	①52	②21	③27
	94年	①42	②49	③9

★環境学について、改良した方がよいと思われる点があれば書いて下さい。

- ・ありきたりの環境破壊への抗議になりがちなのでもっと独自性を生かしてほしい。
- ・講義が多すぎる ・時間短縮
- ・やる内容が多すぎる。もうちょっと内容を減らしてその内容を濃くする方がよい。
- ・フィールドワーク、講演や川の見学については、1日使うべきだ。
- ・理科分野をふやすべき。環境汚染の原因追及
- ・ビニール製品をもやしたときに有害だ!とか言うものを化学の知識を用いて勉強したが、今となっては理解できるが、このころは何をやっているのかさっぱりだった。
- ・奈良学についても環境学についても自主性を養うものであるのなら、早期にすべき。
- ・生徒全員が確実に協力し合って取り組めるようにしたらよいと思う。

環境学は、奈良学よりも肯定的に受けとめられている。講義内容への満足度も、前回よりも若干増えている。しかし、講義よりフィールドワークに対する肯定的意見が多く、00年の否定的意見は前回よりさらに減っている。講演や川の見学も、フィールドワーク同様に受けとめられている。担当者の専門教科が、94年は理科2名・社会科・保健体育各1名だったのが、00年は理科1名にかわって家庭科が加わった。そのこととの関わりは、この結果からは読みとれないものの、肯定的意見が11%増加している。

※その他

(19) 3年の時、「ろう学校」などと交流したのはよかった。	00年	①55	②33	③11
	94年	①61	②32	③6
(20) 中学年には朝の会があります。5・6年のように朝の会はなくともよい。	00年	①29	②21	③50
	94年	①35	②24	③41
(21) 昼の会や昼の掃除をやめて、終わりの会や終わりの掃除にすればよい。	00年	①22	②18	③60
	94年	①24	②18	③58
(22) 中学年にも選択科目を置くとよい。	00年	①37	②25	③38
	94年	①35	②20	③45

交流教育を否定的に受けとめている生徒は少ないが、今回の方が増加している。

中学年の朝の会がなくてもよいと答えている生徒は減少気味。必要性を感じている生徒が、00年は半数となっている。低学年においてと同様の結果である。昼の会を終わりの会に変更することについても、低学年の場合と同じく、反対が多い。

中学年に選択科目を置くことに積極的賛成は少ないものの、肯定的意見は低学年に対する選択科目導入より増加傾向が見られる。

4 高学年（5・6年）について

(25) 選択科目の選び方に迷った。	00年	①50	②18	③32
	94年	①44	②25	③32
(26) 選択科目の選び方についての先生の指導は十分であった。	00年	①39	②46	③16
	94年	①27	②41	③32
(27) 選択科目の選び方について家族と十分話し合った。	00年	①29	②29	③42
	94年	①32	②30	③39
(28) 自由選択科目（とってもとらなくてもよい科目）があつてよかった。	00年	①68	②25	③8
	94年	①84	②11	③5
(29) 自由選択科目の取り消しができてよかった。	00年	①69	②24	③7
	94年	①75	②17	③8
(30) 自由選択科目の取り消し期間が12月まであつてよかった。	00年	①53	②35	③12
	94年	①66	②25	③8
(31) 選択の科目数や時間割によって、空き時間ができたのはよかった。	00年	①65	②21	③14
	94年	①75	②18	③6

選択科目の選び方に迷った生徒は、00年では半数に達しており、教師の指導が十分であったと答えている生徒は半数にもなっていない。進路指導を含めたガイダンスの充実が望まれる。また、家族とも話し合っていない生徒も多くいると思われる。

自由選択制があることには肯定的意見が多いが、前回よりは16%減少している。取り消し制度についても肯定的意見が多いものの、6%減少。取り消し期間が長いことに関しても、肯定的意見が多いものの減少傾向にある。時間割に空き時間があることにも肯定的だが、これも減少傾向が見られる。

(32) 高学年の朝の会がなくなったのはよかった。	00年	①89	②7	③4
	94年	①74	②11	③15
(33) 昼の会や昼の掃除をやめて、終わりの会や終わりの掃除にすればよい。	00年	①23	②21	③56
	94年	①25	②19	③56
(34) 昼の会が終われば、授業のない限り帰宅してもよいのはよかった。	00年	①88	②8	③4
	94年	①87	②8	③5
(35) 4～6年での最低修得単位が80単位であることはよい。	00年	①41	②50	③9
	94年	①70	②28	③2
(36) 生徒によって、20単位以上の差がでるのはやむを得ない。	00年	①47	②27	③25
	94年	①66	②20	③13

(37) 空き時間は有効に使えた。	00年 ①53 ②35 ③12
	94年 ①55 ②30 ③16
(38) 自習室として、図書室などが開放されたが、それは十分であった。	00年 ①36 ②25 ③39
	94年 ①44 ②23 ③33
(39) 講座成立条件（10名以上）が厳しかった。	00年 ①12 ②43 ③45
	94年 ①26 ②31 ③43
(40) 選択科目で取り消しできる単位数が5単位までであるが、適当な単位数だと思う。	00年 ①32 ②33 ③34
	94年 ①50 ②29 ③29
(41) 選択教科・科目については、9月に予備登録し、1月に本登録することになっているが、この時期はよいと思う。	00年 ①41 ②33 ③25
	94年 ①51 ②24 ③25
(42) 4年の3学期に、将来文系に進むか理系に進むかを決定するようになっているが、この時期でよいと思う。	00年 ①42 ②36 ③22
	94年 ①48 ②20 ③32

高学年の朝の会がないことに関しては、圧倒的に賛成意見が多く、今回増加している。終わりの会や終わりの掃除にすればよいという意見は少なく、否定的意見はいずれの年も56%となっている。早く帰宅可能な制度の肯定的意見は圧倒的多数である。

最低修得単位数が80単位であることに否定的意見は少ないが、今回は肯定的意見も大きく減少している。修得単位数の個人差についても、仕方ないと考える生徒が減少している。このことは、最近、国公立大学への進学希望者が増加していることと関係あると考えられないだろうか。

空き時間の有効利用については、いずれの年も回答傾向に変化はなく、半数を超える生徒が肯定的意見を述べている。一方、自習室については、満足している生徒が減少傾向にあり、自習室の充実が望まれる。

講座成立条件が厳しかったという意見は少なく、今回は12%に減っている。取り消し可能単位が5単位であることについては、今回は、回答がちょうど3つに分かれており、肯定的意見については、前回より18%減少している。登録の時期や文理系決定の時期については、前回と同様の傾向が見られた。

5 その他

(1) 担任の持ち方は2年単位がよい。	00年 ①15 ②33 ③52
	94年 ①17 ②34 ③49
(2) 生徒会組織（中高別）も2年単位がよい。	00年 ①4 ②36 ③59
	94年 ①13 ②37 ③50
(3) クラブ組織（中高別）も変えるとよい。	00年 ①15 ②43 ③42
	94年 ①25 ②28 ③45
(4) 現在の教室配置でよい。	00年 ①53 ②33 ③14
	94年 ①30 ②20 ③50

担任の持ち方を、現在の3-3制から2-2-2制に変えることに対しては否定的意見が半数となっている。また、生徒会組織やクラブ活動についても、変えることに肯定的意見は非常に少ない。

教室配置については、現状に対する肯定的意見が大きく増加している。前回の生徒は、途中で教室

配置が変更になったのに対し、今回の生徒は入学時からこの教室配置であるための結果と思われる。

★あなたは自分の進路（学部・学科の決定）を、何年生のいつごろに決めましたか。

・中学生（10人） ・4年生（14人） ・5年生（12人） ・6年生（24人）

(5) 本校では自由選択制をとっていますが、コース選択制（選択のパターンをいくつか固定している）よりは良いと思う。	00年	①79	②18	③4
	94年	①78	②15	③6
(6) 7限目まで授業のある日が週に何回かありますが、それはやむを得ないことと思う。	00年	①61	②23	③16
	94年	①70	②13	③17
(7) 7時間目の授業は疲れる。	00年	①86	②10	③4
	94年	①85	②7	③8
(8) 5・6年の学校への登下校はフレックス制（時差登下校制）ですが、遅刻やさぼりのないよう自分で自分を管理できた。	00年	①65	②21	③14
	94年	①57	②23	③20
(9) カリキュラムで、5・6年生で自分にあった科目を選択できるようになっているのは、大学進学 of 効率的な受験体制になっていると思う。	00年	①73	②19	③8
	94年	①74	②20	③6
(10) 5・6年生での科目選択では、学校での選択単位をなるべく少なくして取った方が、学校外で勉強出来る時間や機会が多くなって良い。	00年	①27	②40	③33
	94年	①43	②41	③16

学部や学科の進路決定をしている時期は、かなり遅いことがわかる。

自由選択制については肯定的意見が、いずれの学年でも80%近くあり、コース制より自由選択制を望んでいることがわかる。

7時間目まで授業があることを仕方がないと受けとめている生徒は多いが、今回は減少傾向となっている。しかし、圧倒的多数の生徒が、7時間目の授業は疲れると答えている。

フレックス制のなかで自己管理ができたと答えた生徒が増加傾向にあるのは望ましい。大学受験体制としても肯定的に受けとめている。学校での学習時間が少なくなっても、学校外で勉強できる時間が増えることにはならないと考えている生徒が増加している。

(11) 5・6年では、朝の会がなくなったので、HR時間以外の話し合う機会や時間が少なくなって困ったことがあった。	00年	①19	②29	③51
	94年	①20	②33	③47
(12) 級友と同じ時刻に下校することが少なくなったので、級友と雑談したり、話し合ったり、相談する機会が少なくなった。	00年	①25	②21	③54
	94年	①32	②27	③41
(13) 今のカリキュラムでは、クラブ活動に消極的になったと思う。	00年	①26	②46	③28
	94年	①17	②29	③53
(14) 今のカリキュラムでは、生徒会活動に消極的になったと思う。	00年	①27	②47	③27
	94年	①8	②45	③47
(17) 5年の選択は現在のような選択科目数でよい。	00年	①68	②18	③14
	94年	①76	②6	③18

朝の会がなくなっても、話し合う時間が少なくなるとは限らないと考えている生徒が半数である。下校時刻にばらつきがあることが、友人関係に影響を与えている生徒も少ない。

現カリキュラムが、クラブ活動や生徒会活動に消極的になる原因と考えていない生徒が、前は半数あったのに対し、今回は約4分の1に減っている。つまり、現カリキュラムが原因で、クラブ活動や生徒会活動に消極的になったと考えている生徒は増加している。

5年の選択科目については肯定的な生徒が多い。

II 1994年アンケート対象生徒の追跡調査結果

2000年8月に、1994年卒業生にアンケートを郵送し、回答を求めた。以下はその結果である。94年に実施したアンケートと同じ項目については、両者を比較考察した。

(1) 6年間で2年単位に区切られていたことはよいことだ。	①33 ②67 ③0
(2) 低学年(1・2年)の目標が「基礎学力の定着」であることはよいことだ。	①80 ②20 ③0
(3) 低学年の目標は守られていた。	①40 ②27 ③33
(4) 中学年(3・4年)の目標が「自主的学習を取り入れる」であることはよいことだ。	①87 ②13 ③0
(5) 中学年の目標は守られていた。	①53 ②33 ③13
(6) 高学年(5・6年)の目標が「大幅な選択制を取り入れた学習」であることはよいことだ。	①100 ②0 ③0
(7) 高学年の目標は守られていた。	①80 ②13 ③7

2-2-2制に対し、積極的な反対はないが、多くの者はどちらともいえないと回答している。

低学年の目標を「基礎学力の定着」としていることはよいとしているが、守られていたと答えている者は40%しかいない。中学年についても同様の傾向が見られる。特に、低学年の授業の中身を目標に沿ったものに充実させる必要があるだろう。

一方、高学年については、全員が「大幅な選択制」に肯定的であり、目標が守られていたと回答した者も80%ののぼった。

(8) 低学年にも選択科目を置くとよい。	99年 ①40 ②13 ③47
	94年 ①26 ②22 ③52
(9) 中学年にも選択科目を置くとよい。	99年 ①64 ②14 ③21
	94年 ①35 ②20 ③45
(10) 低学年の英語の授業が20人クラスになっているのは、よいことだ。	99年 ①87 ②7 ③7
	94年 ①76 ②16 ③8

低学年や中学年にも選択科目を置くとよいという意見は、在学中より増えており、特に、中学年については、30%近く増えている。

英語20人学級についても、在学中より肯定的意見が増えている。

(11) 奈良学をやってよかった。	99年 ①73 ②13 ③13
	94年 ①31 ②43 ③27

(12) 奈良学でやる内容が多すぎた。	99年	①20	②33	③47
	94年	①25	②49	③26
(13) 奈良学は、課題を解決するため、生徒の自主的活動に期待することが多い科目です。このことはよかった。	99年	①80	②20	③0
	94年	①60	②28	③12
(14) 奈良学は4つの分野〈社会・国語・美術工芸・英語〉で実施しています。内容的に適切だったと思う。	99年	①60	②33	③7
	94年	①64	②31	③6
(15) 奈良学が6, 7時間目にあったのはよかった。	99年	①40	②20	③40
	94年	①28	②18	③55
(16) 環境学をやってよかった。	99年	①80	②20	③0
	94年	①52	②28	③20
(17) 環境学の講義の内容はよかった。	99年	①47	②40	③13
	94年	①39	②38	③24
(18) 環境学におけるフィールドワークはよかった。	99年	①67	②13	③20
	94年	①53	②27	③20
(19) 講演や川の見学はよかった。	99年	①80	②7	③13
	94年	①53	②30	③18
(20) 環境学を〈理科・社会科・保健体育科〉の内容で実施したのはよかった。	99年	①53	②40	③7
	94年	①42	②49	③9
(21) 3年生の時、「ろう学校」と交流したのはよかった。	99年	①57	②36	③7
	94年	①61	②32	③6

奈良学や環境学をやってよかったという生徒は、在学中より増えている。しかし、今回の回答者が15名と少ないため、本校教育に対し好意的で肯定的な考え方の持主が回答したということも考えられる。

一方、奈良学や環境学をやってよかったという者が増えているのに対し、交流教育をやってよかったと回答した者はわずかだが減少した。

(22) 5年の国語・英語・保健体育の授業が4講座になってよかった。	99年	①64	②29	③7
	94年	①56	②31	③22
(23) 6年の国語・英語・保健体育の授業が4講座になってよかった。	99年	①64	②29	③7
	94年	①62	②29	③18
(24) 5, 6年でクラス単位の授業も必要である。	99年	①27	②47	③27
	94年	①62	②24	③24

5, 6年での授業が4講座になったことに対しては、肯定的意見が多い。在校時には、クラス単位の授業が必要と考える生徒が62%いたが、今回の回答者は27%に減少している。

(25) 自由選択科目(とってもとらなくてもよい科目)があつてよかった。	99年	①93	②7	③0
	94年	①92	②12	③6
(26) 自由選択科目の取り消しができてよかった。	99年	①93	②0	③7
	94年	①75	②17	③8

(27) 選択の科目数や時間割によって、空き時間ができたのはよかった。	99年 ①71 ②21 ③7
	94年 ①75 ②18 ③6
(28) 昼の会が終われば、授業のない限り帰宅してもよいのはよかった。	99年 ①86 ②14 ③0
	94年 ①87 ②8 ③5
(29) 4～6年での最低修得単位が80単位であることはよい。	99年 ①50 ②50 ③0
	94年 ①70 ②28 ③2
(30) 生徒によって、修得単位に20単位以上の差がでるのはやむを得ない	99年 ①80 ②7 ③13
	94年 ①66 ②20 ③13
(31) 空き時間は有効に使えた。	99年 ①50 ②43 ③7
	94年 ①55 ②30 ③16
(32) 自習室として、図書室・進路指導室の隣の部屋・書道教室などが 開放されたが、それは十分であった。	99年 ①27 ②13 ③60
	94年 ①44 ②23 ③33

自由選択制については、概ね肯定的である。また、取り消し制度や空き時間の存在、フレックス制にも肯定的である。しかし、最低修得単位数が80単位であることに対しては、肯定的意見が20%減少している。自習室に対する不満も増加傾向にある。

(33) 講座成立条件（10名以上）が厳しかった。	99年 ①27 ②33 ③40
	94年 ①26 ②31 ③43
(34) 選択科目で放棄できる単位数が5単位までであるが、適当な単位数 だと思う。	99年 ①50 ②43 ③7
	94年 ①50 ②29 ③29
(35) 選択教科・科目については、9月に予備登録し、1月に本登録する ことになっているが、この時期はよいと思う。	99年 ①73 ②20 ③7
	94年 ①51 ②24 ③25
(36) 4年の3学期に、将来文系に進むか理系に進むかを決定するよう になっているが、この時期でよいとおもう。	99年 ①53 ②13 ③33
	94年 ①48 ②20 ③32

講座成立条件などについての意見は、在校中と変化がない。登録時期については、1月登録に賛成意見が増加しているが、4年の3学期に文系・理系を決めることに賛成する意見は約半数である。

(37) 担任の持ち方は2年単位（低・中・高学年）がよい。	99年 ①27 ②20 ③53
	94年 ①17 ②34 ③49
(39) 生徒会組織（中高別）も2年単位がよい。	99年 ①27 ②0 ③73
	94年 ①13 ②37 ③50
(39) クラブ組織（中高別）も変えるとよい。	99年 ①53 ②7 ③40
	94年 ①25 ②28 ③45

担任の持ち方を2-2-2制にすることに対する反対は、在校中と変化していない。生徒会組織についても、2年単位にすることに反対意見は、在校中よりさらに23%増加している。しかし、賛成意見も14%増加し、中立的な意見が減少した。クラブ組織については、反対意見の比率は変わっていないが、賛成意見が28%増加した。

(40) 本校では自由選択制をとっていますが、コース選択制（選択のパターンをいくつか固定している）よりはよいと思う。	99年	①93	②7	③0
	94年	①78	②15	③6
(41) 7限目まで授業のある日が週に何回かありますが、それはやむを得ないことと思う。	99年	①53	②7	③40
	94年	①70	②13	③17
(42) 7限目の授業は疲れる。	99年	①100	②0	③0
	94年	①85	②7	③8
(43) 5・6年の学校への登下校はフレックス制（時差登下校制）ですが、遅刻やさぼりのないよう自分で自分を管理できた。	99年	①67	②13	③20
	94年	①57	②23	③20
(44) カリキュラムで、5・6年生で自分にあった科目を選択できるようになってきているのは、大学進学 of 効率的な受験体制になっていると思う	99年	①93	②0	③7
	94年	①74	②20	③6
(45) 5・6年生での科目選択では、学校での選択単位をなるべく少なくして取った方が、学校外で勉強出来る時間や機会が多くなってよい。	99年	①27	②53	③20
	94年	①43	②41	③16

自由選択制に対する賛成は、在学中よりさらに増えた。7限目やむなしという意見は、在学中より減少して反対意見が増えた。また、7時限目は疲れるという回答が100%になった。

自己管理ができたと回答した者は、在学中より増加、効率的な受験体制になっていると答えた者も増加している。また、学校での選択単位が少ない方が学校外で勉強できるということに肯定的回答は減少した。

ここでは、各教科に対するアンケート結果については報告していない。しかし、その結果は、各教科に戻っており、アンケート結果に現れた課題については、新しいカリキュラムを構築するときに、改善していけるように取り組んでいきたい。

問題番号1 ① 1994年度 25% 37% 8%
2000年度 25% 37% 8%
1994年度 19% 25% 37% 8%
2000年度 25% 37% 8%
6年間は2年単位に反切られていたことを知っていた。

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

問題番号2 ① 1994年度 22% 31% 44%
2000年度 22% 31% 44%
1994年度 19% 25% 31% 44%
2000年度 22% 31% 44%
低学年の目標は基礎学力の定着であったことを
低学年の目標は基礎学力の定着であったことを
低学年の目標は基礎学力の定着であったことを

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

問題番号3 ① 1994年度 24% 27% 49% 57%
2000年度 24% 27% 49% 57%
1994年度 18% 24% 27% 49% 57%
2000年度 24% 27% 49% 57%
中学年の目標は自主的学習を取り入れることができることを
中学年の目標は自主的学習を取り入れることができることを
中学年の目標は自主的学習を取り入れることができることを

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

問題番号4 ① 1994年度 52% 21% 14%
2000年度 52% 21% 14%
1994年度 70% 21% 14%
2000年度 52% 21% 14%
高学年の目標は大規模な選択制を取り入れること
高学年の目標は大規模な選択制を取り入れること
高学年の目標は大規模な選択制を取り入れること

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

問題番号5 ① 1994年度 76% 18% 8%
2000年度 76% 18% 8%
1994年度 76% 18% 8%
2000年度 76% 18% 8%
現在の1、2、3年の英語の授業は20コマになって
現在の1、2、3年の英語の授業は20コマになって
現在の1、2、3年の英語の授業は20コマになって

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

問題番号6 ① 1994年度 34% 17% 49%
2000年度 34% 17% 49%
1994年度 43% 12% 45%
2000年度 34% 17% 49%
低学年には朝の会があります。5、6年のように朝の会
低学年には朝の会があります。5、6年のように朝の会
低学年には朝の会があります。5、6年のように朝の会

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

問題番号7 ① 1994年度 19% 18% 66%
2000年度 19% 18% 66%
1994年度 18% 16% 66%
2000年度 19% 18% 66%
星の会や星の樹をやって、星の会の会や星のわりの
星の会や星の樹をやって、星の会の会や星のわりの
星の会や星の樹をやって、星の会の会や星のわりの

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

問題番号8 ① 1994年度 25% 25% 50%
2000年度 25% 25% 50%
1994年度 25% 22% 52%
2000年度 25% 25% 50%
低学年にも選択科目を置くこと
低学年にも選択科目を置くこと
低学年にも選択科目を置くこと

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

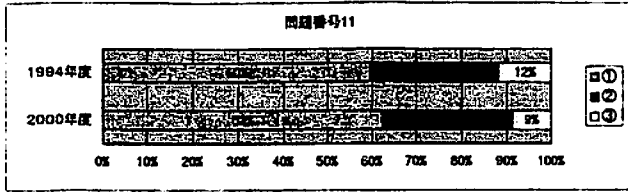
問題番号9 ① 1994年度 41% 33% 27%
2000年度 41% 33% 27%
1994年度 31% 43% 27%
2000年度 41% 33% 27%
教員字をやったよ
教員字をやったよ
教員字をやったよ

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

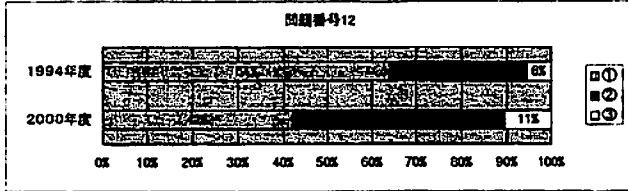
問題番号10 ① 1994年度 25% 42% 32%
2000年度 25% 42% 32%
1994年度 25% 49% 26%
2000年度 25% 42% 32%
教員字でやる内容が多すぎた。
教員字でやる内容が多すぎた。
教員字でやる内容が多すぎた。

OK	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
1994年度										
2000年度										

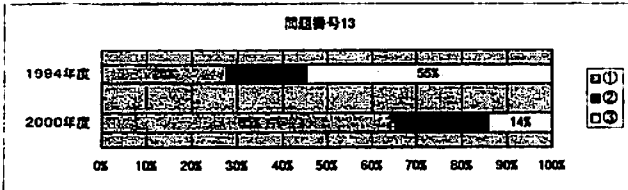
問題番号11① ② ③ 奈良学は、課題を解決するため、生徒の自主的活動に
2000年度 62% 29% 9% 期待することが多い科目です。このことはよかったです。
1994年度 60% 28% 12%



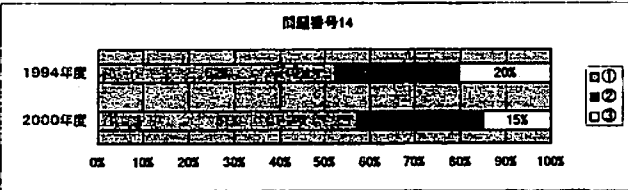
問題番号12① ② ③ 奈良学はく社会・国語・美術工芸・英語の内容で
2000年度 42% 47% 11% 実施しています。内容的に妥当だったと思う。
1994年度 64% 31% 6%



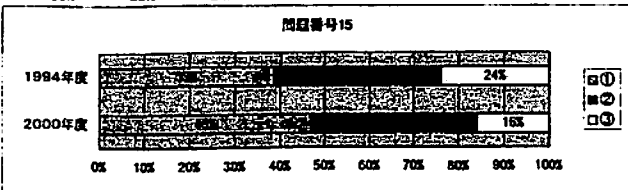
問題番号13① ② ③ 奈良学が6、7時限目にあつたのはよかったです。
2000年度 65% 20% 14%
1994年度 28% 18% 55%



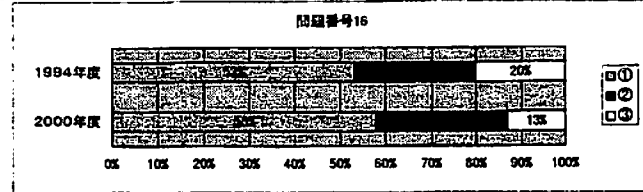
問題番号14① ② ③ 環境学をやつてよかったです。
2000年度 57% 28% 15%
1994年度 52% 28% 20%



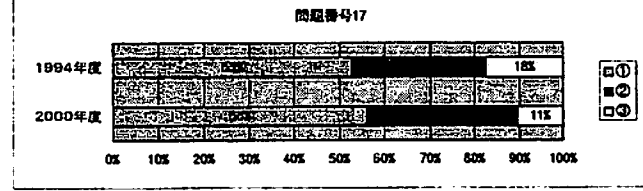
問題番号15① ② ③ 環境学の講義の内容はよかったです。
2000年度 46% 37% 16%
1994年度 39% 38% 24%



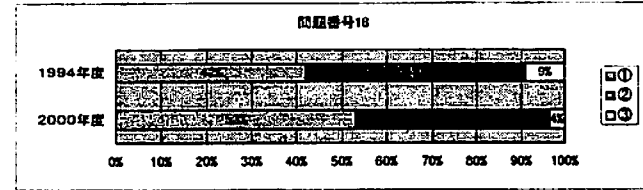
問題番号16① ② ③ 環境学におけるフィールドワークはよかったです。
2000年度 58% 29% 13%
1994年度 53% 27% 20%



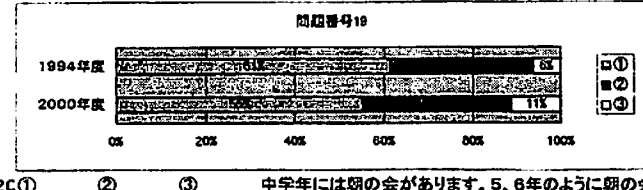
問題番号17① ② ③ 講演や川の見学はよかったです。
2000年度 56% 33% 11%
1994年度 53% 30% 18%



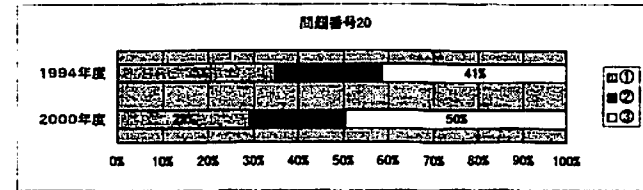
問題番号18① ② ③ 理科・社会科・保健体育科・家庭科の内容で実施した
2000年度 53% 43% 4% のはよかったです。
1994年度 42% 49% 9% (94年度は家庭科なし)



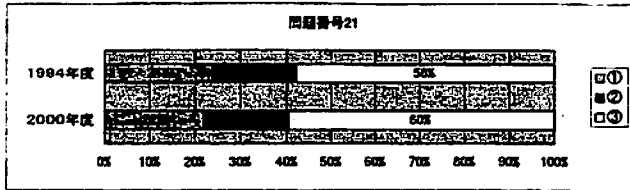
問題番号19① ② ③ 3年の時、「ろう学校」などと交流したのはよかったです
2000年度 55% 33% 11%
1994年度 61% 32% 6%



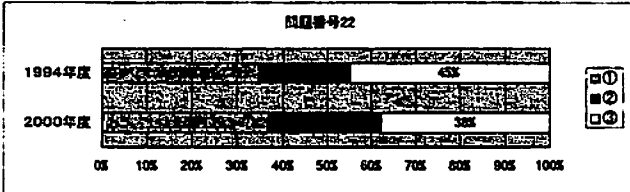
問題番号20① ② ③ 中学年には朝の会があります。5、6年のように朝の会は
2000年度 29% 21% 50% なくともよい。
1994年度 35% 24% 41%



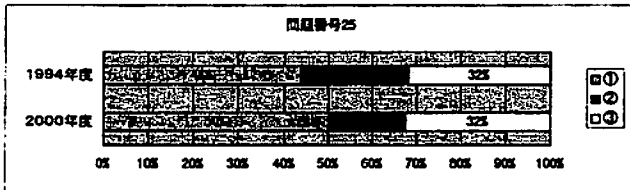
問題番号21 ② ③ 尿の会や尿の掃除をやめて、終わりの会や終わりの掃除にすればよい。
 2000年度 22% 18% 60%
 1994年度 24% 18% 58%



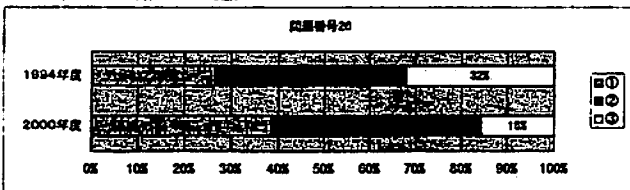
問題番号22 ② ③ 中学年にも選択科目を置くといふ。
 2000年度 37% 25% 38%
 1994年度 35% 20% 45%



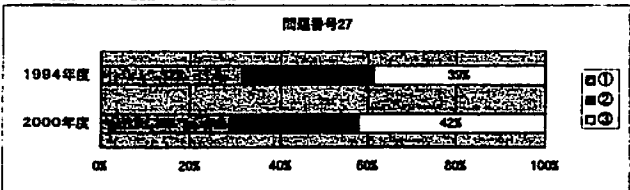
問題番号25 ② ③ 選択科目の選び方に迷った。
 2000年度 50% 18% 32%
 1994年度 44% 25% 32%



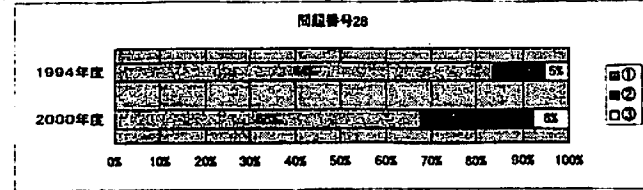
問題番号26 ② ③ 選択科目の選び方についての先生の指導は十分であった。
 2000年度 39% 45% 16%
 1994年度 27% 41% 32%



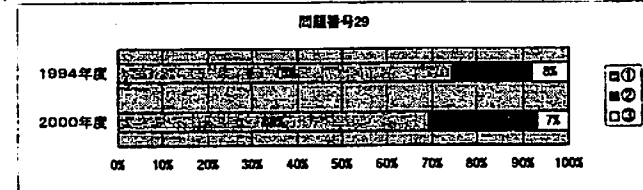
問題番号27 ② ③ 選択科目の選び方について家族と十分話し合った。
 2000年度 29% 29% 42%
 1994年度 32% 30% 39%



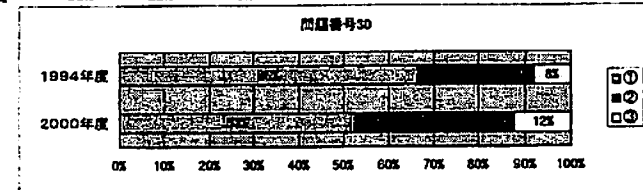
問題番号28 ② ③ 自由選択科目(とってとらなくてもよい科目)があつてよかった。
 2000年度 68% 25% 8%
 1994年度 84% 11% 5%



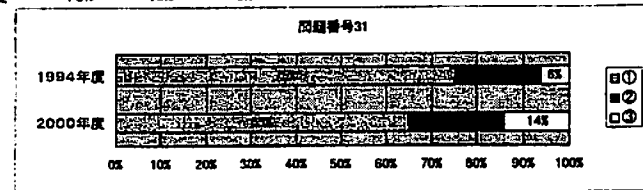
問題番号29 ② ③ 自由選択科目の取り消しができてよかった。
 2000年度 69% 24% 7%
 1994年度 75% 17% 8%



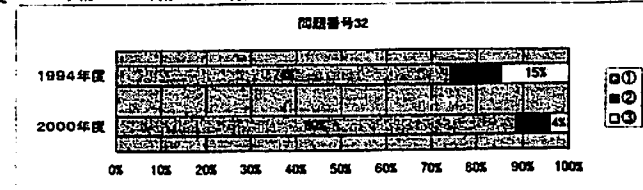
問題番号30 ② ③ 自由選択科目の取り消し期間が12月までであつてよかった。
 2000年度 53% 35% 12%
 1994年度 66% 25% 8%



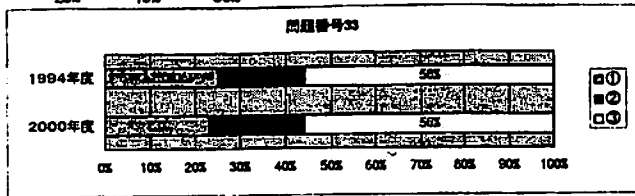
問題番号31 ② ③ 選択の科目数や時間割によって、空き時間ができたのはよかった。
 2000年度 65% 21% 14%
 1994年度 75% 18% 6%



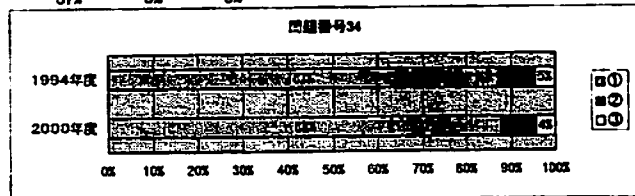
問題番号32 ② ③ 高学年の朝の会がなくなったのはよかった。
 2000年度 89% 7% 4%
 1994年度 74% 11% 15%



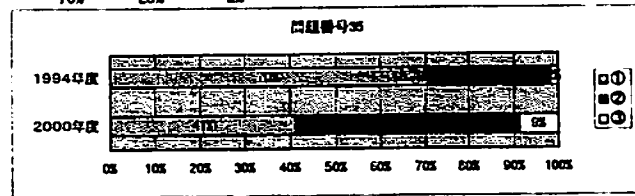
問題番号33① ② ③ 昼の会や昼の掃除をやめて、終わりの会や終わりの掃除にすればよい。
 2000年度 23% 21% 56%
 1994年度 25% 19% 56%



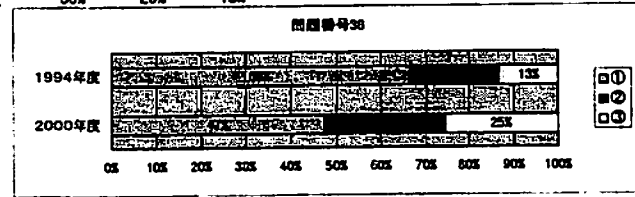
問題番号34① ② ③ 昼の会が終われば、授業のない限り帰宅してもよいのはよかった。
 2000年度 88% 8% 4%
 1994年度 87% 8% 5%



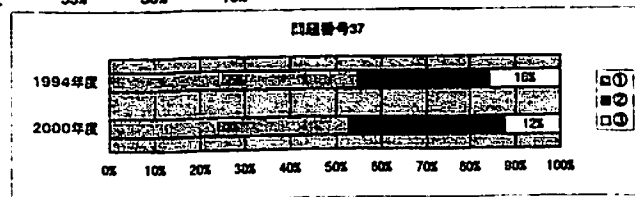
問題番号35① ② ③ 4～6年での最低修得単位が90単位であることはよい。
 2000年度 41% 50% 9%
 1994年度 70% 28% 2%



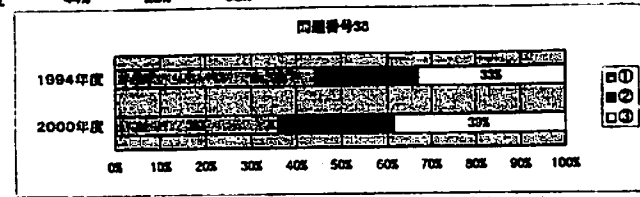
問題番号36① ② ③ 生徒によって、20単位以上の差がでるのはやむを得ない。
 2000年度 47% 27% 25%
 1994年度 66% 20% 13%



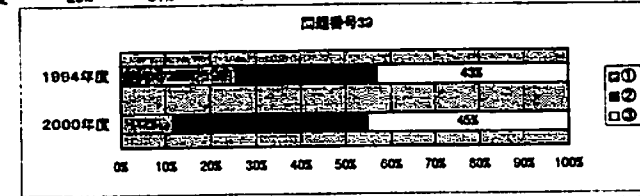
問題番号37① ② ③ 空き時間は有効に使えた。
 2000年度 53% 35% 12%
 1994年度 55% 30% 16%



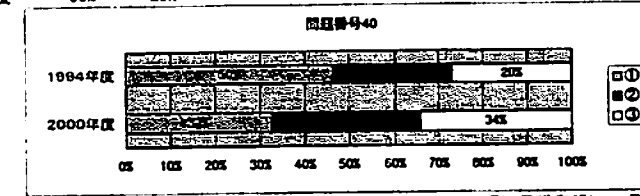
問題番号38① ② ③ 自習室として、図書室などが開放されたが、それは十分であった。
 2000年度 36% 25% 39%
 1994年度 44% 23% 33%



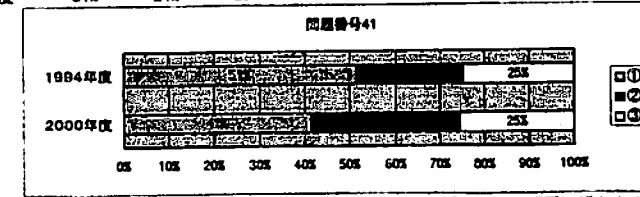
問題番号39① ② ③ 講座成立条件(10名以上)が厳しかった。
 2000年度 12% 43% 45%
 1994年度 26% 31% 43%



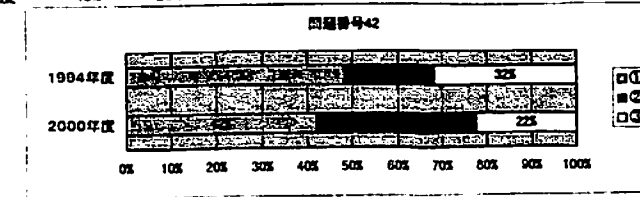
問題番号40① ② ③ 選択科目で取り消しできる単位数が5単位までであるが、適当な単位数だと思う。
 2000年度 32% 33% 34%
 1994年度 50% 29% 29%



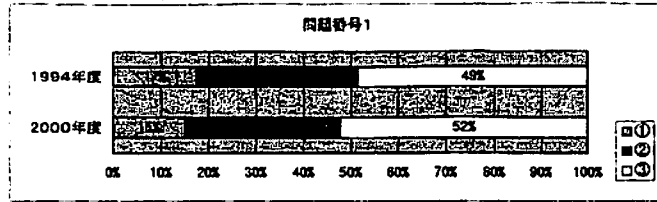
問題番号41① ② ③ 選択教科・科目については、9月に予備登録し、1月に本登録することになっているが、この時期はよいと思う。
 2000年度 41% 33% 25%
 1994年度 51% 24% 25%



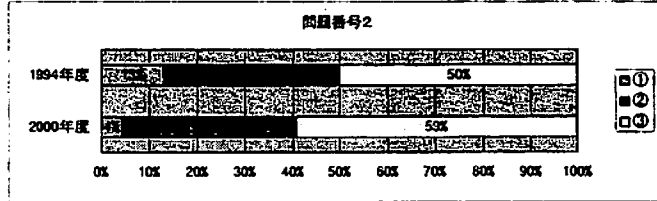
問題番号42① ② ③ 4年の3学期に、将来文系に進むか理系に進むかを決定するようになっているが、この時期でよいと思う。
 2000年度 42% 36% 22%
 1994年度 48% 20% 32%



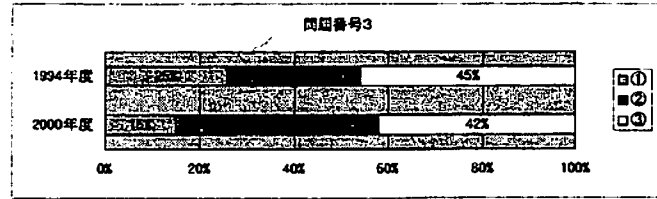
問題番号1 ① ② ③ 担任の持ち方は2年単位がよい。
 2000年度 15% 33% 52%
 1994年度 17% 34% 49%



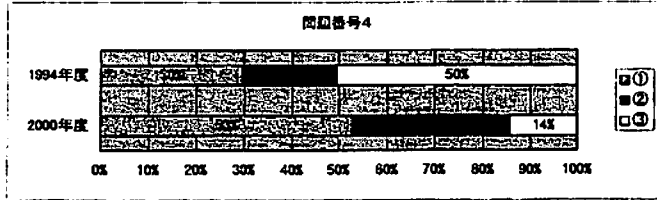
問題番号2 ① ② ③ 生徒会組織(中高別)も2年単位がよい。
 2000年度 4% 36% 59%
 1994年度 13% 37% 50%



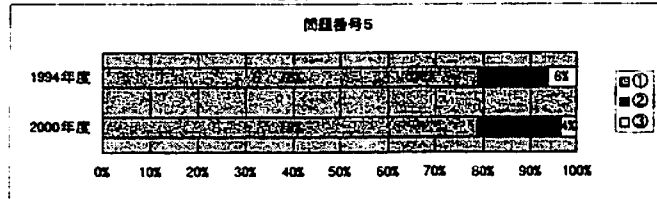
問題番号3 ① ② ③ クラブ組織(中高別)も変えるといよい。
 2000年度 15% 43% 42%
 1994年度 25% 28% 45%



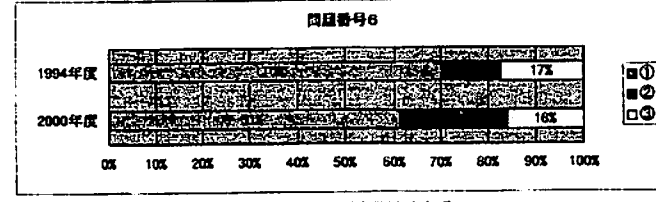
問題番号4 ① ② ③ 現在の教室配置でよい。
 2000年度 53% 33% 14%
 1994年度 30% 20% 50%



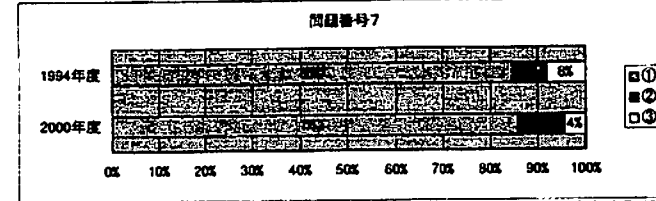
問題番号5 ① ② ③ 本校では自由選択制をとっていますが、コース選択制(選択のパターンをいくつか固定している)よりは良いと思う。
 2000年度 79% 18% 4%
 1994年度 78% 15% 8%



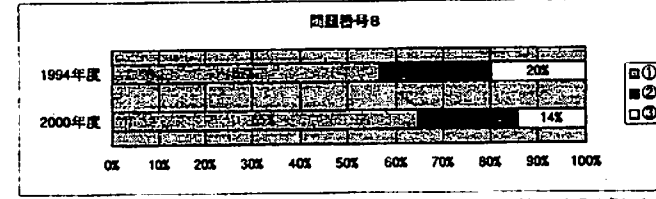
問題番号6 ① ② ③ 7限目まで授業のある日が週に何回かありますが、それはやむを得ないことと思う。
 2000年度 61% 23% 16%
 1994年度 70% 13% 17%



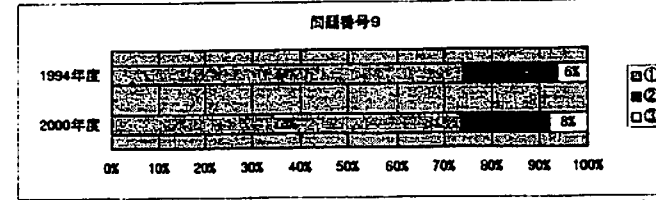
問題番号7 ① ② ③ 7時間目の授業は疲れる。
 2000年度 86% 10% 4%
 1994年度 85% 7% 8%



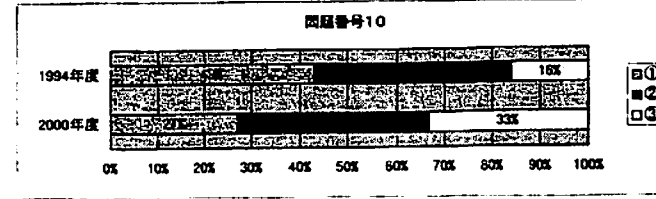
問題番号8 ① ② ③ 5・6年の学校への登下校はフレックス制(時差登下校)ですが、遅刻やさぼりのないよう自分で自分を管理1994年度
 2000年度 65% 21% 14%
 1994年度 57% 23% 20%



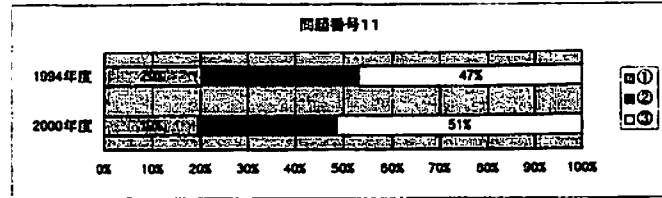
問題番号9 ① ② ③ 5・6年生で自分にあった科目を選択できるようになって8%いるのは、大学進学のための効率的な受験体制になっていると思う。
 2000年度 73% 19% 8%
 1994年度 74% 20% 6%



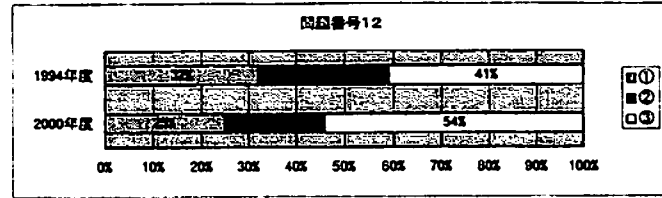
問題番号10 ① ② ③ 5・6年生での科目選択では、学校での選択単位をなるべく少なくして取った方が、学校外で勉強出来る時間や機会が多くなって良い。
 2000年度 27% 40% 33%
 1994年度 43% 41% 16%



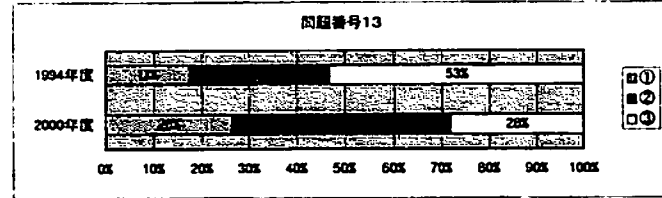
問題番号11 ① ② ③ 5-6年では、朝の金がなくなったので、HR時間以外の
 2000年度 19% 29% 51% 話し合う機会や時間が少なくなって困ったことがあった。
 1994年度 20% 33% 47%



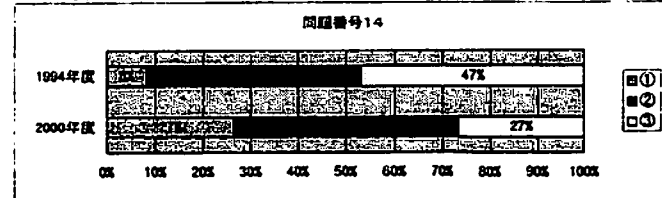
問題番号12 ① ② ③ 級友と同じ時刻に下校することが少なくなったので、級友
 2000年度 25% 21% 54% と雑談したり、話し合ったり、相談する機会が少なくなった。
 1994年度 32% 27% 41%



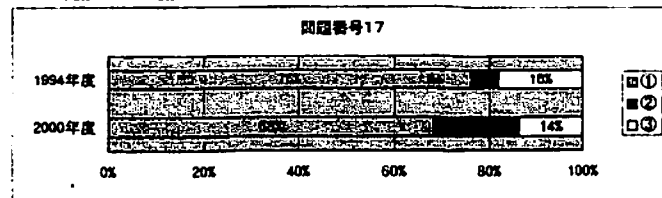
問題番号13 ① ② ③ 今のカリキュラムでは、クラブ活動に消極的になったと
 2000年度 26% 46% 26% 思う。
 1994年度 17% 29% 53%



問題番号14 ① ② ③ 今のカリキュラムでは、生徒会活動に消極的になったと
 2000年度 27% 47% 27% 思う。
 1994年度 8% 45% 47%



問題番号17 ① ② ③ 5年の選択は現在のような選択科目数で良い。
 2000年度 66% 18% 14%
 1994年度 76% 6% 18%



研究紀要 第42集(I)

2001(平成13)年3月19日発行

発行者 奈良女子大学文学部
附属中等教育学校

校長 佐久間 春 夫

〒630-8305 奈良市東紀寺町1-60-1
TEL. 0742 (26) 2571
FAX. 0742 (20) 3660